納 所 遺 跡 Ⅰ

―遺構・土器・木製品編―

2012年 3月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、三重県教育委員会が県土木部の執行委任を受けて昭和48年10月から昭和50年12月にかけて実施し、1980年に『納所遺跡―遺構と遺物―』（以下、「80年報告書」と略）として発掘調査報告書を刊行した納所遺跡の発掘調査結果を再整理して報告するものである。

2　再整理にあたっては、現地調査時及び80年報告書で用いられた遺構番号は使用せず、新たに全遺構（除；ピット）を対象とした統一的な通し番号を付与した。そのため、80年報告書で扱った遺構・遺物についても、80年報告書とは異なる別番号を再交付している。両者の異同については、遺構一覧を参照されたい。

3　方位は磁北を示している。

4　遺構表示略記号は下記のとおりである。
ＳＨ；竪穴住居　ＳＢ；掘立柱建物　ＳＫ；土坑　ＳＤ；溝　ＳＲ；旧河道
ＳＸ；方形周溝墓・墓　ＳＺ；不明遺構　Ｐ(Pit)；柱穴・小穴

5　本書では、再整理のうち、納所遺跡の遺構（上層・下層）と、出土遺物のうちの土器と木製品を対象とした（一部、ピット出土の土器は未掲載）。この再整理により新たに抽出した遺物（土器・土製品）は、コンテナバット293箱である。この他、納所遺跡出土の石器・石製品（玉類含む）も再整理を実施しているが、今回は報告対象としていない。

6　遺構出土遺物は、基本的に遺構番号順に配置したが、レイアウトや整理上の都合等で若干前後した部分がある。

7　遺物番号の後に付した括弧付きの番号は、80年報告書における遺物番号である。

8　今回掲載した遺構出土以外の出土遺物（「〇〇〇層」や包含層などからの出土遺物）については、調査時のラベル表記を元にまとめたが、本書における掲載位置が実際の層の上下関係と必ずしも対応するものではない。

9　出土遺物のうち赤彩を有する土器については、赤彩文様及び部分赤彩例は当該部分をスクリーントーンで、内・外・内外の全面赤彩例は当該土器の脇下へ文字表記により示した。

10　報文執筆は石井智大・川部浩司・櫻井拓馬・穂積裕昌が担当し、執筆分担は目次に記した。

11　本書で報告した記録図面類及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　既往調査・収蔵と再整理の照応 …… （穂積） …… 1
1　本書の目的 …… 1
2　再整理の目的と方法 …… 1
3　調査区の設定と遺構番号 …… 1
Ⅱ　納所遺跡と周辺の調査履歴 …… （櫻井） …… 2
Ⅲ　遺構概要 …… （穂積） …… 4
1　最上層遺構 …… 4
2　上層遺構 …… 4
3　下層遺構 …… 4
遺構図 …… （構成；石井） …… 5
納所遺跡グリッド配置図 …… 5
最上層遺構実測図 …… 6
上層遺構全体図 …… 7
上層遺構実測図 …… 8
下層遺構全体図 …… 18
下層遺構実測図 …… 19
下層及び上層下部遺構実測図 …… 23
下層遺構実測図 …… 24
遺構一覧 …… （遺構；穂積、上層遺物；石井、下層遺物；川部） …… 25
Ⅳ　遺物概要
1　土器の器種分類（弥生時代中期） …… （石井） …… 47
2　土器の器種分類（弥生時代後期～古墳時代初頭） …… （石井） …… 52
3　土器の器種分類（弥生時代前期）・木製品の概要 …… （川部） …… 56
遺物プレート …… 59
上層・最上層・包含層等 …… 59
下層・下層包含層・各層等 …… 118
木製品 …… 157
Ⅴ　納所遺跡の位置づけ …… 162
1　納所遺跡の弥生時代中期集落について …… （石井） …… 162
2　手焙形土器の線刻について …… （石井） …… 165
3　納所遺跡前期弥生土器の諸相 …… （川部） …… 167

Ⅰ　既往調査・収蔵と再整理の照応

１　本書の目的

納所遺跡は、県道雲林院・津線バイパス建設にかかる12,500㎡を調査対象とし、1973年10月から昭和1975年12月まで発掘調査が行われた。発掘調査報告書は、1980年、『納所遺跡―遺構と遺物―』（以下、「80年報告書」と略）として刊行された。弥生時代の全時期に及ぶ資料が出土したが、特に弥生時代前期に属する多量の土器・石器・木製品は遠賀川系文化の東海地域への伝播を考えるための重要資料として注目を集めた。

さて、納所遺跡ではコンテナバットに換算して約3,500箱もの遺物が出土した。この出土量は、それまで三重県内で発掘調査された遺跡のなかで最も多い出土量であった。このため、当時の整理体制上の限界もあって、未洗浄の遺物の残存、遺構に関する基本情報の欠落、報告書掲載遺物が一部遺構の出土遺物に限られたことなど、今後に課題を残すものであった。その後、平成10年度より遺物収蔵スペース上の観点から保管遺物の詰め替え作業を実施し、木製品を除く総コンテナバット数を1,809箱（Ａ遺物203箱・Ｂ遺物1,606箱）に整理した。

以上の経緯を受け、伊勢の弥生文化を考えるうえで重要な位置を占める納所遺跡出土資料のより適切な活用を図るため、平成19年度から納所遺跡の出土資料の再整理を開始した。

２　再整理の目的と方法

今回の再整理は、80年報告書では触れられなかった遺構毎の出土遺物を提示して、集落構成に関する基本情報をより明らかにすることを目的とした。そのため、発掘調査で把握された全ての遺構を対象として、それまで４ｍ×４ｍの小地区を単位として遺構種別毎に付与されていた遺構番号を、遺構種別を問わない調査区全体を覆う通し番号として再交付した（ピットは除く）。この作業により、納所遺跡では上層・最上層で687、下層で18の遺構を認定し、遺物の再抽出もこの遺構番号を基にして実施した（なお、実際には上層にも前期遺構が存在する）。

３　調査区設定と遺構番号

今回の報告は、前述のように新たに付与した新遺構番号に従って行い、発掘調査時の遺構番号（旧番号）及び80年報告書での遺構番号（80年報告書番号）との異同は、遺構一覧に記した。

ただし、遺物への注記や、遺物収蔵では、発掘調査時の遺構番号を踏襲している部分がある。このため、今後の活用にあたっての混乱回避と利便性を考慮し、以下に発掘調査における調査区と遺構番号の付与方法、その後の整理における遺物整理方法、今回の再整理による遺構番号の付与方法との関係を明らかにしておきたい。

《大地区設定》納所遺跡の発掘調査は、Ａ区～Ｈ区、ｆ区という大地区に分けて実施された。調査区は、東西に長い十文字形状を呈する。Ａ～Ｆ区は中央部未調査区を挟んだ東西軸の西側、Ｇ～Ｈ区は東側、ｆ区は中央部未調査区を挟んだ南北トレンチとして調査された。

その後、80年報告書では、「ｆ区」の名称を変更し、中央部未調査部を挟んだ北側をＩ区、南側をＪ区として報告している。

《小地区設定》小地区は、大地区を通しにするかたちで南北をアルファベット（北→南へＡ～）、東西を算用数字（東→西へ１～）で組み合わせた小地区番号が付与されている。したがって、もし大地区番号が脱落していても、小地区の記載（例えばＫ40など）があれば、所属する大地区も復元できる。ただし、Ｅ・Ｆ区では４ｍ（小地区１区分）が東西方向で一部ずれている箇所がある（第３図参照）。

《パイロット道路調査》Ａ～Ｆ区は、工事の進捗上、道路本線と南側８～10ｍのパイロット道路を分けて調査しており、調査時期も異なる。このため、大地区表記上、南側のパイロット道路部はＡ’、Ｂ’･･･とダッシュ（’）を付与して本線部分と区別し、発掘調査時の遺構番号も、同じ小地区でも本線とパイロット道路部分は全く連動せず、それぞれが独立して付与されている。なお、本線部分でみられたＥ・Ｆ区における小地区の東西のズレは、本部分ではみ

られなかった（第３図参照）。

《調査区に関する注意点》80年報告書のＩ区とＪ区は、調査時点はともに「ｆ区」であり、調査時の遺構ラベルや遺物注記も全て「ｆ区」と記されていた。遺物注記は、現在も「ｆ区」のままである。

このことに関して、小地区設定の南北軸は４ｍ毎のアルファベット表記であるが、ｆ区南北長はアルファベット一巡を超えるため、ｆ区の南北（Ｉ区・Ｊ区）で小地区番号が重なり、Ｉ区かＪ区かが不分明な箇所が生じている（第３図参照）。これについては、当該部分の調査がｆ区北側（Ｉ区）は８月、ｆ区南側（Ｊ区）は11月が中心であることから、８月＝Ｉ区、11月＝Ｊ区と判断している。

なお、「ｆ」は調査時の遺構ラベルが筆記体表記（ℓ）だったため、再整理時に「ｂ」と誤認されたうえに「Ｂ」として新遺構ラベルに誤記されていた（既出の大地区「Ｂ」と重なる）。気づく限り上記の基準によりＩ区とＪ区に振り分けたが、完全には修正しきれておらず、上記事項を留意されたい。

《資料活用の留意点》今後の資料活用は、本書で新たに付与した統一遺構番号が基準となると思われる。遺物ラベルには基本的に統一遺構番号を併記したが、遺物注記は調査時構番号のままであり、資料閲覧などにあたってはご留意頂きたい。

Ⅱ　納所遺跡と周辺遺跡の調査履歴

納所遺跡は安濃川の左岸、標高約５～６ｍの低地に位置する弥生時代の集落跡である。遺跡の範囲は東西1,200ｍ、南北600ｍに及ぶ。津市納所町周辺の沖積平野は、北を長岡丘陵（見当山丘陵）、南を半田丘陵（高塚丘陵）で画され、中央を安濃川が伊勢湾に向かい東流している。低平な段丘面は伊勢自動車道の北西側に発達しており、この付近には及んでいない。そのため、納所遺跡の周辺には高低差の明瞭な地形が広がっている。

さて、当地域は、納所遺跡の調査以後、一般国道23号中勢道路建設に伴う発掘調査によって大きな成果が挙がっているところである。以下、これらを中心に、弥生時代の周辺環境について叙述することにしたい（第１図）。なお、紙幅の関係から、出典の詳細は既刊の中勢道路建設事業関連の報告書を参照されたい。

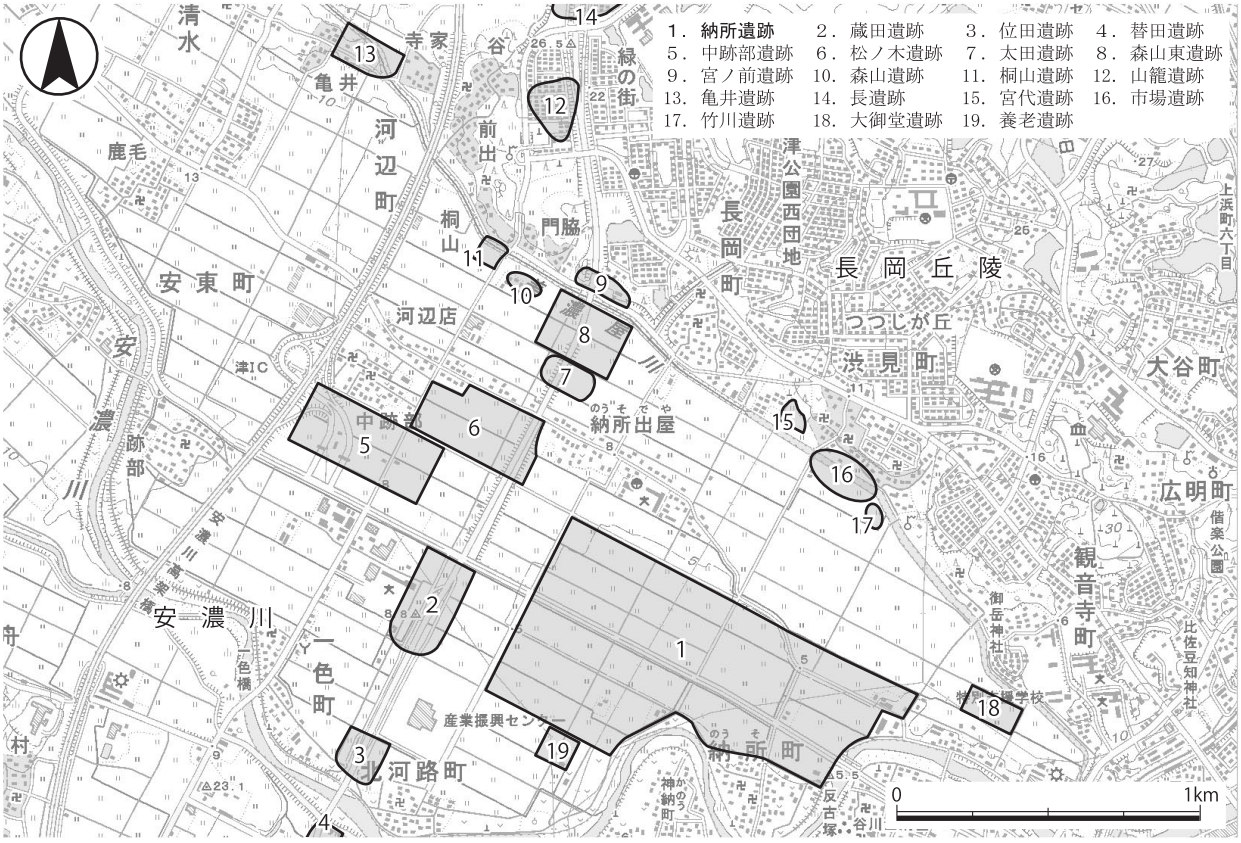
納所遺跡の範囲確認調査の結果によれば、弥生時代の包含層は県道を中心した東西約400m、南北約350ｍにわたり、その西側には青灰色粘土層（低湿地）が広がるという（第２図）。また、下層2.5mから貝を含む有機質粘土層が確認され、海進期にはラグーン化し、海退ののち氾濫原が形成されたと考えられている。この結果と照応するように、縄文後・晩期の遺物が平野部の蔵田遺跡、松ノ木遺跡などで出土している。

納所遺跡の低湿地帯の南西側には、蔵田遺跡や替田遺跡など、弥生時代中期前葉の遺跡が確認されている。蔵田遺跡は方形周溝墓、自然流路などが確認されたほか、住居が掘立柱建物のみで構成されている点が特徴的である。低地に適応した居住形態の例として注目されよう。

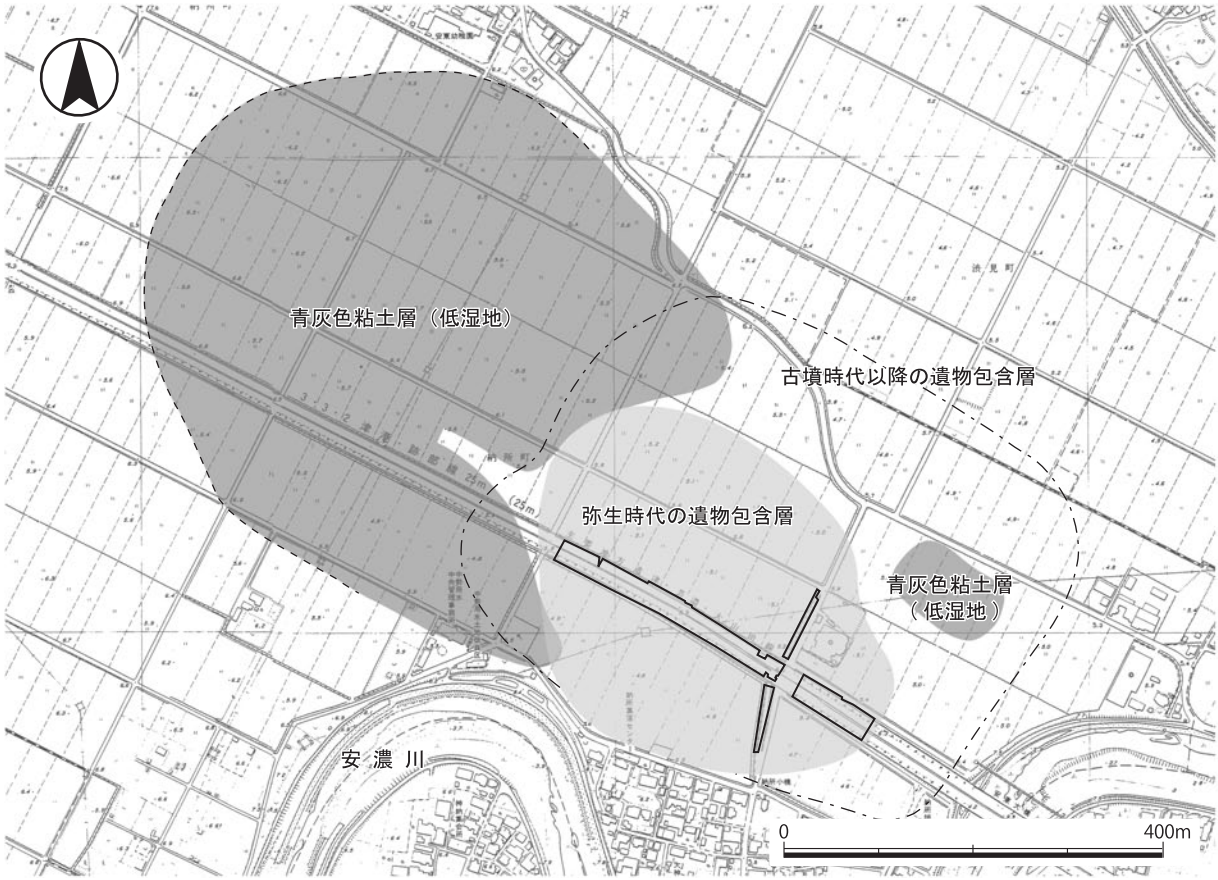
弥生中期後半以降は丘陵部に集落が営まれるようになる。長岡丘陵は谷底平野や谷底池が複雑に入り込み、丘陵斜面の傾斜は概して急峻である。したがって、広い平坦面を確保し、集落を展開することは困難であった。こうした条件下にあって、長遺跡では平均斜度25～30度の斜面にテラスを造成し、200棟もの竪穴住居を営んでいる。一方、山籠遺跡は谷底平野に近い緩斜面を選地した同時期の集落である。両遺跡とも、拠点的集落である納所遺跡から２㎞以内に近在しており、その関係が興味深い。

弥生後期の遺跡は、竹川遺跡や市場遺跡、大御堂遺跡など丘陵と低地の境界付近に散見される。宮ノ前遺跡では後期前半の竪穴住居が確認された。中期後半に引き続き、河川の氾濫を避けられる微高地や高所を居住地に選んでいる様子がうかがわれる。

納所遺跡の北西に位置する森山東遺跡では、灌漑水路や大畦畔で仕切られた弥生時代の小区画水田が上下２面にわたって確認された。食料生産域の様相が判明した例として貴重である。



第１図　遺跡分布図



第２図　納所遺跡周辺の地形環境

Ⅲ　遺構概要

80年報告書では、「上層」遺構と「下層」遺構が報告され、さらに調査区中の最東部となるＨ区のみはさらに最上層として古代の遺構が把握されている。ただし、調査中に面としての「下層」が確認されたのはＢ区からＦ区に存在する「埋積浅谷」として捉えられた第５層の青灰色粘土のみである。80年報告書で下層遺構とされているＧ・Ｉ・Ｊ区の縁辺部で検出された前期溝は面としての「下層面」ではなく「上層遺構」とされた弥生中期以降の遺構群と同じ面での検出であり、その切り合い関係のなかで前期のみが抽出されたものである。

以下、再整理の成果を元に簡単に概説する。

１　「最上層」遺構

調査区東端のＨ区のみで確認された。２間×２間の掘立柱建物１棟のほか、溝、土坑、集石遺構などがあるが、遺構密度は全体に疎らである。所属時期は、概ね奈良時代から平安時代と思われるが、溝などには下層に包含されている弥生時代や古墳時代の遺物も多く含まれている。

２　「上層」遺構

弥生時代中期の遺構を中心とするが、弥生前期や古墳時代の遺構も存在する。

80年報告書10頁第１表で示された納所遺跡標準層位では、第３層（茶褐色砂混じり砂質土、厚さ40～60㎝）に弥生土器の包含があり、その下層である第４層（灰黄褐色砂質土、厚さ30～50㎝）の上面で本遺構群が捉えられている。しかし、これら遺構埋土の多くは上層である第３層とほとんど区別ができない状況とされており、本来の掘り込みは第３層を含む上層部にあったと推定される。

すなわち、遺構として把握されたものは相応の深さがあったために下層まで掘り抜いたものであり、実際には「包含層」とされる第３層中にも多数の遺構が存在すると考えられる。つまり、第３層の「包含層」は、そのすべてではないにせよ、重複が激しかったため把握できなかった遺構が含まれ、実際の「上層」遺構数は今回の再整理でカウントした687個（無物出土遺構のみ、無遺物遺構も含むと2000以上）より遥かに多かったと推定される。

なお、小地区毎の通番として付与された「ピット」のなかにも、通常は「土坑」として扱うような長径１ｍ以上のものも相当数含まれている。

さて、「上層遺構」は、少数ではあるが弥生前期と推定される遺構も含まる。弥生前期は、本層の下位層である第５層（青灰色粘土、厚さ50～80㎝）が相当するが、その層は前期の自然流水路（埋積浅谷）そのものとされている。従って、本層における弥生前期遺構は、谷形成がなかった微高地部分に形成された遺構として捉えられる。

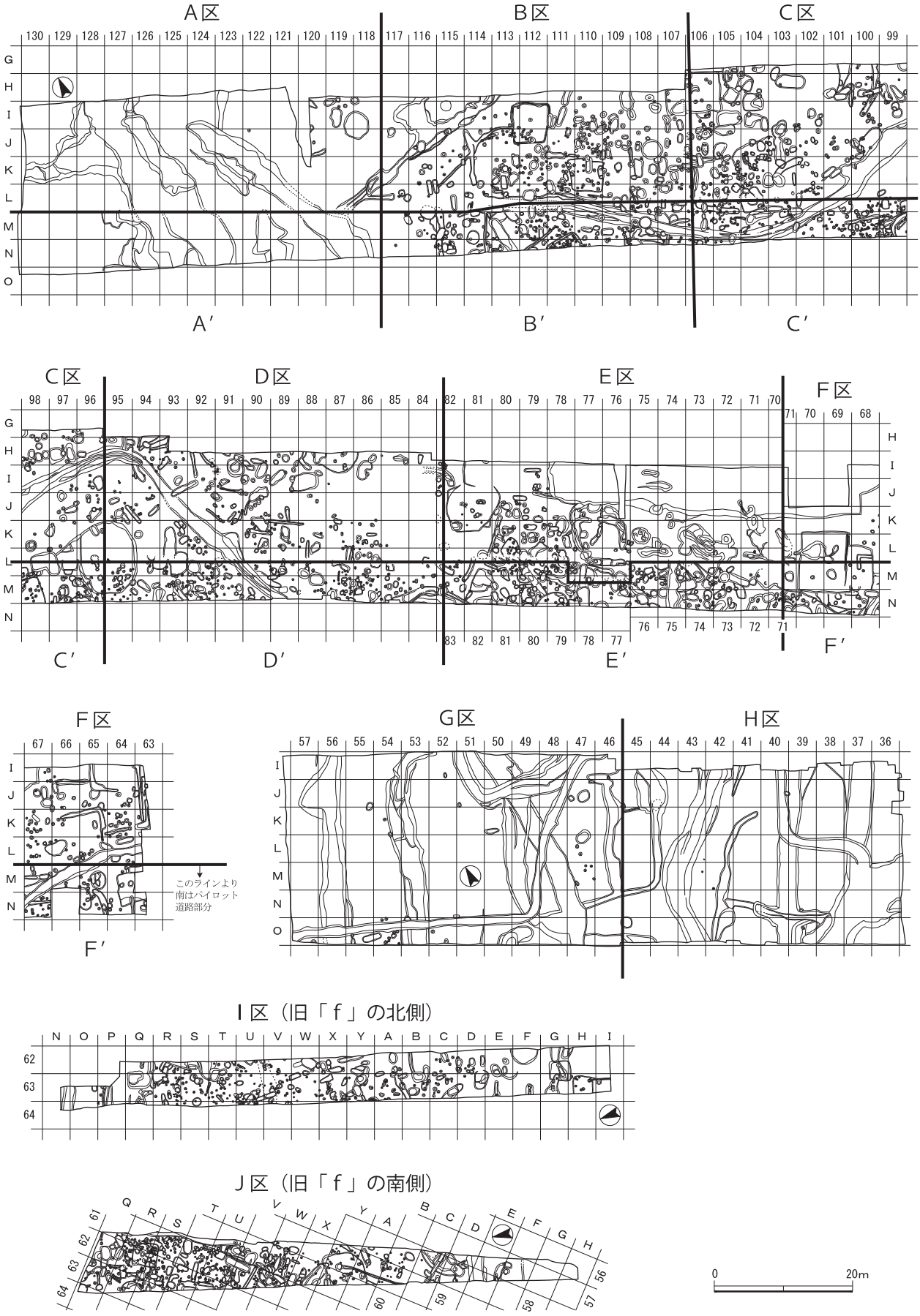
遺構個々の概要は、遺構一覧を参照されたいが、竪穴住居を想起させる規模・形状の「土坑」や、方形周溝墓を想起させるＬ字状に屈折する幅1ｍ前後の細長い「土坑」など、竪穴住居や方形周溝墓は80年報告書で把握されている個数よりも多くなる可能性がある。また、土坑のなかには古代の「土師器焼成遺構」の形状に類似した焼土を伴うものも含まれており、今後、その類例を注視したい。

また、骨を伴う単独土坑が相当数存在するが、今回はその基礎データの提示にとどめた。

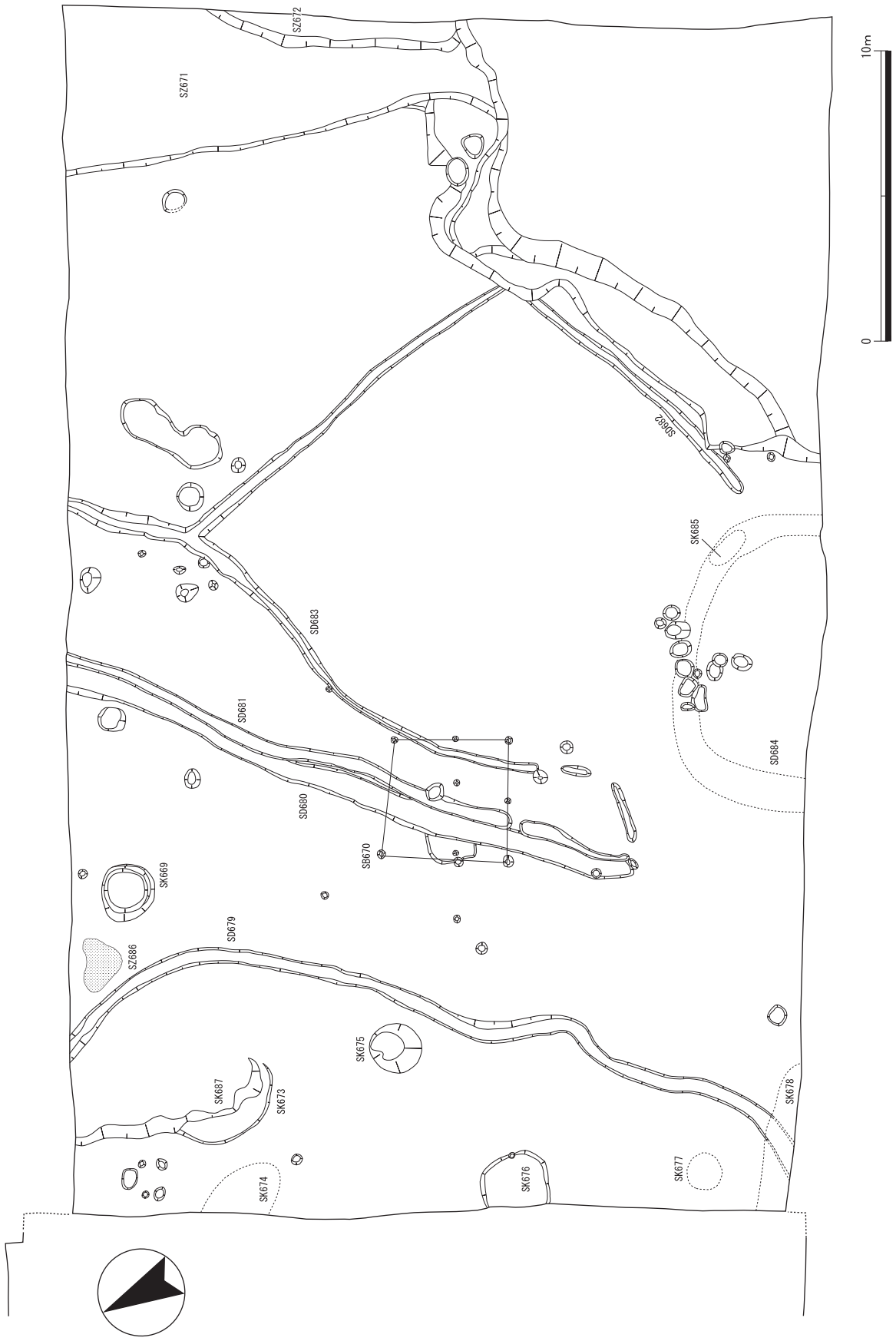
３　「下層」遺構

発掘調査時に面で把握された「下層」遺構は「自然流路・落ち込み」（今報告ではＳＺ1001～ＳＲ1010）だけである。しかし、80年報告書では、「下層＝弥生前期」という観点から前期遺構として６条の溝が「上層」遺構中から分離・抽出され、「下層」遺構に配置された。つまり、80年報告書の「下層」遺構図は、面で確認された遺構と、切り合い関係及び出土遺物から弥生前期と認定したものを図上で合体させたものである。弥生前期遺構は、「上層」中に他にも存在している。

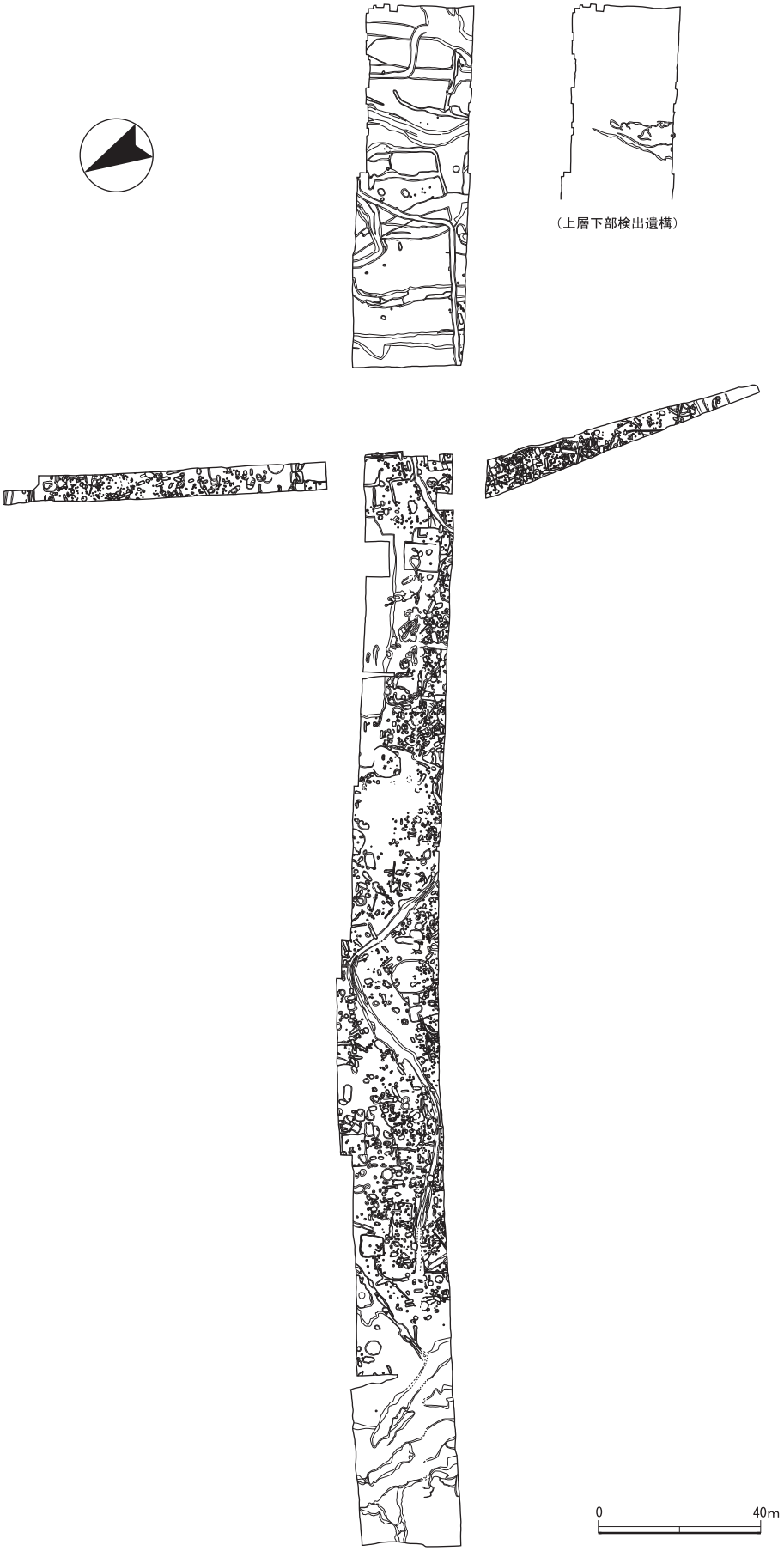
今報告では、80年報告書の「下層」遺構を踏襲し、そのうえで支流相当や井泉的なものにも遺構番号を付与して出土遺物の分別を図った（1001～1018、ただしＳＲ1012のみ上層遺構中最下層で確認した遺構）。今後、本再整理結果からより実態に即した遺構図を作成する必要がある。



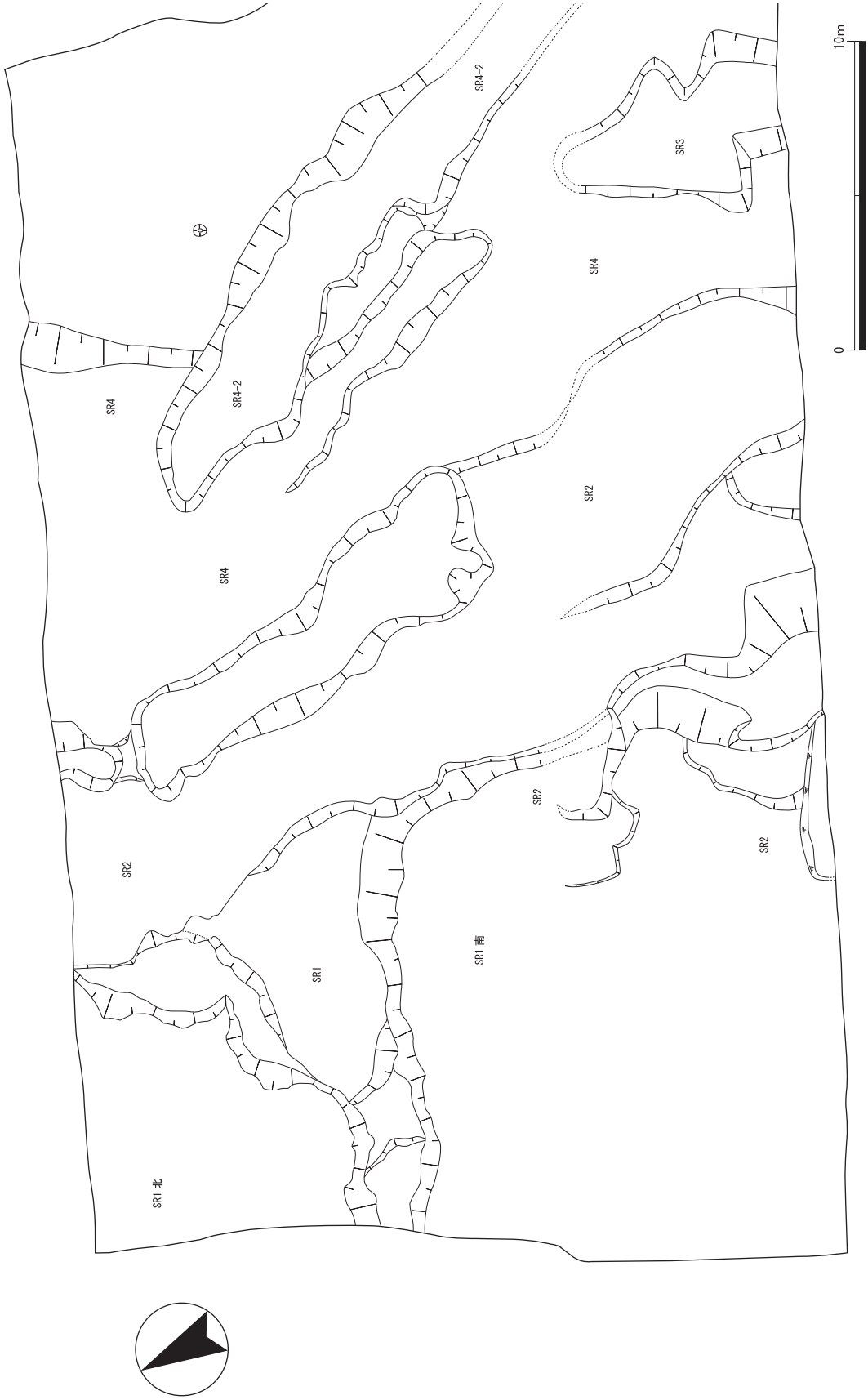
第３図　納所遺跡グリッド配置図（1：800）



第４図　最上層遺構実測図（Ｈ区，１：200）

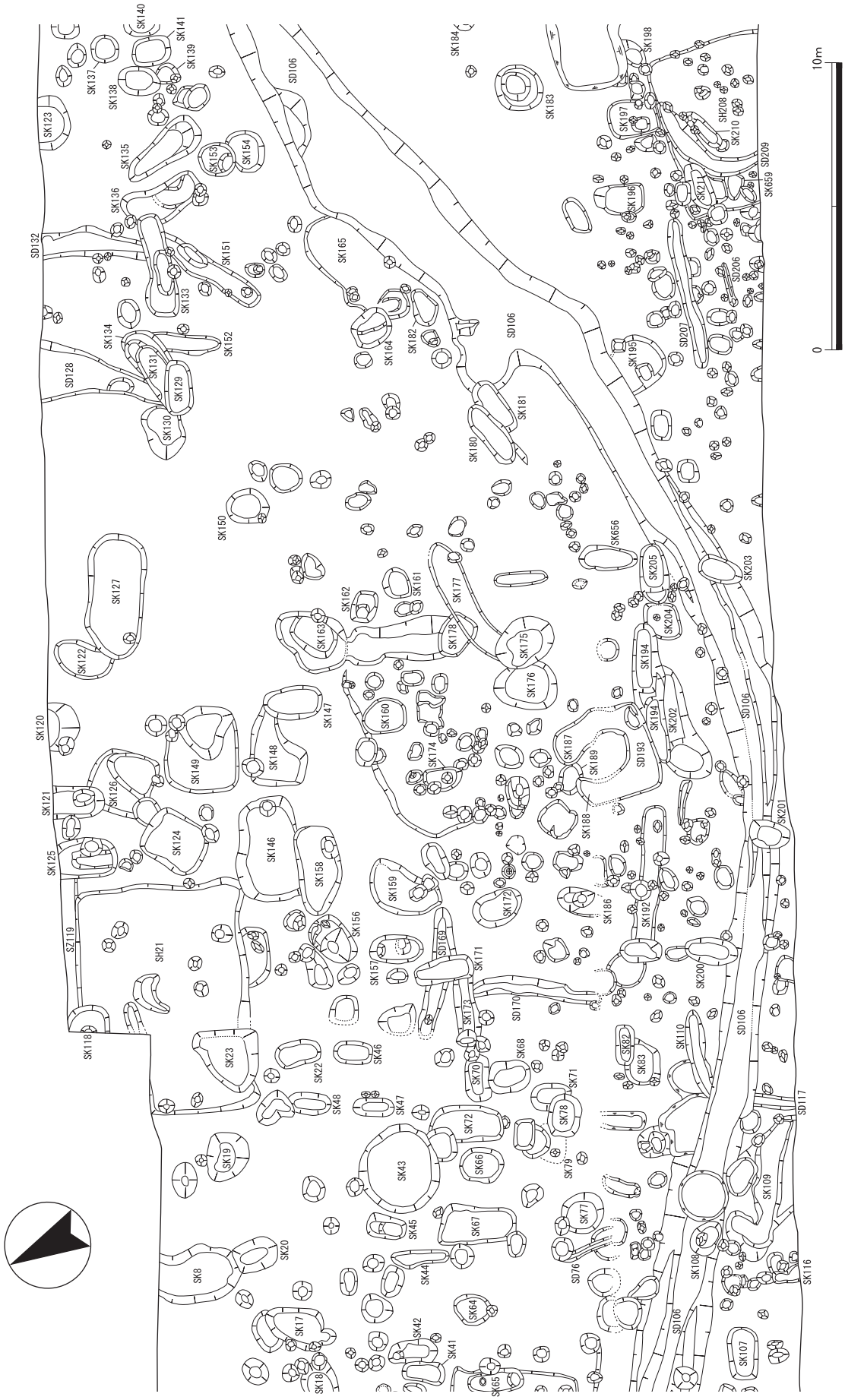


第５図　上層遺構全体図（1：1600）

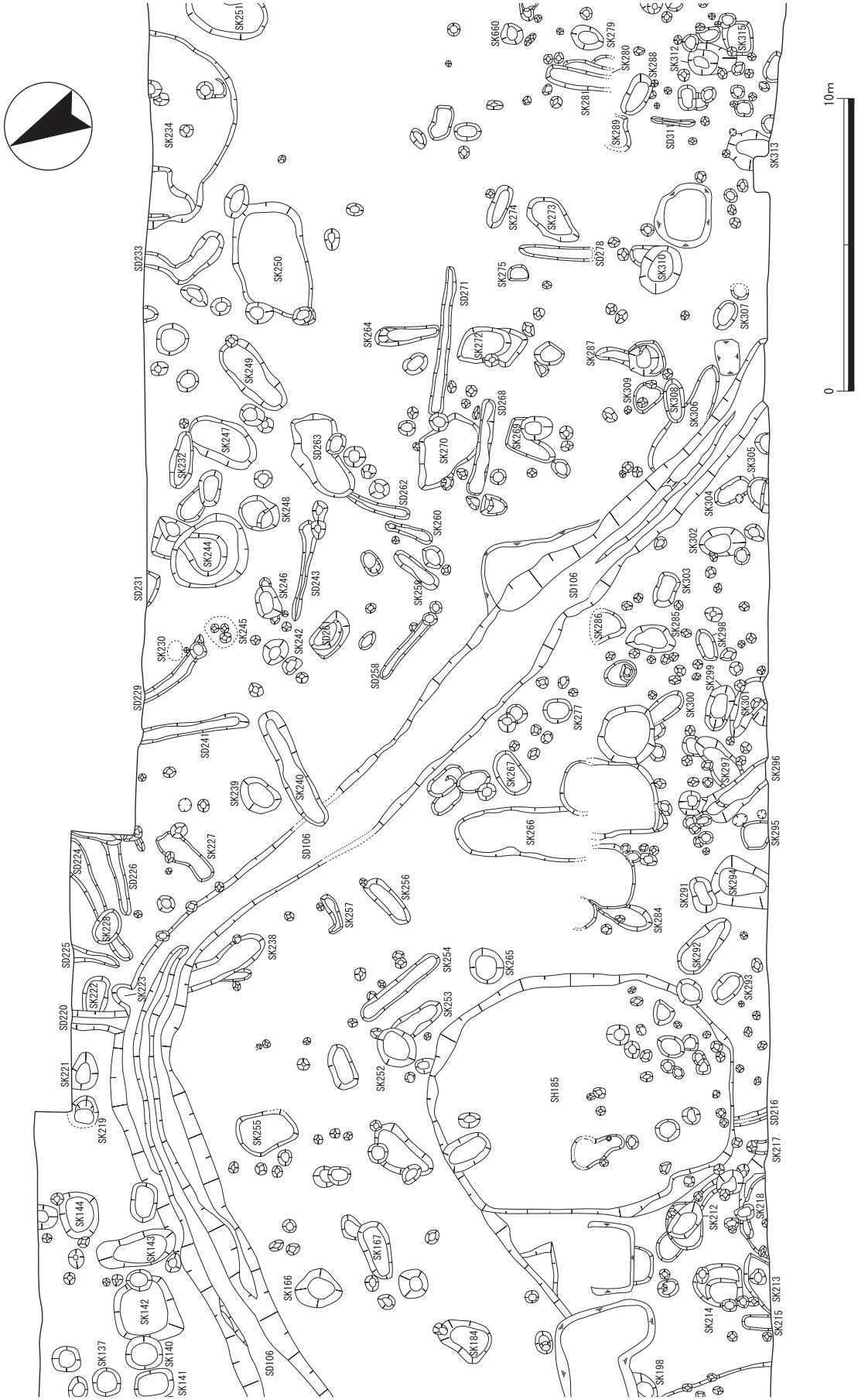


第６図　上層遺構実測図１（1：200）

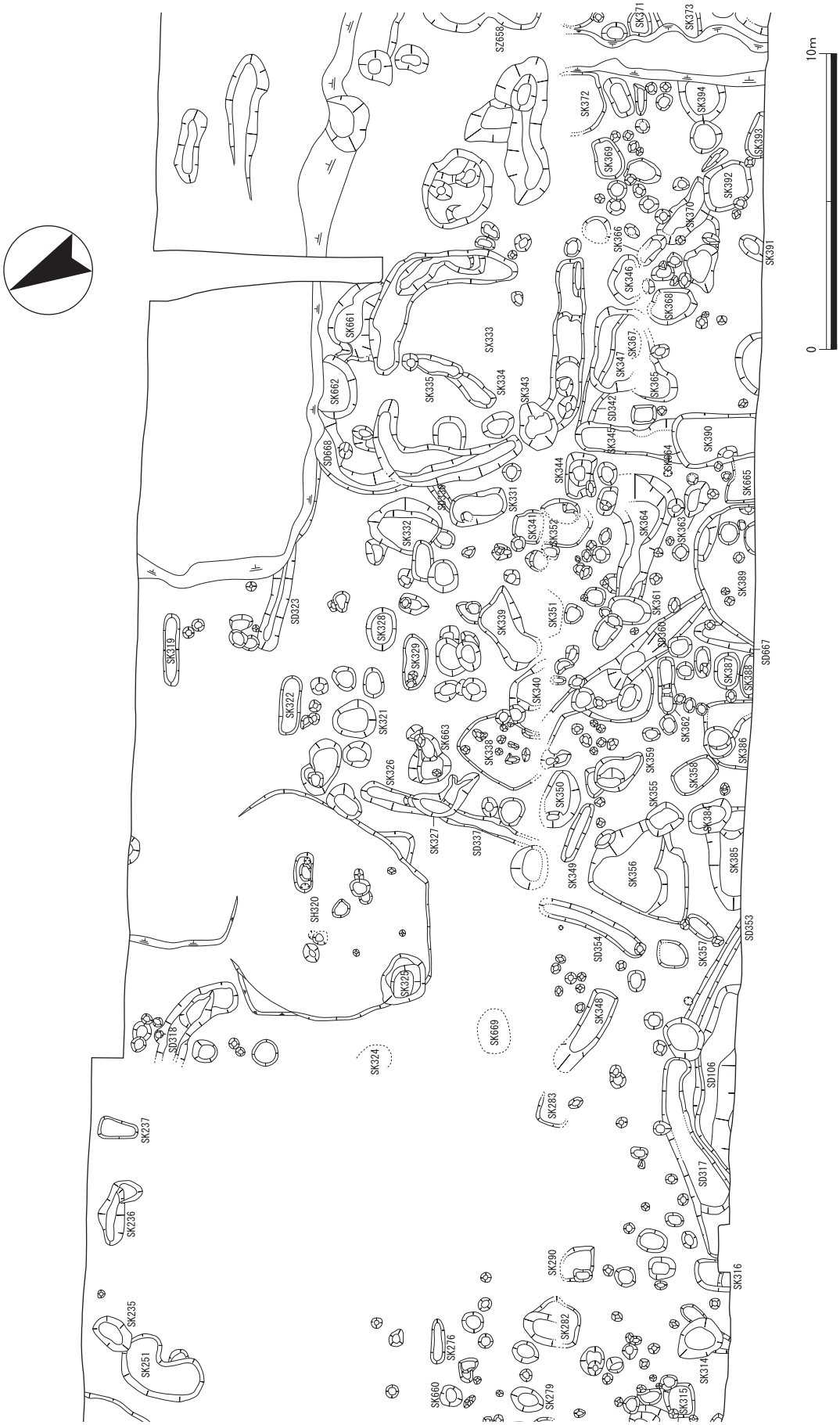
第７図　上層遺構実測図２（1：200）



第８図　上層遺構実測図３（1：200）



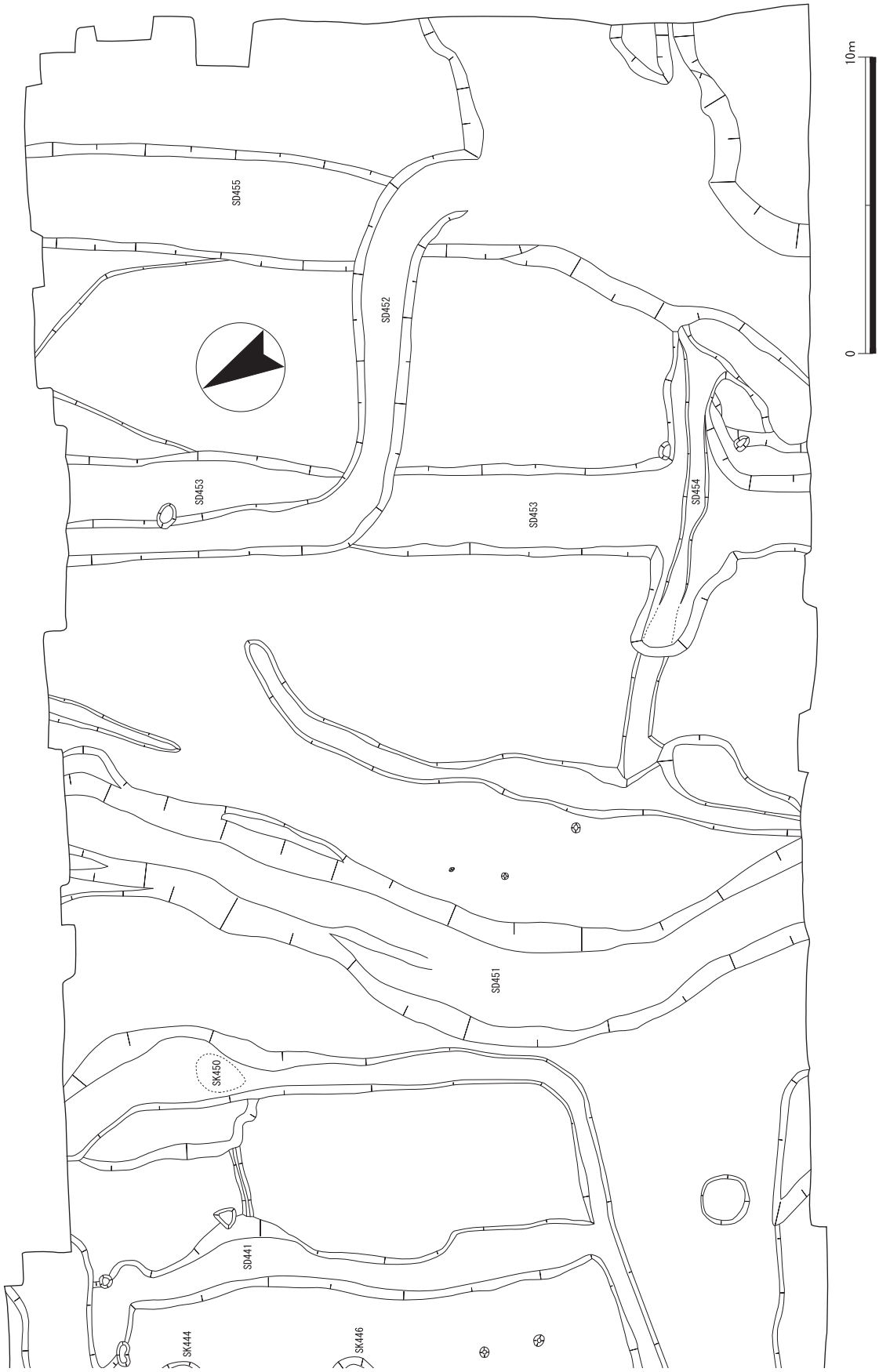
第９図　上層遺構実測図４（1：200）



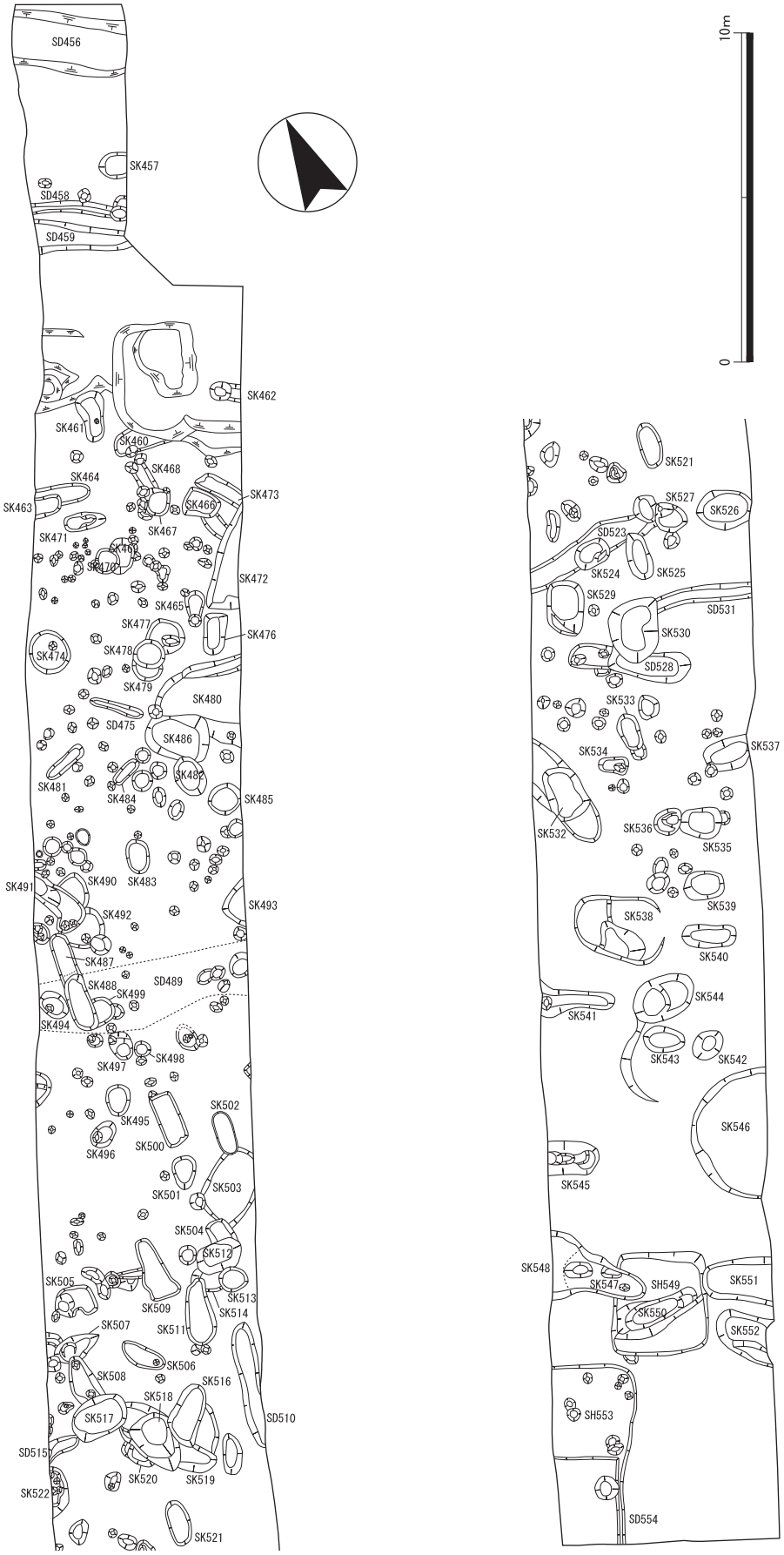
第10図　上層遺構実測図５（1：200）

第11図　上層遺構実測図６（1：200）

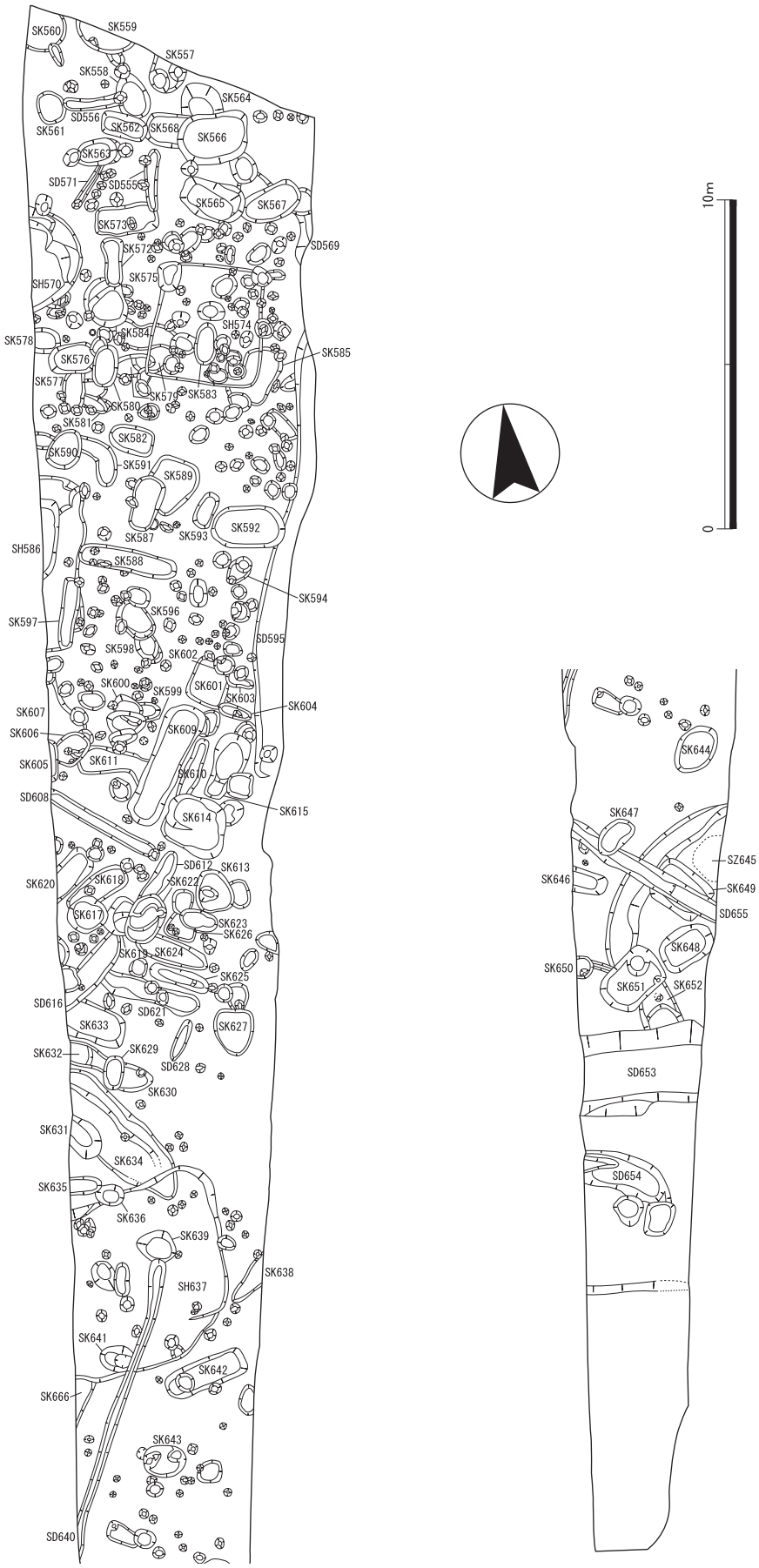
第12図　上層遺構実測図７（1：200）



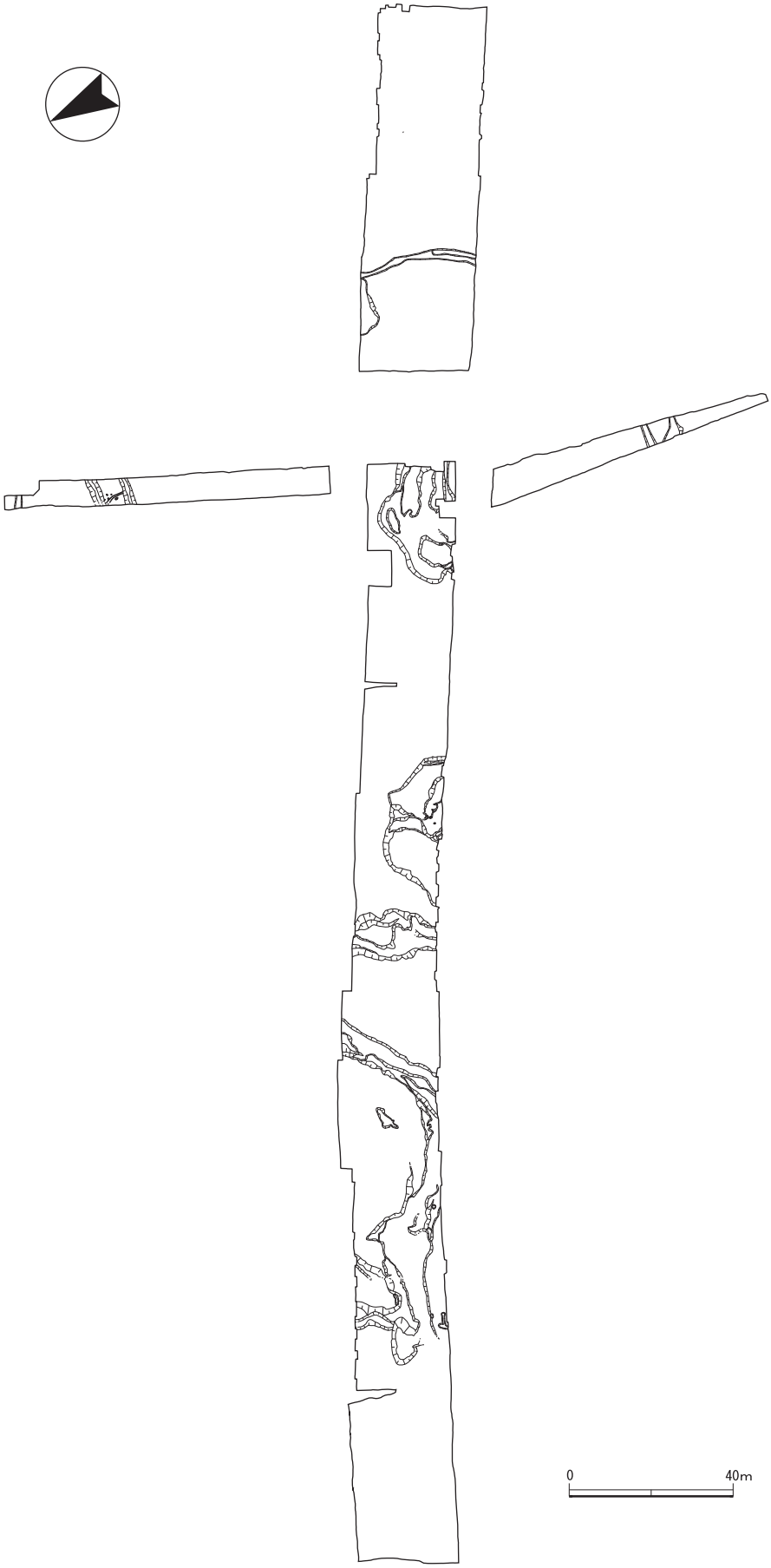
第13図　上層遺構実測図８（1：200）



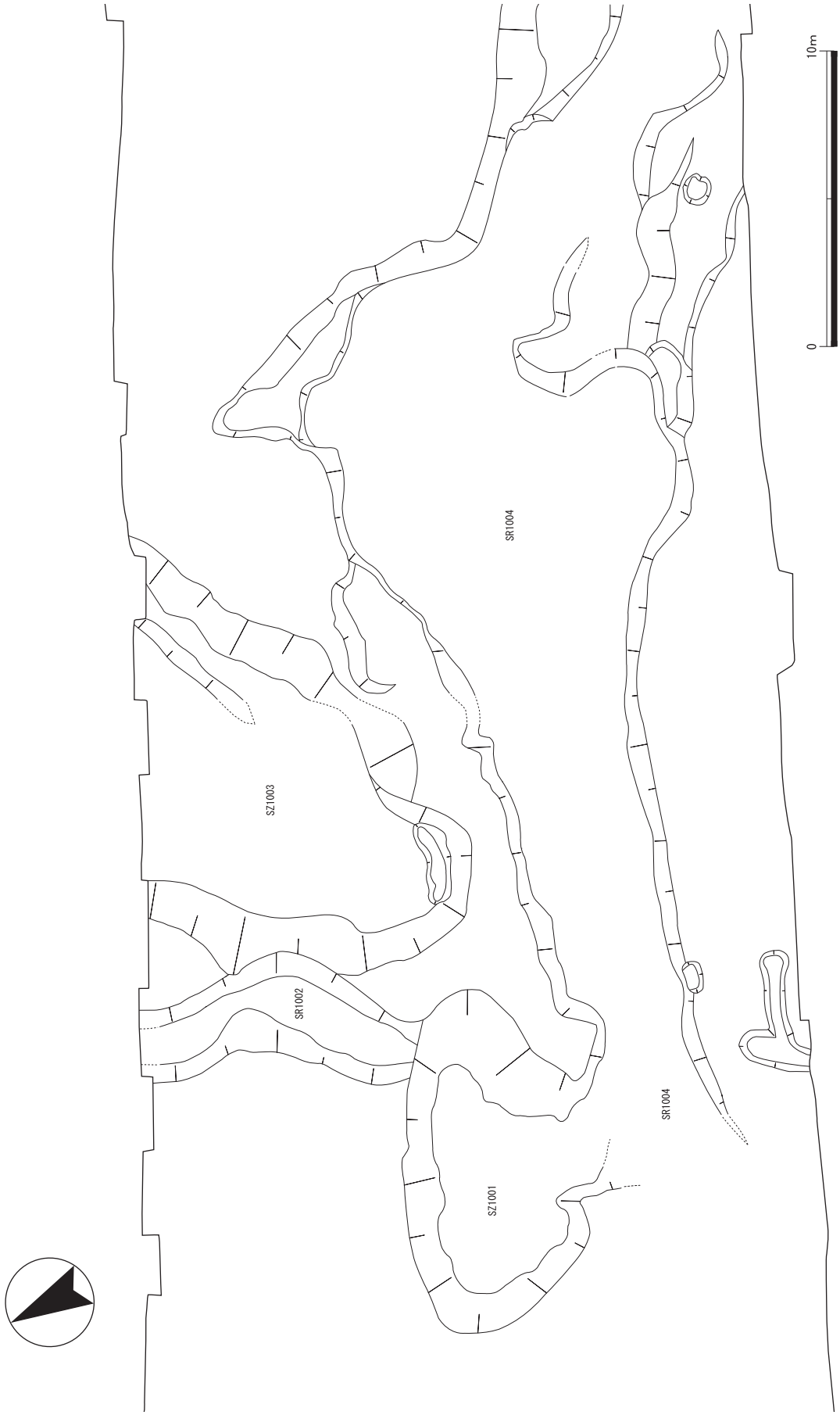
第14図　上層遺構実測図９（1：200）



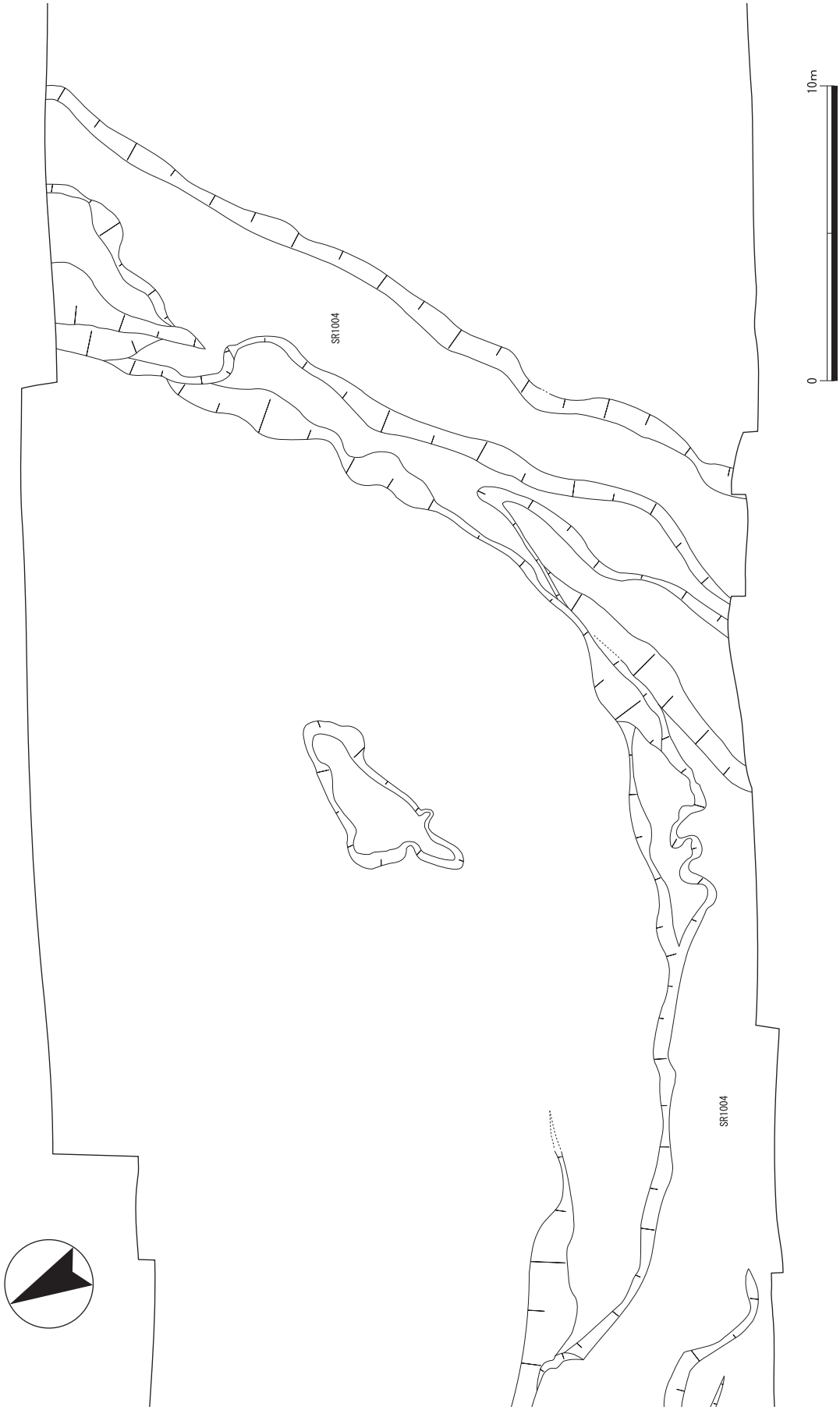
第15図　上層遺構実測図10（1：200）



第16図　下層遺構全体図（1：1600）

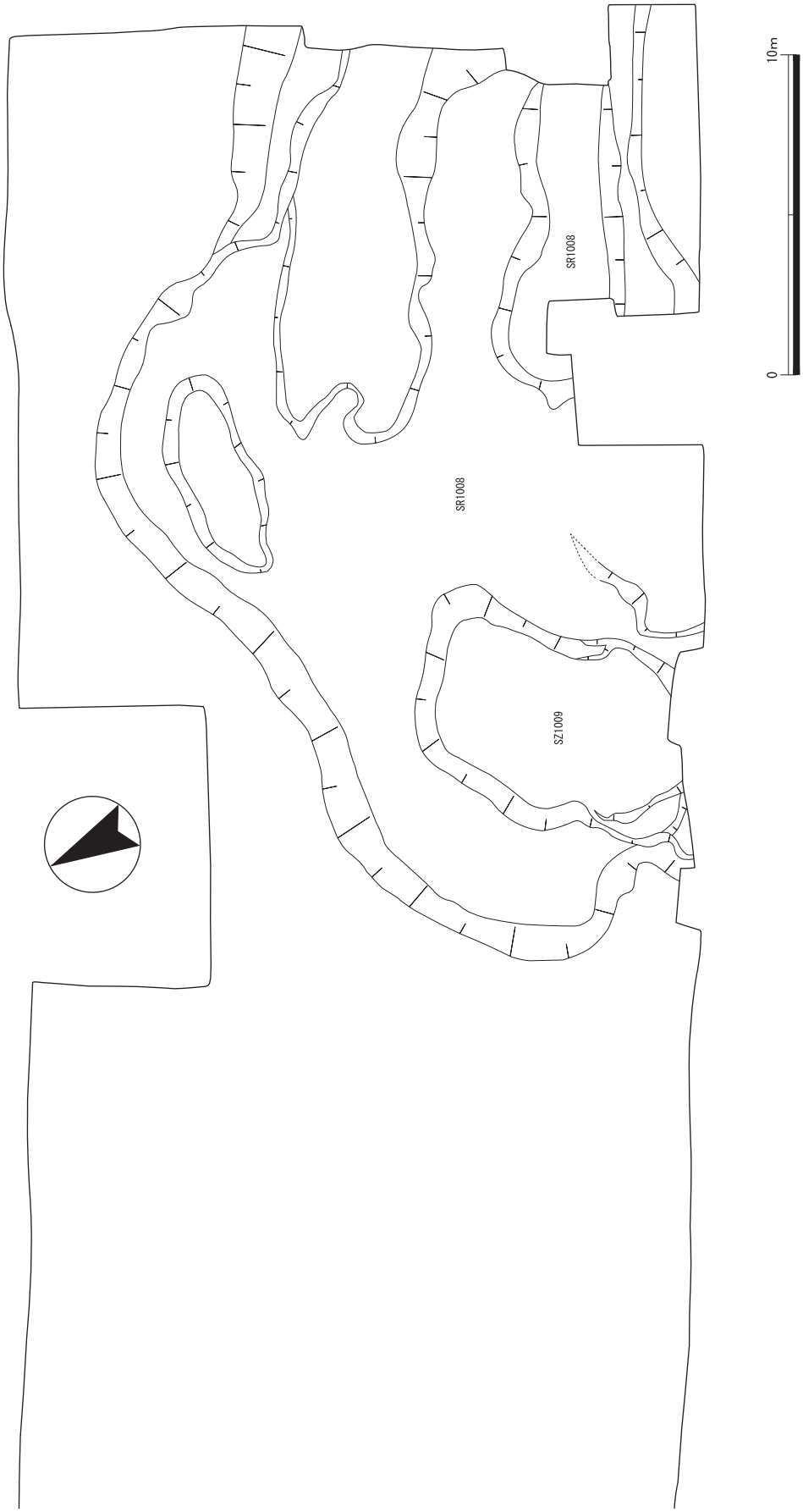


第17図　下層遺構実測図１（1：200）

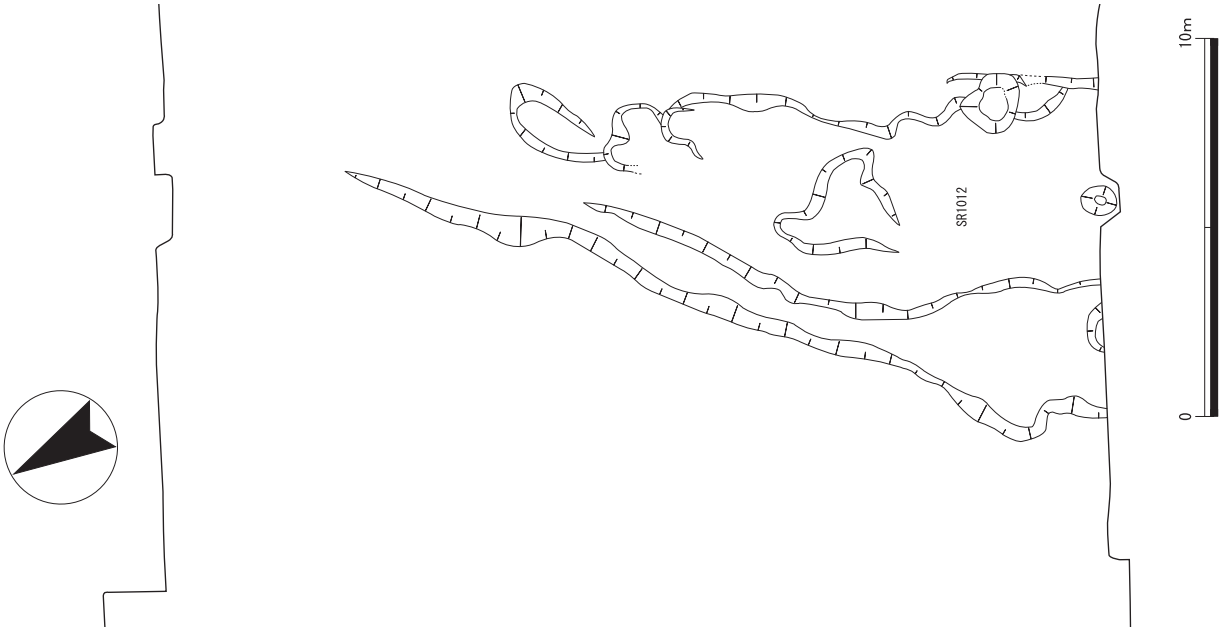


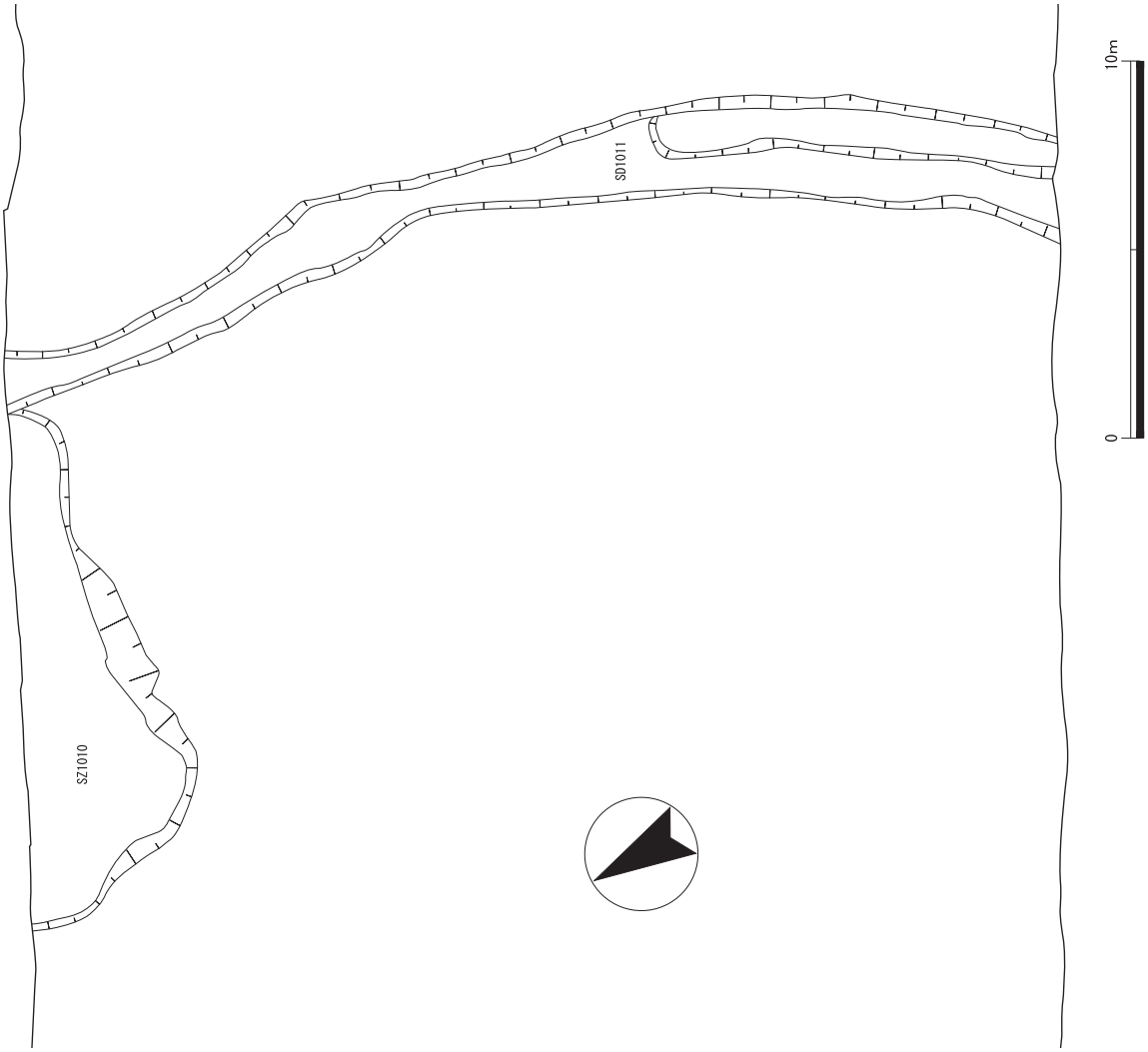
第18図　下層遺構実測図２（1：200）

第19図　下層遺構実測図３（1：200）

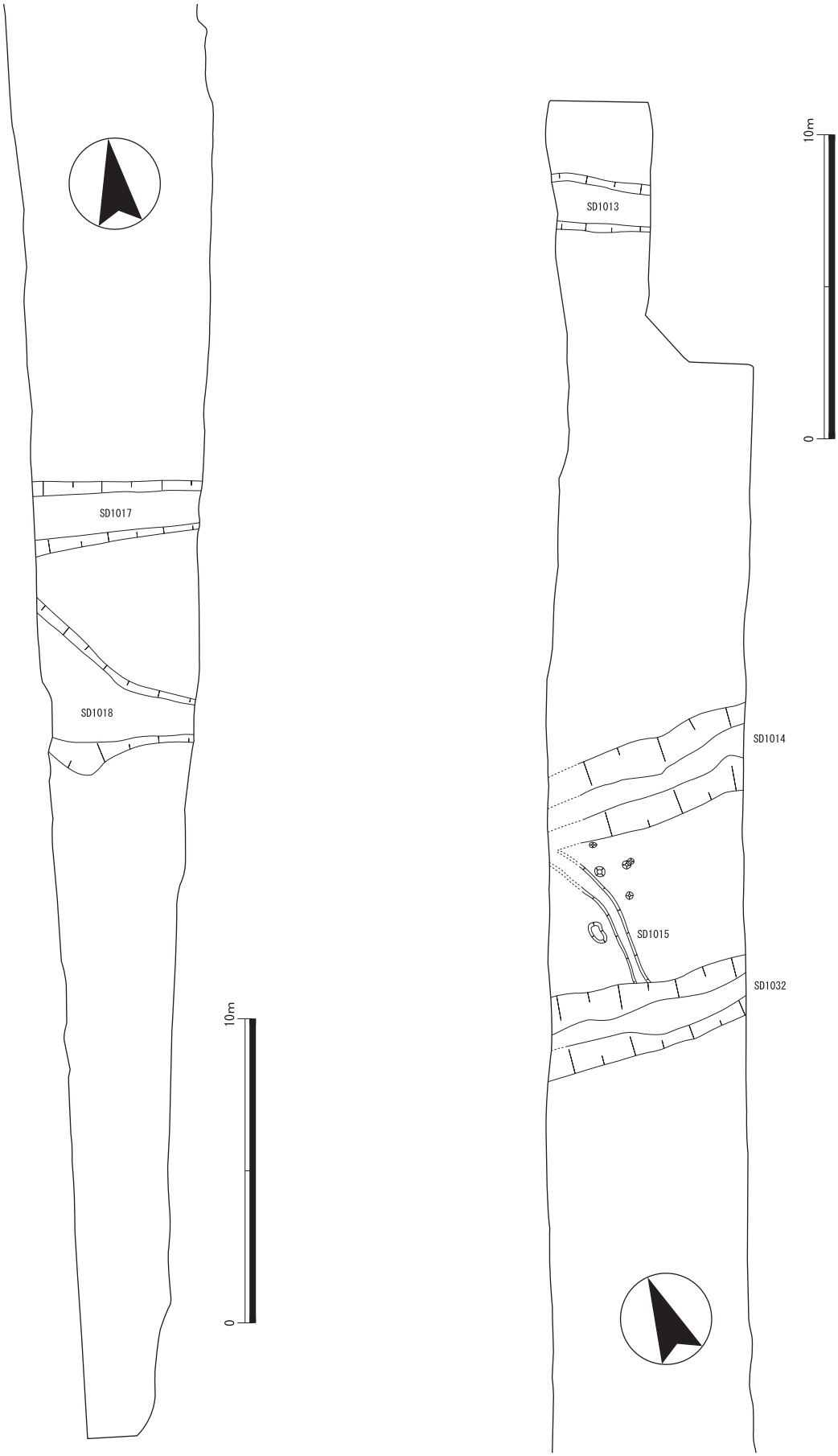


第20図　下層遺構実測図４（1：200）





第21図　下層及び上層下部遺構実測図（上段；H区上層下部・下段；G区下層，1：200）



第22図　下層遺構実測図６（左；Ｊ区・右；Ｉ区，1：200）

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SR1	A	K・J	130～128	自然流水路	A区自然流水路		西側から自然流水路SR2へ流入する小流路。	
SR2	A	I～N	128～123	自然流水路	A区自然流水路	古墳中～後期	調査区西端に所在する自然流水路の西半部。木器出土多。	中心は古墳時代中期～後期。Ⅰ～Ⅴの土器も含む。
SR3	A	M・N	122～121	自然流水路	A区自然流水路		自然流水路SR4内の落ち込み。	
SR4	A	H～N	126～119	自然流水路	A区自然流水路	廻間Ⅰ～Ⅱ	調査区西端に所在する自然流水路の東半部。	Ⅰ～Ⅴの土器や須恵器も含む。ⅣまたはⅤの大型器台114あり。
SR4-2	A	J～N	124～118	自然流水路	A区自然流水路	廻間Ⅰ～Ⅱ	SR4内の主流路。	有稜高坏Cと内湾口縁壺B多い。Ⅱ～Ⅴ初頭の土器も含む。手焙形土器187に人面文線刻。151は四頭渦文の線刻土器片。初期須恵器の高坏221あり。
SK5	A	H	119	SK1		Ⅳ	長さ1.5m×幅１mの楕円形。	大型壺223あり。
SD6	A	K	118	SD1			実測時消滅。	
SD7	B	H	111	SD1		Ⅰ～Ⅳ	調査区外へ延びる長さ2m以上×幅1mの溝状遺構。ただし、隅丸長方形土坑の可能性もあり。	Ⅱ～Ⅲの土器が多いか。
SK8	B	H	109	SK1		Ⅳ	長さ2.8m×幅2mの楕円形土坑。	
SD9	B	I	114	SD1	SD７	Ⅲ～Ⅳ	東北側からSR4-2へ流入する幅約2mの直線溝。	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳの土器があるがⅢが中心か。
SK10	B	I	114	SK1	SK１	Ⅳ	長さ2.55m×幅0.92m、深さ33㎝の船底形土坑。全体に細かい炭化物有。	壺複数器種あり。双頭渦文の線刻をもつ受口状口縁細頸壺247あり。
SH11	B	I	112	SB1？	SB1	Ⅰ～Ⅱ	長径6m×短径4.5～5.6mの隅丸方形竪穴住居。周溝、主柱穴、炉跡（径40㎝、深さ25㎝の円形で、焼土・炭化物集中）、焼土2箇所あるも掘り込み残存なし。西辺から排水溝（SD27・50）。SK31に切られる。	小片のみで図化できず。
SK12	B	I	111	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長径3m×短径1m。	小片のみで図化できず。
SK13	B	I	111	SK2		Ⅲ	長さ2m×幅0.8mの楕円形。	小片のみで図化できず。
SK14	B	I	111	SK3		Ⅰ～Ⅲ	SK13と重複する長さ1.9m×幅0.6m以上の楕円形。	
SK15	B	I	110	SK1		Ⅲ	長さ1.5m×幅1mの楕円形土坑。底に焼土、上面炭化物、特に焼けた土器等はなし。	小片のみ。
SK16	B	I	110	SK2		Ⅲ	長さ1.6m×幅1.3mの楕円形土坑。	小片のみで図化できず。
SK17	B	I	109	SK1		Ⅳ	長径2.1m×短径1.4mの略三角形状土坑。底辺部に半円形の張り出しがあり、これも一連と考えると長径は2.6mとなる。	椀形高坏Ａ257あり。
SK18	B	I	109	SK2		Ⅲ	長径1.65m×短径1.35mの楕円形土坑。	小片のみで図化できず。
SK19	B	I	108	SK1		Ⅳ	長径1.8m×短径1.5mの略円形土坑。	
SK20	B	I	108	SK2		Ⅰ～Ⅲ	長径1.5m×短径1.1mの楕円形土坑。北辺がSK8と重複。	Ⅲは小片のみ。壺蓋261あり。
SH21	B	I	107	住居址	SB4	Ⅲ	長径8m×短径6mの隅丸長方形竪穴住居。残存深25～30㎝。主柱穴2本確認（残りは調査区外）。	小片のみで図化できず。Ⅲでも古い段階か。
	C	H	106	A・B・C・D				
SK22	B	I	107	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.6m×幅0.9mの略楕円形土坑。	
SK23	B	I	107	SK2		Ⅲ	SH21に重複する底辺部2.6m×2.1mの三角形状土坑。	
SK24	B	J	116	SK1		Ⅲ？	長径1.7m×短径1.25mの隅丸長方形土坑。	土器片加工円板269あり。土器は小片のみで図化できず。
SD25	B	J	115	SD1		Ⅱ～Ⅲ？	長さ6.7m×幅0.4m強の小溝。	小片のみで図化できず。
SK26	B	J	115	SK1			長径1.2m×短径0.9mの略円形二段土坑。SD9と重複し、井戸状の施設か。	小片のみで図化できず。
SD27	B	J	114	SD1		Ⅰ～Ⅲ	SH11から西側へ出る幅0.4m～0.8mの排水溝か。その場合、SD50と一連の可能性が高く、長さ約14mとなる。ただし、「溝」の一部が幅広になっている部分があり、別土坑の重複の可能性あり。	Ⅰの土器が目立つがⅡ～Ⅲの小片も混じる。
SD28	B	J	114	SD2		Ⅲ～Ⅳ	北端部へ向かって深くなる長さ3.5m×幅1m程度の小溝。SD52と西辺が一連となるため同一遺構の可能性があるが（その場合、長さ8.3m）、別遺構とするとSD28単独の土坑状のものである可能性も高い。	Ⅲの土器が主体。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK29	B	J	113	SK1		Ⅱ～Ⅲ？	SH11とSD27と重複する土坑。ただし、残りが悪く、実測時には消滅。	小片のみで図化できず。沈線文系あり。
SD30	B	J	113	SD1			長さ2.4m×幅0.4mの小溝。	小片のみで図化できず。
SK31	B	J	112	SK1		Ⅲ～Ⅳ	SH11を切る長径1.1m×短径0.9mの略円形の二段土坑。	
SK32	B	J	111	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長径1m×短径0.9mの略円形。	小片のみで図化できず。
SK33	B	J	111	SK2			長径1.1m×短径0.8m弱の楕円形。	
SK34	B	J	111	SK3		Ⅳ	東側がSK34、西側がSK35。実測図上では遺構境界不明。SK34は幅0.9m、SK35は幅1.1m。	耳状の突起が付く破片281あり。
SK35	B	J	111	SK4		Ⅲ～Ⅳ		土器出土量は僅少。284は把手が剥離したらしい痕跡あり。
SK36	B	J	110	SK1		？	長径0.7m×短径0.6mの隅丸方形。SK37と重複。	小片のみで図化できず。
SK37	B	J	110	SK2		？	長径0.9m×短径0.8mの隅丸方形。	小片のみで図化できず。
SK38	B	J	110	SK3		Ⅰ～Ⅲ	長径1.4m×短径0.8mの隅丸長方形。	小片のみで図化できず。沈線文系あり。
SK39	B	J	110	SK4		Ⅲ～Ⅳ	長径1.1m×短径0.3mの長楕円形。	
SK40				重複分				
SK41	B	J	109	SK1		Ⅳ	長径1.5m×短径0.8mの隅丸長方形土坑。東辺がSK42と重複。	壺体部片289に竹管状工具による施文。
SK42	B	J	109	SK2		Ⅲ	長径1.7m×短径0.8mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK43	B	J	108	SK1		Ⅳ	長径3.1m×短径2.9mの略円形大型土坑。	凹線文系のく字状口縁甕B目立つ。壺体部片291は古井・長床式系壺か？
SK44	B	J	108	SK2			長径2m×短径0.6mの長楕円形。	
SK45	B	J	108	SK3		Ⅰ～Ⅲ	長径1.4m×短径0.8mの隅丸長方形。	
SK46	B	J	107	SK1			長径1.4m×短径0.8mの隅丸長方形。	
SK47	B	J	107	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長径1.4m×短径0.6mの隅丸長方形土坑。両側が深く中央浅い。	小片のみ。
SK48	B	J	107	SK3		Ⅳ	長径1.5m×短径0.8mの長楕円形。	脚付大型鉢？295あり。Ⅳでも古い段階か。
SK49	B	K	116	SK1		Ⅲ	長径2.1m×短径0.7mの長方形土坑。SK51と平行して所在する。	小片のみで図化できず。
SD50	B	K	115	SD1		Ⅲ	SD27と一連でSH11の排水溝。	
SK51	B	K	115	SK1		？	長径2m×短径0.7mの長方形土坑。	
SD52	B	K	114	SD1		Ⅲ～Ⅳ	SD28と一連となる溝か。	脚付大型鉢？298あり。
SK53	B	K	114	SK1		Ⅲ	長径1.2m×短径1.1mの略円形土坑。	小片のみで図化できず。
SK54	B	K	113	SK1		Ⅲ	長径1.7m×短径1.2mの隅丸長方形土坑。	廻間式期の高坏片もあるが混入か。
SK55	B	K	113	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長さ2.2m、幅1.9mの隅丸三角形状土坑。	
SK56	B	K	113	SK3		Ⅳ	長さ2m×幅1mの長方形土坑。短辺戸口に突起→木棺か？	
SK57	B	K	113	SK4		Ⅲ？	SK59と重複する長さ0.8m、幅0.4mの土坑。	小片のみで図化できず。沈線文系あり。
SK58	B	K	113	SK5		Ⅲ？	SK59と重複する長径0.7m×短径0.5mの略長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK59	B	K	113	SK6		Ⅰ～Ⅲ	径1mの隅丸正方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK60	B	K	113	SK7		Ⅴ	長径1.4m×短径0.9mの隅丸長方形土坑。	図化できていないが赤彩の壺破片あり。
SK61	B	K	111	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長径2.3m×短径1.3mの略楕円形土坑。	
SH62	B	K	110	SB1？	SB2	Ⅱ～Ⅲ？	長径4.3～5.2m×短径4.3×4.6m、残存深10㎝の歪な形状の竪穴住居。周溝なし。主柱穴位置が住居壁際。	小片のみで図化できず。
SK63	B	K	110	SK1		Ⅲ	SH62に重複する長さ2.3m×幅1mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK64	B	K	109	SK1		Ⅲ	1.2m×1.1mのやや歪な土坑。	
SK65	B	K	109	SK2		Ⅲ	SH62に重複する長さ2m×幅0.8mの略楕円形土坑。	小片のみで図化できず。
SK66	B	K	108	SK1		Ⅲ	長径1.5m×短径1.2mの略円形土坑。	壺体部片313に流水文。
SK67	B	K	108	SK2		Ⅲ	長径2.7m×短径1.4mの略長方形土坑。	受口状口縁細頸壺317は櫛描直線文帯に縦位直線文と相反する弧線を施す。
SK68	B	K	107	SK5		Ⅳ	長径1.5m×短径1.1mの隅丸長方形土坑。	Ⅰの土器も含む。
SK69		K	107	重複分		Ⅳ		小片のみで図化できず。凹線文系・櫛描文系あり。
SK70	B	K	107	SK2		Ⅳ	長径1.9×短径0.9mの略隅丸長方形土坑。	口縁が内湾する鉢？323あり。
SK71	B	K	107	SK3		Ⅲ？	SK78に切られる長径1.4m×1mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK72	B	K	107	SK4		Ⅳ	長径2.6m×短径1.3mの長方形土坑。	壺体部片321は連続刺突文の上から沈線施す。
SK73	B	L	114	SK1		Ⅳ	長径1.3m×短径0.8mの略長方形土坑。	ハケメ文系のく字状口縁甕B328あり。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK74	B	L	113	SK1		Ⅲ	長さ1.4m×幅0.4mの長方形土坑。	甕の破片が多い。
SK75	B	L	112	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長径1.9m×短径1.6mの略方形土坑。SD106を切る。	凹線文系の破片あり。
SD76	B	L	108	SD1		Ⅰ～Ⅲ？	長さ1.7m以上、幅0.3mの小溝。	小片のみで図化できず。
SK77	B	L	108	SK1		Ⅲ	1.5m×1.4mの略円形土坑。	壺330付加沈線研磨による加飾。
SK78	B	L	107	SK1		Ⅲ	長径1.5m×短径1.1mの隅丸長方形土坑。SK71を切る。	
SK79	B	L	107	SK2		Ⅲ	SK78と重複して西側に形成された土坑。残存が浅く、遺構実測時には消滅。	壺337体部の屈曲部に貼付突帯。条痕文系のく字状口縁甕A338底部外面に布目、美濃からの搬入か。
SD80	B'	L	114	SD1		Ⅲ	長さ0.9m以上×幅0.2mの小溝。	小片のみで図化できず。櫛描文系あり。
SD81	B'	L	114	SD2		Ⅲ？	SD80の西側に平行する長さ0.7m以上×幅0.4mの小溝。南部を欠くが、楕円形土坑状の形状を呈する。	小片のみ。
SK82	B'	L	107	SK1		Ⅳ	長径1.4m×短径0.6mの隅丸方形。	
SK83	B'	L	107	SK2		Ⅲ	1.7m×1.3mの不正方形。	小片のみで図化できず。
SK84	B'	M	116	SK1		Ⅲ～Ⅳ	2.3m×1.3m以上の略円形、北側欠。	
SK85				重複分				
SK86	B'	M	116	SK2		Ⅲ？	長さ2m以上×幅1.3mの不正楕円形。中央部が窄まるため、2遺構重複の可能性あり。	
SK87	B'	M	115	SK1		Ⅲ	長さ1.4m以上×幅0.5m。	
SK88	B'	M	115	SK2		Ⅲ？	長径約1m×短径0.8mの菱形。北端部をピットと重複。	小片のみで図化できず。
SK89	B'	M	115	SK3		Ⅲ	長径1.9m×短径1.1mの隅丸長方形。	小片のみで図化できず。
SK90	B'	M	114	SK1		Ⅲ～Ⅳ	2m×1.9mの略円形。	出土土器量少ないが甕が目立つ。
SK91	B'	M	114	SK2		Ⅲ	約0.8m×0.5メートルの楕円形土坑。西側は別遺構と重複のため不明。	出土土器量少ないが甕が目立つ。
SK92	B'	M	114	SK3		Ⅲ	長径1.3m×短径1.2mの隅丸方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK93	B'	M	114	SK4		Ⅲ	1.4m×0.5m以上の隅丸方形土坑。北半を欠く。	小片のみで図化できず。
SK94	B'	M	113	SK1		Ⅲ	長さ2.3m×幅1.2mの隅丸長方形。	出土土器量は多いが図化できる破片は限られる。水平口縁高坏352あり。351は何らかの土製品の破片か。
SK95	B'	M	113	SK2		Ⅳ	長さ約6m×1.5mの溝状遺構。方形周溝墓の周溝様であるが、その場合対応する明瞭な溝を欠く（ただしSK97やSD114は位置的にその残欠の可能性あり）。	甕は受口状口縁甕Ａ・Ｂが主体。
SK96	B'	M	113	SK3		Ⅲ～Ⅳ	長さ3.5m以上×幅1.5m。調査区境界だったため北半及び西側を欠く。	図化できていないが受口状口縁細頸壺も数個体あり。Ⅳの土器が主体か。
SK97	B'	M	113	SK4		Ⅲ～Ⅳ	長さ2.3m以上×幅1.6m。調査区境界だったため東側を欠く。	小片のみで図化できず。
SK98	B'	M	112	SK1		Ⅲ？	長さ1.7m×幅0.7mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK99	B'	M	112	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.7m以上×幅1mの隅丸長方形土坑。北側を欠く。	
SK100	B'	M	112	SK3		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.1m以上×幅1.2m。2遺構重複の可能性あり。	Ⅲの土器が主体か。
SK101	B'	M	112	SK4		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.6m×幅1.3mの不正長円形。	凹線文系の無頸鉢367あり。
SK102	B'	M	111	SK1		Ⅲ	長さ1.1m×幅0.9mの不正長円形。	壺底部片372は底部に２箇所穿孔あり。
SK103	B'	M	111	SK2		Ⅲ	長さ1m以上×幅0.8mの楕円形。SD106と重複。	
SK104	B'	M	110	SK1		Ⅲ	長さ1m×幅0.65mの楕円形。	
SK105	B'	M	110	SK2		Ⅲ	長さ1.6m×幅0.7mの隅丸長方形。	
SD106	B'	M	109	溝１	SD８	Ⅰ～Ⅳ	調査区を東西に貫く大溝。幅1.5m～4m、深さ60cmで、途中調査区外へ出る部分もあるが、大きく屈折を繰り返しながら総延長100m以上を確認。下層の自然流水路埋没後の落ち込みに形成されている部分もある。	各時期の遺物が混在。受口状口縁甕Ｂが目立つ。1467・1470など瓜郷式系と思われる大型壺が目立つ。アーチ状の把手1493あり。1494は台付鉢の脚部片か。皿形鉢1498は比較的残存率高い。土玉・土錘多く出土。
	C	I	97	SD1				
	C	J	99	大溝				
	C'	M	106	SD1				
	C'	M	104	SD1				
	C'	M	102	SD1				
	D	J	D地区	SD1				
	D	K	92	SD1				
	D'	M	90	SD1				
	D'	N	84	SK1				
	F	L	64	溝１				
	F	M	67	SD1				
SK107	B'	M	109	SK1		Ⅲ	長さ1.8m×幅1mの隅丸方形土坑。	
SK108	B'	M	108	SK1		Ⅲ	長さ1.3m×幅１mの略楕円形土坑。	

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK109	B'	M	108	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長さ5.3m×幅１mの東西溝の西端部がL字状に短く北側へ延びる。方形周溝墓？	やや口縁端部を拡張する水平口縁高坏384あり。Ⅳでも古い段階か？
SK110	B'	M	107	SK1		Ⅳ？	長さ3m×幅0.7mの溝状遺構。	受口状口縁広口壺らしい口縁部片385あるが凹線は施されていない。
SK111	B'	N	115	SK1		Ⅲ？	長さ1.9m×幅0.9mの略楕円形。	小片のみで図化できず。
SK112	B'	N	115	SK2		Ⅲ	長さ1.5m×幅0.7mの隅丸方形土坑。切り合い関係でSK111よりも新しい。	甕１個体分あるが図化できず。
SK113	B'	N	114	SK1		Ⅲ？	1.7m以上×0.7m以上。東半及び南半を欠く。	小片のみで図化できず。土器出土量も僅少。
SD114	B'	N	112	SD1			長さ1.5m×幅0.7mの長方形（西側やや丸い）。	
SH115	B'	N	111	SB1？	SB３	Ⅲ～Ⅳ	東西4.7m×南北2.9m以上の隅丸方形竪穴住居。残存高15㎝。周溝有。	椀形高坏Ａ392あり。Ⅳの土器が多いか。
SK116	B'	N	108	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ1m以上×0.6mの楕円形。	「北部系」外反口縁広口壺393あり。
SD117	B'	N	107	SD1		Ⅲ	長さ1.3m以上×0.4mの小溝。ただし、SD106に分断されているが、位置的にはSK110と一連の遺構である可能性あり。	
SK118	C	G	106	SK1		Ⅲ？	1.4m以上×1m以上の略円形もしくは隅丸方形。	小片のみで図化できず。
SZ119	C	G	106	落ち込み		Ⅳ	SH21北側から調査区北壁に向かう落ち込み。他遺構の重複のため詳細不明。	Ⅳでも古い段階か？
SK120	C	G	104	SK1		Ⅳ	1.1m以上×1.7m。調査区外へ延びる。SK127とセットになる方形周溝墓の可能性もあり。	凹線文系目立つ。凹線文系のく字状口縁甕Ｂ402は体部をタタキ成形し、口縁端部を上方へはね上げる。
SK121	C	G	104	SK2		Ⅲ？	長さ1.8m以上×幅1.1m。	Ⅰの土器も目立つが混入か？
SK122	C	G	103	SK1		Ⅳ	長さ2m×幅1.2mの略楕円形土坑。	高坏ないしは脚付鉢の脚部409あり。
SK123	C	G	98	SK1		Ⅲ～Ⅳ	底辺2.6m×高さ2.1mの三角形状土坑。SH21を切る。	椀形の坏部で口縁が外方へ屈曲する高坏416あり。Ⅳでも古い段階か？
SK124	C	H	105	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長辺2.3m×短辺1.8mの隅丸長方形土坑。	
SK125	C	H	105	SK2		Ⅱ～Ⅲ？	長さ2m以上×幅1.4mの楕円形もしくは隅丸方形土坑。	小片のみで図化できず。土器出土量も僅少。
SK126	C	H	104	SK1		Ⅲ	一辺2.2mの方形土坑。東半部が一段低い。	
SK127	C	H	103	SK１		Ⅲ～Ⅳ	長さ4.4m×幅2m。両端部丸い。SK120とセットになる方形周溝墓溝の可能性あり。	
SD128	C	H	101	SD1		Ⅲ・Ⅴ	長さ4.3m以上×幅2.3m以上。北側は調査区外。端部に向かい細くなる。	ⅢとⅤの土器が混在。
SK129	C	H	101	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.9m×幅１mの隅丸長方形。	小片のみで図ができず。凹線文系あり。
SK130	C	H	101	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.9m×幅1.3mの隅丸長方形。SK130→SK131→SK129	Ⅳの土器は小片で少ないため混入？
SK131	C	H	101	SK3		Ⅲ	長さ2.3m×幅0.9mの端部が丸い溝状土坑。SK152→SK134→SK131→SK129。	
SD132	C	H	100	SD1		Ⅰ	長さ3.5m以上×幅1.1m。	
SK133	C	H	100	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ3.7m×幅1.2m。片側端部が幅広となる土坑。	太頸広口壺Ｂ431は口縁下端に連続指押圧施す。壺435は瓜郷式系壺か。
SK134	C	H	100	SK2		Ⅲ	長さ1.7m以上×幅1.3m。SK152→SK134→SK131→SK129。SK130出土遺物と接合例あり。	SK130の土器と接合する破片あり。
SK135	C	H	99	SK1		Ⅳ	長さ3m×幅1.3m。片側が広い「しゃもじ」形。	Ⅰ～Ⅲの土器も含む。
SK136	C	H	99	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長さ2.9m×幅1.4m。やや歪な隅丸長方形。	Ⅳでも古い段階か？
SK137	C	H	98	SK1		Ⅲ	直径1mの円形土坑。	頸部に波状文・竹管刺突文を施す壺446あり。
SK138	C	H	98	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長さ1m×幅0.5mの楕円形土坑。切り合い関係からSK139、141より新しい。	
SK139	C	H	98	SK3		Ⅳ	0.7m以上×0.7mの隅丸三角形。	
SK140	C	H	98	SK4		Ⅲ～Ⅳ	長径1.2m×短径1.1mの略円形土坑。SK142を切る。	
SK141	C	H	98	SK5		Ⅲ	長さ1.3m×幅1mの隅丸長方形土坑。	甕の破片多い。
SK142	C	H	97	SK1		Ⅲ	直径2.2mの略方形土坑。	大型の長頸壺？451あり。
SK143	C	H	97	SK2		Ⅳ	長さ2.8m×幅1.2mの略楕円形。	
SK144	C	H	96	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長径1.6m×短径1.3mの略楕円形。	条痕文系く字状口縁甕Ａ462あり。
SK145	C	I	106	SK1			2.1m×0.9m以上。SH21に切られる。	小片のみで図化できず。土器出土量も僅少。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK146	C	I	105	SK1		Ⅳ～Ⅴ	長さ3.7m×幅2.2mの隅丸方形土坑。片側がやや幅広。SK146・148・159・163・172・176などがひとつの削平された方形周溝墓の周溝を構成する可能性あり。その場合、内法径7m×6m程度。	Ⅴ前半の有稜高坏Ａ468あり。Ⅴの土器が中心か。ミニチュア鉢？470あり。
SK147	C	I	104	SK1		Ⅳ	長さ2.1m×幅1.2mの略楕円形土坑。土坑墓か。SK148を切る。	
SK148	C	I	104	SK2		Ⅱ～Ⅳ？	東西2.8m×南北2.2mの太Ｌ字状。	小片のみで図化できず。
SK149	C	I	104	SK3		Ⅲ	一辺2.6m程度の隅丸方形土坑か。東側を別遺構との重複で欠く。	小片のみで図化できず。
SK150	C	I	102	SK1		Ⅳ	長さ1.5m×幅1.2mの略楕円形。	
SK151	C	I	100	SK1		Ⅰ	長さ3.9m以上×幅0.8m。	
SK152	C	I	100	SK2		Ⅱ～Ⅲ	長さ2.3m×幅0.7m。SK152→SK134→SK131→SK129。	直口細頸壺483あり。く字状口縁甕Ａ482の口縁内面に波状文。
SK153	C	I	99	SK1		Ⅳ	1.3m×1.2mの略円形土坑。SK154を切る。	
SK154	C	I	99	SK2		Ⅰ～Ⅲ？	直径1.4mの略円形。	小片のみで図化できず。
SK155	C	I	96	SK1		Ⅰ	長さ2.1m×幅1.5mの略長方形。	突帯文深鉢485あり。
SK156	C	J	106	SK1		Ⅱ～Ⅲ？	長さ1.9m×幅1.2mの隅丸長方形。ただし、全体に膨らむ形状。複数遺構重複。	小片のみで図化できず。
SK157	C	J	106	SK2		Ⅱ～Ⅳ？	長さ1.9m×幅1mの略楕円形。	小片のみで図化できず。
SK158	C	J	105	SK1		Ⅲ？	長さ3.1m×幅1.5m。片側端部が窄まる。	小片のみで図化できず。
SK159	C	J	105	SK2		Ⅱ～Ⅳ？	長さ2.7m×幅1.6mの不整形。	小片のみで図化できず。
SK160	C	J	104	SK1		Ⅲ？	長さ1.6m×幅1.2m。	小片のみで図化できず。
SK161	C	J	103	SK1		Ⅱ～Ⅳ？	長径1.1m×短径0.9mの略楕円形。	小片のみで図化できず。
SK162	C	J	103	SK2		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.1m×幅0.9mの隅丸方形。西側が一段低い。	小片のみで図化できず。
SK163	C	J	103	SK3		Ⅲ？	長さ1.7m×幅1.3mの隅丸長方形。外側も一段低くなっていて二段掘り込み様を呈するが、外側プランはやや歪なため、大きさには含めていない。	小片のみで図化できず。
SK164	C	J	100	SK1		Ⅲ？	長さ1.9m×幅1.2mの隅丸長方形。ただし、全体に膨らむ形状を呈する。	小片のみで図化できず。
SK165	C	J	100	SK2		Ⅲ？	3.5m以上×1.9m以上。SD106やSK164に切られているため、全体形不明。	
SK166	C	J	97	SK1		Ⅲ？	長径1.5m×短径1.3m。膨らみのある略方形。	小片のみで図化できず。
SK167	C	J	97	SK2		Ⅲ？	長さ2m×幅1mの隅丸長方形であるが、片側端部が若干幅広の「しゃもじ」形。	小片のみで図化できず。
SK168	C	J	96	SK1		Ⅲ～Ⅳ？	長さ2.3m×幅1.3mの略長半円形。	
SD169	C	K	106	SD1		Ⅲ	長さ4.4m以上×幅0.7m。SK171に切られる。西端部を欠く。	
SD170	C	K	106	SD2			長さ4.2m×幅0.6m。北側端部をSK173に切られ、南側端部も欠く。SK192一連のものととすると隅部が途切れるＬ字状の溝となり、方形周溝墓周溝の可能性もある。	
SK171	C	K	106	SK1		Ⅲ	長さ2.1m×幅0.85mの隅丸長方形。SK169・173を切る。	
SK172	C	K	106	SK2		Ⅲ？	長さ1.8m×幅1.2mの略楕円形。	
SK173	C	K	106	SK3		Ⅲ	長さ1.9m以上×幅0.8m。両端部を別遺構との重複のため欠く。SK171に切られる。	小片のみで図化できず。
SK174	C	K	104	SK1		Ⅴ	長さ1.4m×幅0.8mの略半円形。	有稜高坏Ｂの脚部495あり。壺蓋494あり。
SK175	C	K	103	SK1		Ⅴ	長さ2.2m×幅1.6mの楕円形。SK176・177を切る。	Ⅳの土器も含む。把手状のもの499あり。
SK176	C	K	103	SK2		Ⅳ	長さ2.2m×幅1.7mの歪な楕円形。SK175に切られる。	受口状口縁の壺503は口縁端部や内面に竹管刺突による文様を施す。
SK177	C	K	103	SK3		Ⅱ～Ⅳ？	長さ4.5m以上×幅1.1mの溝状を呈する。西側をSK175に切られて欠く。	小片のみで図化できず。
SK178	C	K	103	SK4		Ⅲ	長さ1.6m×幅1.2m。SK177に切られる。	
SK179					重複分			
SK180	C	K	101	SK1		Ⅳ	長さ2.4m×幅0.9mの長楕円形。SK181を切る。「Ⅳ・土坑墓」との注記あり。	凹線文系の土器多い。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK181	C	K	101	SK2		Ⅳ？	長さ2m×幅0，9mの隅丸長方形。SK180に切られる。	
SK182	C	K	100	SK1		Ⅰ～Ⅲ	長さ1.4m×幅0.9mの不整楕円形。	Ⅰの土器多く含む。
SK183	C	K	98	SK1		Ⅲ	外側長径1.7m×短径1.6m、内側長径1.2m×短径1.1mの略円形二段掘り込み土坑。	壺蓋？513あり。
SK184	C	K	97	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.8m×幅1.4mの不整形。	小片のみで図化できず。
SH185	C	K	96	大溝２	SB6	Ⅲ～Ⅳ	長径11m×短径8.4mの長八角形を呈する竪穴住居。残存深20㎝。周溝なし。SD216は南側へ延びる排水溝か。	土器多量に出土。壺は凹線文系、甕はハケメ文系・櫛描文系が主体。やや時期幅あるがⅣでも古い段階の土器が主体か。台付甕554あり。瓜郷式系壺526あり。
	C	L	97	大溝２				
	C'	L	96	落ち込み				
	D	K	95	SK1				
SK186	C	L	105	SK1			長さ1.3m以上×幅0.9m。複数遺構重複の可能性あり。	
SK187	C	L	104	SK1			長さ1.8m以上×幅1.2mの略楕円形。南側を欠く。80年報告書ではSK188・SD193を「コ」字形形状の同一遺構とみる可能性を全体遺構図で提示。	
SK188	C	L	104	SK2			南側を欠き一部のみ残。SD193と繋がる可能性が80年報告書で指摘されている。	
SK189	C	L	104	SK3		Ⅲ？	長さ1.2m×幅0.8mの楕円形土坑。SK187・188に切られる。	甕の破片少量のみ。
SK190	C'	L	106	SK1		Ⅳ？	長さ1.95m×幅0.8mの楕円形土坑。SK191・192を切る。	多数の透孔を穿つ脚部567あり。
SK191	C'	L	106	SK2		Ⅲ	SK190に切られ詳細不明だが、直径1.3m程度の略円形土坑。	小片のみで図化できず。
SK192	C'	L	105	SK1		Ⅰ～Ⅱ	長さ4.3m×幅0.8mの溝状遺構。	小片のみで図化できず。
SD193	C'	L	104	SD1		Ⅳ	幅１m前後で「コ」状に廻る溝。80年報告書で指摘されているようなSK187やSK188も一連のものとすると、北側に陸橋部をもつ外辺3.3m程度の方形溝となる可能性あり。	小片のみで図化できず。土器出土量も僅少。
SK194	C'	LM	103	SK1		Ⅲ？	L・m－103・104のSK1は同じ。長さ5m×幅1.7mの溝であるが、長さ2.4mの別土坑が２基連結したものである可能性もあり。	線刻のある壺体部片568あり。ミニチュア壺569あり。
	C'	M	104	SK1				
SK195	C'	L	101	SK1		Ⅱ～Ⅲ	1.6m以上×1.9mの膨らみをもつ略方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK196	C'	L	99	SK1		Ⅲ？	長さ1.4m×幅1.05mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK197	C'	L	99	SK2		Ⅲ	長さ1.8m×幅1.35mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK198	C'	L	98	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ１m以上×幅0.8m。	甕の小片のみ。
SK199	C'	L	96	SK1			SH185内の土坑。「SB6」内土坑。	
SK200	C'	M	106	SK1		Ⅳ	長径1.9m×幅0.95mの楕円形土坑。SD106を切る。	大型の袋状口縁細頸壺572あり。
SK201	C'	M	105	SK1		Ⅲ	長さ1.4m×幅１mの片側長辺が膨らむ隅丸長方形。SD106を切る。	甕蓋581あり。
SK202	C'	M	104	SK2		Ⅲ	長さ4.2m以上×幅1.5m以上の溝状を呈する。西側端部が1.5m前後の略円形に窪み、別遺構重複の可能性もあり。SK202→SK194→SD193。	
SK203	C'	M	103	SK1		Ⅰ	長さ1.6m×幅0.9mの略楕円形。SD106を切る。	
SK204	C'	M	103	SK2			一辺1.3mの隅丸方形土坑。SK194・205に切られる。	
SK205	C'	M	102	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ2.1m×幅1mの略楕円形。西側端部が一段高い。	
SD206	C'	M	100	SD1		？	長さ1.6m×幅0.25mの小溝。	小片のみで図化できず。
SD207	C'	M	100	SD2		Ⅲ	長さ5.3m×幅0.5m。	Ⅰ・Ⅱの土器も含む。
SH208	C'	M	98・99	SB1	SB5	Ⅲ	5.9m×4.2m以上の隅丸方形竪穴住居。周溝なし、主柱穴も不明。	
SD209	C'	M	99	SD1		Ⅰ～Ⅱ	幅0.9mの弧状溝。SH208と重複。	
SK210	C'	M	99	SK1		Ⅳ	長さ1.6m×幅0.5mの長楕円形。	受口状口縁細頸壺598の肩部に流水文状文様。
SK211	C'	M	99	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.7m×幅0.8mの略楕円形。	Ⅳの土器が多いか。
SK212	C'	M	97	SK1		Ⅰ～Ⅲ	長さ1.4m×幅0.8mの略楕円形。別遺構の埋没後に形成。	小片のみで図化できず。
SK213	C'	M	97	SK2		Ⅲ	南側調査区外へ延びる1.9m以上×0.9m以上の不整形土坑。	壺606・607のように付加沈線研磨手法による加飾が目立つ。
SK214	C'	M	97	SK3			長径1.7m×短径1.5m。西側が一段窪む。	
SK215	C'	M	97	SK4		Ⅱ～Ⅲ	長さ1m以上×幅0.5mの隅丸長方形土坑。南側は調査区外へ延びる。	小片のみで図化できず。土器出土量も僅少。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SD216	C'	M	96	SD1		Ⅲ？	長さ1.2m以上×幅0.4mの小溝。SH185南端から延びる排水溝か。南側は調査区外。	小片のみで図化できず。
SK217	C'	M	96	SK1		Ⅲ	幅0.5mの小土坑。南側は調査区外。	小片のみで図化できず。
SK218	C'	M	96	SK2		Ⅱ～Ⅲ	南側が調査区外のため、北側の一部のみ検出。現況で2.8m×0.9mの半円形を呈しており、直径3m程度の円形土坑か。	小片のみで図化できず。
SK219	D	H	96	SK1		Ⅲ	直径1m程度の略円形土坑。北側及び西側が調査区境界となっていたため不明瞭。	Ⅰの土器も含む。
SD220	D	H	95	SD1'		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.9m以上×幅0.8m。北側は調査区外。北からSD106に注ぐ小溝。	
SK221	D	H	95	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.3m×幅1mの隅丸三角形状を呈する土坑。	小片のみで図化できず。
SK222	D	H	95	SK2		Ⅱ	長さ1.25m×幅0.8mの隅丸長方形土坑。SD220に切られる。	小片のみで図化できず。
SK223	D	H	95	SK3		Ⅲ～Ⅳ	長さ0.7m以上×幅0.8mの楕円形溝。SD106との重複により南側を欠く。	
SD224	D	H	94	SD1		Ⅰ～Ⅲ	長さ4.4m以上×幅0.8m以上。北側は調査区外。	Ⅰ・Ⅱの土器が多い。
SD225	D	H	94	SD2		Ⅰ～Ⅱ？	長さ1.6m以上×幅0.5m。北側は調査区外。	小片のみで図化できず。
SD226	D	H	94	SD3		Ⅰ～Ⅱ	長さ2.5m以上×幅0.5m。東側は調査区外。	小片のみで図化できず。
SK227	D	H	94	SK1		Ⅲ	長さ2.2m×幅0.9mの片「しゃもじ」形土坑。片側が膨らむ。	
SK228	D	H	94	SK2		Ⅰ～Ⅱ	長さ1.2m×幅0.8mの楕円形。SD224を切る。	小片のみで図化できず。
SD229	D	H	92	SD1		Ⅲ	長さ2.9m以上×幅0.5m。北側は調査区外。	小片のみで図化できず。
SK230	D	H	92	SK1		古墳中～後期	長径でも1m弱程度の浅い土坑。遺構実測時には消滅のため略図より復元した。	
SD231	D	H	91	SD1		Ⅰ～Ⅱ	1m以上×0.5m以上。北側は調査区外となるが、遺構南端部を三角形状に確認。	小片のみで図化できず。
SK232	D	H	90	SK1		Ⅲ	長さ2m×幅0.8mの長楕円形。SK247を切る。	
SD233	D	H	88	SD1		Ⅰ～Ⅱ	幅0.9mでL字状に屈折する溝。北側は調査区外。	小片のみで図化できず。
SK234	D	H	87	SK1		Ⅲ～Ⅳ	北側が調査区外となるため半円形状だが、本来は直径6m程度の円形か。その場合、竪穴住居の可能性あり。西側が帆立貝状に方形突出。別遺構の重複もしくは竪穴住居入口の仕様か。	Ⅳの古い段階の土器が主体か？
SK235	D	H	86	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.4m×幅0.9mの隅丸長方形。SK251を切る。	
SK236	D	H	85	SK1		Ⅲ	長さ2m×幅0.7mの楕円形。	Ⅲでも新しい段階か。
SK237	D	H	84	SK1			長さ1.3m×幅0.7mの台形状を呈する。	
SK238	D	I	94	SK1		Ⅲ	長さ3.2m以上×幅1mの溝状。SD106に切られる。SD106を挟んだ延長にSK223があり、一連のものとすると長さが5.7m程度となる。	
SK239	D	I	93	SK1		Ⅲ	長さ1.5m×幅1.05mの不整楕円形。埋土内に焼土。	土器多数出土。壺が多い。受口状口縁広口壺641は瓜郷式系壺にやや似る。
SK240	D	I	93	SK2		Ⅱ	長さ4.3m×幅0.9mの溝状。擂鉢状の床面に灰あり。	土器出土量は多いが小片のみで図化できず。
SD241	D	I	92	SD1		Ⅳ	長さ3.8m以上×幅0.5m。北側は調査区外。	上げ底の甕底部片648あり。凹線文系のく字状口縁甕B649の口縁端部はね上げ。
SK242	D	I	92	SK1		Ⅲ	0.9m×0.8mの略円形。	
SD243	D	I	91	SD1		Ⅱ～Ⅳ	長さ3.5m以上×幅0.2～0.5mの小溝。	小片のみで図化できず。
SK244	D	I	91	SK1		Ⅲ～Ⅳ	外側長径2.8m×短径2.3mの不整円形内に1.5m×1.4mの略円形の窪み。ただし、内側窪みは北東側に隣接する遺構と一連のものである可能性もあり。	土器は多数出土したが小片が多く図化できず。
SK245	D	I	91	SK2		Ⅱ～Ⅲ	ピット状の掘り込み3個を含む長径1mの範囲を遺構認定したが、遺構実測時には消滅。	
SK246	D	I	91	SK2（P1）			長さ1.1m×幅0.8mの隅丸長方形土坑。	
SK247	D	I	90	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ2.6m×幅1.5mの楕円形。SK232に切られる。	
SK248	D	I	90	SK2		Ⅳ	長径1.4m×短径1.1mの略円形。	
SK249	D	I	89	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ2.9m×幅1.2mの長楕円形。	受口状口縁広口壺656の頸部に連続押圧の粘土帯貼り付け。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK250	D	I	88	SK1		Ⅲ	長さ3.9m×幅2.5mの隅丸長方形。	脚付壺の脚部664あり。
SK251	D	I	86	SK1		Ⅲ	長径2.9m×短径1.3～2mの太L字形。風倒木か。	中実の高坏脚部673あり。
SK252	D	J	95	SK1		Ⅲ～Ⅴ	長径1.4m×短径1.3mの略円形。SK253を切る。	
SK253	D	J	95	SK2		Ⅲ	長さ1.8m以上×幅0.8m。西側をSK252に切られて欠く。	
SK254	D	J	95	SK3		Ⅱ～Ⅲ	長さ3.4m×幅0.6mの溝状。この周囲にSK223・238、240、255、156など良く似た幅の溝状の「土坑」があり、方形周溝墓の周溝を形成している可能性もある。	
SK255	D	J	95	SK4		Ⅲ	長さ1.6m×幅0.8m。	Ⅳの土器も少量含む。高坏脚部684あり。
SK256	D	J	94	SK1		Ⅲ	長さ2m×幅0.7m。	
SK257	D	J	94	SK2		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.3m、幅0.4mの南側端部が鍵手状に0.3m程西側へ屈折。	小片のみで図化できず。
SD258	D	J	92	SD1		Ⅱ～Ⅲ	長さ2.4m×幅0.3m。	小片のみで図化できず。
SK259	D	J	91	SK1		Ⅲ	長さ1.8m×幅0.5m。	
SK260	D	J	91	SK2		Ⅲ	長さ1.7m×幅0.25～0.4mの溝状。	受口状口縁細頸壺689の口縁部外面に十字浮文を貼り付け。
SK261					重複分		長さ1.6m×幅1mの隅丸長方形で、内側は楕円形状に一段落ちる。	
SD262	D	J	90	SD１		Ⅱ～Ⅲ	長さ2.2m×幅0.4mの小溝。	小片のみで図化できず。
SK263	D	J	90	SK1		Ⅲ	長さ3.2m×幅1.5mの不整長方形。片側端辺は膨らみをもつ。	
SK264	D	J	89	SK1		Ⅲ・Ⅴ	長さ2.2m以上×幅0.3～0.4m。SK263に切られる。	
SK265	D	K	94	SK1		Ⅲ？	直径1.2mの円形土坑。	Ⅱの土器も含むか？
SK266	D	K	93	SK1		Ⅱ	長さ4m以上×幅1.9m。南側を欠く。	
SK267	D	K	93	SK2		Ⅲ	長さ1.6m×幅0.95mの隅丸長方形。	
SD268	D	K	90	SD1		Ⅱ～Ⅲ	長さ3.3m×幅0.4～0.6m。	人面土製品？700あり。土器は小片のみで図化できず。
SK269	D	K	90	SK1		Ⅲ	長さ1.8m×幅0.6～1.2m。片側端部が幅広になる。	小片のみで図化できず。
SK270	D	K	90	SK2		Ⅱ～Ⅳ	長さ2.9m×幅1.2mの不整形。	いくつかの時期の土器が混在。
SD271	D	K	89	SD1		Ⅱ～Ⅳ	長さ5.1m×幅0.5m。	小片のみで図化できず。
SK272	D	K	89	SK1		Ⅳ	長さ1.8m×幅1.3mの略楕円形。	
SK273	D	K	88	SK1		Ⅰ～Ⅲ	長さ2.1m×幅1.2mの略楕円形、ただし直線的な部分もあり。	
SK274	D	K	88	SK2		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.5m×幅0.6mの楕円形。	小片のみで図化できず。甕が多いか。
SK275	D	K	88	SK3		？	長径0.7m×短径0.5mの略方形。	小片のみで図化できず。
SK276	D	K	86	SK1		Ⅰ～Ⅲ	長さ1.5m×幅0.4m。	Ⅱの土器多い。Ⅲの土器は古い段階のものか。
SK277	D	L	92	SK1		Ⅰ～Ⅱ	長径1m×短径0.85mの略円形。	
SD278	D	L	88	SD1		Ⅰ	長さ2.5m以上×幅0.4m、南端部を欠く。	
SK279	D	L	86	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.2m×幅0.8mの楕円形。	
SK280	D	L	86	SK2		Ⅰ～Ⅱ	長さ1.5m以上×幅0.4m以上。南側を欠き、西側はSK281に切られて不明。	小片のみで図化できず。
SK281	D	L	86	SK3		Ⅰ～Ⅲ	長さ2m以上×幅0.7m。SK280を切る。南側は不明。	
SK282	D	L	86	SK4		Ⅲ	長径1.9m×短径1.7mの不整五角形状。	小片のみで図化できず。
SK283	D	L	84	SK1		Ⅱ～Ⅲ？	0.9m以上×0.9m以上。掘形浅く、削平のため全体形不明。	小片のみで図化できず。
SK284	D'	L	94	SK1		Ⅴ？	長さ1.9m以上×幅0.9mの楕円形。	
SK285	D'	L	92	SK1		Ⅱ～Ⅲ？	長さ1.7m×幅1mの略楕円形。	小片のみで図化できず。
SK286	D'	L	92	SK2		Ⅱ～Ⅲ	北側を欠くため全体形不明だが、直径1m前後の小土坑。	小片のみで図化できず。
SK287	D'	L	89	SK1		Ⅱ～Ⅲ？	長さ1.1m以上×幅0.4mの溝状。南側を別遺構に切られて欠く。	小片のみで図化できず。
SK288	D'	L	87	SK1		Ⅲ？	長さ1.5m×幅0.8mの略楕円形。	
SK289	D'	L	87	SK2		？	北側を欠くが、長さ1.2m程度の土坑。	小片のみで図化できず。
SK290	D'	L	85	SK1		Ⅰ～Ⅲ	1.2m×0.9m以上の方形土坑。	Ⅰの土器が主体か。
SK291	D'	M	94	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.3m×幅0.8mの楕円形。	く字状口縁甕A716の口縁部内面に波状文。
SK292	D'	M	94	SK2		Ⅲ	長さ2.3m×幅1mの長楕円形。	
SK293	D'	M	94	SK3		Ⅲ	長さ1.2m×幅0.8mの楕円形。	小片のみで図化できず。
SK294	D'	M	94	SK4		Ⅴ	長径2m以上×短径1.7mの台形状。ただし南側は調査区外。	小片のみで図化できず。
SK295	D'	M	93	SK1		Ⅱ？	長径1m×短径0.9mの台形状。	小片のみで図化できず。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK296	D'	M	93	SK2		Ⅲ	長さ2.9m以上×幅1.1mの溝状。南側は調査区外。SK297を切る。	Ⅲでも新しい段階か。
SK297	D'	M	93	SK3		Ⅰ～	長さ1.9m以上×幅1mの楕円形。片側端部をSK296に切られる。	
SK298	D'	M	92	SK1		Ⅲ	長さ1.2m×幅0.6mの楕円形。	
SK299	D'	M	92	SK2			長さ1.6m×幅0.9mの楕円形。	
SK300	D'	M	92	SK3		Ⅲ	長さ1.4m以上×幅0.7m。片側端部を攪乱で欠くが、全体形は楕円形か。	小片のみで図化できず。
SK301	D'	M	92	SK4		Ⅰ～Ⅱ	長さ2.4m×幅1mの「ナスビ」形。	小片のみで図化できず。
SK302	D'	M	91	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.6m×幅1mの楕円形。	小片のみで図化できず。
SK303	D'	M	91	SK2		Ⅰ	長さ1.2m×幅0.8mの隅丸長方形。	小片のみで図化できず。
SK304	D'	M	90	SK1		Ⅰ～	長さ1.4m×幅0.7mの楕円形。	
SK305	D'	M	90	SK2		Ⅱ～Ⅲ	南側は調査区外のため不明だが、長さ1m以上の楕円形土坑か。	小片のみで図化できず。
SK306	D'	M	90	SK3		Ⅲ	長さ4.2m×幅1m以上の溝状の土坑。	
SK307	D'	M	89	SK1		Ⅰ～Ⅱ	長さ1.1m×幅0.7mの楕円形。	小片のみで図化できず。
SK308	D'	M	89	SK2		Ⅲ	長さ1.45m×幅0.7mの楕円形。	小片のみで図化できず。
SK309	D'	M	89	SK3		Ⅲ	長径1.1m×短径0.8mの隅丸半円形。	小片のみで図化できず。
SK310	D'	M	88	SK1		Ⅰ～Ⅲ？	長径1.7m×短径1.4mの楕円形。	小片のみで図化できず。
SD311	D'	M	87	SD1		？	長さ1.5m×幅0.2mの小溝。	小片のみで図化できず。土器出土量も僅少。
SK312	D'	M	87	SK1		Ⅰ～Ⅲ？	長径1.7m×短径0.6～1.1mの台形状。	小片のみで図化できず。
SK313	D'	M	87	SK2		Ⅲ	長さ1.4m以上×幅1.4mの楕円形。南側は調査区外。	小片のみで図化できず。
SK314	D'	M	86	SK1		Ⅰ～Ⅲ	長径1.6m×短径1.2mのベース形。	小片のみで図化できず。
SK315	D'	M	86	SK2		Ⅰ～Ⅱ	長径1.2m×短径1mの略方形。	小片のみで図化できず。
SK316	D'	M	85	SK1		Ⅰ～Ⅲ	長さ1.2m以上×幅1mの隅丸長方形か？南側は調査区外。	小片のみで図化できず。
SD317	D'	M	84	SD1		Ⅱ～Ⅳ	幅1.5m程度。SD106を切る。途中別遺構が重複するが、東側のSD353は本遺構の延長上にあり、同一遺構の可能性がある。	
SD318	E	I	82	SD1		？	長さ3m以上×幅1.1mの弧状溝。	
SK319	E	I	79	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ2.4m×幅0.5mの溝状。	小片のみで図化できず。
SH320	E	J	81	住居址１	SB7	Ⅲ	全体に不整形で、東西約8m×南北約7m。六角形住居もしくは複数重複の可能性があるが、住居深が西辺20㎝、南辺40㎝を考慮すると、複数遺構重複の可能性もある。南辺のみ周溝あり。	無頸鉢730あり。壺体部片729は簡略化された流水文を施す。Ⅴの土器もごく少量含むが混入か？
SK321	E	J	79	SK1		Ⅱ～Ⅳ？	長径1.5m×短径1.3mの略円形。	小片のみで図化できず。
SK322	E	J	79	SK2		Ⅱ	長さ2m×幅0.6mの隅丸長方形。	直口壺741あり。
SD323	E	J	79・78	SD1		Ⅰ～Ⅱ	長さ3.7m以上×幅0.7m。攪乱のため東側は不明。	小片のみで図化できず。
SK324	E	K	82	SK1		Ⅰ・Ⅲ	長径1m程度。掘り込み浅く、遺構実測時には消滅。略図より復元。	図化していないがⅢの土器が主体か。甕が多い。
SK325	E	K	82	SK3		Ⅰ～Ⅱ	長径1.9m×短径1.5m。	
SK326	E	K	80	SK1		Ⅲ	長さ2.1m以上×幅0.7m。途中SK327に分断されているが南側延長部のSD337も同一遺構の可能性あり。その場合、長さは5.5m以上となる。	小片のみで図化できず。
SK327	E	K	80	SK2		Ⅳ～Ⅴ	Ｌ字状に屈折する不定形土坑。風倒木か。	壺744は岩滑式か？。Ⅴの土器主体。
SK328	E	K	79	SK1		Ⅲ？	長さ1.4m×幅1mの楕円形土坑。	
SK329	E	K	79	SK2		？	長さ1.9m×幅0.85mの略楕円形。	小片のみで図化できず。
SD330	E	K	78	SD1		Ⅲ	両端を別遺構に切られる長さ1.2m以上×幅0.4mの溝。	
SK331	E	K	78	SK１		Ⅲ	長さ2m×幅1.1mの隅丸長方形土坑。SD330を切る。	
SK332	E	K	78	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長径2.3m×短径1.9mの略方形。ただし、一部膨らみをもつ。	台付甕754あり。投弾755あり。
SX333	E	K	77・76	SX1	SX1	Ⅲ？	方形周溝墓。やや歪形状。隅及び北辺中央部等に陸橋部。内法東西5.6m×南北5.2m、外法東西8m×南北7.3m。溝幅は概ね1m前後。	土製紡錘車816あり。
SK334	E	K	77	SK1	SK3	Ⅲ～Ⅴ	長径1.9m以上×短径0.8m、深さ36㎝の略長方形土坑。	Ⅳの土器が多いか。小片で図化できず。
SK335	E	K	76	SK1		Ⅲ～Ⅳ？	長さ1.6m以上×幅0.6mの略楕円形。	甕蓋758あり。
SK336	E	K	72	土坑			直径1.5mの隅丸方形土坑。	
SD337	E	L	80	SD1		Ⅲ	長さ2.7m×幅0.6m。SK326と同一遺構の可能性あり。	小片のみで図化できず。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK338	E	L	80	浅土坑		Ⅲ	2.9m以上×1.9m以上の不定多角形。	小片のみで図化できず。
SK339	E	L	79	SK1		Ⅲ	長さ2.5m×幅1～1.5mの不整長方形。	小片のみで図化できず。
SK340	E	L	79	SK2		Ⅲ	2.2m以上×0.9m以上の略円形もしくは隅丸不整多角形。遺構南側を欠く。	小片のみで図化できず。
SK341	E	L	78	SK1		Ⅱ	長径1.15m×短径1m。	小片のみで図化できず。
SD342	E	L	77	SD1		Ⅰ～Ⅱ	長さ1.8m以上×幅0.45～0.8m、SK347との重複のため詳細不明。SK347にも続いているとすると、長さは４m以上となる。	
SK343	E	L	77	SK1		Ⅲ	長径1.7m×短径1.3mの略楕円形。	小片のみで図化できず。
SK344	E	L	77	SK2		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.6m×幅1mの隅丸長方形で、内側0.9m×0.7mが一段落ちる。	
SK345	E	M	77	SD1	SK4	Ⅳ	長径3.5m以上×短径0.95～1.5m、深さ40cmの長方形土坑。全体に炭化物混。なお調査時はSK390と接する遺構南側の幅広部分（幅1.5mの部分）を別遺構（今報告ではSK664に措定）としているが、両者は同一遺構の可能性が高い。	全形のわかる椀形高坏Ａ767あり。甕は凹線文系のく字状口縁甕Ｂが主体。
	E'	M	78	SK2				
SK346	E	M	76	SK1			南側を欠くが、長さ1.7m×幅0.9m以上の不整方形か。	
SK347	E	M	76	SK2		Ⅲ	長さ3m×幅1.4m以上。南側を欠く。遺構北側の一段低くなた部分は、西接するSD342との重複部に相当するため、SD342の延長部かもしれない。	小片のみで図化できず。
SK348	E'	L	83	SK1		Ⅱ	長さ3m強×0.9mの長方形。	把手付鉢770あり。
SK349	E'	L	82	SK1		Ⅰ～Ⅲ	長さ2.2m×幅0.5mの隅丸長方形。	Ⅰの土器が主体か。
SK350	E'	L	81	SK1		Ⅲ～Ⅳ	北側を一部欠くが、長さ2.1m×幅1.2mの略楕円形。	
SK351	E'	L	80	SK1		Ⅰ～Ⅱ	北側を欠くが、長さ1.5m×幅0.4m以上の楕円形。ただし、遺構浅く遺構実測時消滅のため略図から復元。	Ⅴの土器も少量含む。
SK352	E'	L	79	SK1			1.3m以上×1m、重複や攪乱のため全体形は不明。	
SD353	E'	M	83	SD1			長さ3.9m×幅0.4～0.5m。西側のSD317は同一遺構の可能性がある。	
SD354	E'	M	82	SD1		Ⅱ～Ⅲ	長さ3.5m以上×幅0.65m。北側を欠くが、長さはさほど変わらないであろう。	壺蓋778あり。SK390の遺物と混じる。
SK355	E'	M	82	SK1		Ⅲ	長さ1.2m×幅0.9mの長方形土坑。	
SK356	E'	M	82	SK2		Ⅰ	長径3.5m×短径3m前後の不整五角形状を呈する。SK355に切られる。	
SK357	E'	M	82	SK3		Ⅲ	長さ1.2m×幅0.6mの楕円形。	小片のみで図化できず。
SK358	E'	M	81	SK1		Ⅰ～Ⅱ	長さ1.6m×幅1m前後の略長方形。	小片のみで図化できず。
SK359	E'	M	81	SK2		Ⅱ	長径1.8m×幅1.2mの略楕円形。	小片のみで図化できず。
SD360	E'	M	80	SD1		Ⅲ	長さ７m×幅0.5～1.1mの溝。途中、部分的に深くなる箇所有。	
SK361	E'	M	80	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.5m×幅0.9mの略楕円形もしくは隅丸長方形。	
SK362	E'	M	80	SK2		?	長さ1.9m×幅0.55～0.6m。	
SK363	E'	M	79	SK1		Ⅲ	長さ1.3m×幅0.85mの楕円形。	受口状口縁細頸壺784は付加沈線研磨手法により縄文帯を２条作り、そこに貝殻腹縁で縦方向の連弧文を施す。
SK364	E'	M	79	SK2		Ⅲ	長さ4m以上×幅1mの溝で、東側端部がＬ字状に北側へ屈折するが、遺構重複多く詳細不明。SK339などとセットになった方形周溝墓の周溝の可能性もある。	搬入と思われる瓜郷式壺788あり。甕はハケメ系が主体。
SK365	E'	M	78	SK1		Ⅲ	直径1m前後の略円形土坑。ただし、北側を攪乱やSK347との重複で欠くため、詳細不明。	甕１点のみ出土。
SK366	E'	M	77	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.2m×幅0.6mの隅丸長方形。	
SK367	E'	M	77	SK2		Ⅲ	SK347を切る長径1m前後の小土坑。残りが浅かったので調査過程で消滅。略図より所在位置のみ略復元。	
SK368	E'	M	77	SK3		Ⅲ	長径1.6m×短径1.3mの略楕円形土坑。	小片のみで図化できず。
SK369	E'	M	76	SK1		Ⅲ	長さ1.4m×幅0.8～1mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK370	E'	M	76	SK2		Ⅲ	長さ2.5m×幅1.1mの略長方形土坑。SK366やSK392に切られる。	小片のみで図化できず。
SK371	E'	M	75	SK1		Ⅱ～Ⅳ	長径0.9m×短径0.8mの長半円形。	小片のみで図化できず。
SK372	E'	M	75	SK2		Ⅲ～Ⅳ	北側を欠くが、2m×0.9m以上の略円形もしくは不整多角形状。	特異な形状の土器あるいは土製品791あり。他の土器は小片のため図化できず。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK373	E'	M	74	SK1		Ⅱ	西側を攪乱されるが、長さ3m以上×幅1.6m。西側延長部にあるSK394も一連の同一遺構とすると、長さは5.9mになる。	
SK374	E'	M	74	SK2		Ⅰ～Ⅱ	長径1.5m×短径1.2mの隅丸方形。ただし、膨らみの目立つ部分あり。	小片のみで図化できず。
SK375	E'	M	74	SK3		Ⅱ	北側を攪乱により欠くが、長さ4.2m×幅1.7mの隅丸長方形。	
SK376	E'	M	74	SK4		Ⅱ	SK376に重複して形成された小土坑。ただし、調査の過程で消滅したので詳細不明。遺物取り上げはSK376でされており、略図より位置復元。	骨片出土。土器は小片のみで図化できず。
SK377	E'	M	74	SK5		Ⅲ	径3m前後の不定形。複数遺構が重複している可能性もあり。	
SK378	E'	M	74	SK6		Ⅱ？	長さ1.4m×幅0.65mの略隅丸長方形。ただし片側短辺は丸い。	
SK379	E'	M	73	SK1		Ⅲ	1.7m×1.6mの略円形土坑。SK381を切る。	小片のみで図化できず。
SK380	E'	M	73	SK2		？	長さ1.2m×幅0.7mの隅丸長方形土坑。SK381→SK379→SK380。	小片のみで図化できず。
SK381	E'	M	72	SK1		Ⅱ～Ⅳ？	SH379・380に切られ西端を欠くが、長さ3.4m以上×幅1.3mの溝状遺構。	底部が突出する椀形鉢793あり。図化できていないが頸部に沈線施す壺などもあり。
SK382	E'	M	72	SK2		Ⅱ	SK381やSK383に切られるが、直径1.1m前後の略円形。	直口壺796・797あり。Ⅰの土器も少量含む？
SK383	E'	M	72	SK3		Ⅲ	東半を欠くが、3.1m×1.8m以上。残存部だけをみれば台形状を呈する。SK3821を切る。	甕が多い。
SK384	E'	N	82	SK1		Ⅲ・Ⅴ	長さ1.5m×幅1mの隅丸方形土坑。SK385を切る。	Ⅴ後半の土器が少量含まれる。
SK385	E'	N	82	SK2		Ⅰ	南側は調査区外のため全体形状は不明だが、3.5m×1.2m以上。SK384に切られる。	
SK386	E'	N	81	SK1		Ⅰ	南側は調査区外となるが、2.4m×1.6m以上の隅丸方形状を呈する。ただし、別遺構の重複あり。	
SK387	E'	N	80	SK1		Ⅲ	長さ1.2m×幅0.8mの両短辺部が膨らむ土坑。	Ⅲでも古い段階か。
SK388	E'	N	80	SK2		Ⅱ～Ⅲ	南側は調査区外となるが、1.5m×0.4m以上の隅丸（長）方形土坑か。	甕が多い。
SK389	E'	N	79	SK1		Ⅲ	南側は調査区外となるが、残存部で長さ4.8m、幅2mを測る。長径6m程度の楕円形に復元可能か。その場合、形状は竪穴住居様となるが、周溝等は未確認。	小片のみで図化できず。
SK390	E'	N	78	SK1		Ⅳ	南側は調査区外となるが、長さ2.8m以上×幅1.4～1.9mの溝状遺構。SK345を切る。	甕は凹線文系のく字状口縁甕Ｂ主体。凹線文系のく字状口縁甕Ｂ808は頸部外面に連続押圧の粘土帯貼り付け。SD354の遺物と混じる。
SK391	E'	N	77	SK1		Ⅱ	南側は調査区外となるが、長さ0.9m以上×幅0.6m。	小片のみで図化できず。
SK392	E'	N	76	SK1		Ⅱ	径1.6mの隅丸平行四辺形状を呈する。SK370を切る。	
SK393	E'	N	76	SK2		Ⅱ？	南側は調査区外となるが、長さ1.6m×幅0.8m前後。	小片のみで図化できず。
SK394	E'	N	75	SK1		Ⅱ～Ⅲ	東側を攪乱で欠くが、1.5m×1.3m以上の略円形土坑。	小片のみで図化できず。条痕文系甕あり。
SK395	E'	N	74	SK1		Ⅱ～Ⅲ	南側は調査区外となるが、長さ1.1m以上×幅1.2mの略隅丸長方形土坑か。	
SK396	E'	N	74	SK2		Ⅱ？	長さ1.3m×幅0.95mの略楕円形。	小片のみで図化できず。
SK397	E'	N	74	SK3		？	長径1.5m×短径1.2mで、南側が径0.7mの円形に一段低くなる土坑。	小片のみで図化できず。
SK398	E'	N	74	SK4		Ⅲ	長さ1.6m×幅1,1mの楕円形土坑。	
SK399	E'	N	74	SK5		Ⅲ	北側をSK399に切られるが、1.2m×0.6m以上の円形土坑か。	
SK400	E'	N	73	SK1			長さ2m×幅1.1mの隅丸長方形土坑。	
SK401	E'	N	73	SK2		Ⅱ	南側は調査区外となるが、長さ2.2m以上×幅1.2mの溝状の遺構。	壺蓋811あり。
SK402	E'	N	73	SK3			長さ1.3m×幅0.7mの片側が幅広の楕円形状（隅丸三角状）を呈する。	
SK403	E'	N	73	SK4		Ⅲ	南側は調査区外となるが、長さ1.8m以上×幅1.1mの隅丸長方形。SK401に似た溝状になるか。	
SK404	E'	N	72	SK1		Ⅱ	北側をSK381に切られるが、長さ2.5m以上×幅1.3mのやや歪な隅丸長方形状。	

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK405	E'	N	72	SK2		Ⅰ～Ⅱ	南側は調査区外となるが、長さ2.8m以上×幅3mの隅丸方形状の土坑。SK427に切られる。	小片のみで図化できず。
SD406	F	I	63	SD1		Ⅰ～Ⅱ	北側は調査区外となるが、長さ8.3m以上×幅0.3～0.5mの溝。だたし、調査区壁と接する北端部は1.2mと幅広。	
SK407	F	J	67	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長径1,7m×短径1.4mの楕円形土坑。	Ⅰの土器も含む。
SK408	F	J	67	SK2		Ⅲ	南側をSK407に切られるため不明だが、長さ1.8m×幅0.95mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK409	F	J	67	SK3		Ⅲ	直径1.1mの円形土坑。	Ⅲでも新しい段階か。
SX410	F	J	66	SD1	SX2	Ⅳ	方形周溝墓周溝。内法東西4.6m×南北3.7～4.1m。西端部で南側へL字状に屈折する北溝と、ＳＸ414北溝と溝共有する南溝が残る。	凹線文系の土器多い。小型高坏と思われる脚部825あり。
SX411	F	J	65	SD1	SX4	Ⅳ	方形周溝墓周溝。内法東西6.1m×南北3.5m以上。	凹線文系の土器多い。Ⅴの小型脚付壺837混じる。
SK412	F	J	65	SK1		Ⅱ～Ⅳ	ＳＸ411周溝に切られる長さ1.5m以上×幅1.4mの楕円形土坑。	小片のみで図化できず。
SD413	F	J	63	SD1		Ⅲ	長さ2.8m×幅0.4～0.5m以上の溝。東側が調査区境界のため詳細は不明だが、東側へ屈折して調査区外へ逃げていく可能性あり。方形周溝墓周溝か。	
SX414	F	K	65	SD1	SX3	Ⅳ	方形周溝墓周溝。内法東西5.5m×南北4.3m。L字状に繋がる北溝と東溝が残る。北溝はＳＸ410南溝、東溝はＳＸ415西溝と共有。	Ⅳでも古い段階か？
SX415	F	K	64	SD1	SX5	Ⅲ～Ⅳ	方形周溝墓周溝。内法東西6m、南北5.3m。南溝中央やや東寄りに陸橋。固有の北溝と西溝はなく、それぞれＳＸ414東溝、ＳＸ411南溝と共有か。	
	F	K	63	SD1				
SK416	F	L	70	SK1		Ⅰ・Ⅳ	長さ3.7m×幅2.7mの隅丸三角形状の土坑で、西側はさらに長さ1m×幅0,5mの溝が取り付く。全体に焼けており、いわゆる「焼成坑」的様相を採るが、詳細は不明。SH417と重複。調査時は「井戸下層」という名称で遺物が取り上げられていた。	Ⅳの土器が主体だがⅠの土器もかなり含む。頸部が締まる胴長の小型甕873あり。甕には櫛描文系・凹線文系・ハケメ文系あり。
SH417	F	L・M	70・69	SB1	SB8	Ⅲ～Ⅳ	長径8.9m×短径7～7.6m、残存深25㎝の長方形住居。切り合い関係からSH419より新しい。東辺のみ周溝確認。主柱穴有。	土器出土量多い。Ⅳの土器が主体か。古井・長床式系壺874あり。住居内土坑からもⅣの土器が出土。
SK418	F	L	69	SK1			SH417内に形成された長径1.3m×短径1.1mの不整楕円形土坑。	投弾912あり。土器は小片のみで図化できず。
SH419	F	L・M・N	69・68	SB2	SB9	Ⅲ	東西6.7m×南北9.4m、残存深25㎝の長方形住居。主柱穴あるも周溝は未確認。東辺中央から東側外へ排水溝。床面の東北隅にL字状小溝があり、何らかの住居内仕切り施設か。	Ⅰの土器もかなり含む。Ⅳの土器も少量含むがⅢの土器が主体か。頸部がかなり長くのびる細頸壺917あり。
SK420	F	L	66	SK1		Ⅰ～Ⅱ	長径3.3m×短径2mの不定形土坑。	
SK421	F	L	64	SK1		Ⅱ～Ⅲ？	長さ2m以上×幅１mの略楕円形土坑。SD106に切られる。	紐通しの孔がある蓋924あり。
SK422	F	L	64	SK2			長さ2.6m×幅0.8mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SD423	F	M	67	溝１		Ⅲ	SH419東辺から延びる長さ2.7m×幅0.6mの浅いU字溝。	Ⅲでも新しい段階か。
SK424	F	M	67	SK1		Ⅱ？	長さ1.8m×0.6～0.8mの隅丸長方形。	
SK425	F	M	65	SK1		Ⅳ	長径2.7m×短径2.2mの略円形。	中空で脚部側を塞ぐ高坏脚部928あり。
SK426	F	M	64	SK1		Ⅱ	南北4.7m×東西4m以上の隅丸方形を呈する。竪穴住居か。ただし、その場合、残存部に周溝はなし。東側は調査区外。	甕が多い。Ⅰの土器も含む。
SK427	F'	N	71	SK1		Ⅳ	長さ1.9m×幅1.4mの略楕円形。	
SK428	F'	N	71	SK2		Ⅰ～Ⅱ	南側が調査区外となり、またSK429などとの重複のため全体形は不明だが、1.6m以上×1.5m以上の略楕円形を呈するか。	小片のみで図化できず。
SK429	F'	N	70	SK1		Ⅲ	南側が調査区外のため全体形は不明だが、直径3m以上の円形か。	
SK430	F'	N	69	SK1		Ⅲ	1.3m以上×1.7m以上。南側が調査区外となるが、溝状のものか。	
SK431	F'	N	68	SK1		Ⅲ	南側が調査区外となるが、長さ1.5m以上×幅0.8m以上。	細頸壺932頸部に十字浮文貼り付け。
SK432	F'	N	68	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長径1.7m×短径0.7mの半円形状に残存するが、本来略円形もしくは隅丸方形か。SH419と重複。	

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK433	F'	N	68	SK3		Ⅲ	長さ3.1×幅1.1mの隅丸長方形土坑。	
SK434	F'	N	68	SK4		Ⅰ	長さ2m×幅0.4m以上。北半を欠く。	
SD435	F'	N	67	SD2		Ⅲ	長さ3m×幅0.3～0.5m。両端部は重複や調査区外のため不明。	Ⅲでも新しい段階か。
SD436	F'	N	65	SD1		Ⅰ～Ⅱ	長さ3.5m×幅1mのやや屈曲した溝。	小片のみで図化できず。
SK437	F'	N	65	SK1		Ⅰ～Ⅲ	長さ3.3m×幅2m以上の楕円形土坑。	Ⅰの土器が目立つ。
SD438	G			大溝１	SD9	Ⅲ～Ⅴ	南へ緩傾斜する幅約4m、深さ50～60cmの南北台形状溝。	
SD439	G			大溝3・3'	SD11	Ⅰ・Ⅲ～Ⅳ	途中西側に分流し、再び合流する溝で、いずれも幅2～3m、深さ約50cmの台形状溝。Ⅰが入ることは下層掘り抜きか。SD439→SD440→SD443。	Ⅲ～Ⅳの土器多い。Ⅰ末の内傾口縁土器950あり。
SD440	G			大溝4	SD12	Ⅲ～Ⅳ	幅2～4m、深さ約50cmの屈折する東西溝。SD439→SD440→SD443。	「北部系」の外反口縁広口壺979あり。受口状口縁広口壺976・977の口縁部外面に竹管刺突文。Ⅰ・Ⅱの土器も少量含む。多様な器種が出土。
SD441	G			大溝5		Ⅰ～Ⅲ	幅1.2m～2mの南北溝。	Ⅰの土器が目立つ。ミニチュア壺1012あり。杓子形土製品1016あり。
SD442	G			大溝6	SD10	Ⅲ	緩やかに南流する幅2.5m～4m、深さ50～60cmの台形状溝。SD442→SD443。	
SD443	G			小溝	SD13	奈良？	幅1.6m～2m、深さ30cmの蛇行と直線部をもつ浅い台形状溝。下層遺物も混入。3層より下位は下層「H区最下層自然流水路」（→SR1012）遺物として扱った。SD439→SD440→SD443、SD442→SD443。	奈良時代の坏1025・1026あり。Ⅰ～Ⅴの土器も含む。
SK444	G	J	47	SK1		Ⅰ？	長径1.8m×短径1.6mの略隅丸方形。	小片のみで図化できず。
SK445	G	K	50	SK1		Ⅰ	長さ2.1m×幅0.8mの楕円形。ただし注記は「Ｊ50SK１」、当初「Ｊ50SK１］としていたが後で遺構カード直してあるので当初取り上げ分か。	
SK446	G	L	47	SK1		Ⅲ	長さ2.3m×幅1.6mの略長方形（短辺側が膨らむ形態）。	小片のみで図化できず。
SD447	G	O	55	SD1		？	南側は調査区外となるが、長さ0.9m以上×幅0.6m。	土器片加工円板1027あり。
SK448	G	O	55	SK1	SK5	Ⅲ～Ⅳ	長さ2.75m×幅0.93m、深さ30～45cmの隅丸長方形土坑。中央部が凹む。	複数の壺出土。細頸の広口壺1028あり。
SK449	G	O	48	SK1	SK6	廻間Ⅰ	東西1.2m×南北1.3m以上の楕円形の二段土坑で、最深部で深さ20cm。	内湾口縁壺Ａ？1033の頸部に小孔あり。
SK450	H	J	45	SK1			長径1m強の楕円形土坑。溝と重複のため、遺構実測時には消滅。遺構略図より復元。	
SD451	H		43	SD１	SD14	廻間Ⅲ～松河戸	下層の自然流水路の窪みに重複。幅2.5m～4m、深さ35cm程度。自然木等、下層の混入もあり。全体に古式土師器、最上層に須恵器。ドングリ、桃核等の種子・実類も多数出土。	近畿系の有段口縁鉢1056・1057・1058や布留形甕1086あり。伊勢型二重口縁壺1052・1053あり。Ⅲ～Ⅳの土器も含む。Ⅳの脚付壺1043の体部に流水文。
SD452	H			下層溝5	SD15		幅2～3.5mで途中Ｌ字状に屈折して南流する南北溝。SD453・455と重複。	
SD453	H			溝6	SD17	Ⅱ	幅2～3.5mの南流する南北溝。	
SD454	H			溝７			長さ14.5m×幅0.4～1mの東西溝。	
SD455	H			溝８	SD16	Ⅱ～古墳	幅2～3.5mの南流する南北溝。	大型の外反口縁広口壺1118あり。
SD456	F北（Ⅰ）	O	64・63	SD１		Ⅰ・Ⅳ	攪乱溝。	
SK457	F北（Ⅰ）	O	63	SK1		？	東側は調査区外となるが、長さ0.9m以上×幅0.7mの楕円形。	
SD458	F北（Ⅰ）	O	64・63	SD1			幅0.3m前後の東西溝。	
SD459	F北（Ⅰ）	P	64・63	SD1		Ⅰ～Ⅱ	幅0.6～1mの東西溝。	Ⅳ以降の土器もごく少量含む。ミニチュア壺1124あり。
SK460	F北（Ⅰ）	Q	63	SK1		Ⅰ～Ⅲ	攪乱で東側を欠くが、長さ1.7m以上×幅0.7m。	
SK461	F北（Ⅰ）	Q	63	SK2			長さ1.5m×幅0.6～0.9mの片側端部が幅広の「しゃもじ」形土坑。	
SK462	F北（Ⅰ）	Q	62	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ0.95m以上×幅0.5m。	
SK463	F北（Ⅰ）	R	64	SK1		Ⅰ	長さ0.8m以上×幅0.6m。SK464を切る。	小片のみで図化できず。
SK464	F北（Ⅰ）	R	64	SK2		？	長さ1.7m以上×幅0.6m。	小片のみで図化できず。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK465	F北（Ⅰ）	R	63	SK1			長さ0.7m以上×最大幅0.6mの片側が広い扇形。	
SK466	F北（Ⅰ）	R	63	SK2		Ⅰ～Ⅱ	長さ1.1m×幅0.6～0.8mの略長方形（片側短辺が膨らむ。	
SK467	F北（Ⅰ）	R	63	SK3		Ⅲ～Ⅳ	長径0.8m×長径0.7mの略方形。	
SK468	F北（Ⅰ）	R	63	SK4		Ⅰ	両端部を欠くが、長さ0.9m以上×幅0.5m。	
SK469	F北（Ⅰ）	R	63	SK5		Ⅲ	長径1.1m×幅0.8mの隅丸方形。SK470に切られる。	小片のみで図化できず。
SK470	F北（Ⅰ）	R	63	SK6		Ⅲ	0.7m×0.7mの不整隅丸方形。	
SK471	F北（Ⅰ）	R	63	SK7		Ⅱ？	長さ1.3m×幅0.5mの片側が丸い舟形状。	小片のみで図化できず。
SK472	F北（Ⅰ）	R	62	SK1			遺構西側の一部を検出したのみであるが、3.3m以上×1m以上。	
SK473	F北（Ⅰ）	R	62	SK2		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.5m以上×幅0.5mの長方形状。	小片のみで図化できず。
SK474	F北（Ⅰ）	S	64	SK1		Ⅰ	長径1.3～短径1.2mの略円形土坑。	小片のみで図化できず。
SD475	F北（Ⅰ）	S	63	SD1		Ⅰ～Ⅲ	長さ1.7m×幅0.2～0.3mの小溝。	歯出土。
SK476	F北（Ⅰ）	S	63	SK1			長さ1.3m×幅0.6mの隅丸長方形。	
SK477	F北（Ⅰ）	S	63	SK2			長径1.2m×短径1.1mの略円形。	
SK478	F北（Ⅰ）	S	63	SK3		Ⅱ？	長径1m×短径0.9mの略円形。	
SK479	F北（Ⅰ）	S	63	SK4		Ⅱ～Ⅲ	SK478に来たれているため北側を欠くが、0.9m以上×0.5mで略円形もしくは隅丸方形か。	土玉1132あり。土器は小片のみで図化できず。
SK480	F北（Ⅰ）	S	63	SK5		Ⅰ～Ⅱ？	東側は調査区外となるが、2.6m以上×2.5m以上の落ち込み状。	
SK481	F北（Ⅰ）	T	64	SK1		Ⅰ	長さ1.4m×幅0.4mの小溝状。	
SK482	F北（Ⅰ）	T	63	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.25m×幅0.8mの楕円形土坑。	
SK483	F北（Ⅰ）	T	63	SK2		？	長さ1m×幅0.7mの隅丸長方形。	小片のみで図化できず。
SK484	F北（Ⅰ）	T	63	SK4		Ⅰ	長さ0.9m×幅0.3mの隅丸長方形。	小片のみで図化できず。
SK485	F北（Ⅰ）	T	62	SK1		Ⅲ	1m×0.9mの略円形土坑。	小片のみで図化できないが土器出土量は多い。甕が多い。
SK486	F北（Ⅰ）	T	62	SK3		Ⅳ	長さ2m×幅1.4mの隅丸台形状。	椀形高坏A1137あり。甕は凹線文系が主体。
SK487	F北（Ⅰ）	U	63	SD1	SK9	Ⅳ	長さ1.53m以上×幅0.6m、深さ19cmの長方形土坑。南辺をSK488に切られる。微細獣骨片少量混じる。	
SK488	F北（Ⅰ）	U	63	SD1	SK8		長さ1.87m×幅0.7m、深さ40cmの隅丸長方形土坑。SK487を切る。細かい獣骨片が東辺から集中出土。	
SD489	欠番							
SK490	F北（Ⅰ）	U	63	SK1		Ⅰ	1.1m×0.6m以上。SK４９１に切られる。	
SK491	F北（Ⅰ）	U	63	SK2		Ⅱ～Ⅲ	西側は調査区外となるが、長さ2m以上×幅0.65～1.1m。片側端部がL字状に屈折する溝状を呈する。方形周溝墓の溝の可能性もある。	小片のみで図化できず。
SK492	F北（Ⅰ）	U	63	SK3		Ⅱ	激しく重複されているが、長径1.2m×短径1.1m程度の不定形土坑か。	小片のみで図化できず。
SK493	F北（Ⅰ）	U	62	SK1			東側が調査区外となるが、一辺1m以上が三角状に残る。	
SK494	F北（Ⅰ）	V	64	SK1		Ⅰ？	長さ1m×幅0.65mの楕円形（もしくは隅丸長方形）土坑。	小片のみで図化できず。
SK495	F北（Ⅰ）	V	63	SK1		？	長径0.9m×短径0.7mの略楕円形。	小片のみで図化できず。土器出土量も僅少。
SK496	F北（Ⅰ）	V	63	SK2		？	長径0.85m×短径0.6mの略楕円形。	小片のみで図化できず。
SK497	F北（Ⅰ）	V	63	SK3		Ⅰ	長径0.9m×短径0.65mの略円形土坑。	小片のみで図化できず。
SK498	F北（Ⅰ）	V	63	SK4		Ⅰ～Ⅱ	直径0.5mの円形。	小片のみで図化できず。Ⅰの土器が多いか。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK499	F北（Ⅰ）	V	63	SK5		Ⅱ	SK488に西側を切られるが、0.8×0.6m以上の略円形。	小片のみで図化できず。
SK500	F北（Ⅰ）	V	63	SK6	SK7	Ⅰ	長さ1.63m×0.7m、深さ12㎝の長方形土坑。床面は中央部が皿状に窪む。猪・鹿の顎骨・長肢骨出土。	土器は小片のみで図化できず。
SK501	F北（Ⅰ）	W	63	SK1		Ⅲ	長さ1m×幅0.7mの隅丸長方形の隅丸扇形。骨出土。	土器は小片のみで図化できず。沈線文系あり。
SK502	F北（Ⅰ）	W	62	SK1		Ⅱ～Ⅳ	長さ1.35m×幅0.6mのカプセル形（短辺部が丸く、長辺部が直線）。	Ⅱの土器が主体か。
SK503	F北（Ⅰ）	W	62	SK2		Ⅲ	隅部を重複のため欠くが、長さ2.2m×幅1.5mの長方形土坑。骨出土。	
SK504	F北（Ⅰ）	W	62	SK3		Ⅲ	0.7m以上×0.7mの方形。SK503、SK512を切る。	
SK505	F北（Ⅰ）	X	63	SK1		Ⅳ	1.2m×0.6～0.9mの不定形。	
SK506	F北（Ⅰ）	X	63	SK2		Ⅱ～Ⅳ	長さ1.4m×幅0.6mの略楕円形。	Ⅰの土器も含む。
SK507	F北（Ⅰ）	X	63	SK3		Ⅲ	長さ1.5m×幅0.7mの楕円形。	小片のみで図化できず。
SK508	F北（Ⅰ）	X	63	SK4		Ⅱ～Ⅲ	南側を重複のため欠くが、長さ1.3m以上×幅0.85m。	条痕文系あり。
SK509	F北（Ⅰ）	X	63	SK5		Ⅱ	長さ1.9m×幅0.9mの不整形。	小片のみで図化できず。
SD510	F北（Ⅰ）	X	62	SD1		Ⅳ	東側を欠くが、長さ3.9m以上×0.7m。	
SK511	F北（Ⅰ）	X	62	SK1		Ⅳ	長さ2m×幅0.9mの略楕円形。SK514に切られる。	Ⅱ～Ⅲの土器も含む。
SK512	F北（Ⅰ）	X	62	SK2	SK11	Ⅲ	長さ1.46m、幅0.86m、深さ27㎝の楕円形土坑。床面はほぼ水平。SK514を切り、SK504に切られる。骨出土。	
SK513	F北（Ⅰ）	X	62	SK3		Ⅲ	0.8m×0.7mの略円形土坑。SK514を切る。	
SK514	F北（Ⅰ）	X	62	SK4		Ⅲ～Ⅳ	1m以上×0.9mの楕円形。SK511→SK514→SK512→SK504。	
SD515	F北（Ⅰ）	Y	63	SD1		Ⅲ	西側が調査区外となるが、長さ1m以上×幅0.6m。SK517に切られる。骨が出土しており、本来は土坑か？	土器は小片のみで図化できず。
SK516	F北（Ⅰ）	Y	63	SK1		Ⅲ	掘削過程で変形したが、本来は長さ1.8m×幅1mの隅丸長方形か。SK518・519を切る。骨出土。	Ⅰの土器も含む。
SK517	F北（Ⅰ）	Y	63	SK2		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.8m×幅1.2mの隅丸長方形土坑。SD515、SK518を切る。骨出土。	
SK518	F北（Ⅰ）	Y	63	SK3		Ⅲ	重複のため規模・形状が不確実だが、長さ2.5m以上×幅1.5mの隅丸長方形もしくは楕円形の土坑。SK516、517に切られ、SK519、520を切る。骨出土。	土器は小片のみで図化できず。
SK519	F北（Ⅰ）	Y	63	SK4		Ⅱ	重複激しいが、長さ1.2m以上×幅0.8m。SK516・518に切られる。	
SK520	F北（Ⅰ）	Y	63	SK5		Ⅱ	SK518に切られ、一部が残るのみ。1m以上×0.4m以上。	小片のみで図化できず。
SK521	F北（Ⅰ）	Y	63	SK6		Ⅰ	長さ1.3m×幅0.65mの楕円形もしくは隅丸長方形。骨出土。	小片のみで図化できず。
SK522	F北（Ⅰ）	Y	63	SK7		Ⅱ～Ⅲ	西側が調査区外となるが、1.5m以上×0.5m以上。	土器は小片のみで図化できず。
SD523	F北（Ⅰ）	A	63	SD1		Ⅰ～Ⅱ	西側は調査区外となるが、長さ4.4m以上×幅0.7～0.9m。骨出土。	土器は小片のみで図化できず。
SK524	F北（Ⅰ）	A	63	SK1		？	長さ1.1m×幅0.7mの楕円形土坑。	小片のみで図化できず。
SK525	F北（Ⅰ）	A	63	SK2		Ⅳ	長さ1.5m×幅0.7mの楕円形もしくは隅丸長方形。調査時に遺構番号重複あり。	
SK526	F北（Ⅰ）	A	62	SK1		Ⅲ	長さ1.7m×幅1.2mの楕円形。	小片のみで図化できず。
SK527	F北（Ⅰ）	A	62	SK2		Ⅱ～Ⅳ	長さ1m×幅0.9mの不整形。	小片のみで図化できず。
SD528	F北（Ⅰ）	B	63	SD1		Ⅱ～Ⅳ	長さ3.7m×幅0.7～1m。	
SK529	F北（Ⅰ）	B	63	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.7m×幅1.1mの隅丸長方形土坑。SD523を切る。骨出土。	
SK530	F北（Ⅰ）	B	63	SK2			長径1.9m×短径1.5mの不整隅丸長方形。SD531を切る。	
SD531	F北（Ⅰ）	B	62	SD1		Ⅱ～Ⅲ	長さ3m以上×幅0.4～0.5m。SK530に切られる。	小片のみで図化できず。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK532	F北（Ⅰ）	C	63	SK1		Ⅳ	長さ3m以上×幅1.5mの溝状遺構内にある長さ1.7m×幅1.1mの隅丸長方形土坑。骨出土。	土器は小片多い。
SK533	F北（Ⅰ）	C	63	SK2		Ⅲ	長さ1.1m×幅0.65mの隅丸長方形。	
SK534	F北（Ⅰ）	C	63	SK3		Ⅱ	長さ0.9m×幅0.4mの隅丸長方形土坑。	小片のみ。
SK535	F北（Ⅰ）	C	62	SK1		Ⅲ～Ⅴ	SK536に切られるが、長さ1.9m×幅0.9めmの隅丸二等辺三角形状土坑。	Ⅴの高坏脚部1168あり。
SK536	F北（Ⅰ）	C	62	SK2		Ⅱ～Ⅳ？	0.8m×0.7mの略円形土坑。	小片のみで図化できず。
SK537	F北（Ⅰ）	C	62	SK3		Ⅰ	東側が調査区外だが、長さ1.4m×幅0.9mの楕円形土坑。	小片のみで図化できず。
SK538	F北（Ⅰ）	D	63	SK1		Ⅴ	長さ2.9m×幅2mの歪な隅丸台形状を呈する。	Ⅴ前半の有稜高坏A1171あり。
SK539	F北（Ⅰ）	D	62	SK1			長さ1.2m×幅0.8mの隅丸長方形土坑。	
SK540	F北（Ⅰ）	D	62	SK2			長さ1.6m×幅0.7mの隅丸長方形。	小片のみで図化できず。
SK541	F北（Ⅰ）	E	63	SK1		Ⅳ	西側は調査区外だが、長さ2.2m以上×幅0.5～1m。	坏部の深い椀形高坏1173あり。
SK542	F北（Ⅰ）	E	62	SK1		Ⅲ？	長さ1.1m×幅0.8mの卵形。	小片のみで図化できず。
SK543	F北（Ⅰ）	E	62	SK2		Ⅱ～Ⅳ？	長さ1.3m×幅0.8mの略楕円形。	小片のみで図化できず。
SK544	F北（Ⅰ）	E	62	SK3		Ⅱ？	長さ2m×幅1.25mの楕円形土坑。	く字状口縁甕Aの1176は口縁直下の外面に段をもつ。
SK545	F北（Ⅰ）	F	63	SK1		Ⅱ～Ⅳ	西側は調査区外だが、長さ1.5m以上×幅1m。	小片のみで図化できず。
SK546	F北（Ⅰ）	F	62	SK1		Ⅲ	東半は調査区外となるが、長径3.9mの半円形に残存しており、本来は直径3.9mの円形か。円形の竪穴住居かとも思われるが、周溝・主柱穴ともに未確認で、土坑として扱われた。	小片のみで図化できず。
SK547	F北（Ⅰ）	G	63	SK1		Ⅳ？	SK548に切られているため不明瞭だが、本来は長さ2.6m×幅1.1mの楕円形土坑か。	椀形高坏や受口状口縁細頸壺あり。椀形高坏には凹線文が施される。
SK548	F北（Ⅰ）	G	63	SK2		Ⅳ	西半を欠くが、本来は直径2m程度の円形土坑か。	
SH549	F北（Ⅰ）	G	62	SK1	SB11	Ⅲ～Ⅳ	3.1m×3m、残存深20～30㎝の隅丸方形土坑。80年報告では竪穴住居とされるが、主柱穴・周溝ともになく、やや疑わしい。床面を斜めに区切るように楕円形土坑SK550あり。SK548・551に切られる。	
SK550	F北（Ⅰ）	G	62	SK1’		Ⅴ？	SK549床面で検出された長さ2.8m×幅1.1mの楕円形土坑。	特異な土器目立つ。1183は高坏脚部か。中位に２条の突帯をもつ。
SK551	F北（Ⅰ）	G	62	SK2		Ⅲ～Ⅳ	東側は調査区外となるが、長さ2.1m×幅1～1.5m。	
SK552	F北（Ⅰ）	G	62	SK3		Ⅱ～Ⅲ	東側は調査区外となるが、長さ2m以上×幅1.5m。	小片のみで図化できず。
SH553	F北（Ⅰ）	H	63	SB1	SB10	Ⅲ？	大半が調査区外となるが、東西2.6m以上×南北2.9m以上、残存深15㎝の隅丸方形住居。	
SD554	F北（Ⅰ）	I	63	SD1		Ⅲ	SH553の東南隅より南側へ延びる長さ2.5m以上×幅0.3mの排水溝。	
SD555	F南（J）	Q	63	SD1		Ⅰ～	長さ1.9m×幅0.4mの小溝。	Ⅰの壺小片1192以外は図化できず。中期の土器も含むか？
SD556	F南（J）	Q	63	SD2		Ⅱ～Ⅲ？	長さ2m×幅0.3～0.35mの小溝。SK558・561を切る。	壺底部出土。
SK557	F南（J）	Q	63	SK1			北側は調査区外となるが、長さ0.9m以上×幅1m。	
SK558	F南（J）	Q	63	SK2		Ⅳ	長さ約1.4m×幅0.9mの楕円形土坑。SK562に切られる。	
SK559	F南（J）	Q	63	SK3		Ⅱ	北側は調査区外となるが、長さ1.9m以上×幅0.6m以上の楕円形もしくは円形土坑か。	小片のみで図化できず。
SK560	F南（J）	Q	63	SK4		Ⅱ	西側及び北側が調査区外となるが、1.9m以上×1.4m以上の円形もしくは楕円形。	直口細頸壺1195あり。
SK561	F南（J）	Q	63	SK5		Ⅲ～Ⅳ？	長径1m×短径0.8mの隅丸長方形。	小片のみで図化できず。凹線文系あり。
SK562	F南（J）	Q	63	SK6		Ⅰ～Ⅱ	長さ1.4m×幅0.7mの隅丸長方形土坑。SK568を切る。骨出土。	主体はⅠの土器。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK563	F南（J）	Q	63	SK7		Ⅲ	両端部は重複のため不明だが、長さ1.3m以上×幅0.8m。	
SK564	F南（J）	Q	62	SK1			南半部をSK566に切られるが、1.3m×1m以上の隅丸方形を呈する。	
SK565	F南（J）	Q	62	SK2		Ⅲ	長さ1.8m×幅1.1mの隅丸長方形土坑。SK567を切る。	壺蓋と思われるもの1204あり。
SK566	F南（J）	Q	62	SK3		Ⅲ	長さ2.1m×幅1.5mの隅丸長方形土坑。SK564・568を切る。土坑底に骨。	大型の甕の破片多い。
SK567	F南（J）	Q	62	SK4		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.9m×幅1.1mの略楕円形。SK565に切られる。	
SK568	F南（J）	Q	62	SK5		Ⅱ～Ⅲ	SK562とSK566に両端部を切られるが、長さ1.2m以上×幅1mの隅丸長方形土坑か。	口縁部内面に波状文施す甕1213あり。
SD569	F南（J）	Q	61	SD1		Ⅲ～Ⅳ	多くが調査区外となり、全体形不明。	台付甕あり？
SH570	F南（J）	R	63	SB3	SB12	Ⅲ	西半部が調査区外のため規模不明。楕円形住居か。現況で3.2m以上×1.5m以上残存。	大型の壺1220あり。土錘1221あり。
SD571	F南（J）	R	63	SD1		Ⅲ	SK571に切られるが、長さ1.5m以上×幅0.2mの小溝。	
SK572	F南（J）	R	63	SK1		Ⅰ	長さ1.5m×幅0.5mであるが、床面はピット状に分かれており、複数遺構重複の可能性あり。	
SK573	F南（J）	R	63	SK2		Ⅰ	長さ1.9m×幅0.9mの長方形土坑。	
SH574	F南（J）	R	62	SB1	SB13	Ⅲ	東西3～3.5m×南北3.6m、残存深10㎝の略台形形住居。主柱穴あるも周溝なし。床面中央に炭化物。遺構の切り合い激しい。	小片が多い。Ⅲでも古い段階か。
SK575	F南（J）	R	62	SK1		Ⅳ	長径0.9m×短径0.7mの隅丸方形土坑。SH574床面で確認。	体部外面下半にケズリを施すく字状口縁甕B1232あり。1233はハケの前にタタキを施す。
SK576	F南（J）	S	63	SK1		Ⅰ～Ⅱ	長さ1.4m以上×幅0.9mの隅丸長方形土坑。SK577・578を切り、SK580に切られる。	
SK577	F南（J）	S	63	SK2		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.1m以上×幅0.7m。北側はSK576に切られる。骨出土。	
SK578	F南（J）	S	63	pit7			長さ0.8m以上×幅0.8mの楕円形土坑。骨出土。	
SK579	F南（J）	S	62	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.2m以上×幅0.6mの楕円形土坑。SH574・SK580に切られる。	く字状口縁甕Aの1235は口縁端部に押圧あり。
SK580	F南（J）	S	62	SK2		Ⅲ	長さ1.2m×幅0.8mの楕円形土坑。SK576・579を切る。	
SK581	F南（J）	S	62	SK3			長さ0.8m以上×幅0.4mの楕円形土坑。西側をSK577に切られる。	
SK582	F南（J）	S	62	SK4		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.4m×幅0.85mの隅丸長方形土坑。	受口状口縁細頸壺1238は口縁部外面に円形浮文貼り付け。
SK583	F南（J）	S	62	SK5		Ⅲ	長さ1.2m×幅0.6mの楕円形土坑。SH574と重複あるも切り合い不明瞭。	小片のみで図化できず。
SK584	F南（J）	S	62	SK6		Ⅲ	長さ1.7m以上×幅0.8mの不整楕円形。SH574に切られる。	
SK585	F南（J）	S	61	SK1		Ⅲ	長さ1.8m×幅1.2mの不整方形。SH574に切られる。	口縁部外面に縄文を施す受口状口縁細頸壺1240あり。
SH586	F南（J）	T・U	62	SB2	SB14	Ⅲ～Ⅳ	大半が調査区外となるが、東辺で5.4mの方形もしくは長方形住居、残存高25㎝。	Ⅲの土器が多いか。
SK587	F南（J）	T	62	SK1		Ⅰ～Ⅳ	長さ1.6m×幅0.9mの隅丸長方形土坑。骨出土。	突起状把手をもつ鉢1258あり。
SK588	F南（J）	T	62	SK2		Ⅰ～	長さ3m×幅0.7mの溝状。	小片のみで図化できず。
SK589	F南（J）	T	62	SK3		Ⅲ～Ⅳ	長径1.7m×短径1.4mの略隅丸方形。SK587に切られる。	凹線文系のく字状口縁鉢1262あり。
SK590	F南（J）	T	62	SK4		Ⅰ～Ⅱ	長径1.2m×短径1mの楕円形。SK591を切る。	小片のみで図化できず。
SK591	F南（J）	T	62	SK5		Ⅲ～Ⅳ	幅0.6mの平面L字状を呈する。SK590に切られる。	小片のみで図化できず。
SK592	F南（J）	T	61	SK1		Ⅴ	長さ2.2m×幅1.2mの端部が丸いカプセル形。	有稜高坏B1264はⅤ前半か。
SK593	F南（J）	T	61	SK2		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.1m×幅0.5mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK594	F南（J）	T	61	SK3		Ⅲ	長さ0.9m×幅0.6mの楕円形土坑。	小片のみで図化できず。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SD595	F南(J)	T	60	溝1		Ⅲ	調査区東辺に沿って検出された長さ13.7m以上×幅1m以上の南北溝。SD569と一連の可能性もあり。	土錘1267あり。
SK596	F南(J)	U	62	SK1		Ⅲ～Ⅳ	長さ1.3m×幅0.85mの隅丸長方形土坑。SK598を切る。	
SK597	F南(J)	U	62	SK2	SK12	Ⅲ	長さ1.08m×幅0.3m、深さ20cmの隅丸長方形土坑。床面ほぼ水平。切り合い関係よりSH586に先行する。	壺が目立つ。太頸広口壺B1273は頸部に斜格子文を施す。
SK598	F南(J)	U	61	SK1		Ⅲ？	長さ1m以上×幅0.7mの楕円形土坑。SK596に切られる。	細頸壺破片などあり。小片のみで図化できず。
SK599	F南(J)	U	61	SK2		Ⅲ	重複あるが、長さ1.2m×幅0.7mの隅丸著方形もしくは略楕円形土坑。SK600を切る。	小型のく字状口縁甕B1274あり。
SK600	F南(J)	U	61	SK3		Ⅱ	長さ1.1m×幅0.65mの楕円形土坑。SK599に切られる。	小片のみで図化できず。
SK601	F南(J)	U	61	SK4		Ⅲ～Ⅴ？	長径1.4m×短径1.2mの略方形土坑。SK602～604に切られる。	突帯状のものをもつ土器1276・1277あり。
SK602	F南(J)	U	61	SK5		Ⅲ～Ⅳ	0.6m×0.5mの略円形。SK601・603を切る。	小片のみで図化できず。
SK603	F南(J)	U	61	SK6		中期か	0.85m×0.45mの「しゃもじ」形土坑。SK601→SK603→SK602。	小片のみで図化できず。
SK604	F南(J)	U	61	SK7		Ⅲ	長さ1m×幅0.35mのカプセル形。	小片のみで図化できず。
SK605	F南(J)	V	62	SK1		Ⅲ？	大部分が調査区外となるが、1.3m以上×0.3m以上の多角形状。SK606を切る。	小片のみで図化できず。
SK606	F南(J)	V	62	SK2		Ⅰ	長径1.1m以上×短径0.9mの不整長方形を呈する。SK605・607に切られる。	Ⅱの土器も混じるか。貼り付け突帯をもつ破片1279あり。
SK607	F南(J)	V	62	SK3		Ⅲ	大部分が調査区外となり、全体形は不明。SK606→SK607→SK605。	小片のみで図化できず。
SD608	F南(J)	V	61	SD1		Ⅲ？	長さ3.5m以上×幅0.4mの直線的な溝。SD612・616とはL字状の位置関係。	小片のみで図化できず。
SK609	F南(J)	V	61	SK1	SK14	Ⅲ	長さ3.95m×幅0.55m、深さ50cmの隅丸長方形土坑。	アーチ状の把手を付ける鉢1286あり。椀形高坏1287は外面に波状文を施す。脚付の椀形鉢の可能性もあり。壺1283は縦位に連続竹管文などを施す。
SK610	F南(J)	V	61	SK2		Ⅱ～Ⅲ	南側をSK614との重複で欠くが、長さ1.9m以上×幅0.4～0.6mの溝状を呈する。	広口壺あり。
SK611	F南(J)	V	61	SK3		Ⅰ	両端をSK606・609に切られ欠くが、長さ2.3m以上×幅0.6から0.9mの屈折のある溝。	大型の遠賀川系の甕1291あり。
SD612	F南(J)	V	60	SD1		Ⅲ	南側をSK619・622に切られるが、長さ1.8m以上×幅0.5m。ただし、延長上にSD616があり、同一溝の可能性もある。	小片のみで図化できず。
SK613	F南(J)	V	60	SK1		Ⅲ？	長径1.2m×短径0.6～1.1mの隅丸台形状を呈する。	小片のみで図化できず。
SK614	F南(J)	V	60	SK2		Ⅳ	長径2m×短径1.7mの隅丸略方形土坑。SK610を切る。	凹線文系の椀形鉢1295あり。
SK615	F南(J)	V	60	SK3		Ⅲ	長さ2.1m×幅0.6～1mの「しゃもじ」形土坑。幅広部分が深い。	
SD616	F南(J)	W	61	SD1		Ⅲ	長さ2.5m以上×幅0.8m。SD612と直線上に並ぶ。	甕の破片多く出土。
SK617	F南(J)	W	61	SK1		Ⅱ～Ⅲ	直径1.1mの略円形もしくは隅丸方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK618	F南(J)	W	61	SK2		Ⅲ	長さ2.1m×幅0.8mの隅丸長方形土坑。SK617に切られる。	ハケメ文系の受口状口縁壺1298あり。
SK619	F南(J)	W	61	SK3		Ⅲ	SK617・622に切られて全体形は不明だが、長さ1.2m×幅0.6m以上の隅丸長方形土坑か。	
SK620	F南(J)	W	61	SK4		Ⅰ～Ⅱ	西側は調査区外だが、長さ1.5m以上×幅0.8mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SD621	F南(J)	W	60	SD1		Ⅱ	長さ3m以上×幅0.7m。西側をSD616に切られる。	太頸広口壺A1301は口縁内面に楕円形の突起を貼り付ける。
SK622	F南(J)	W	60	SK1		Ⅲ	長さ1.6m×幅1mの隅丸長方形土坑。床面でSK619方向へ続く別遺構あり。	小片のみで図化できず。
SK623	F南(J)	W	60	SK2		Ⅲ	長さ1.15m×幅0.6mの楕円形土坑。SK626を切る。	受口状口縁細頸壺1304はかなり頸部が長くのびる。
SK624	F南(J)	W	60	SK3		Ⅲ	長さ2.1m以上×幅0.7mの長楕円形。西側をSK622に切られる。	体部片など多く図化できず。
SK625	F南(J)	W	60	SK4		Ⅲ	長さ1.9m×幅0.5mの溝状。	小片のみで図化できず。
SK626	F南(J)	W	60	SK5		Ⅲ？	0.9m×0.7m以上の隅丸方形。SK623に切られる。	小片のみで図化できず。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK627	F南（J）	W	59	SK1		Ⅲ	長径1.4m×短径1.2mの隅丸三角形状。	1305は袋状口縁細頸壺か？
SD628	F南（J）	X	60	SD1		Ⅱ	長さ1.3m×幅0.3mの長楕円形。	条痕文系のく字状口縁甕A1307あり。
SK629	F南（J）	X	60	SK1		Ⅲ？	長さ1m×幅0.6mの隅丸長方形土坑。	小片のみで図化できず。
SK630	F南（J）	X	60	SK2		？	長さ0.9m以上×幅0.8mの楕円形。SK629に切られる。	小片のみで図化できず。
SK631	F南（J）	X	60	SK3		Ⅲ	西側は調査区外となるが、長さ1.4m以上×幅0.9m。	小片のみで図化できず。
SK632	F南（J）	X	60	SK4		Ⅱ～Ⅲ？	西側は調査区外となるが、0.7m以上×0.7m。	
SK633	F南（J）	X	60	SK5		Ⅲ？	長さ1.9m以上×幅1.1mの隅丸長方形。西側はSD616に切られる。	小片のみで図化できず。
SK634	F南（J）	X	60	SK6		Ⅰ	長さ5m以上×幅1.7m。SH637に切られる。	壺1309は突帯上に竹管文を施す。甕1312は底部に穿孔あり。甕は頸部に多条の沈線あるものが多い。
SK635	F南（J）	Y	60	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ0.9m×幅0.5m。SK636との切り合い不明瞭。	小片のみで図化できず。
SK636	F南（J）	Y	60	SK2		Ⅱ～Ⅲ	長径0.9m×短径0.6mの略円形土坑。	外反口縁広口壺A1316は頸部に縦位の浮文貼り付け。
SH637	F南（J）	Y	59	SB4	SB15	Ⅲ	東西5m以上×南北4.6m、残存深25㎝の隅丸方形住居。主柱穴あり。南辺が弧状に廻っており、楕円形を呈した別遺構と重複。	Ⅰの土器も多い。Ⅲの土器は小片多い。
SK638	F南（J）	Y	59	SK1		Ⅱ～Ⅳ	東側は調査区外だが、長さ1.5m以上×幅0.6m以上。	小片のみで図化できず。
SK639	F南（J）	Y	59	SK2		Ⅲ	長径1.2m×短径0.9mの略楕円形土坑。	沈線文系の壺多い。
SD640	F南（J）	A	59	SD1		Ⅲ	長さ9.4m以上×幅0.2～0.5m。SH637、SK639・641を切る。	1327は付加沈線研磨手法により縄文帯を作り、縦位に刻線を施す。
SK641	F南（J）	A	59	SK1		Ⅰ～Ⅲ	長さ1m以上×幅0.8mの楕円形土坑。	ミニチュアの鉢1329あり。
SK642	F南（J）	A	58	SK1		Ⅰ～Ⅱ	長さ2.6m×幅0.9mの隅丸長方形土坑。	土玉1331あり。
SK643	F南（J）	B	59	SK1		Ⅳ？	長径1.3m×短径0.95mの楕円形土坑。骨出土。	小片のみで図化できず。
SK644	F南（J）	B	58	SK1		Ⅰ	長さ1.5m×幅1.1mの不整隅丸方形土坑。	紐通しの孔がある壺蓋1333あり。
SZ645	F南（J）	C	58	旧地形おちこみ		Ⅱ～Ⅲ？	明確な遺構ラインを形成せず。下層流路存在により地盤が落ち込んだ部分。	壺蓋1336は分厚い。
SK646	F南（J）	C	58	SK1		Ⅲ	長さ1.1m以上×幅0.7mの隅丸長方形土坑。	1339は大型の受口状口縁細頸壺か？縄文を施す。
SK647	F南（J）	C	58	SK2		Ⅱ～Ⅳ？	長さ1.3m×幅0.7mの略楕円形土坑。SD655を切る。	小片のみで図化できず。
SK648	F南（J）	C	58	SK3		Ⅲ	長さ1.7m×幅1.1mの隅丸長方形土坑。	水平口縁高坏1343あり。Ⅳの土器もわずかに混入？
SK649	F南（J）	C	57	SK1		Ⅱ～Ⅲ	長さ1.8m×幅1.3mの隅丸長方形土坑。SD655に切られる。	小片のみで図化できず。
SK650	F南（J）	D	58	SK1		Ⅲ	西側は調査区外だが、直径0.6m程度の円形土坑か。	壺1340は一部に線刻らしきもの遺存。
SK651	F南（J）	D	58	SK2		Ⅲ	長さ2m×幅1.4mの隅丸長方形土坑。	小片多い。Ⅰの土器も混じる。
SK652	F南（J）	D	57	SK1		Ⅲ	両端をSK651とSD653に切られるが、幅1.2m。	付加沈線研磨手法で加飾する外反口縁広口壺1347は遺存状況よい。甕1349は底部に穿孔あり。
SD653	F南（J）	E	57	SD1		Ⅴ後～古墳	トレンチを東西に走る幅2.2mの溝。	
SD654	F南（J）			重複分			西側は調査区外となるが、幅1.2mの溝。やや屈曲している。	
SD655	F南（J）	C	58	SD１		Ⅳ	両端は調査区外へ延びるが、幅0.5mの直線溝。	凹線文系の水平口縁高坏1353あり。く字状口縁甕B1352は体部の張りが強い。
SK656	C'	L	102	SK1		Ⅳ	長さ2.1m×幅0.9mの略楕円形。	受口状口縁広口壺1356は口縁部外面に簾状文を施す。土玉複数出土。
SK657	F	K	71	SK		Ⅱ～Ⅲ	長さ約3.5m×幅1.3m。調査区境界となったため残存悪い。	土器片加工円板1366あり。
SZ658	E	L	73	大オチコミorSK		Ⅲ～Ⅳ	約8m×4mの範囲に不整形に広がる落ち込み状遺構。複数の風倒木や遺構が重複したものであると推定される。	
SK659	C'	M	99	SK3		Ⅱ～Ⅳ	長さ0.9m以上×幅0.7mの略楕円形。SD209に切られ東側を欠く。	小片のみで図化できず。
SK660	D	K	86	SK2		Ⅲ	直径0.7mの略円形土坑。	小片のみで図化できず。

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SK661	E	J	76	SK1		Ⅰ～Ⅱ	ＳＸ333の東北溝に切られる2.8m×1.2m以上の略円形土坑。	条痕文系のく字状口縁甕Ａ1369あり。
SK662	E	J	76	SK2			北側は調査区外だが、2.2m×1.3m以上の楕円形土坑か。	受口状口縁甕Ｂ1371は口縁端部にも刻みを施す。
SK663	E	K	80	SK3		Ⅰ？	長さ1m×幅0.5m程度の小土坑。別遺構との重複あり。	小片のみで図化できず。
SK664	E'	N	78	SK2		Ⅰ？	SK345に重複する幅広部分（幅1.5m）。ただし、調査時期を異にしたため、本来は同一遺構だったかもしれない。	小片のみで図化できず。
SK665	E'	N	79	SK2		Ⅱ～Ⅲ？	SK390に切られる1.5m以上×1m以上。	小片のみで図化できず。
SK666	F（J）	A	60	SK１		Ⅰ～Ⅱ	SH637に切られ、西側は調査区外になるため、全体形不明だが、遺構ラインは直線的。	小片のみで図化できず。
SD667	E'	N	80	SD1		Ⅲ	南側は調査区外になるが、長さ2m以上×幅0.8m前後。SK389に切られる。	
SD668	E	J	77	SD1		Ⅰ～Ⅱ	ＳＸ333の西北溝に切られる幅0.8～1mで弧状に屈曲する溝。	
SK669	H	J	43		SK1	平安	最上面。再整理時の遺構番号SK1013。2m×1.8mの略円形土坑。	山茶碗1376あり。
SB670	H	L・M	43～42		SB1		最上面。掘立柱建物。再整理時の遺構番号SB1018。ほぼ4m四方で２間×２間。	
SZ671	H	J～M	36		北東部落ち込み	奈良	最上面。再整理時の遺構番号SZ1026。南北15m以上×幅6m以上の落ち込み。	暗文土師器皿1377あり。
SZ672	H	K～M	35		L35落ち込み	古墳後期～古代	最上面。再整理時の遺構番号SZ1026でSZ671と同一だが、注記及び遺構略図の記述から分別。	
SK673	H	K	45		SK1	Ⅰ～Ⅱ	最上面。再整理時SK1014。SK687に切られ、東半を欠くが、直径3.7m程度の浅い円形土坑か。	小型の壺1384は体部下半に穿孔あり。
SK674	H	K	45		SK2	Ⅱ	最上面。再整理時SK1015。長径1m以上。残り悪く、遺構実測時には消滅。遺構略図より復元。	小片のみで図化できず。
SK675	H	L	44		SK1	Ⅰ	最上面。再整理時SK1016。直径1.8mの円形土坑。	
SK676	H	M	45		SK1	Ⅰ新	最上面。再整理時SK1017。西側は調査区外だが、2.3m×2m以上の隅丸方形土坑か。	小片のみで図化できず。
SK677	H	O	45		SK1	Ⅰ～Ⅱ	最上面。再整理時SK1019。残り悪く遺構実測時には消滅。遺構略図より復元。直径1m前後の円形土坑か。	小片のみで図化できず。
SK678	H	P	45		SK1	Ⅱ	最上面。再整理時SK1020。調査区南西隅で検出のため、全体形不明。長径4m以上か。	
SD679	H	J～P	45～43		溝１	Ⅰ～	最上面。再整理時SD1021。幅0.5～0.8m程度で調査区を蛇行しながら南北に横断。	大型のく字状口縁鉢1388あり。
SD680	H	J～N	41～43		溝２	Ⅰ～Ⅲ	最上面。再整理時SD1022。幅1m、長さ20m以上の直線溝。SD681に切られる。	小片のみで図化できず。
SD681	H	J～N	41～43		溝３	Ⅱ～Ⅲ	最上面。再整理時SD1023。SD680に重複する幅0.4～0.6mの直線溝。	
SD682	H	N・O	39～38		溝４	？	最上面。再整理時SD1024。長さ10m以上×幅0.3～0.5mの直線溝。	小片のみで図化できず。
SD683	H	J～L	42～40		溝５	Ⅰ？	最上面。再整理時SD1025。長さ18m以上×幅0.2～0.8mで緩やかに蛇行し南流。	小片のみで図化できず。
SD684	H	O～P	42～40		溝10	Ⅰ～Ⅲ	最上面。再整理時SD1028。幅1m前後で隅丸方形状に巡る溝だったが、遺構実測時には消滅。略図より復元。	受口状口縁細頸壺1391は口縁部外面に波状文を施す。
SD685	H	O	40	SK1		Ⅰ	最上面。再整理時SD1035。長径1m程度の楕円形土坑だったが、遺構実測時には消滅。略図より復元。	小片のみで図化できず。
SZ686	H	J	43	石群中	集石遺構	Ⅰ	最上面。再整理時SZ1036。2m×1mの三角状の範囲に広がる集石遺構。	
SK687	H	K	44	SK1		弥生	最上面。再整理時SK1014。再整理時はSK673と同一遺構としたが、改めて分別。遺構プランが不明瞭だが溝状となる可能性もあり。	

納所遺跡（上層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SZ1001	A～B	K・L	118～116	井泉		Ⅰ・Ⅲ	SR1004に付設、中期上層遺構、混じり多。	Ⅰ主体。Ⅲを少量含む。条痕文系甕あり。
SR1002							幅3.5m程度の蛇行する南北流路。SZ1001に流入か。	
SZ1003						Ⅰ・Ⅲ	北側は調査区外だが、東西12m以上×南北11m以上の落ち込み状。	Ⅰ・Ⅲを含む。条痕文系甕あり。
SR1004	B～C	H～M	116～98		自然流水路	Ⅰ～Ⅴ廻間	幅5m、深さ80cmの自然流路。蛇行しながら調査区を東に走る。下層の堆積の多くは、本流路によりもたらされたものか。なお、東側は調査区を斜めに走るが（南西→北東）、東流してきた西側部分と区別可能。ただし、遺物は一括して上げられている。	Ⅰ主体。Ⅱ～Ⅴを含む。出土土器多量。 削出段・削出突帯第Ⅰ種＋刻目・篦描沈線文間刻目をもつ広口壺・甕。口縁部内面突帯・彩文をもつ広口壺・無頸壺・高坏・ミニチュア土器多数。条痕文系甕、廻間式期の高坏あり。 農具・掘削具各種、容器類、建築部材など木製品多数。
SR1005	D	H～M	94～91		自然流水路	Ⅰ・Ⅲ	幅6～12mの南北流路。SR1004とは明らかに流れを異にする。	Ⅰ主体。Ⅲを少量含む。出土土器多量。 条痕文系甕、伐採斧直柄あり。
SR1006	D	J～M	90～85		D区下層東部落ち込み	Ⅰ	長径24m以上×幅13m程の落ち込みを形成した部分。農工具未成品や製品、弓、容器未成品等を含むが、特に三又鍬や諸手鍬は遠賀川文化東伝の様子を伝える好資料。	木葉文・双頭渦文の浮文・流水文（変形工字文）をもつ広口壺。 鍬各種、斧直柄、容器類未成品、縦杓子、鐸形木製品あり。
SZ1007	D	J～M	86～80	東部落ち込みの東側		Ⅰ	SR1006の東側に形成された幅10m程の流路か。流路方向に平行して杭列があり、SR1006から続く流水・湧水を受けた施設かもしれない。	条痕文系甕あり。
SR1008	F	I～N	70～63		F区下層自然流水路	Ⅰ	調査区南東隅で確認された幅13m前後の自然流水路。	特殊文様・彩文をもつ土器多数。流水文（変形工字文）をもつ甕、条痕文系甕。 鍬・鋤各種、琴形木製品、紡織具あり。
SZ1009	F	L～N	69～68	F区下層自然流水路の落ち込み		Ⅰ	SR1008中でより落ち込んだ部分。広鍬3連の未成品が出土しており、自然流路内部で湧水部の多いところに設けられた木器貯蔵用の施設であった可能性もある。また、保存できなかったが紡織具の綜棒が出土しており、前期の紡織技術を示すものとして注目される。	彩文をもつ広口壺。広鍬三連未成品・着柄鍬あり。
SZ1010	G	I～J	55～52		G区落ち込み	Ⅰ	北側は調査区外となるが、13.5m×4.5m以上の落ち込み。農具製品のほか、斧類の未成品も含む。	彩文をもつ広口壺・無頸壺。流水文（変形工字文）をもつ無頸壺。手焙形土器あり。 広鍬未成品、斧直柄・膝柄、容器類、竪杵、匙、弓あり。
SD1011	G	I～O	52～50		SD１・溝		緩やかに屈曲しながら流れる幅1.1m～2.7m程度の南北溝。さらに東に自然流路SR1012があるが、前期の出土遺物の多くはこの溝より西側からの出土であり、前期集落の東側を画する溝の可能性がある。	
SR1012	H				最下層自然流水路	Ⅰ～Ⅲ	幅9mの南北流路。流路西側はより深い溝となり、落ち込みに沿って杭列が打ち込まれているほか、法面や流路底に直径1.5～2m程度の土坑状の落ち込みが数箇所みられ、それぞれ木器等もみられる。木製品は鍬鋤類の未成品のほか、製品も含む。80年報告書の「最下層」は「上層における最下層」の意か。	Ⅲ中心。Ⅰ～Ⅳを含む。鉤状突起をもつ土製品。 鍬各種・一木鋤・斧膝柄あり。
SD1013	I	O	63	SD2	SD2	Ⅰ	再整理時SD1029。幅1.5～1.8mの溝。納所遺跡調査区中最北に位置し、ある時期の前期遺構群を画する環濠的機能をもつ溝であった可能性がある。	
SD1014	I	S	62～63	SD2	SD3		再整理時SD1030。SD1013のひとつ内側にある幅2.8m程度の溝。南側にSD1016がほぼ平行して存在する。	

納所遺跡（下層遺構）一覧

遺構名	地区	南北	東西	調査時遺構名	80年報告書遺構名	時代	遺構概略等	出土遺物
SD1015	I	U	63	SD2			SD1014とSD1016を繋ぐように存在する幅0.4m～0.6mの南北小溝。	
SD1016	I	U	62・63	SD2	SD4	I	再整理時SD489もしくは1032。SD1014の南側を平行して流れる幅2～2.5mの東西溝。	Ⅱ～Ⅲを少量含む。
SD1017	J	A	59		SD5		再整理時SD1033。幅1.5m～2.5mの安定した溝。納所遺跡調査区中、前期の確実な溝としては最南に位置し、東トレンチのSD1011や北トレンチのSD1013～1015同様、集落を画する機能が想定される。	長方形区画文をもつ鉢、条痕文系甕あり。
SD1018	J	B	59・58	オチコミ	SD6		再整理時SD1034。幅1.4～3.5mと一定せず、調査時は「オチコミ」として把握されている。前SD1017の南側、は納所遺跡の前期遺構としては最南に位置する。	

納所遺跡（下層遺構）一覧

Ⅳ　遺物概要

1　土器の器種分類（弥生時代中期）

①分類の方法

納所遺跡出土の弥生時代中期の土器には、ほぼ中期の全期間に及ぶものが存在する。これらすべてを網羅的に記述することは難しいため、とりあえず、それらの中にどのような土器が存在するのかを示すために、分類を行って全体の整理を図っておきたい。ただし、ここでは、ある程度の数量が出土している種類のものに限って取り上げる。

土器を分類するにあたって、まず土器の用途を示しうる器種（形式）による分類を上位に置くことには問題ないと思われるが、その中でさらに細分化を図るには、一定の方向性が求められる。

各器種の細分にあたって、分類基準となりうる大きな属性には、器形・文様・調整の３つが考えうる。ここでは、長期にわたる土器群を分類する必要性から、土器の用途や外見上の差異の明瞭性とも密接に関わる、器形を主軸に据えて分類を行う。

一方、文様・調整については、ある特定の系統（あるいは小様式）を抽出するには最も適した属性ではあるが、異なった器形間での相互交流も認められる。また、凹線文など特定の文様系統の場合は、時期を限定することにもなり、今回のような中期全般にわたる土器群を分類する際の上位基準とするのはあまり適当ではないであろう。

ただし、伊勢湾西岸地域の弥生時代中期の土器には複数の系統[1)]が存在することが指摘されている。ここでは、そうした指摘を参考にしながら、文様・調整等から５つの系統を抽出した。条痕文系・櫛描文系・沈線文系・凹線文系・ハケメ文系である。

条痕文系は外面に二枚貝の貝殻や櫛状工具などで粗い条痕状の調整を施す。縄文時代晩期・弥生時代前期から続く系統と思われる。櫛描文系は施文に櫛状工具や二枚貝の貝殻腹縁を主に用いる[2)]。外面調整にはハケが多用される。沈線文系は櫛描文系と近しいが、施文に櫛状工具を用いず、直線文には沈線を一本ずつ施している[3)]。凹線文系は凹線文や簾状文といった文様を多用し、整形にはタタキも用いられる。ハケメ文系は外面調整に粗いハケが用いられ、施文にも櫛状工具・ハケ工具などによる刺突が多用される[4)]。

分類される各形式の中には、このうちの複数系統が存在するものもあり、またどれか１つの系統しか存在しないものもある。このように、器種・器形による分類の中で、特定の系統がどの器種・器形に存在する、あるいは存在しないのか、という点も明らかにできよう。したがって、ここでは各器形ごとに、どの系統が存在しているのかについても記しておきたい。

②器種分類

【壺】

壺については多様であるため、「広口壺」のような大分類を設け、さらに器形によって細分する。

広口壺

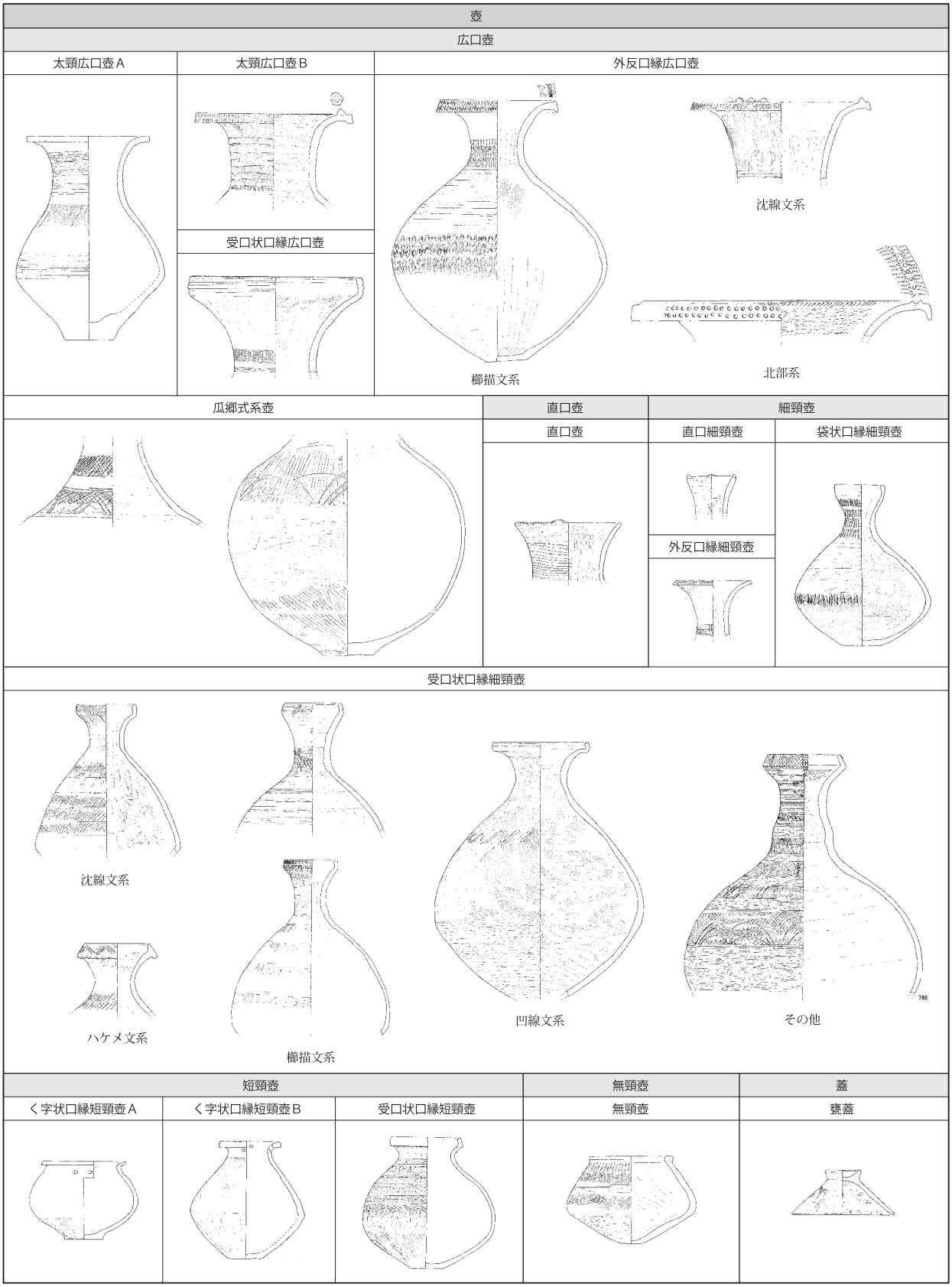
口縁部が外方へ大きく開くものを広口壺とした。多様なものが認められる。

〔太頸広口壺Ａ〕　頸部がほぼ直立して円筒状をなし、口縁部や体部と比較的明確に区別ができる。口縁部は急激に屈曲して外方へ開く。頸部の締まりが弱く、体部の張りも弱い。体部は中位が張り、やや算盤玉形を呈する。

基本的に櫛描文系のもので、頸部に櫛描（貝殻描）による直線文帯をもつ。

〔太頸広口壺Ｂ〕　頸部がほぼ直立して円筒状をなし、口縁部や体部と比較的明確に区別ができる。口縁部は急激に屈曲して外方へ開く。口縁部内面に高い瘤状突起を貼り付けるものが多い。

基本的に沈線文系のもので、頸部には１本ずつ施した多条沈線が認められる。口縁端部には面を作り、そこに二枚貝の貝殻腹縁で垂直の刻みを入れるものが目立つ。



縮尺はすべて1/8

第23図　中期弥生土器分類図①

〔外反口縁広口壺〕　頸部から口縁部にかけて外反する。口縁端部には面を作り、文様を施す。口縁部内面にも文様を施すなど、口縁部への加飾傾向が強い。大型のものは垂下させたり上下に拡張するなどして口縁端部に広い文様帯を作り出しているものが多い。体部は中位がやや張る球胴で、多くのものは外面上半の調整がハケ、下半の調整がヘラミガキである。

櫛描文系、沈線文系、凹線文系の各種がみられる。櫛描文系では口縁端部の面に波状文を施すものが主流で、沈線文系のものでは貝殻腹縁による刺突文が目立つ。櫛描文系のものでは体部上半に櫛描の直線文や波状文、斜格子文などを施す。また、沈線文系のものには口縁部内面に瘤状突起を貼り付けるものが多くみられる。

なお、口縁部内面に突帯を貼り付けるものは畿内地域北部のものと類似するとされ、「北部系」とも呼ばれる[5)]。これには竹管文が施されているものが多いようである。

〔受口状口縁広口壺〕　口縁部が受口状口縁を呈する。やや締まった頸部から口縁部が大きく外方へ開く。基本的に凹線文系のもので、口縁部外面に凹線文を施すものが目立つ。

〔瓜郷式系壺〕　大型の壺で、体部の大きさに比して頸部は細く締まるが、口縁部は大きく外反するものと思われる。口縁部は単純に外反するものと受口状口縁を呈するものとがある。肩部に膨らみをもつ。体部には大振りな連弧文や直線文を施しているものが目立つ。

三河地域の瓜郷式の壺、もしくは瓜郷式から影響を受けて作られた壺と思われ、色調などからみて搬入品も存在していると考えられる。しかしながら、中・北勢地域では一定量が出土しており、納所遺跡でも複数個体が出土しているため、分類に加えた。

直口壺

口縁部があまり外反せず直線的にのび、かつ頸部が比較的太いものを直口壺とした。

〔直口壺〕　口頸部が比較的直線的にのび、やや外方へ開く。口縁端部は拡張したり垂下させたりしない。体部の形態は不明であるが、口縁部外面に多条の沈線文を施すものが通有で、沈線文系あるいは櫛描文系のものと思われる。口縁端部には押圧により山形突起が付けられるものが認められる。

細頸壺

頸部の締まりが強く、また口頸部が外方へ開かず全体的に長細い口頸部を持つものを細頸壺とした。多様なものが認められる。

〔直口細頸壺〕　口縁部は細く直立し、口縁部でやや外反する。基本的に櫛描文系である。直口壺と同じく、口縁端部に山形突起が付けられているものが認められる。

〔外反口縁細頸壺〕　口縁部が外反する。口縁端部に面を作り、文様を施すものもみられる。広口壺に近いが、頸部が強く締まり、口頸部が細長い。櫛描文系もしくは沈線文系のものがある。

〔袋状口縁細頸壺〕　口縁部が内湾してふくらみ、袋状を呈する。体部は算盤玉形を呈する。簾状文・波状文によって加飾されるものが多い。体部下半の外面調整は幅の広いヨコミガキである。基本的に凹線文系であるが、櫛描文系とみなされるものも存在する。大型のものも一定量認められる。

〔受口状口縁細頸壺〕　受口状の口縁部をもつ。頸部は細く締まる。多様なものが存在しており、櫛描文系、沈線文系、凹線文系、ハケメ文系の各種のものがみられる。

櫛描文系のものは下ぶくれの体部をもち、体部下半で強く屈曲する。体部から頸部にかけて櫛描直線文を施す。口縁部外面には波状文や直線文を施すものが多く、円形浮文を貼り付けるものも目立つ。沈線文系のものは、櫛描文系のものと基本的に同じ器形であるが、やや肩の張りが弱く細身のものが目立つ。凹線文系のものは口縁部外面に凹線文を施す。櫛描文系のものより頸部の締まりは緩く、体部は算盤玉形を呈する。加飾傾向も弱く、体部にはあまり文様が施されない。

ハケメ文系のものは厳密には独立させた方がよいかもしれないが、口縁部が強く屈曲し、内傾している。また、口縁部の屈曲部がやや垂下するものが認められる。口縁部の加飾には櫛状工具ないしハケ工具による斜行列点文や山形文などが多用される。縦位の棒状浮文を貼り付けるものも多い。頸部の下部から体部上半にかけてふくらみを持つものも認めら

れる。

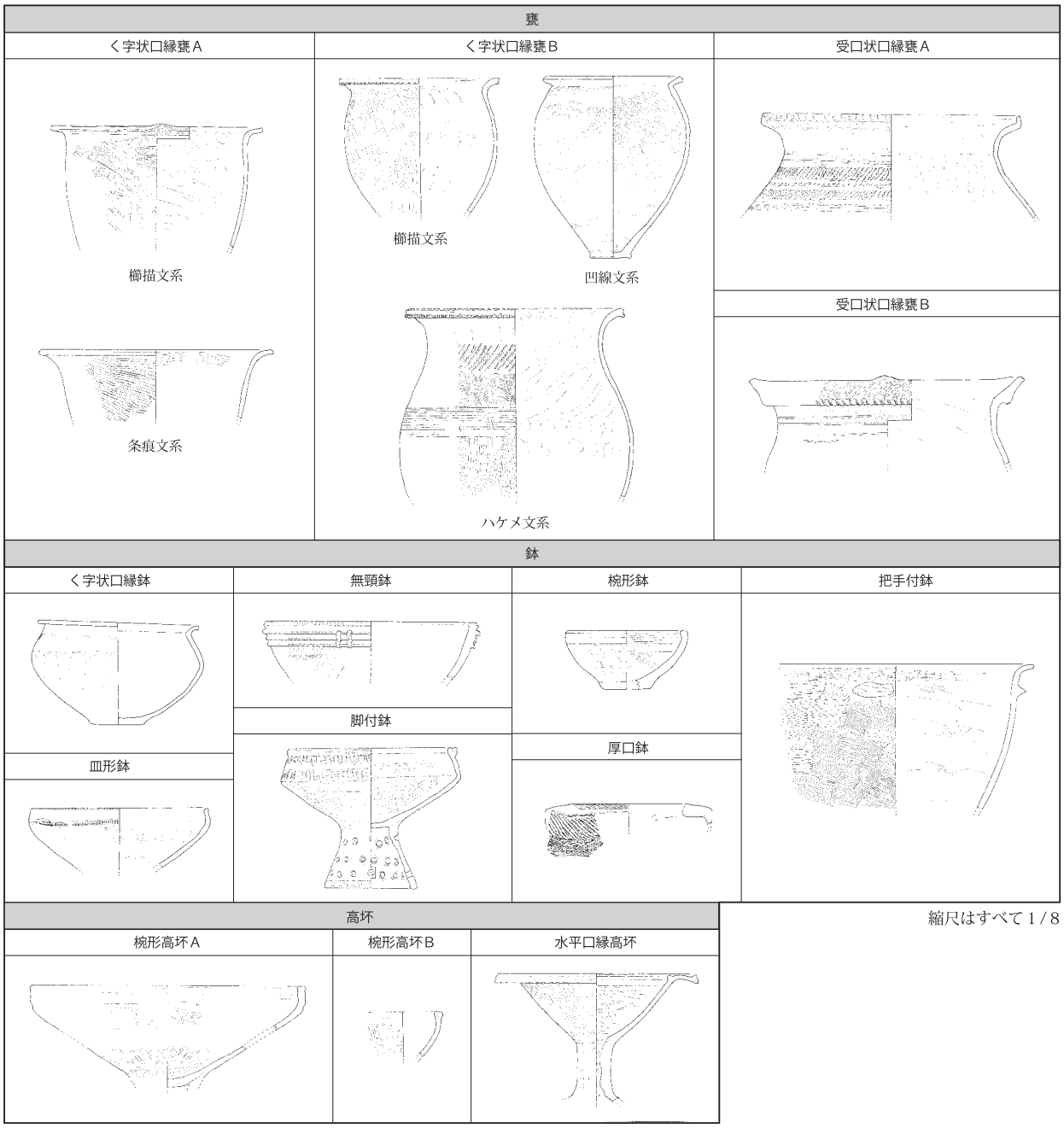
また、これら以外に条痕文系とされているような細頸壺に似たものも存在している[6)]。頸部に膨らみをもつ大型品で、体部は球胴である。瓜郷式系壺のような連弧文を施すものもみられる。条痕文系に沈線文系など、いくつかの系統のものが融合したものとも考えられる。

短頸壺

体部の大きさにくらべてかなり短い口頸部をもつ壺を短頸壺とした。

〔く字状口縁短頸壺A〕　算盤玉形の体部に、短く屈曲し外反する口縁部をもつ。頸部に蓋と綴じ合わせるための穴と思われる小孔を穿つものが目立つ。簾状文を施すものもある。

〔く字状口縁短頸壺B〕　く字状口縁短頸壺Aと同じく算盤玉形の体部をもち、頸部に小孔を穿つものも多いが、かなり頸部が締まっており、器高も高い。加飾傾向は弱く、無文のものが目立つ。



縮尺はすべて1/8

第24図　中期弥生土器分類図②

〔**受口状口縁短頸壺**〕　受口状の口縁部をもつ。頸部は良く締まり、球形の体部をもつ。

体部には櫛状工具による直線文・波状文・斜行列点文などを施すものが多い。体部外面はハケによって調整されるものが多い。ハケメ文系のものが多いと思われるが、口縁部外面に凹線文が施されるものもみられることから、凹線文系のものも存在すると考えられる。

無頸壺

鉢に近いが、体部径にくらべて口径が小さいものを無頸壺とした。

〔**無頸壺**〕　く字状口縁短頸壺Ａに近いが、口縁部は肥厚するのみで外反せず、頸部を形成しない。く字状口縁短頸壺Ａ・Ｂと同様に口縁部直下に小孔を穿つものが目立ち、使用形態としては近いものであった可能性がある。大型と小型とがある。大型のものには透孔のある脚が付くものもある。

【蓋】

壺や甕の蓋として使われていたと考えられるものである。ただし、壺蓋については確実に中期に属するものを抽出できなかった。

〔**甕蓋**〕　甕の蓋と考えられる径の大きいもの。口縁部に孔はなく、輪状の摘みがつくものが多い。頂部から口縁部へ向かって直線的に開くものと、外反しながら開くものがある。

【甕】

〔**く字状口縁甕Ａ**〕　平底の甕で、く字状に屈曲する口頸部をもつ。頸部の屈曲は緩い。また、頸部が締まらず、砲弾形を呈する。口縁部に４箇所程度の押圧を施すものも多い。

櫛描文系のものと条痕文系があり、櫛描文系のものの体部調整は基本的に外面がタテハケ・ナナメハケで内面がナデである。内面の頸部付近にヨコハケを施すいわゆる大和形甕にあたるものもある。条痕文系のものは、外面調整が貝殻条痕あるいは櫛条痕である。

〔**く字状口縁甕Ｂ**〕　平底の甕で、く字状に屈曲する口頸部をもち、頸部の締まりがよい甕を一括した。

櫛描文系のものは、大和形甕とそれに類するものである。頸部の屈曲は緩く、頸部内面から口縁部内面にかけて粗いヨコハケが施される。体部は肩の張りが目立ち、基本的に外面調整はタテハケ、内面調整はナデである。肩部には直線文状のヨコハケが施される場合がある。また、口縁下端部に刻みが入れられるものが多い。

ハケメ文系の影響を受けていると思われるものも、頸部の屈曲は緩い。体部のプロポーションや器面の調整については櫛描文系のものと共通性が認められるが、肩があまり張らないものが多く、肩部から頸部にかけてに櫛状工具で波状文や斜行列点文、直線文を施す。ハケも全体的に粗い。また、口縁端部には下端部だけではなく上端部にも刻みを施すものが目立つ。

凹線文系のものは頸部がく字状に鋭く屈曲する。肩があまり張らない器形のものが多い。体部に文様は施さない。口縁端部には基本的に面を作り、中には端部を上方にはね上げたり、やや肥厚させたり、上下に拡張したりするものもある。上下に拡張するものは大型のものが多い。外面調整は、体部上半はナナメハケもしくは直線文状のヨコハケが目立つが、それに先だって施されたタタキが確認できるものもある。また、体部下半にはストロークの長いタテハケやタテミガキが施される。内面調整はタテハケ、ヨコハケ、ナデ、ケズリなどバリエーションが多い。

〔**受口状口縁甕Ａ**〕　受口状口縁をもつ。そのほかの特徴はハケメ文系の影響を受けたく字状口縁甕Ｂと共通性が高く、肩が張らずなで肩の器形である。口縁部外面に櫛状工具による斜行列点文を施すものが多い。大型のものが多い。

〔**受口状口縁甕Ｂ**〕　受口状口縁をもつ。基本的に大型のもので、口縁部はやや外方へ比較的高く立ち上がる。口縁部外面に波状文などの文様を施すものもみられる。また、口縁部が屈曲部でやや垂下する個体が多い。

体部の調整は比較的粗いタテハケで、内面は基本的にナデ、頸部内面にはヨコハケが施される。ハケメ文系のものである。

口縁部の４箇所に山形突起をもつものが主体で、口縁部が波状を呈するものもみられる。山形突起の頂部ないしは波頂部に切り込み状の刻みを入れるものが目立つ。

【鉢】

〔**く字状口縁鉢**〕　頸部がく字状に屈曲する。頸部はやや締まり、浅い体部をもつ。

〔**無頸鉢**〕　頸部がなく、砲弾形を呈する。口縁部外面に１～３条の突帯を貼り付ける。突帯には刻みを入れることが多い。棒状浮文を貼り付けているものもみられる。

〔**皿形鉢**〕　浅い皿状を呈する。口縁部直下で屈曲し、口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。屈曲部に二枚貝の貝殻腹縁などで刻みを施すものがみられる。沈線文系のものと思われる。受口状口縁細頸壺の下半部と作りが共通するようである。

〔**椀形鉢**〕　平底で椀形を呈する。基本的に小型のものである。文様が施されているものはほとんどみられない。

〔**把手付鉢**〕　大型の鉢で、く字状口縁鉢と同じく短く外反する口縁をもつが、頸部はほとんど締まらない。口径にくらべて器高が低い。体部外面の頸部直下に２箇所以上の瘤状の把手を貼り付ける。外面調整はハケもしくはナデが多い。

〔**脚付鉢**〕　多数の小さな円形の透孔があけられた、ハの字状に開く脚部が付く鉢である。やや大型のものもある。体部は中位で強く屈曲する。口縁部は外方に折り曲げて断面が方形になるように肥厚させる。凹線文系に特徴的な器種と思われ、脚端部に凹線文が施されているものもみられる。鉢部外面に簾状文が施されているものが主流である。

〔**厚口鉢**〕　口縁部が強く内側へ屈曲する。また屈曲部から口縁部にかけての器壁がかなり厚い。条痕文系のものである。

【高坏】

〔**椀形高坏Ａ**〕　椀形の坏部をもつ高坏で、坏部が口縁部付近で屈曲するものと、あまり屈曲せず緩やかに内湾するものとがある。凹線文系のもので、口縁部外面に凹線を施すものが多い。

〔**椀形高坏Ｂ**〕　椀形の坏部をもつ高坏で、口縁端部を外方へ肥厚させるもの。凹線文系のものと思われる。

〔**水平口縁高坏**〕　外方へ水平にのびる口縁をもつ。脚部は柱状脚のものが主体である。櫛描文系ないしは凹線文系のものである。口縁の端部を垂下させるものもあるが、大きく拡張して垂下させるものは少ない。

註

1）　ここでは以下の文献を参考に、加飾・製作技法などからみたまとまりといった意味合いで「系統」という概念を用いる。この系統は、壺の加飾において比較的明瞭にみられるが、調整などにおいては器種をこえたまとまりも看取される。
穂積裕昌「弥生土器について」『菟上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2005。

2）　伊勢湾西岸地域では、櫛状工具による櫛描文が盛行する以前には二枚貝の貝殻腹縁による櫛描状の文様が盛行しており、貝殻描文とも呼ばれている。ここでは両者を包括して一つの系統としておく。尾張地域の朝日式・貝田町式に該当する。

3）　伊勢湾西岸地域では櫛描文系とともに朝日式・貝田町式を構成するものとも思われるが、特に壺においては櫛描文系との区別があるようにみえることから、註１）穂積2005文献を参考に、沈線文系として独立させた。なお、下記文献で取り上げられているような、大地式などを中心とする「沈線紋系土器」とは全く異なるものである。
永井宏幸「沈線紋系土器について」『朝日遺跡Ｖ』土器編・総論編　(財)愛知県埋蔵文化財センター　1994。

4）　以前は「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」とされていたものである。提唱者の石黒立人により、近年では「ハケメ紋系土器」とされているため、それに従う。なお、「紋」の字はここでは本報告の体裁上、「文」に統一した。
石黒立人「鈴鹿・信楽山地周辺の土器―イメージとしての山」『古代文化』第44巻第８号　古代学協会　1992、石黒立人・宮腰健司「伊勢湾周辺における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会　2007。

5）　三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』2005。

6）　永井宏幸・村木誠「尾張地域」『弥生土器の様式と編年―東海編―』木耳社　2002。

2　土器の器種分類（弥生時代後期～古墳時代初頭）

①分類の方法

納所遺跡出土の弥生時代後期～古墳時代初頭の土器は、量は少ないもののほぼ全期間にわたるものが存在している。それらの土器を分類するにあたっては、弥生時代中期土器の分類と同じく、まず土器の用途を示しうる器種（形式）による分類を上位に置き、さらに各器種の中における器形の差異に基づいて分類を行う。こうした器形の差異には、加飾の度合いや器壁の調整なども対応してくるため、それらも分類の参考としている[1)]。

なお、ここでは納所遺跡から出土したものに限って分類を行った。したがって、分類の対象となる土器の量自体が少なく、当該期の器種組成を網羅的には反映できていない。

②器種分類

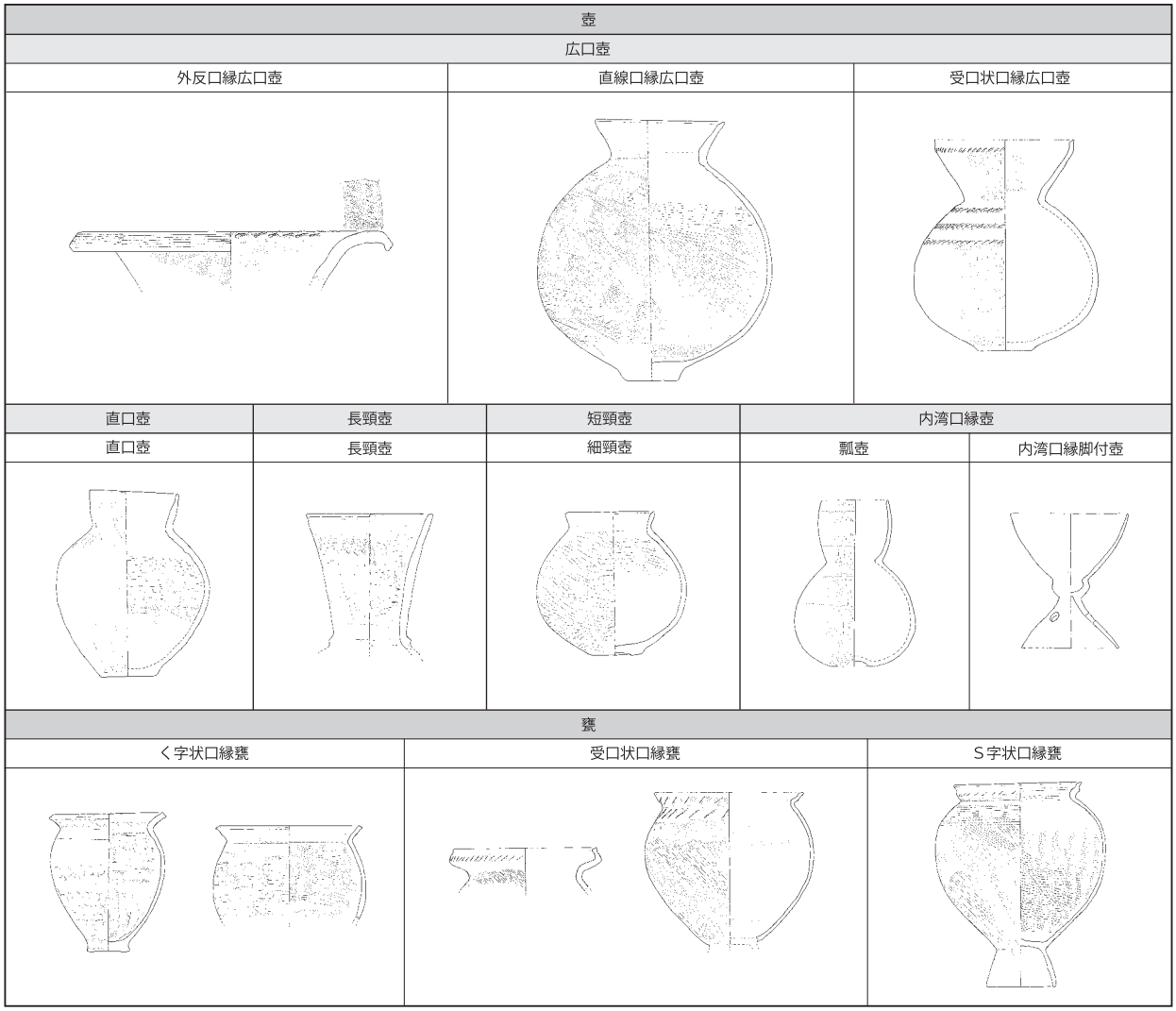
【壺】

壺については多様であるため、「広口壺」のような大分類を設け、さらに器形によって細分する。

広口壺

口縁部が外方へ大きく開くものを広口壺とした。基本的に大型・中型のものである。

〔外反口縁広口壺〕　口頸部が外反して大きく広がる。口縁端部を拡張するものもある。口縁端部や体部外面上半などに波状文、直線文、列点文などを施すものがあり、加飾傾向は比較的強い[2)]。



縮尺はすべて1/8

第25図　後期～古墳時代初頭土器分類図①

〔直線口縁広口壺〕　口頸部が比較的直線的にのび、やや外方へ開く。口縁端部は拡張したり垂下させたりしない。体部は広口壺に比べてあまり胴部の張りが強くない。体部上半に施文されるものもあるが、全体として加飾傾向は弱い。

〔受口状口縁広口壺〕　直線口縁広口壺と同様に口頸部が直線的にのびるが、口縁部が屈曲し受口状をなす。口縁部外面に櫛状工具による列点文を施す。体部にも文様を施すものがみられる。

直口壺

〔直口壺〕　小型・中型のもので、口頸部が外方へあまり開かず、直線的にのびる。体部はあまり胴が張らず、細身である。外面調整はタテハケが主体である。

長頸壺

〔長頸壺〕　口頸部が直線的に長くのびる。外面の調整は基本的にハケである。頸部に突帯をもつものもみられる。

短頸壺

〔短頸壺〕　短く外反する口縁部をもつ。頸部は締まり、体部は球形に近い。文様はあまり施されず、加飾傾向は弱い。体部外面の調整にはハケのものとミガキのものとがみられる。

内湾口縁壺

口縁部が内湾する壺をまとめて内湾口縁壺とした。小型・中型のものが中心で、いずれも外面調整はミガキが基本である。

〔瓢壺〕　口頸部が内湾しながらほぼ直立する。長頸のものと短頸のものとがあるが、長頸のものが主流である。口縁端部に内傾する面を作るものが多い。また、底部は小さく円形に凹む。外面に二枚貝の貝殻腹縁による連弧文や櫛状工具による直線文を施すものが目立つ。

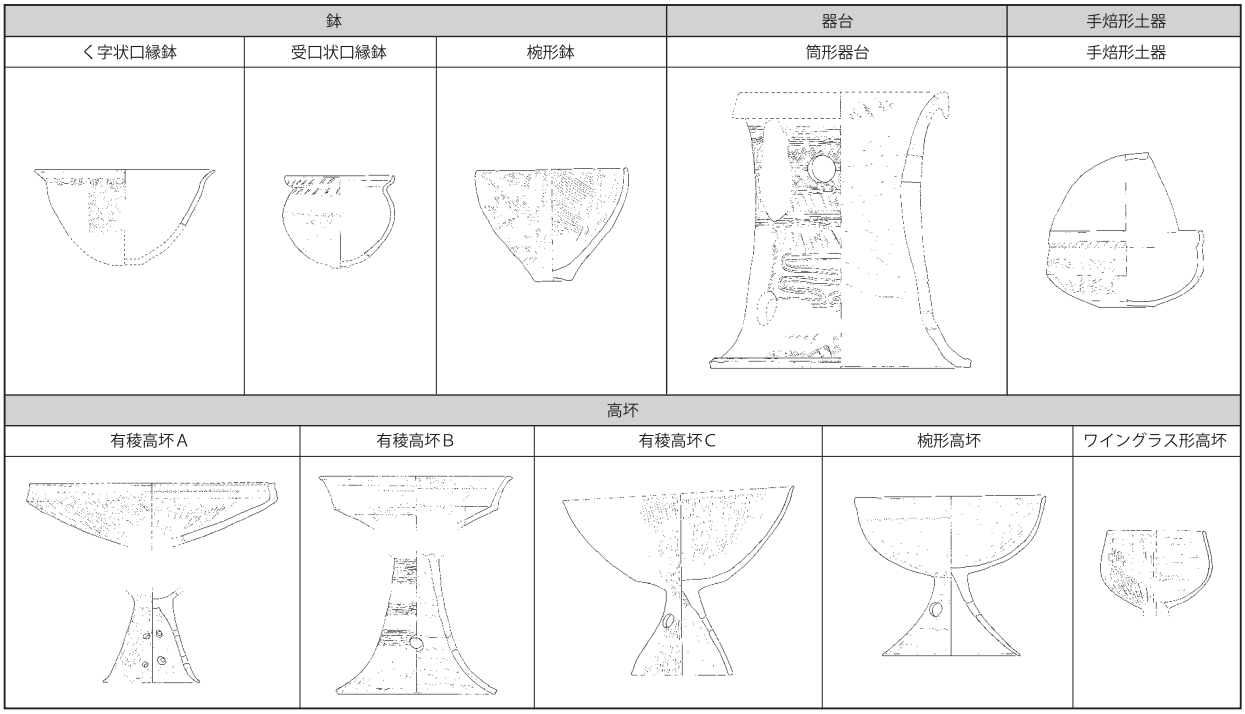
〔脚付内湾口縁壺〕　小型の壺で、口頸部が内湾しながらやや外方へ大きく開く。体部の大きさに比べて口頸部がかなり大きい。やや内湾しながらハの字状に開く脚が付く。脚部外面には直線文を施すものがみられる。

【甕】

〔く字状口縁甕〕　く字状に屈曲する口頸部をもつ。底部が遺存するものはわずかしかないが、平底のものと脚付のものとがあると思われる。両者とも外面調整は基本的にハケである。

〔受口状口縁甕〕　受口状口縁をもつ。平底のものと脚付のものとがある。

平底のものは口縁部が強く屈曲して受口状をなし、



縮尺はすべて 1 / 8

第26図　後期～古墳時代初頭土器分類図②

屈曲部より上は直立または内傾する。口縁端部には明瞭に面を作る。口縁部外面には櫛状工具による列点文が施される。体部外面の調整はやや粗いハケが目立つ。

脚が付くものは口縁部の形態にバリエーションが多いが、口縁部の屈曲が甘く、屈曲部より上が外方へ開くものが主流である。口縁部外面には櫛状工具による列点文が施される。体部外面の調整には平底のものとくらべて細かいハケが目立つ。また、体部外面上半に櫛状工具による列点文や波状文、直線文などが施されるものもある。

〔S字状口縁甕〕　いわゆるS字状口縁台付甕である。口縁端部を外方へ引き出し、断面形がS字状をなす口縁部としている。脚はあまり外方へ広がらず、脚端部を内面へ折り返すものが多い。外面調整はいずれも粗いハケで、肩部には直線文状のヨコハケが施される[3)]。

【鉢】

〔く字状口縁鉢〕　く字状に屈曲する口頸部をもつ。頸部があまり締まらないものと、やや締まるものとがある。

〔受口状口縁鉢〕　受口状口縁をもつ。頸部はやや締まり、口縁部外面や肩部などに櫛状工具で刺突文を施すものが多い。体部外面の調整は基本的にハケである。

〔椀形鉢〕　頸部をもたず椀形を呈する。器高が高いものと低いものとがある。底部は基本的に平底である。内面調整はハケが多い。

【器台】

〔筒形器台〕　大型の器台で、全体が復元できる資料がないために器形など不明な点が多いが、あまり中位の径が窄まらずに筒形に近い器形を呈するようである。円形や長方形の透孔をもち、波状文や直線文で加飾する。流水文を施すものもある。

【高坏】

〔有稜高坏A〕　坏部が浅く、口縁部直下で強く屈曲して稜をもち、口縁部は短く直立気味に立ち上がる。脚部は柱状部のものとハの字状に開くものとがある。

〔有稜高坏B〕　坏部が浅く、中位で屈曲し稜をもつ。稜より上は有稜高坏Aにくらべて長くなっており、やや外反しながら外方へ開く。口縁端部には面を作る。脚部はハの字状に長くのび、脚端部は外反する。脚部外面には直線文を施す。

〔有稜高坏C〕　坏部が深く、下位で屈曲し稜をもつ。稜より上は長く、内湾する。口縁端部には内傾する面を作る。脚部は坏部の深さと同じくらいの高さで、内湾する。坏部内外面と脚部外面の調整はストロークの長いタテミガキである。脚部上半に直線文を施すものが目立つ。

〔椀形高坏〕　椀形の坏部をもつ。口縁端部には内傾する面を作る。脚部は外反する。坏部内外面と脚部外面の調整はストロークの長いタテミガキである。

〔ワイングラス形高坏〕　ワイングラスのような形を呈する。外面調整は基本的にミガキである。口が窄まるものや、坏部外面に文様を施すものなども認められる。

【手焙形土器】

〔手焙形土器〕　鉢形を呈する体部をもち、その口縁の半分をドーム状に覆うように覆部が付く。体部の口縁部は受口状になるものが多い。

註

1）　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器分類の基本的な方針は下記の文献に基づくが、納所遺跡では土器の出土量自体が少ないため細分は避けた。また、本報告の方針・体裁にあわせて分類名称も変えている。
三重県埋蔵文化財センター『村竹コノ遺跡』2009。

2）　パレススタイル壺のような加飾壺は含めていない。納所遺跡でもパレススタイル壺と思われる破片は確認できるが、ごく少量の上にいずれも小片で、器形が窺えるようなものはないため、分類には加えていない。

3）　S字状口縁台付甕については下記の文献で詳細な分類と編年が行われている。納所遺跡では、下記文献における分類のA類とC類が認められる。
愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990。

3　土器の器種分類（弥生時代前期）・木製品の概要

①土器の分類方法

弥生時代前期に帰属する納所遺跡出土土器の分類をおこなうにあたっては、次の点に留意しながら方向性の焦点を定める。

かつて“日本列島西部域の前期弥生土器様式の総称”として「遠賀川系土器」が設定[1]され、壺形土器を中心とした〈区分文様〉から〈帯状文様〉への変遷を念頭に置いた「型式」的手法[2]によって語られてきた。文様構成と変遷を重視した視点によって、これまで列島諸地域において再生産が繰り返されてきたように、従前までは「型式」的に把握するのが前期弥生土器にとって穏当とみられてきた。ただし、「型式」的手法による変遷を語る際に、文様を基軸に据えた指標を求めるのではなく、あくまで“土器のかたち”の変遷が最優先されるべきだと考える。つまり、系統樹的な成形技法の体系[3]に即して遠賀川系土器が構成されたという理解、板付Ⅰ・Ⅱ式土器の製作工程[4]にも示されているように、成形技法・製作工程こそ指標の根幹に位置づけられるだろう。

「型式」的手法は当然ながら視覚的な分類である。土器生産は粘土の採取・調達や胎土の調整から、成形や調整、焼成に至る一連の土器製作体系の反復によって支えられている。“土器を製作する”ということはある決まった手順で、ある特定のかたちの土器を作ることであり、その認識は形態だけでなく、色調や胎土の特徴も含まれている。こうした諸要素の共通性／非共通性をもとに分類を可能とするのが理想的であるため、諸要素を階梯的に扱うことを念頭におく。土器分類は形態や文様を含めた製作技法を第一義とし、胎土や色調の観点をその次点として使用する。

前期弥生土器の分類にあたっては、こうした視点に立脚すると「土器のかたち」→「文様」といった方向性が導き出される。土器のかたちによって規定された用途の対応関係にみる〈器種の分化〉を示した壺形土器・甕形土器（以下「形土器」を省略）といった粘土帯積み上げ工程に起因する“形式”を上位概念としてまず前提に捉えるのに異同はないだろう。器種の細分化にかかる次のステージにおいては、土器の形態に基づく器高と胴部最大径にみるサイズの比率、土器各種部位の境界にみる変換点の差異、土器製作技法などが密接に関連する。そして次に重要な指標となる文様（黒色物質塗布及び彩文を含む）と胎土・色調など、これまでにみた土器の諸属性を階梯的な序列として組み合わせた方法が最も適切であろう。よって、前期弥生土器の分類にあたっては、80年報告書で用いられた分類方法とは整合性を図らずに、土器の形態と文様などを指標として新たに設定する。

土器製作技法から導き出される弥生時代前期の土器は遠賀川系[5]・条痕文系・浮線網状文系で構成される。ただし、遠賀川系以外は器種が限定されているため、ここでの分類はおもに遠賀川系が中心となり、搬入品の条痕文系と浮線網状文系の土器は該当する器種だけを取り扱う。以下からは土器の形態を重視した器種分類をおこなう。

②器種分類

〈遠賀川系〉

【壺】

広口壺　口縁部がやや短くて弱く外反し、胴部上半に張りをもつものが主体であり、頸部／頸胴部界の屈曲が比較的明瞭となる。区画文様は篦描沈線少条、篦描沈線間刻目、半截竹管文、削出段、削出突帯第Ⅰ種・第Ⅱ種少条、貼付突帯で主に構成される。これらの文様帯間には木葉文・重弧文・複線山形文状と双頭渦文や棒状浮文などの特殊文様が施文され、黒色物塗布及び彩文で加飾された個体もある。無文器種は認められない。壺口縁部には紐孔が穿孔されている個体が多く、壺用蓋がともなう。中形品。土器の色調は灰黄褐色が主体。器高と胴部最大径の比率により２種に区分される。

〔広口壺Ａ〕　胴部最大径が器高を凌ぐもの、あるいは器高と胴部最大径が同等のものがこれに相当し、胴部が強く張る一群を指す。特殊文様をは

じめ、黒色物質塗布及び彩文で加飾される場合が多い。

〔**広口壺Ｂ**〕　器高が胴部最大径を凌ぐもので、胴部の張りはそれほど顕著でない一群を指す。広口壺Ａと異なり加飾傾向は低調となる。

広口長頸壺　口縁部が間延びする長頸化した口縁部をもつ形態が主体となる。いわば広口壺の長頸化傾向に相当し、頸部／頸胴部界の屈曲はやや不鮮明となる。口縁部には紐孔がなく、内面突帯をもつ個体がある。区画文様は篦描沈線多条、半截竹管文、削出突帯第Ⅱ種多条、貼付突帯を中心に構成する。中形品。文様構成と色調の観点から２種に区分される。

〔**広口長頸壺Ａ**〕　頸部／頸胴部界は削出突帯第Ⅱ種多条、貼付突帯、多条沈線をもつ。土器の色調は灰黄褐色が主体。

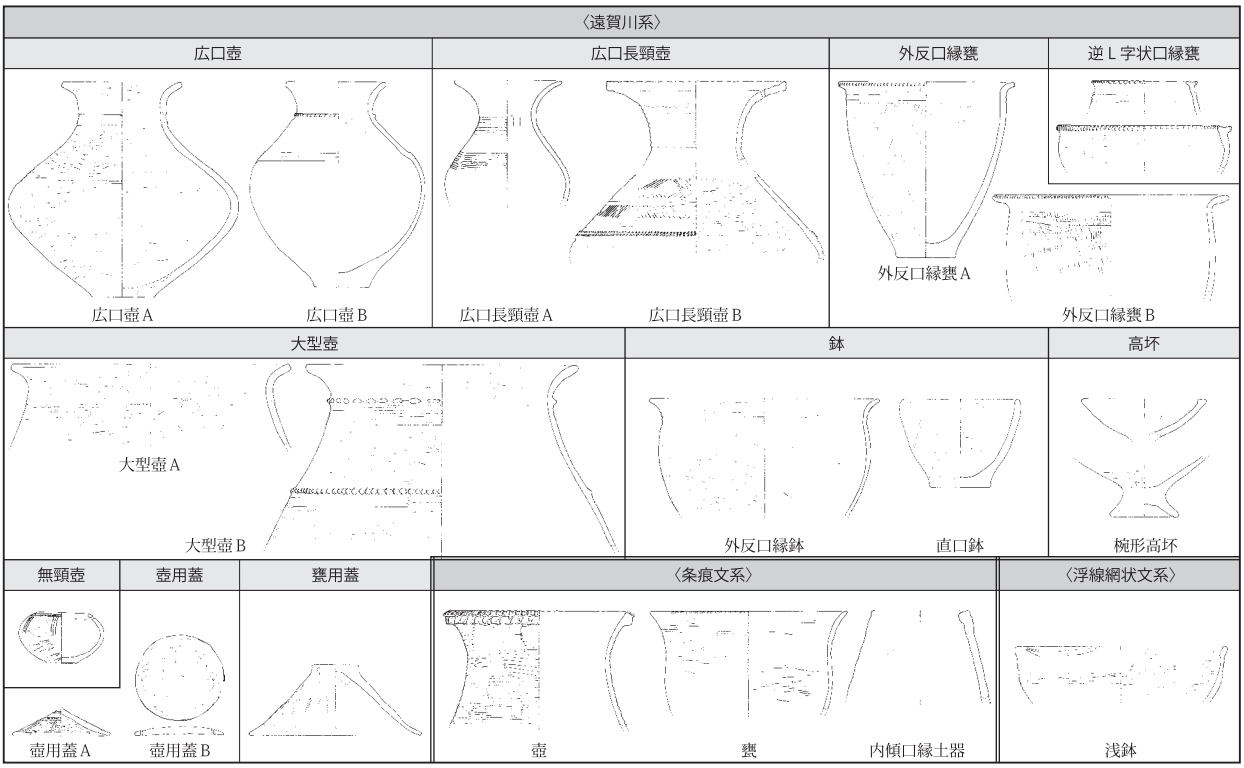
〔**広口長頸壺Ｂ**〕　頸部／頸胴部界は指づくね貼付突帯＋幅太の篦描沈線多条で構成される。口縁部上・下端のどちらかは押捺により波状に仕上げ、口縁部内面は幅太の篦描沈線多条、あるいは内面突帯をもつものがある。土器の色調は赤褐色が主体。

大型壺　広口壺Ａと広口長頸壺Ｂの大形品。口縁部が短く外反し、口縁部径・頸部径とも大きい形態と口縁部が間延びする長頸化した口縁部をもつ形態がある。どちらも頸部／頸胴部界の屈曲はやや不鮮明。頸部／頸胴部界は指づくね貼付突帯＋幅太の篦描沈線多条で構成され、口縁部には紐孔がともなわずに、口縁部内面に幅太の篦描沈線多条あるいは内面突帯をもつものが多い。区画文様は広口長頸壺Ｂと調和的な構成であるが、口縁端部に刻目をもつ特徴がある。土器の色調は赤褐色が主体。口縁部・頸部径を基準とした２種に区分される。

〔**大型壺Ａ**〕　頸部は窄まらず口径と頸部径が大きいもの。形態はかつて「大型甕形土器」と称されたものに相当する。

〔**大型壺Ｂ**〕　頸部は窄まらず口径と頸部径が大きいもので、変容壺系の大型壺に相当する。

無頸壺　広口壺の粘土帯積み上げ段数が少ないものに相当する。文様は少条の篦描沈線が中心に構成され、無文器種はない。口縁部には紐穴が穿孔される個体が多く、壺用蓋がともなう。外反口縁や瘤状把手のほか、注口をもつ個体もあるが希少。



＊小型土器・ミニチュア土器は除く。

第27図　前期弥生土器分類図

中形品。

【蓋】

壺用蓋　傘形あるいは円板形の２種が存在するが、前者が主体。特殊文様で加飾される傾向が強い。

〔**壺用蓋Ａ**〕　摘部あるいは突起の有無にかかわらず、傘形を呈するものを指す。外面は特殊文様で加飾される場合が多い。広口壺・無頸壺にともなう。

〔**壺用蓋Ｂ**〕　扁平な円板形を呈するもの。無文のものが通有。

甕用蓋　摘部をもち裾部が大きく開き、傘形を呈する。

【甕】

外反口縁甕　外反口縁甕は短い口縁部が弱く外反し、口縁部径と胴部径の差が少ない倒鐘形を呈する。胴部上位がわずかに張る形態が多く、頸部／頸胴部の区画文様は篦描沈線少条、半截竹管文が主体。外面は縦位ハケによる調整が大勢を占める。器形は大きく異ならないが、口縁部先端の形状あるいは文様の施文方法に相異点が認められ、２種に区分される。

〔**外反口縁甕Ａ**〕　通有の遠賀川系土器と等しくするもの。頸部下位には完周を原則とする篦描沈線少条をもつ。土器の色調は明褐色が主体。

〔**外反口縁甕Ｂ**〕　口縁部先端が肥厚し、頸部下位に断続的な篦描沈線・半截竹管文を施すものが多い。土器の色調は赤褐色が主体。

逆Ｌ字状口縁甕　口縁部外面に粘土紐を貼り付けた一群。無文が主体。「瀬戸内形甕」の系統をもつ。

【鉢】

外反口縁鉢　無頸壺の粘土帯積み上げ段数が少なく仕上げ、口縁部を外反させた一群。中形品が主体となる。大形品は大型壺の胴部下半に相当する。どちらも胴部外面に瘤状把手がつくものがある。

直口鉢　外反する口縁部がつかないもので、内彎口縁も含むものを直口鉢と一括した。口縁端部に瘤状把手をもつものがある。

【高坏】

椀形高坏　坏部が椀形を呈し、底部に短い脚部がつく形態。

【小型土器・ミニチュア土器】

小型土器　広口壺の小形品が主体。

ミニチュア土器　手づくね成形の極小形品。

〈条痕文系〉

壺　口縁部・頸部に無刻突帯をもつ深鉢の変容壺。

外反口縁甕　条痕調整の甕。

内傾口縁土器　内傾口縁部をもつ条痕調整の土器。

〈浮線網状文系〉

浅鉢　浮線網状文をもつ中部高地系土器。

③木製品の概要

納所遺跡出土木製品は80年報告書によると合計77点が出土している。このうち53点が弥生時代前期に帰属する。その内訳は、農具（広鍬・狭鍬・叉鍬・泥除・一木鋤・叉鋤・鍬直装柄・槽・槌・竪杵）、工具（斧直柄・加工斧膝柄）、容器／食事具（鉢・高坏・槽・縦杓子・横杓子・匙）、紡織具、精製品（竪櫛・琴形・鐸形）となる。

鍬類・斧直柄・刳物容器は未成品の存在により、自家生産が認められる。一方で他器種の未成品の存否はすでに検証が困難な状況にある。

註

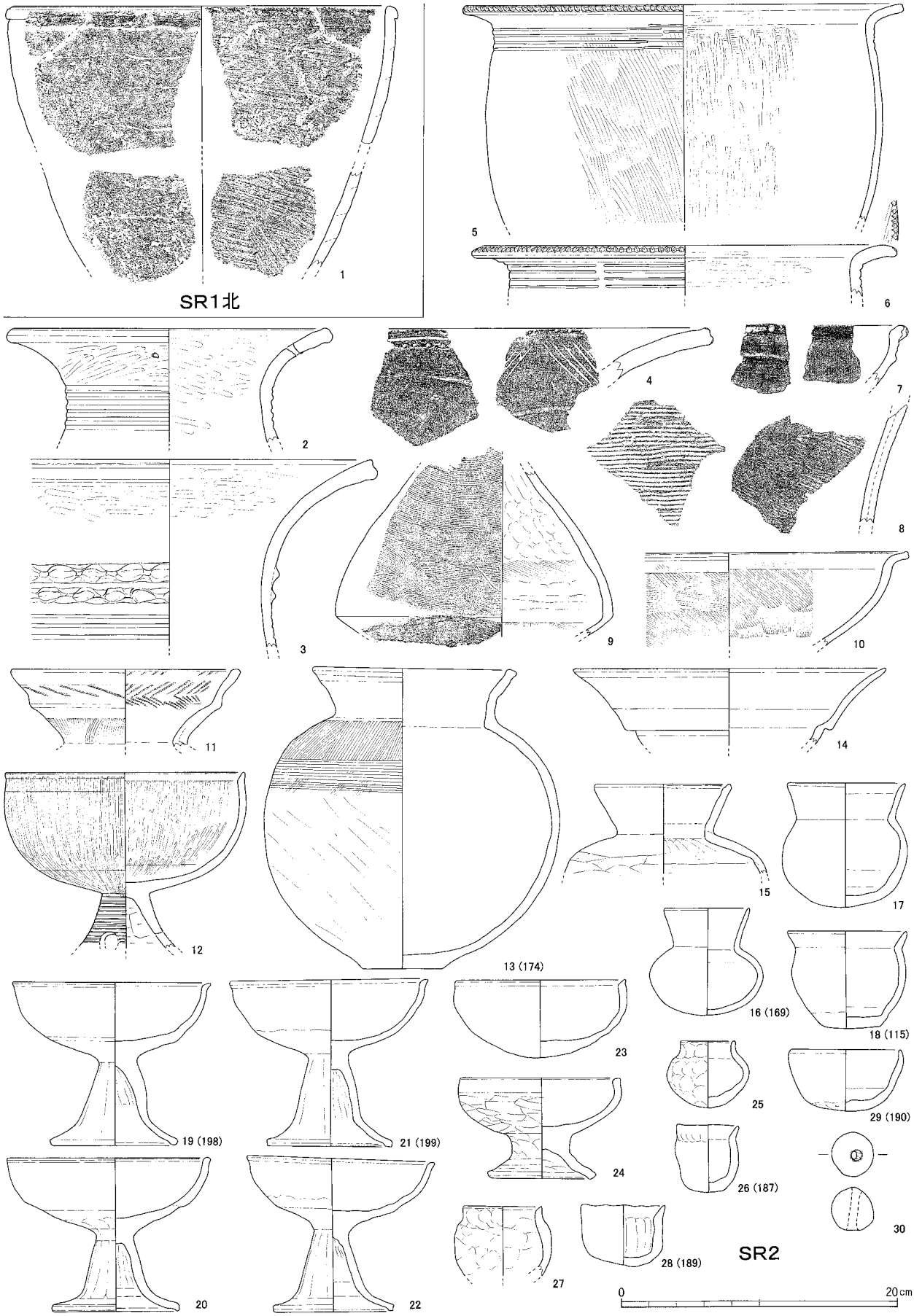
1）　小林行雄「一の傳播変變現象―遠賀川系土器の場合―」『考古學』第５巻第１号 東京考古學会　1934。

2）　佐原 眞「山城における弥生式文化の成立―畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置―」『史林』第50巻第５号　史学研究会　1967。

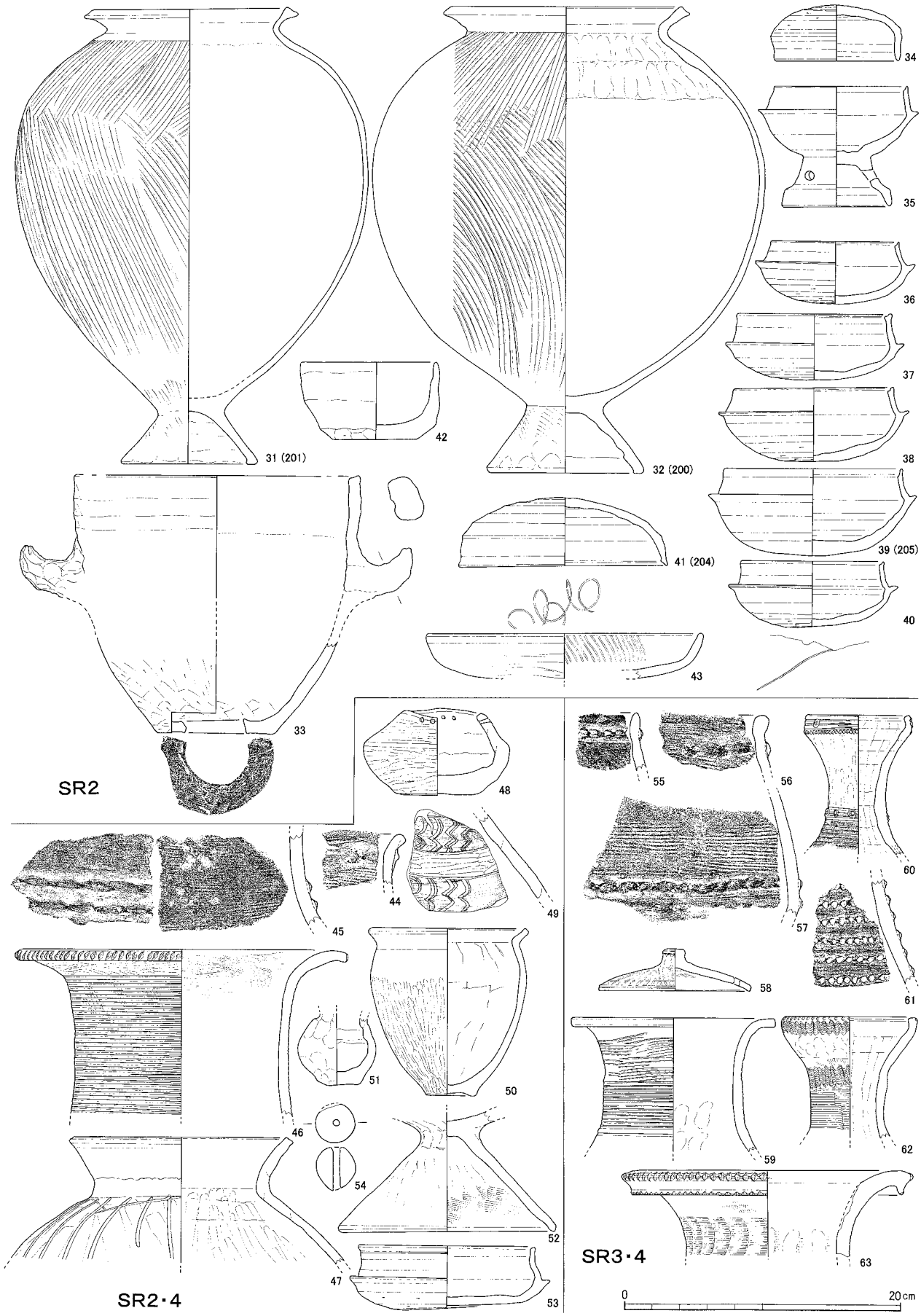
3）　深澤芳樹「土器のかたち―畿内第Ⅰ様式古・中段階について―」『紀要』Ⅰ　(財)東大阪市文化財協会　1985。

4）　田崎博之「壺形土器の伝播と変容」『突帯文と遠賀川』土器持寄論文集刊行会　2000。

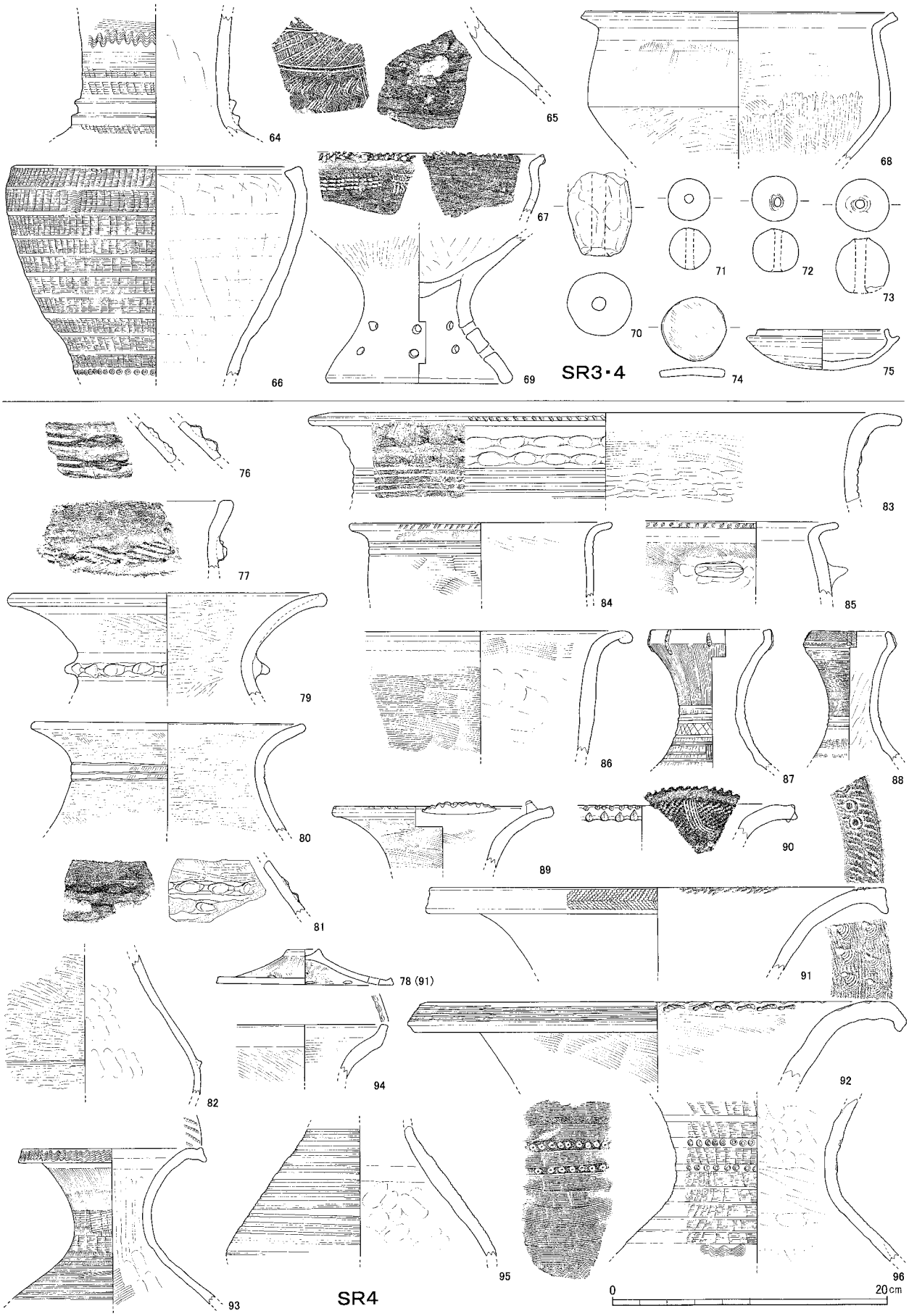
5）　“広域型遠賀川系土器”と“金剛坂式土器”の２系統土器群を総称する。



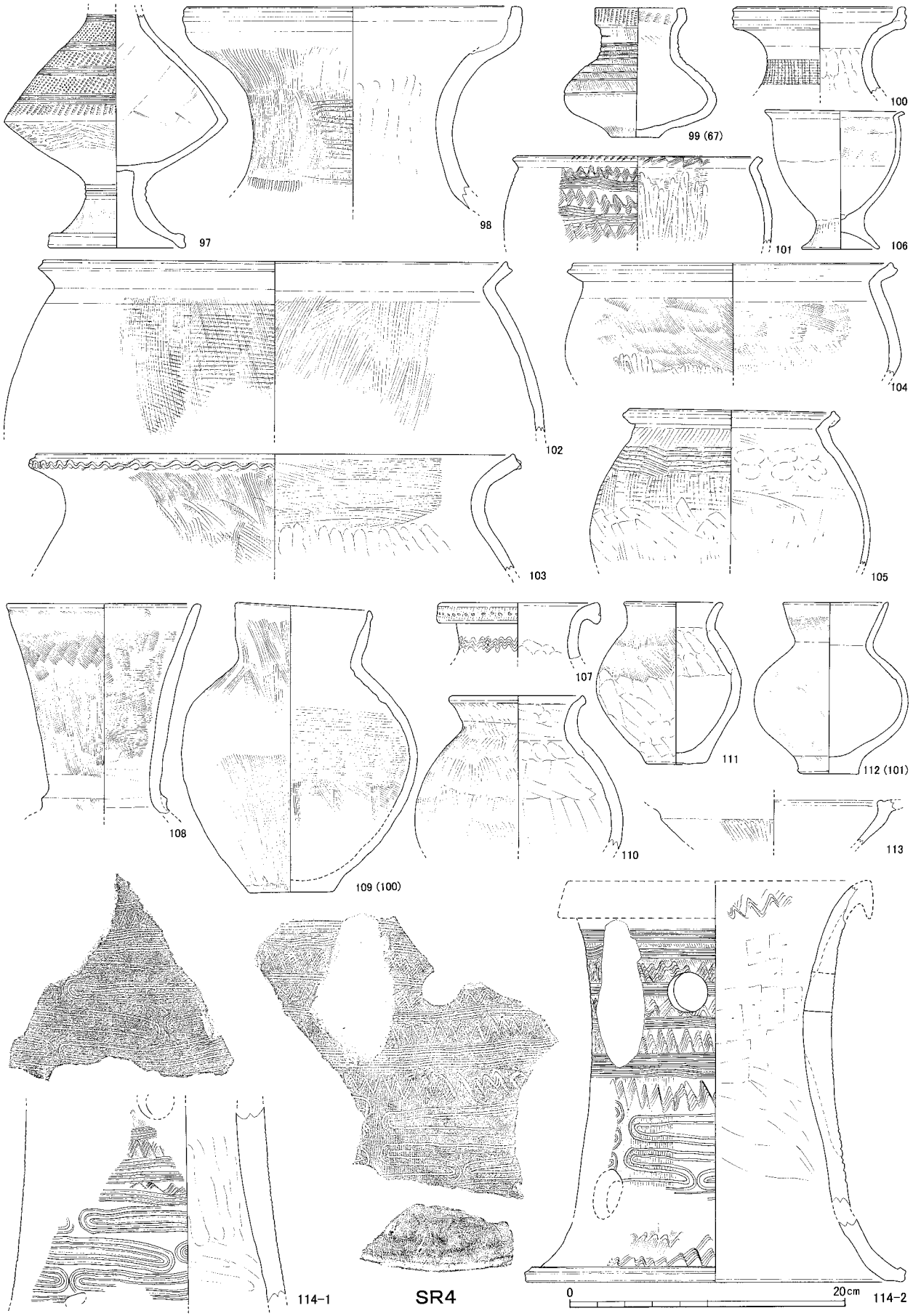
第28図　遺物実測図１（1：4）



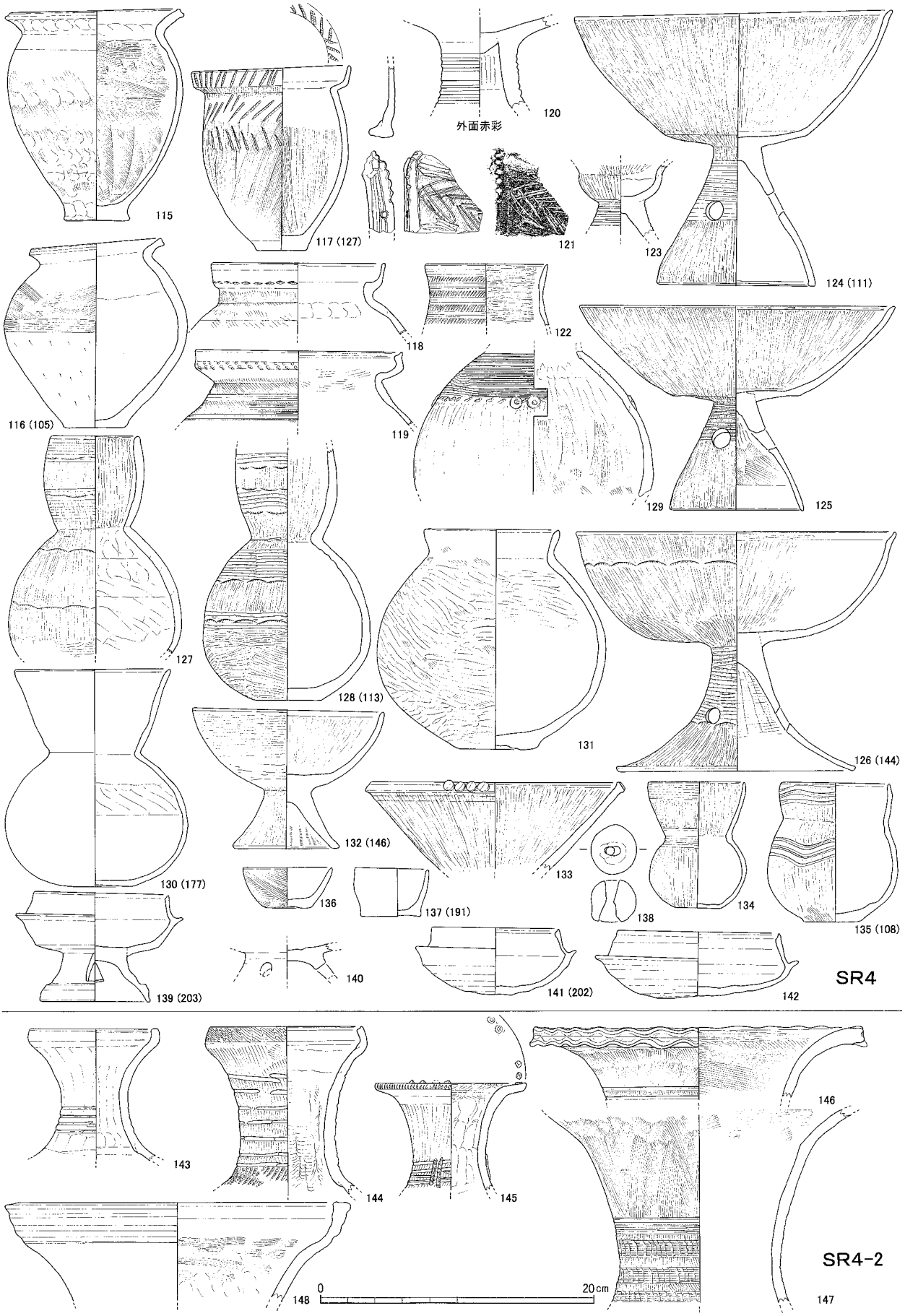
第29図　遺物実測図２（1：4）



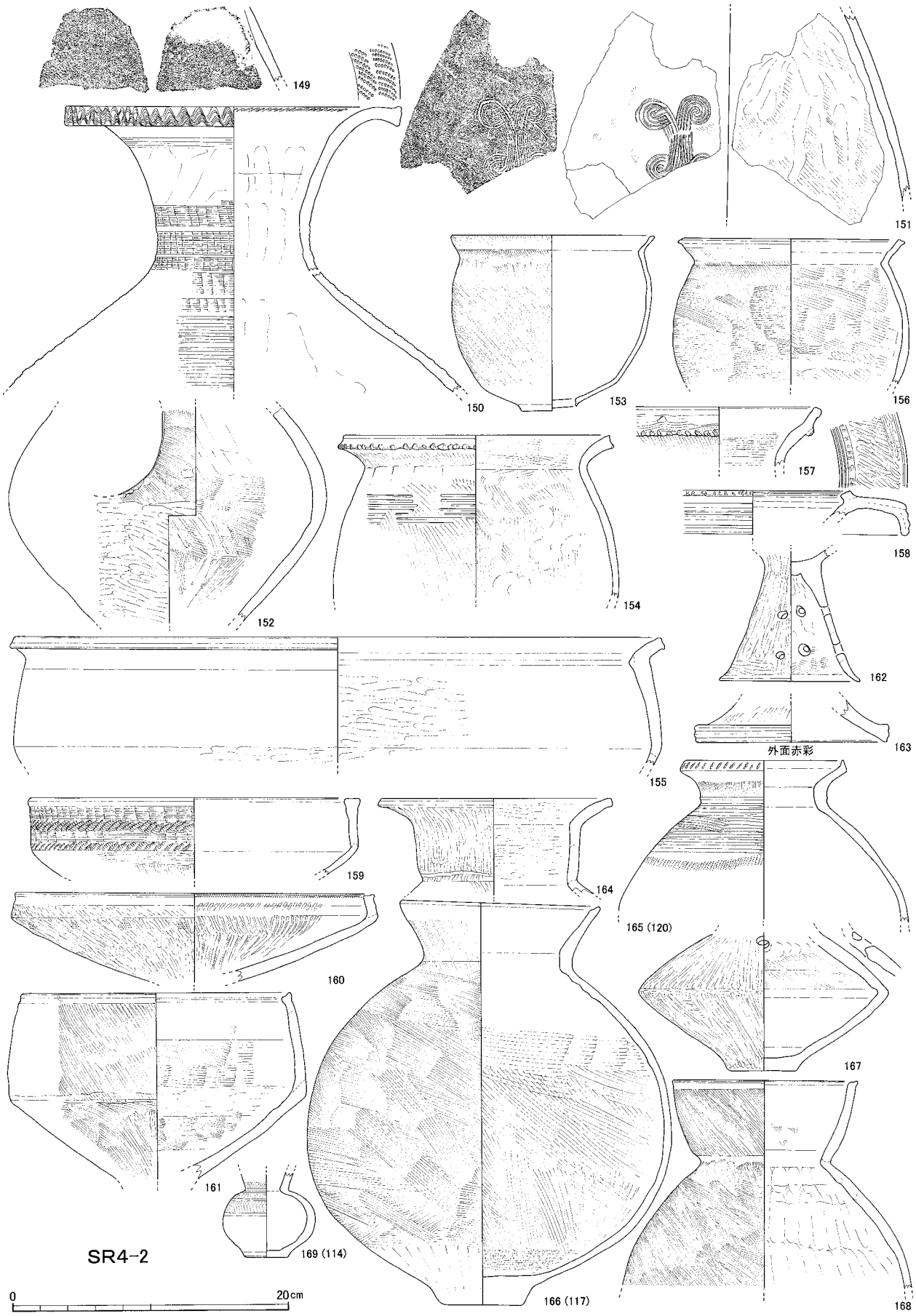
第30図　遺物実測図３（1：4）



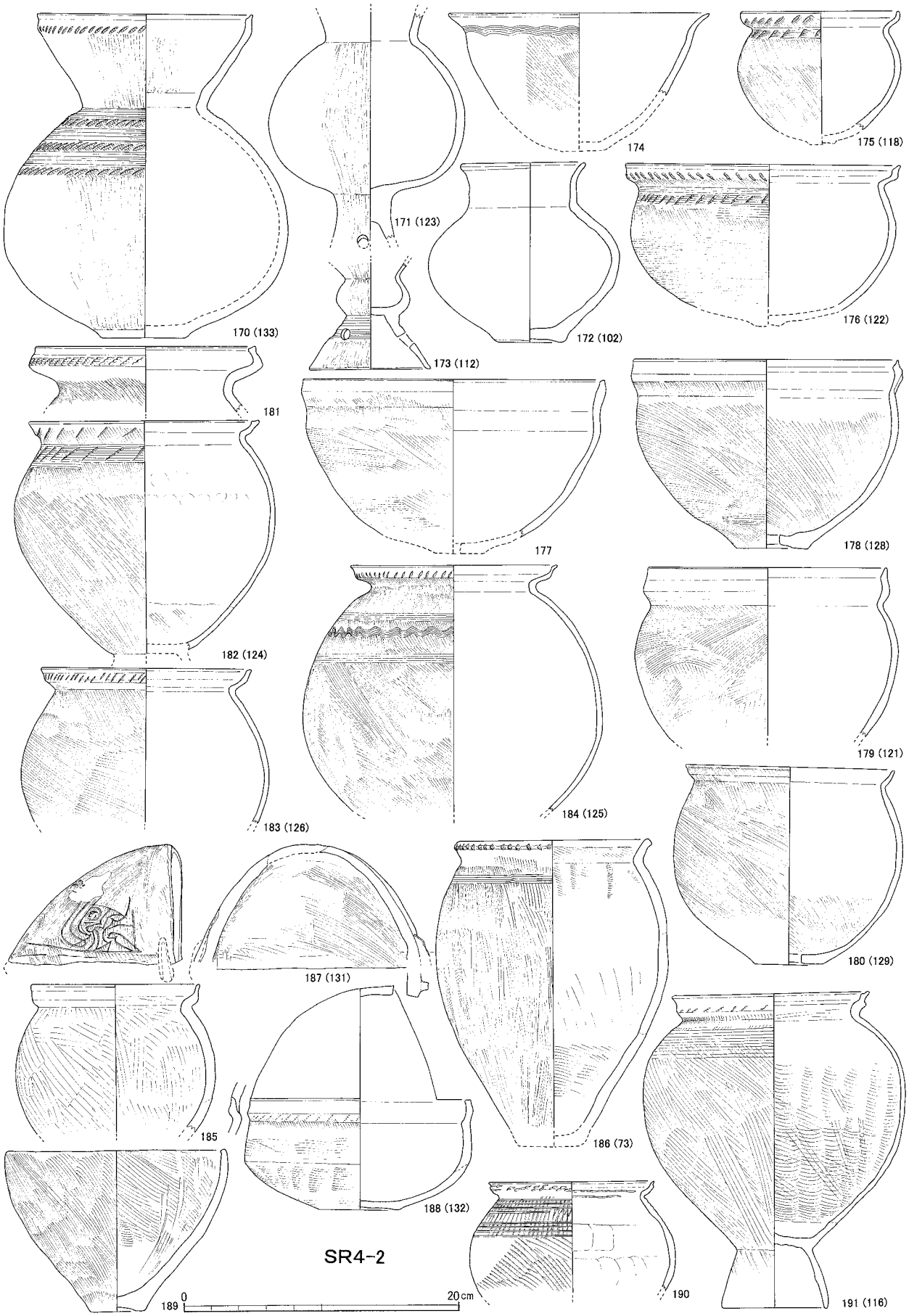
第31図　遺物実測図４（1：4）



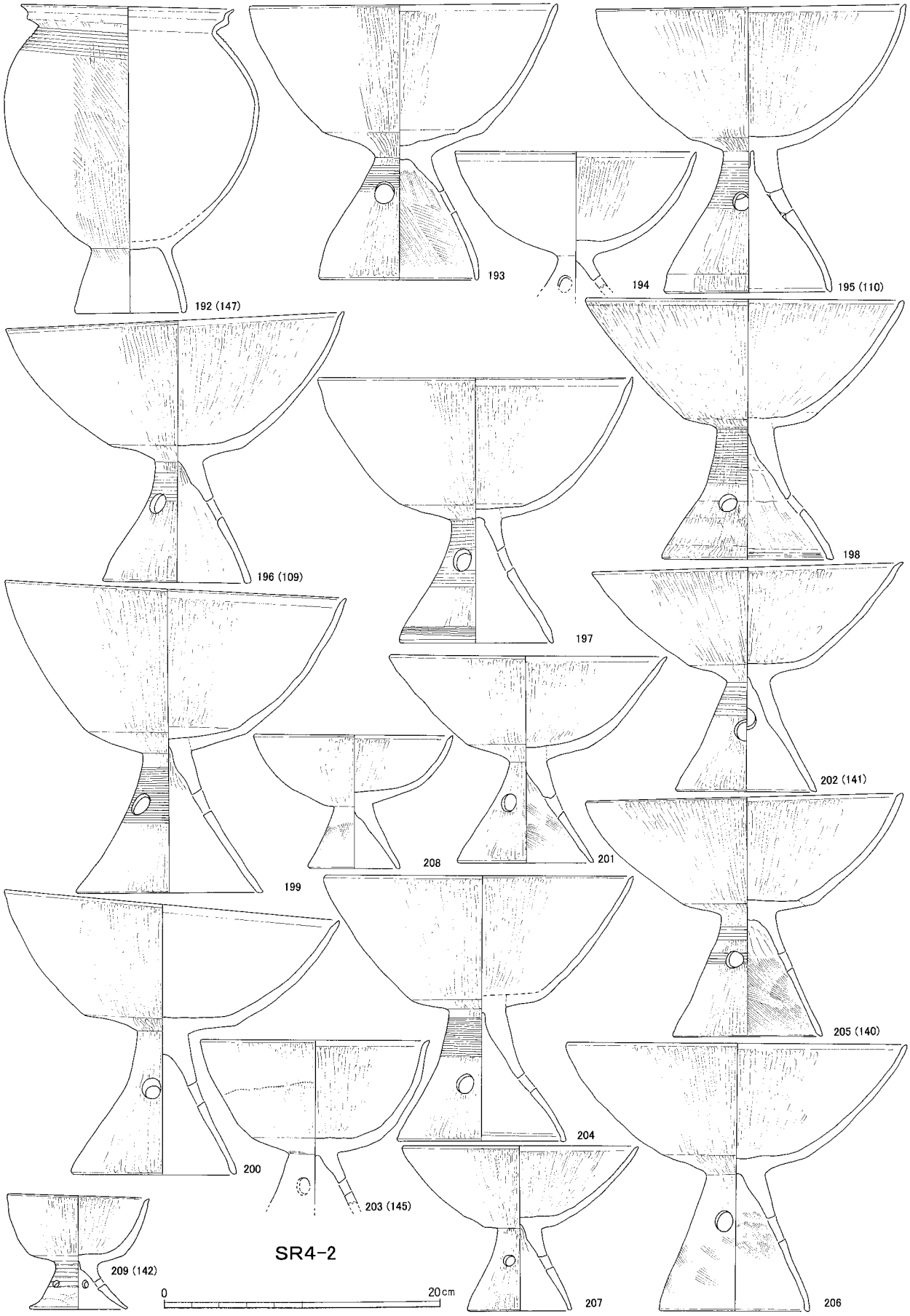
第32図　遺物実測図５（1：4）



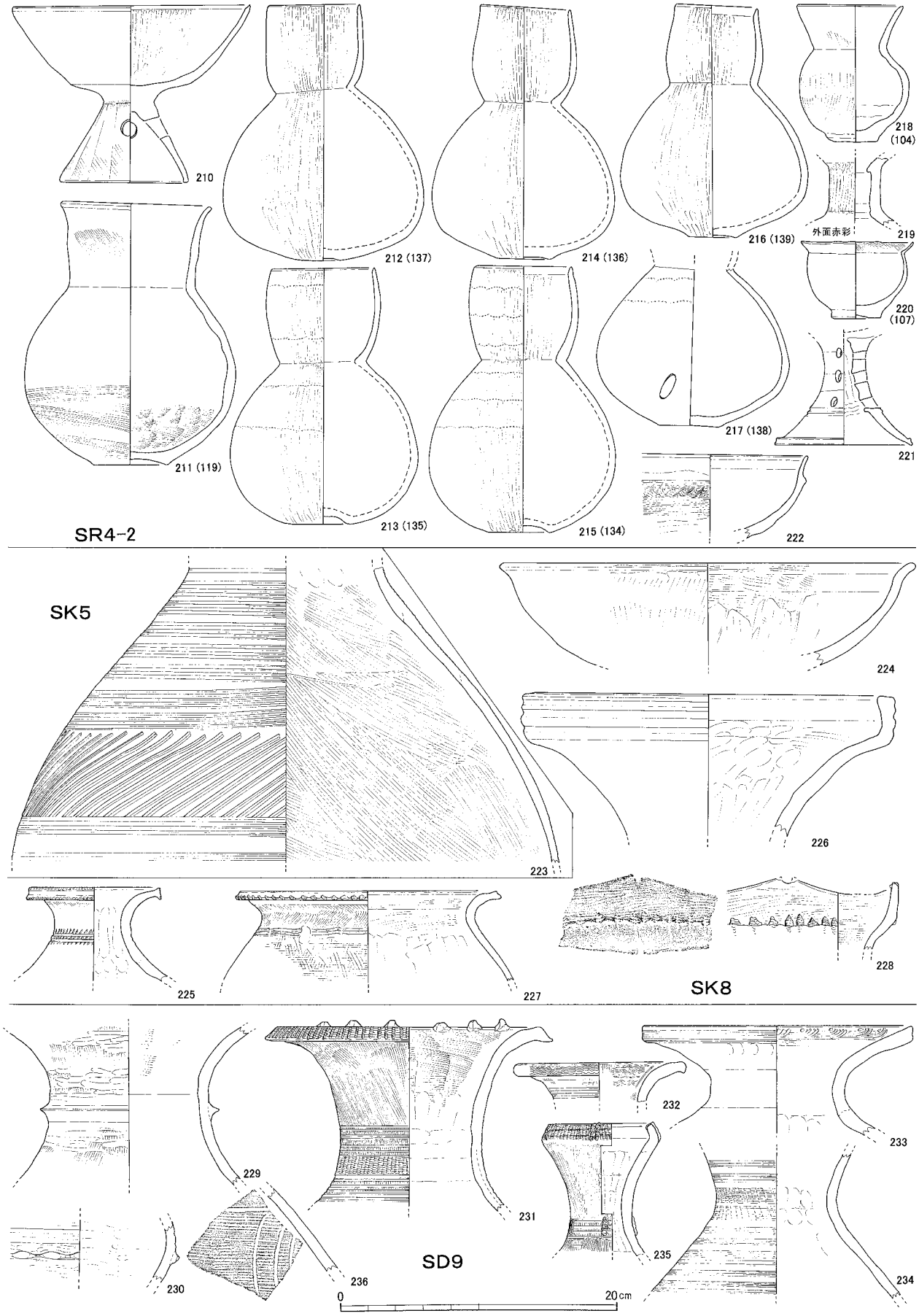
第33図　遺物実測図６（1：4）



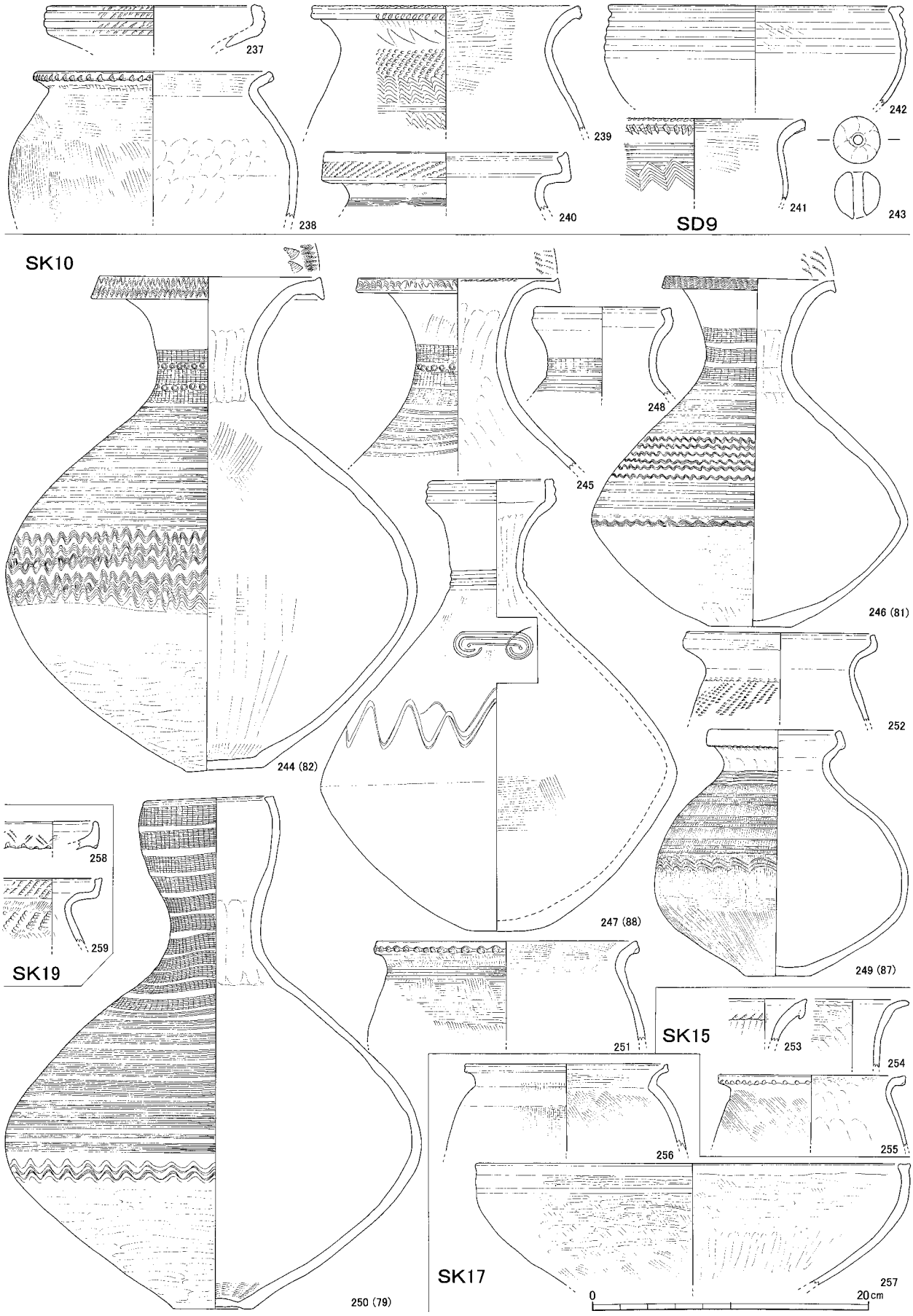
第34図　遺物実測図７（1：4）



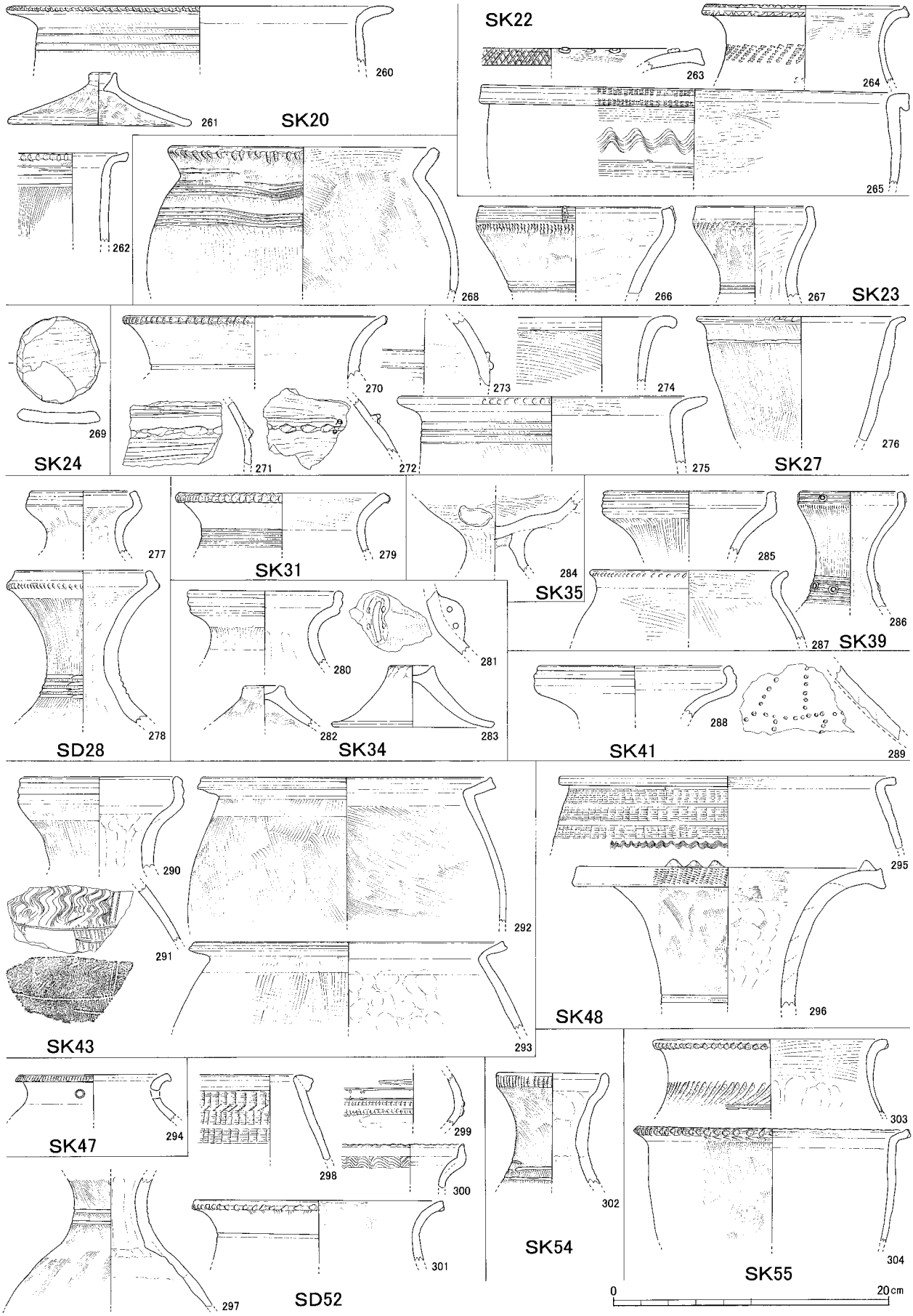
第35図　遺物実測図８（1：4）



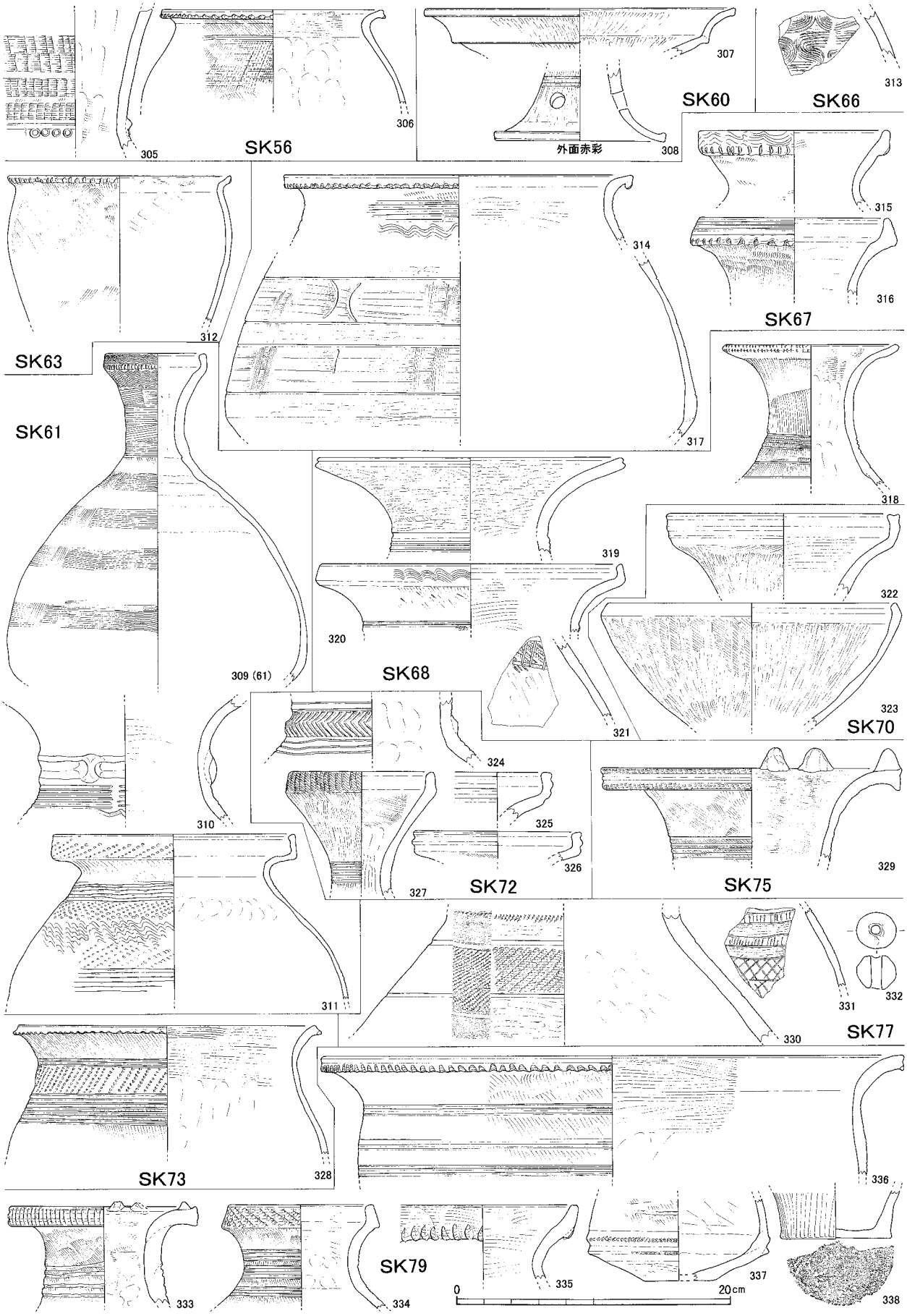
第36図　遺物実測図９（1：4）



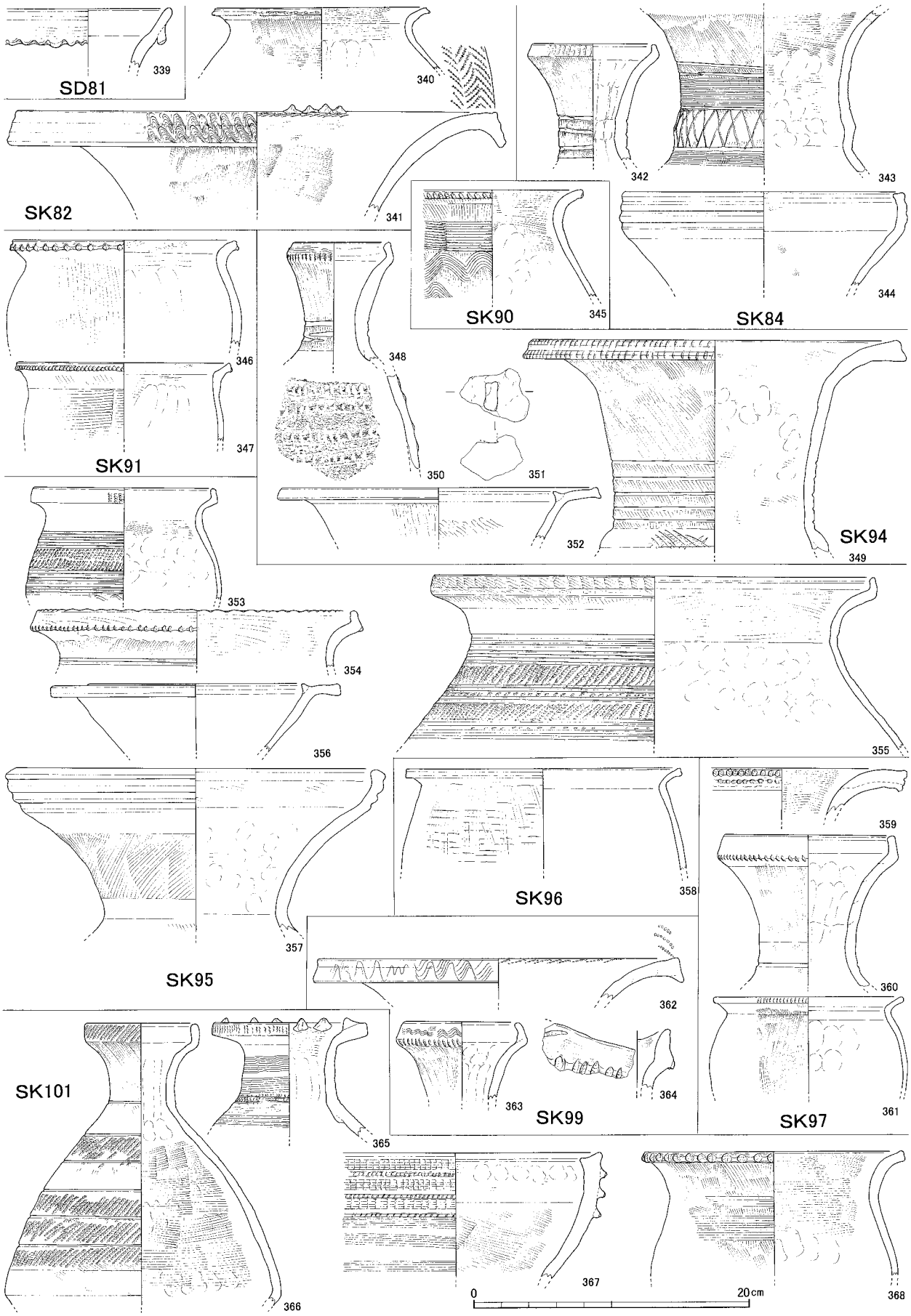
第37図　遺物実測図10（1：4）



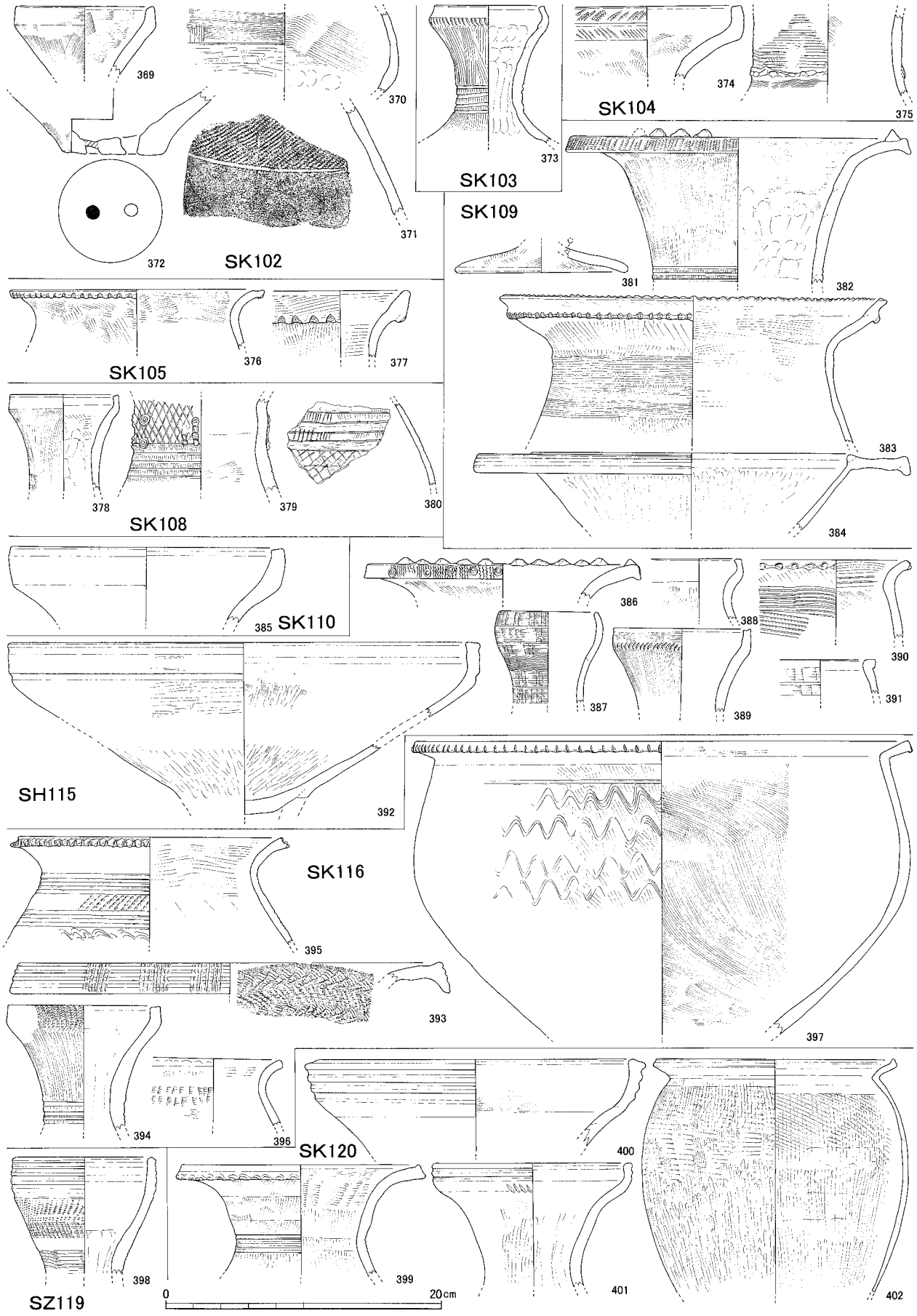
第38図　遺物実測図11（1：4）



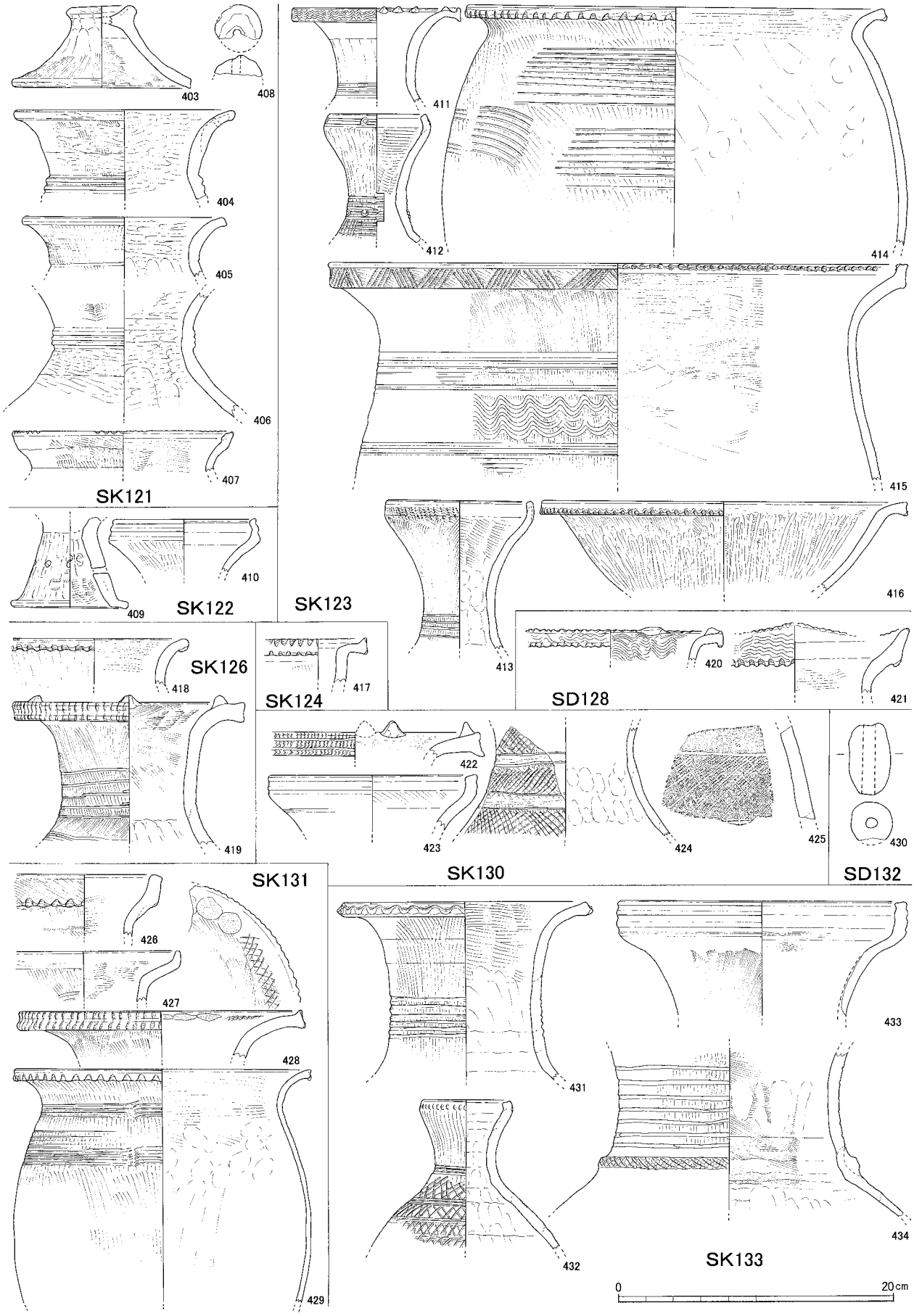
第39図　遺物実測図12（1：4）



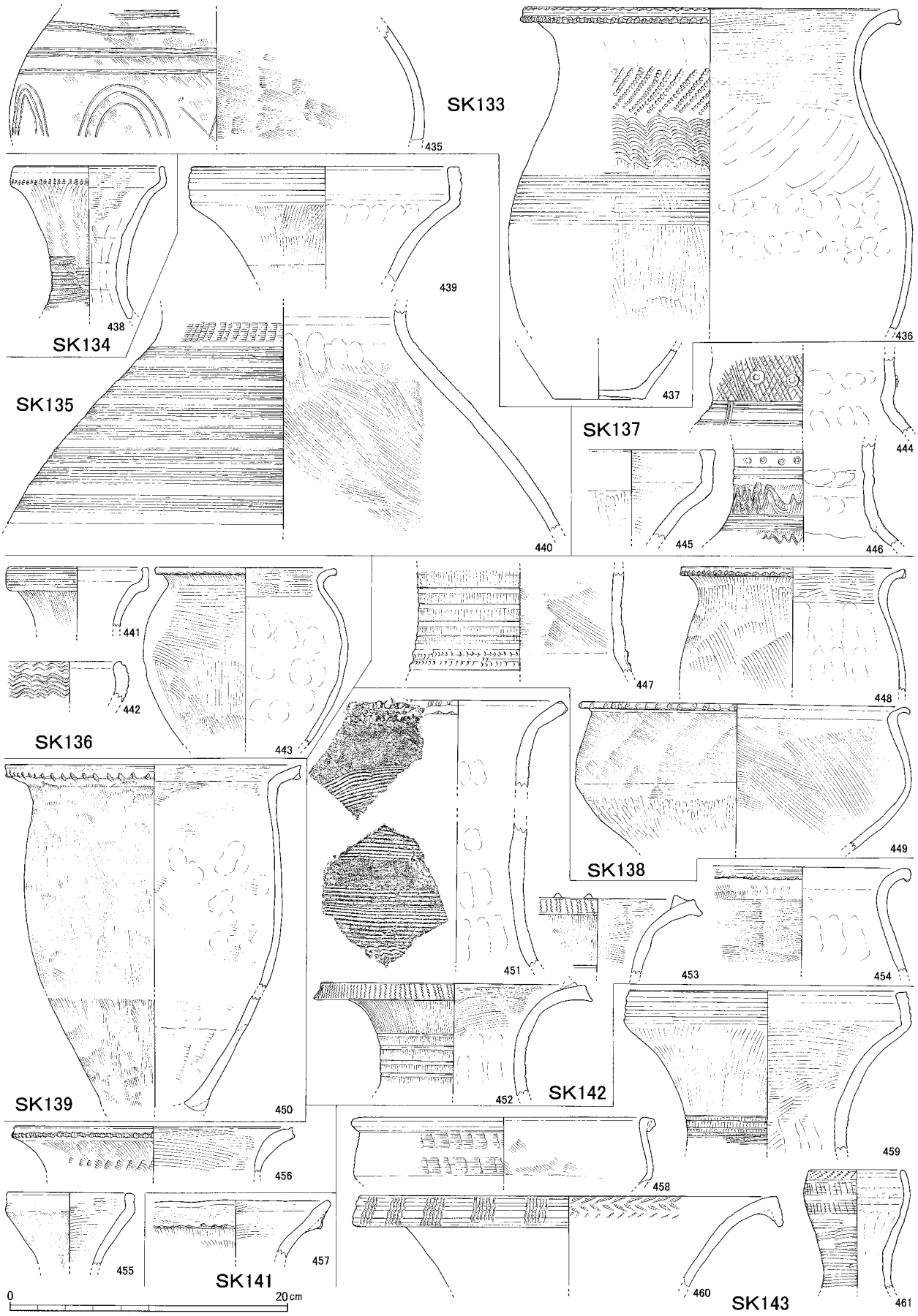
第40図　遺物実測図13（1：4）



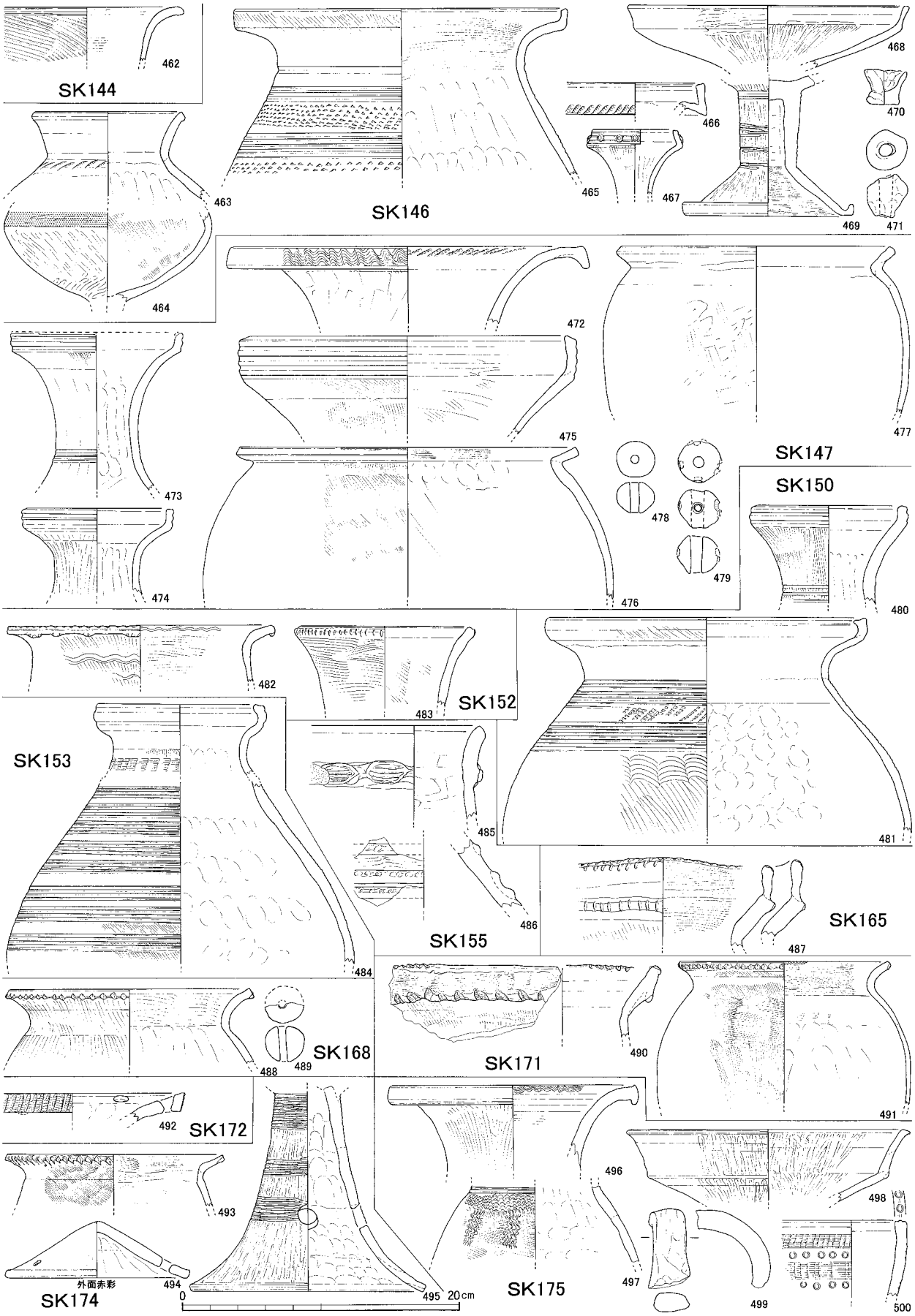
第41図　遺物実測図14（1：4）



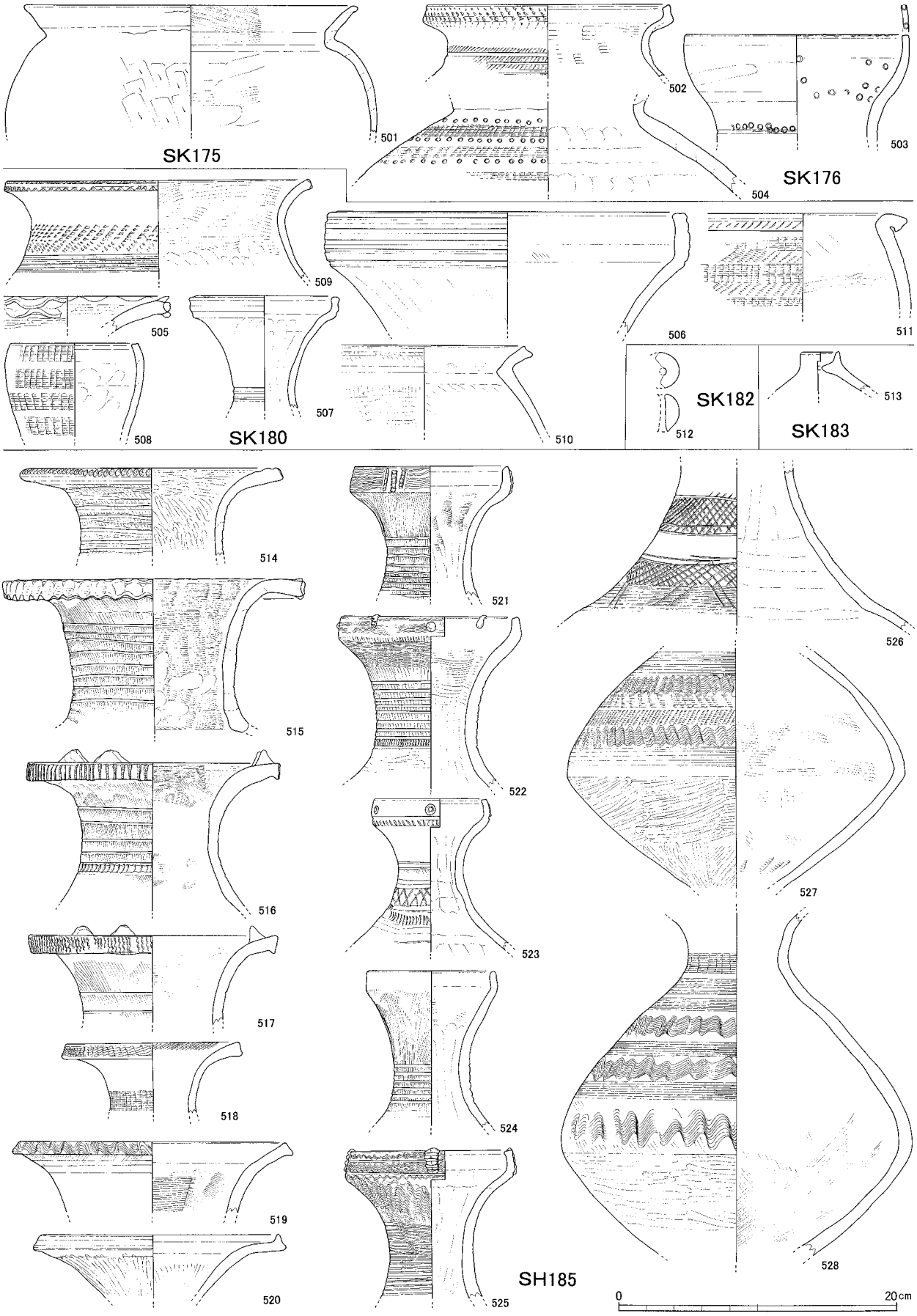
第42図　遺物実測図15（1：4）



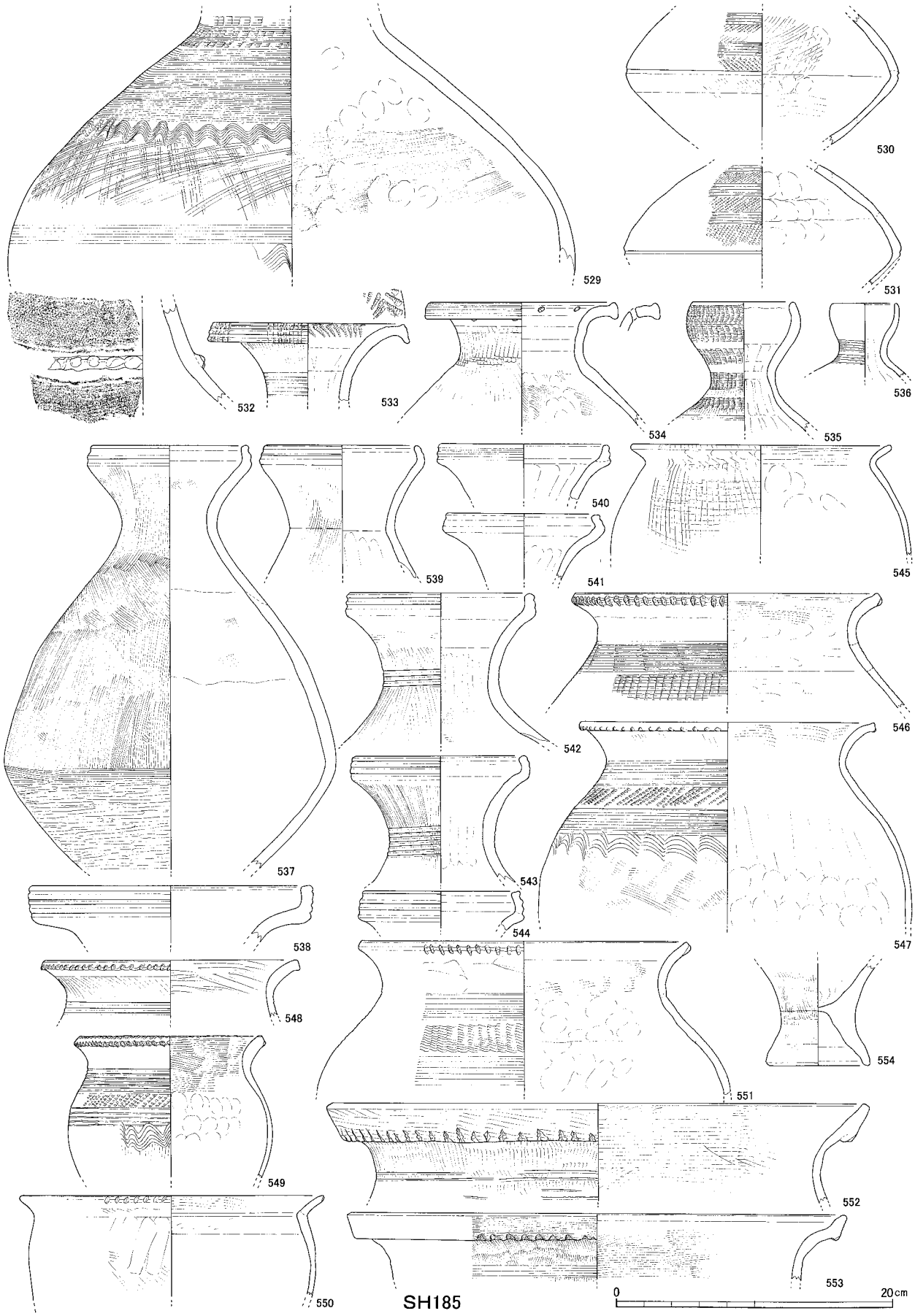
第43図　遺物実測図16（1：4）



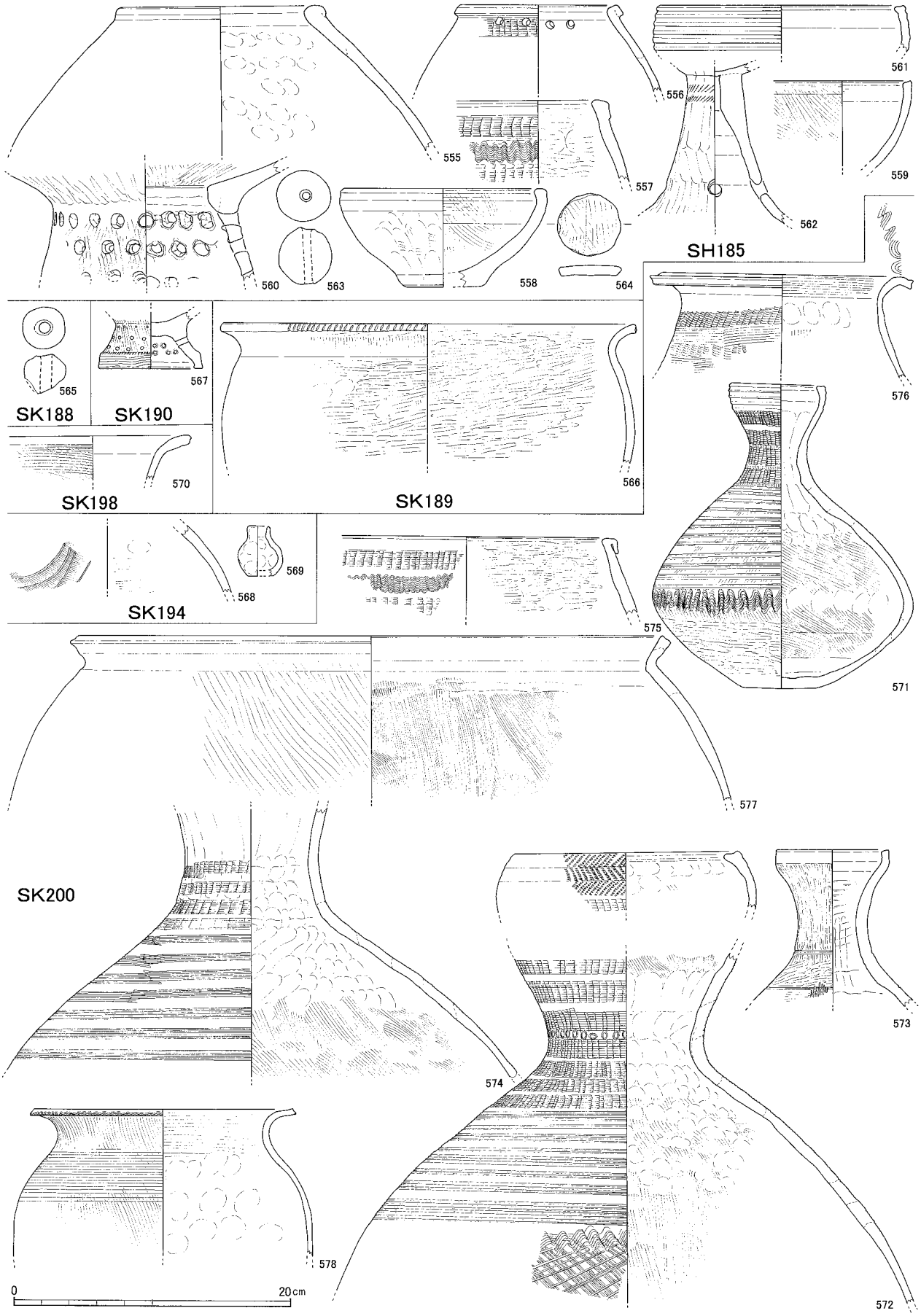
第44図　遺物実測図17（1：4）



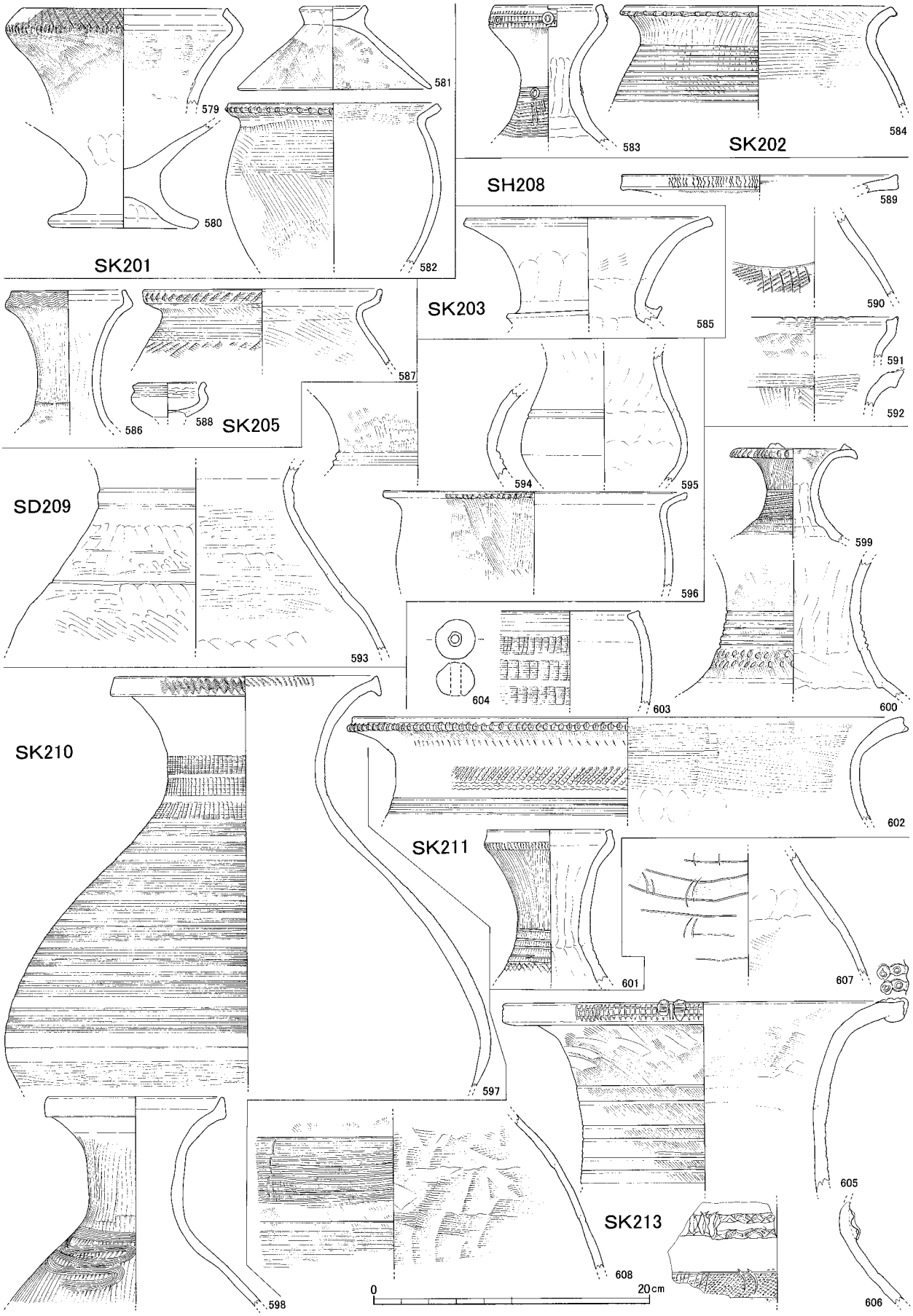
第45図　遺物実測図18（1：4）



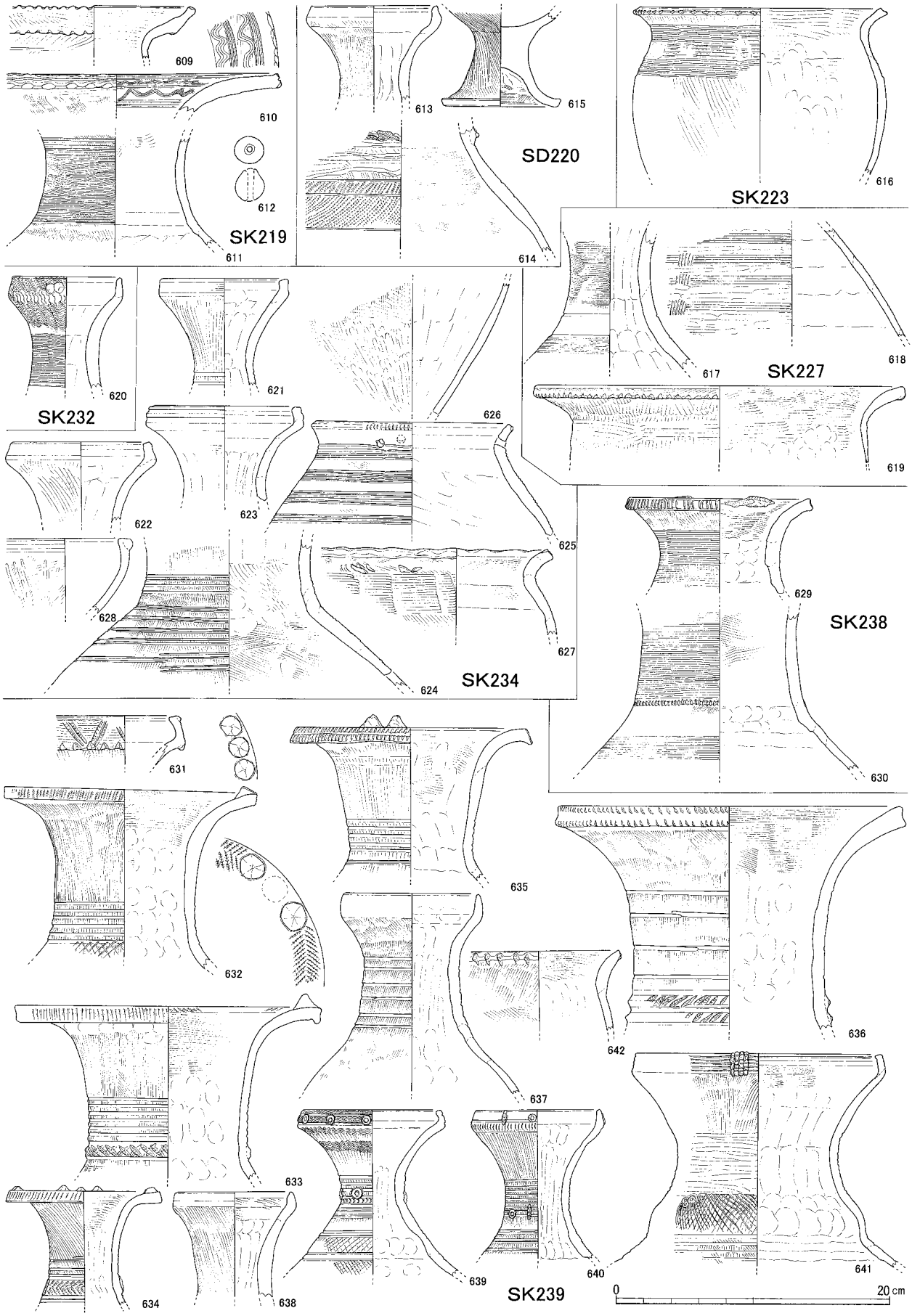
第46図　遺物実測図19（1：4）



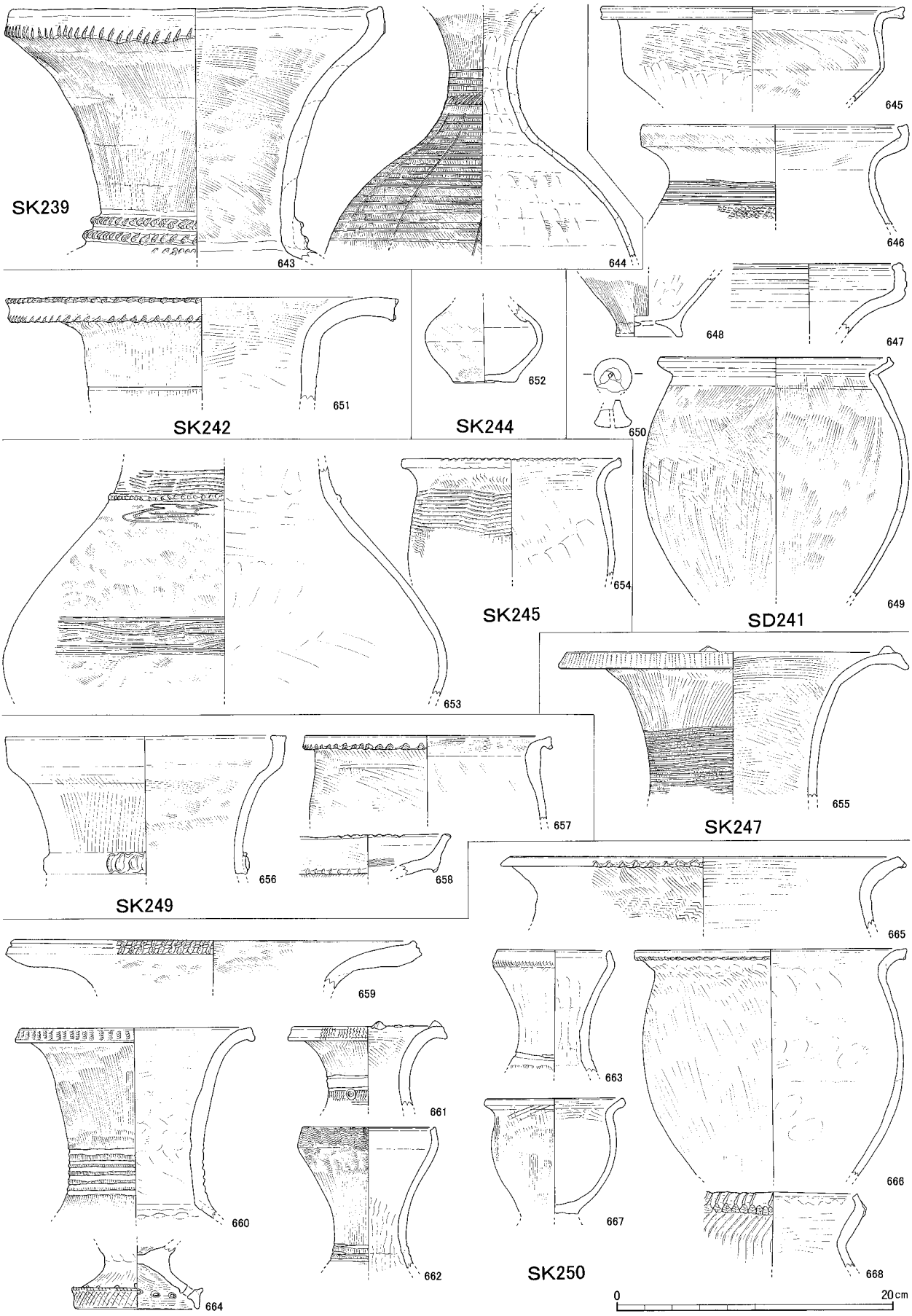
第47図　遺物実測図20（1：4）



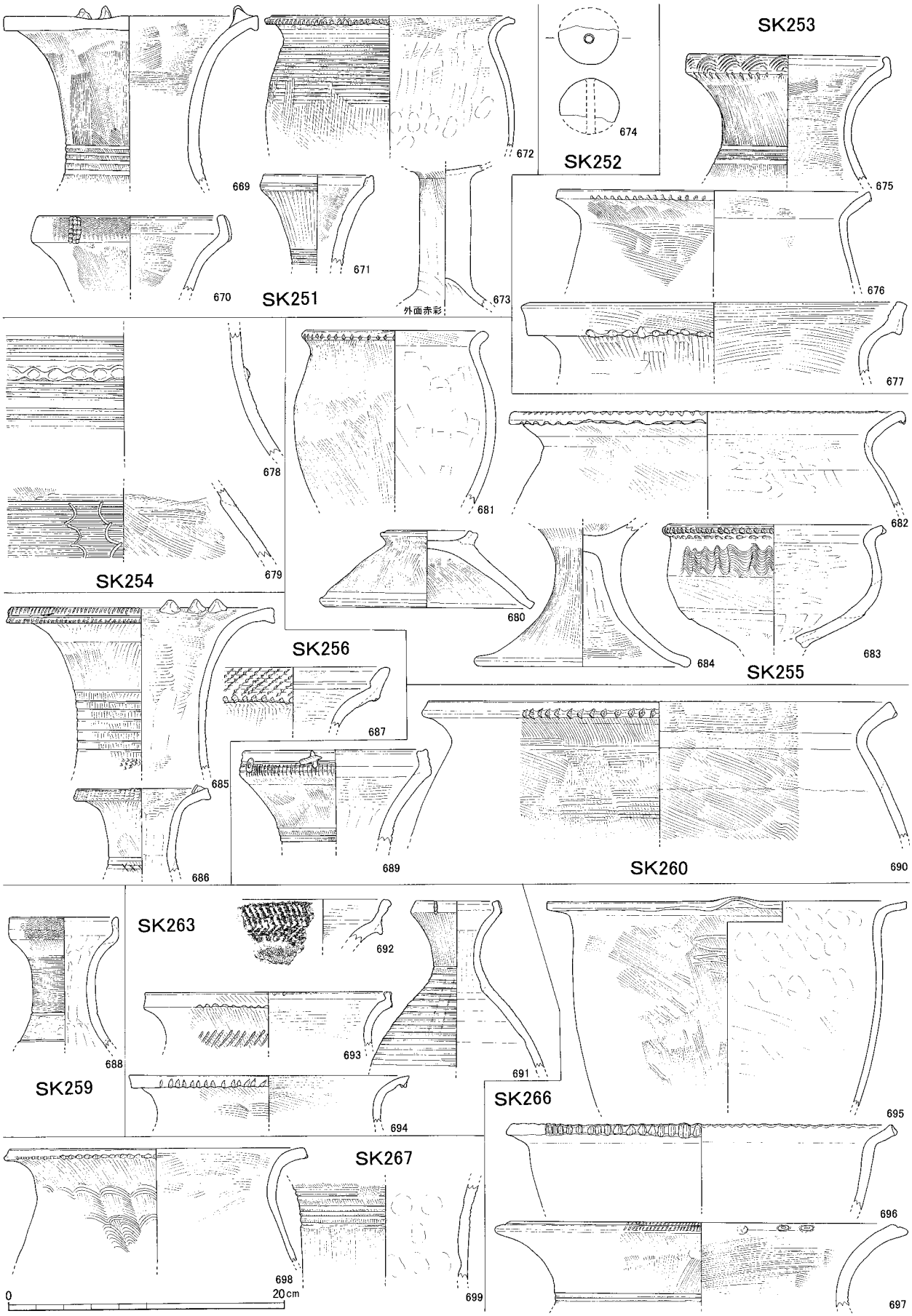
第48図　遺物実測図21（1：4）



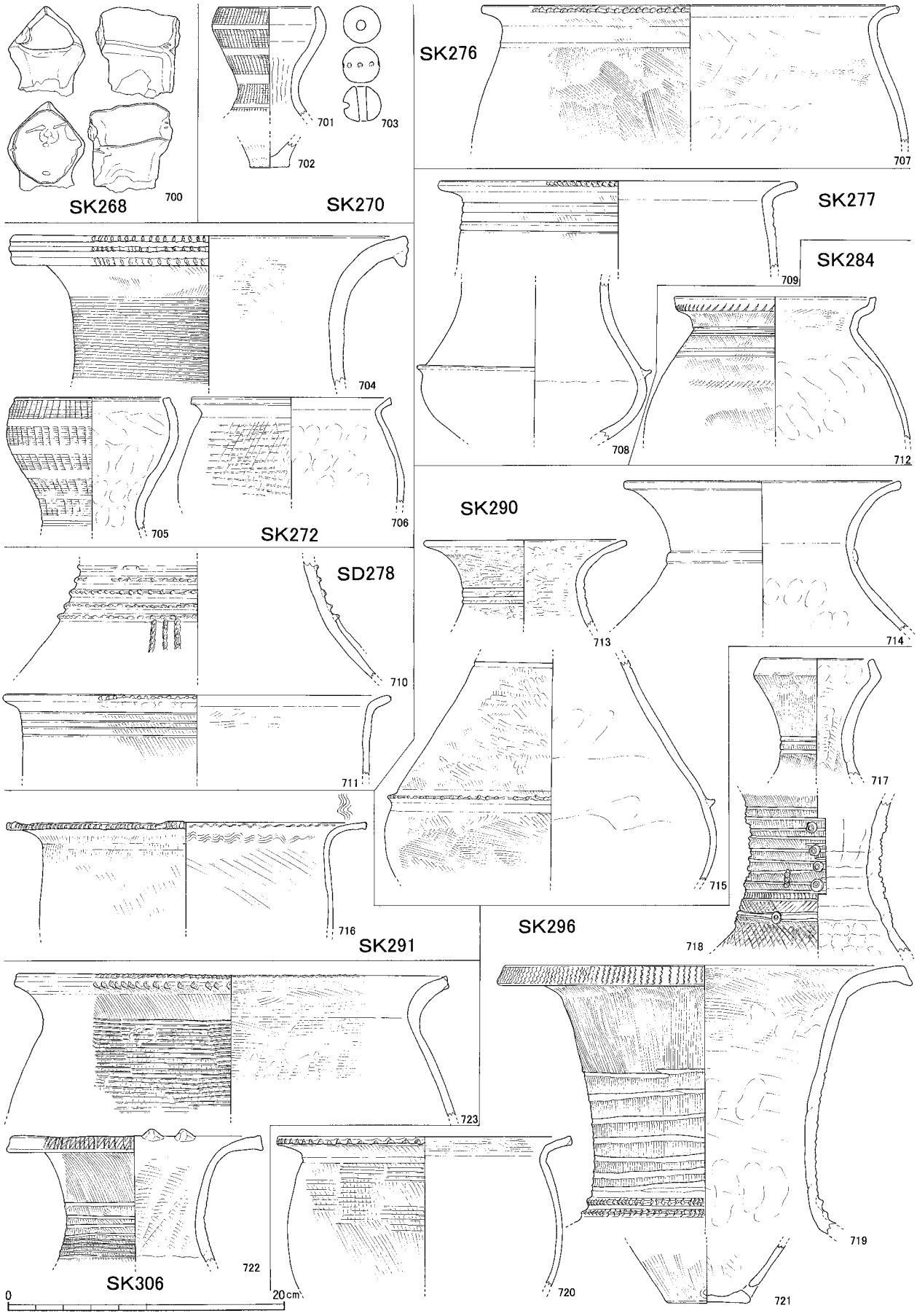
第49図　遺物実測図22（1：4）



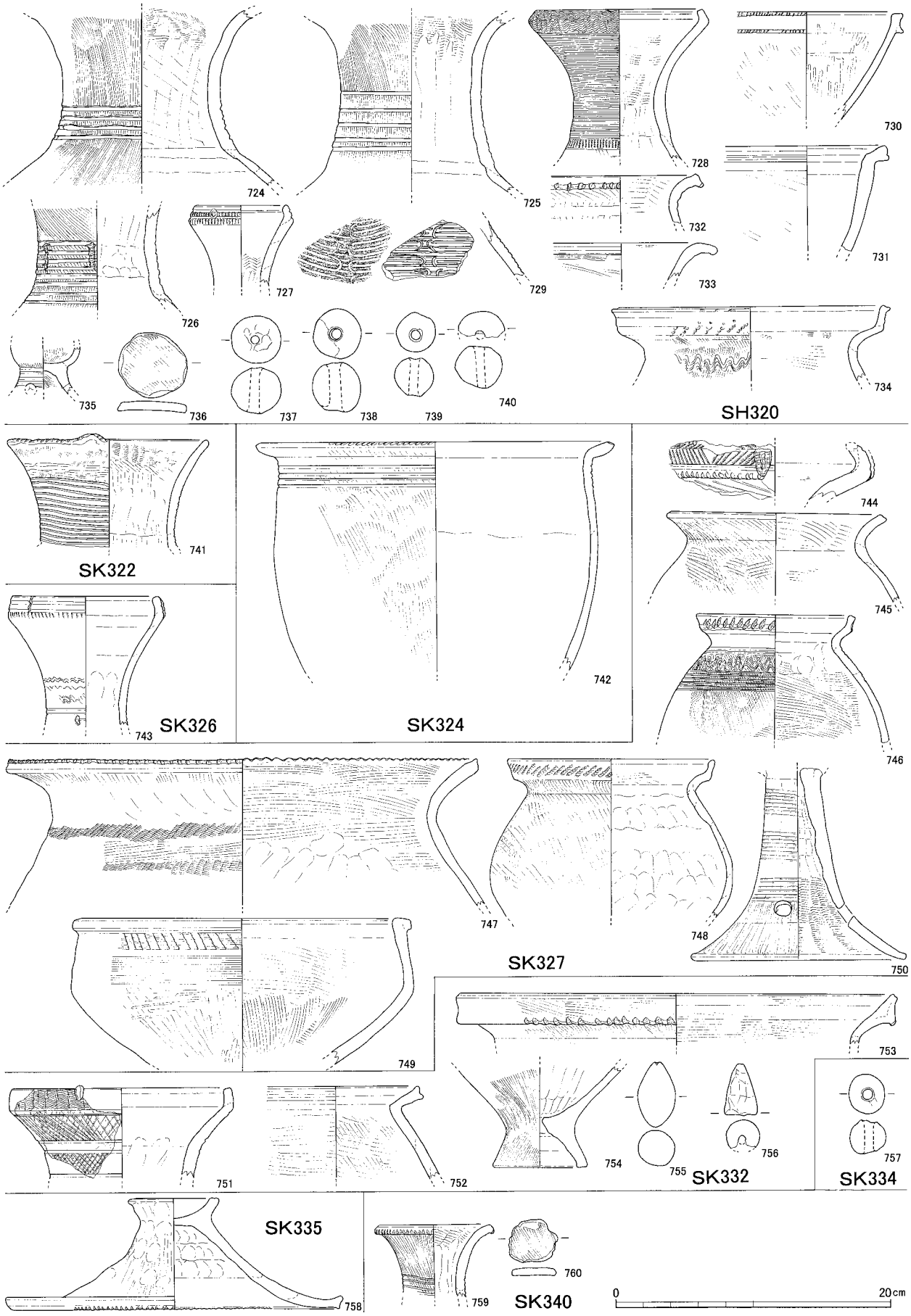
第50図　遺物実測図23（1：4）



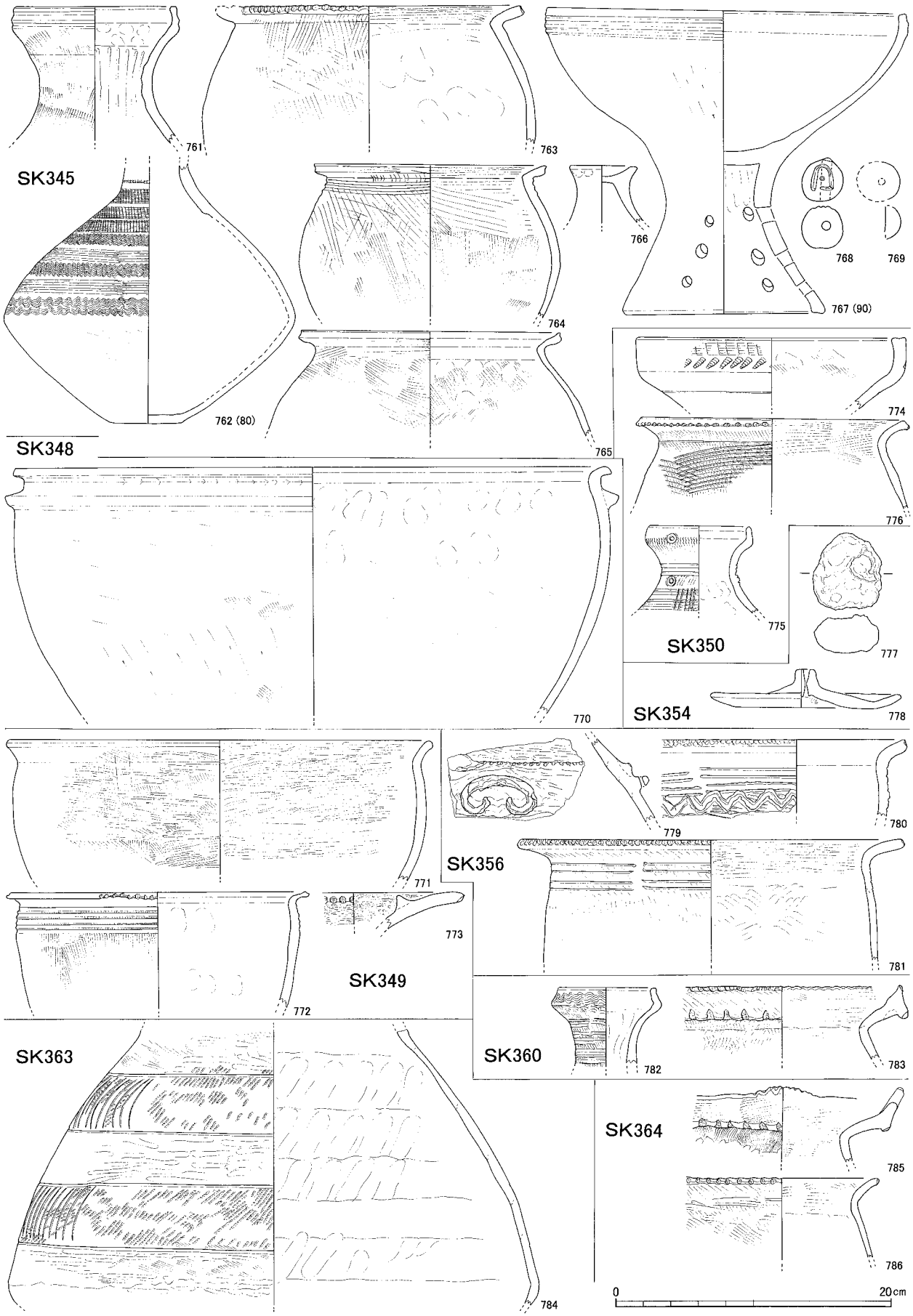
第51図　遺物実測図24（1：4）



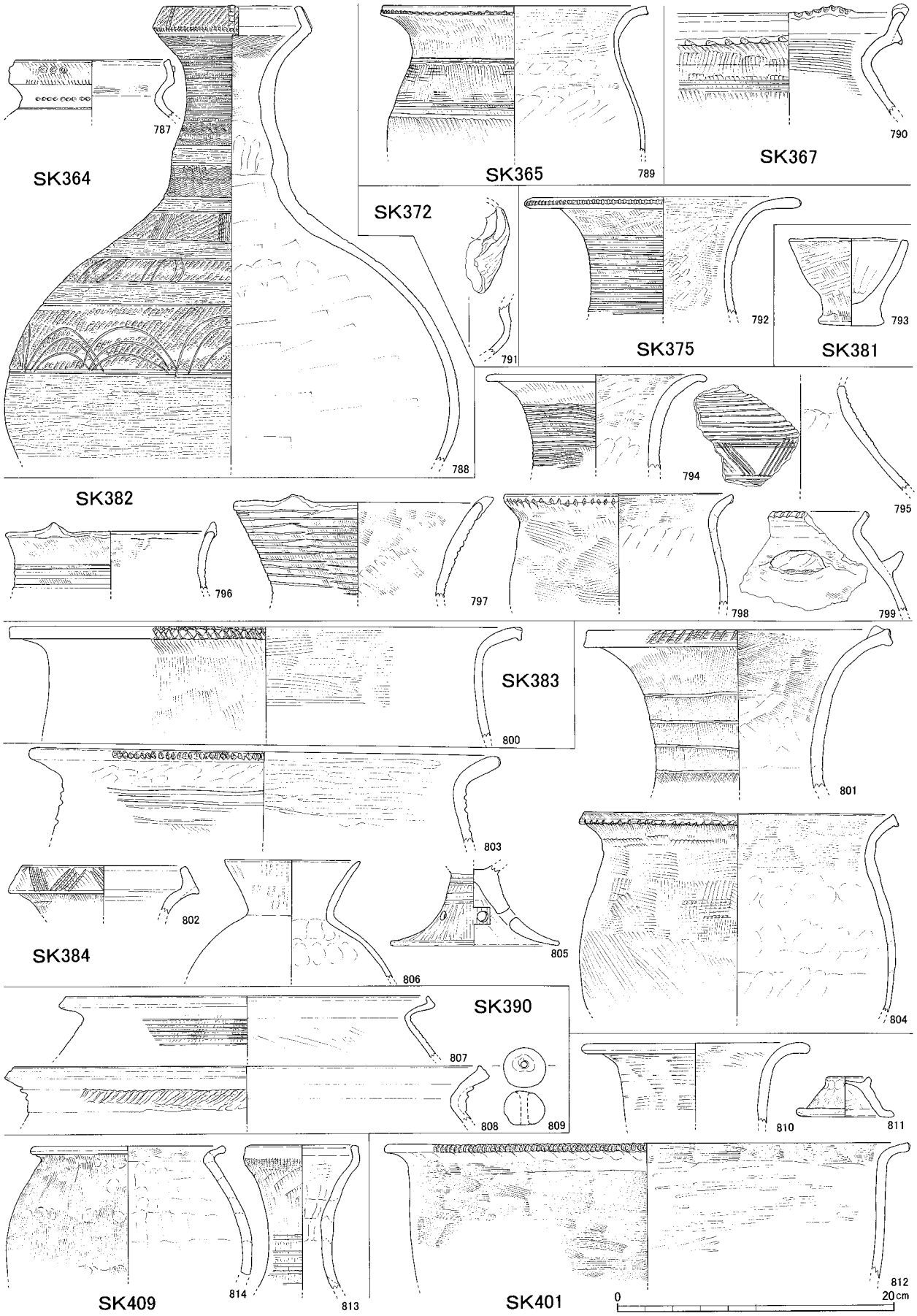
第52図　遺物実測図25（1：4）



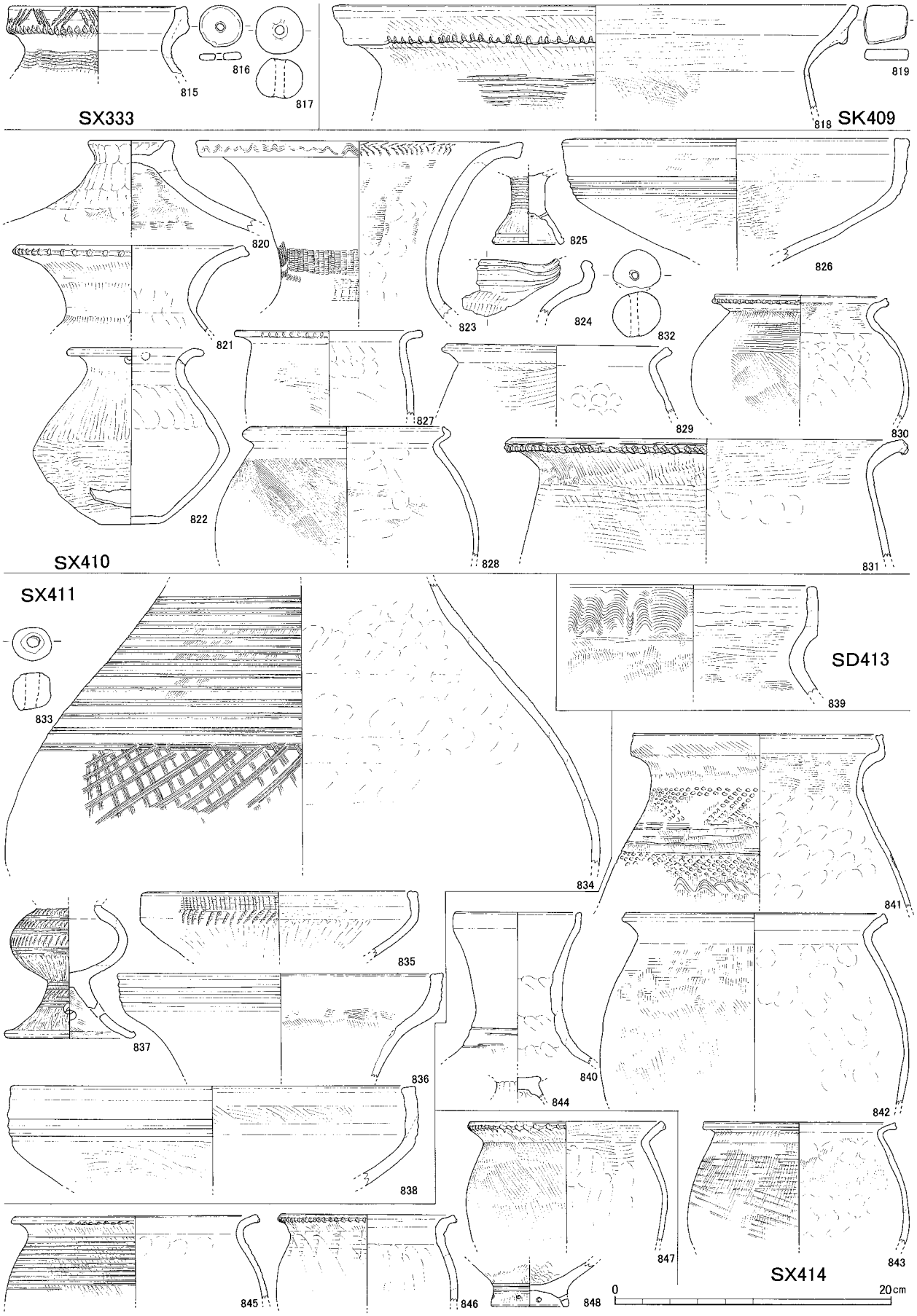
第53図　遺物実測図26（1：4）



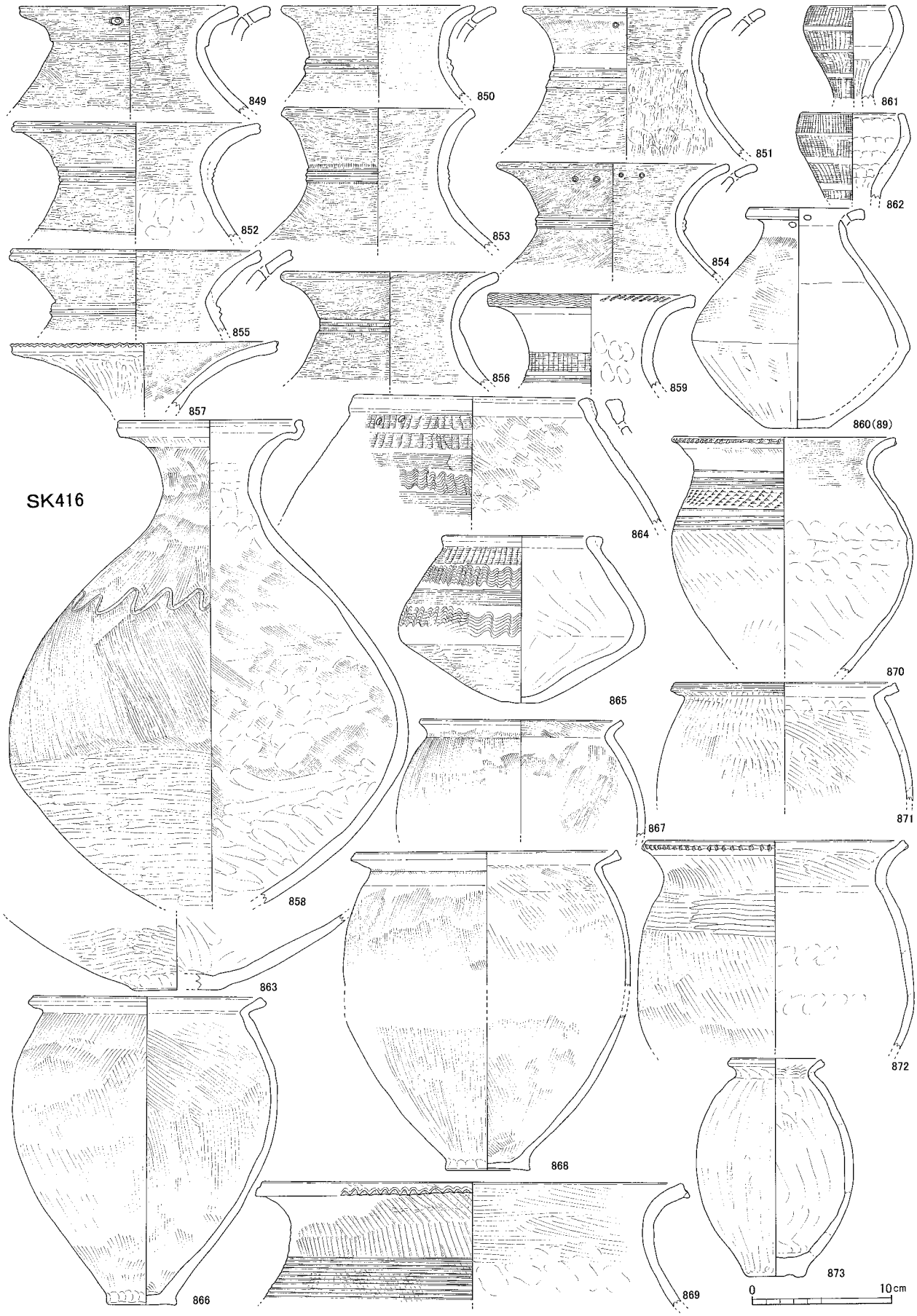
第54図　遺物実測図27（1：4）



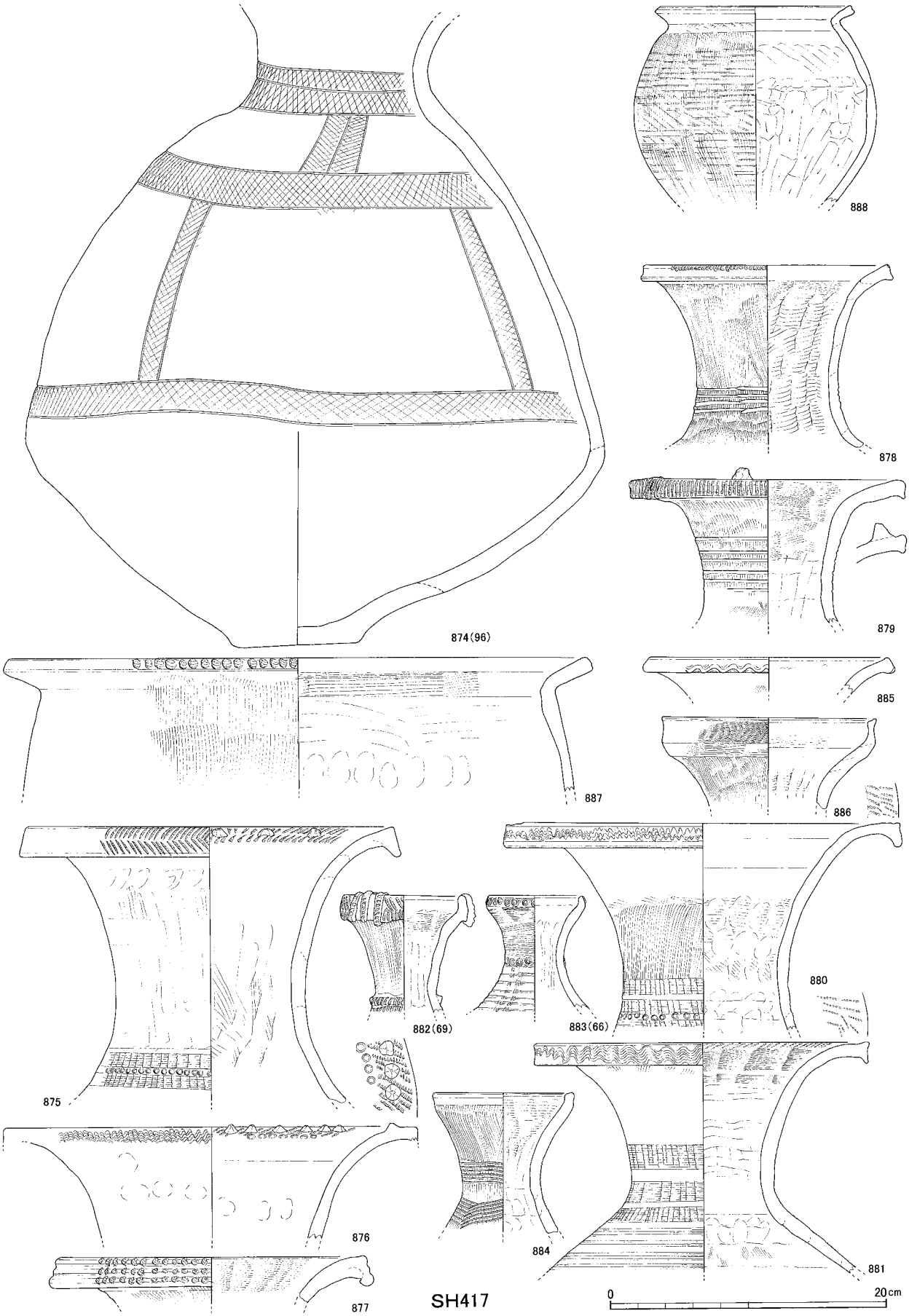
第55図　遺物実測図28（1：4）



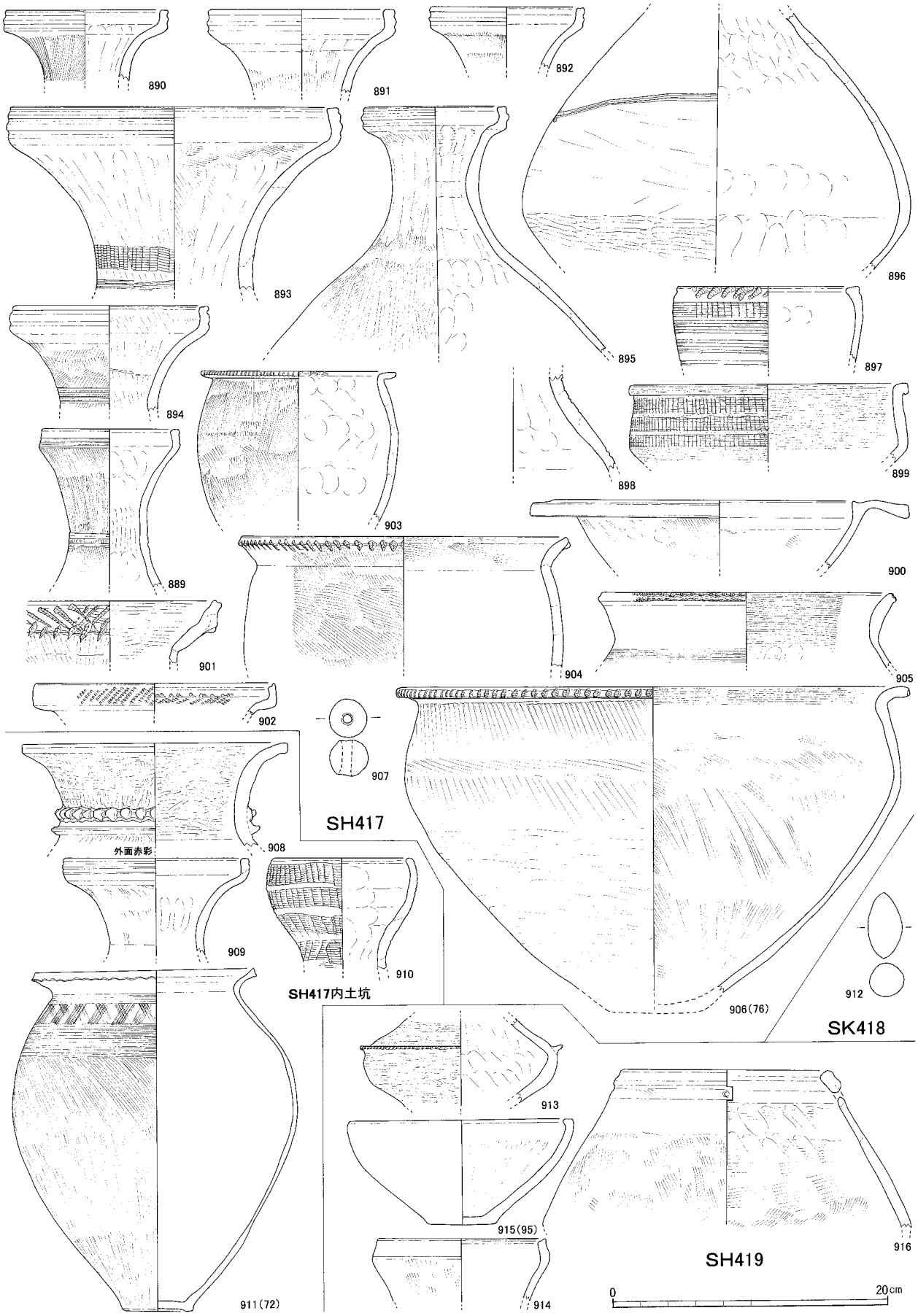
第56図　遺物実測図29（1：4）



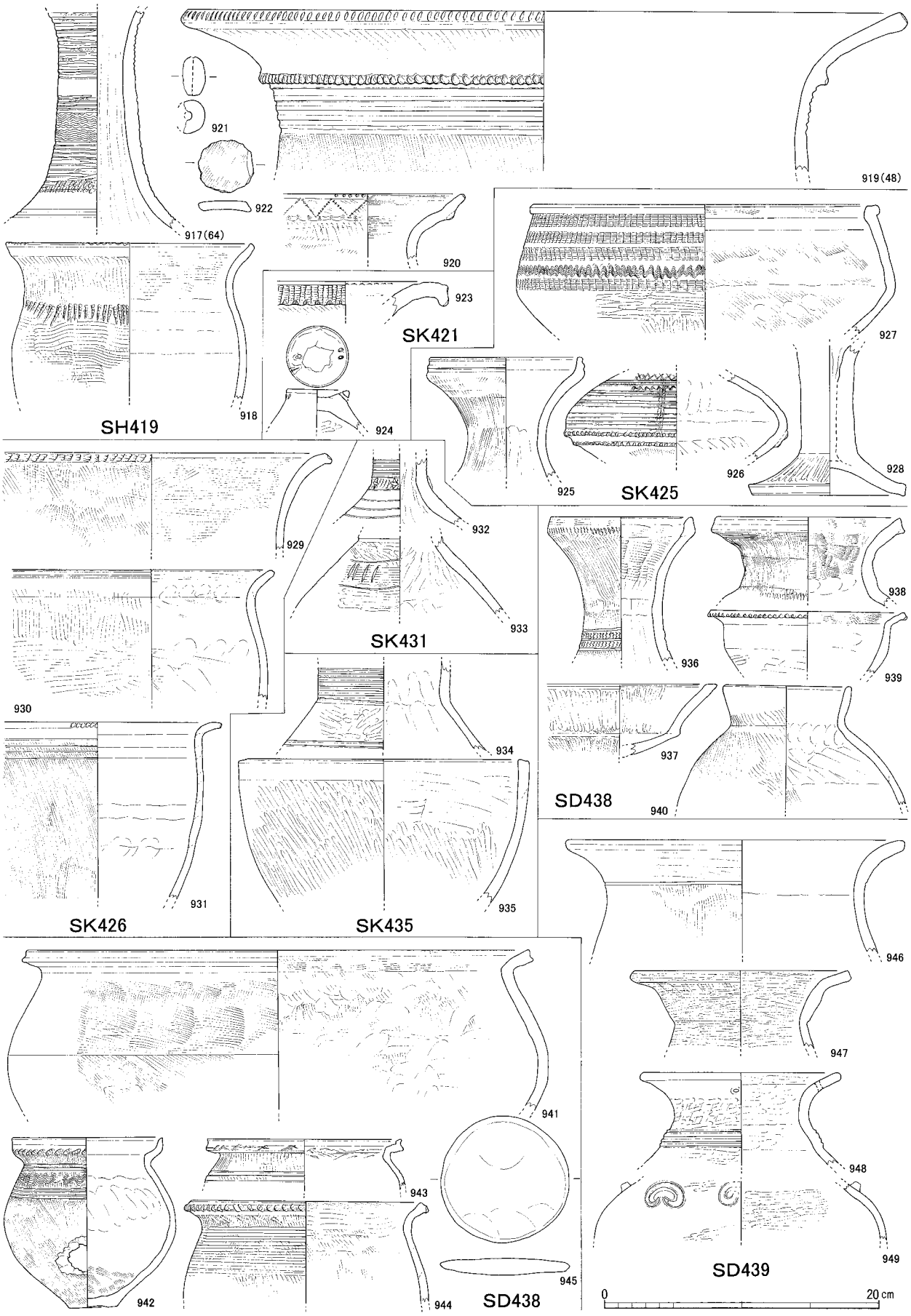
第57図　遺物実測図30（1：4）



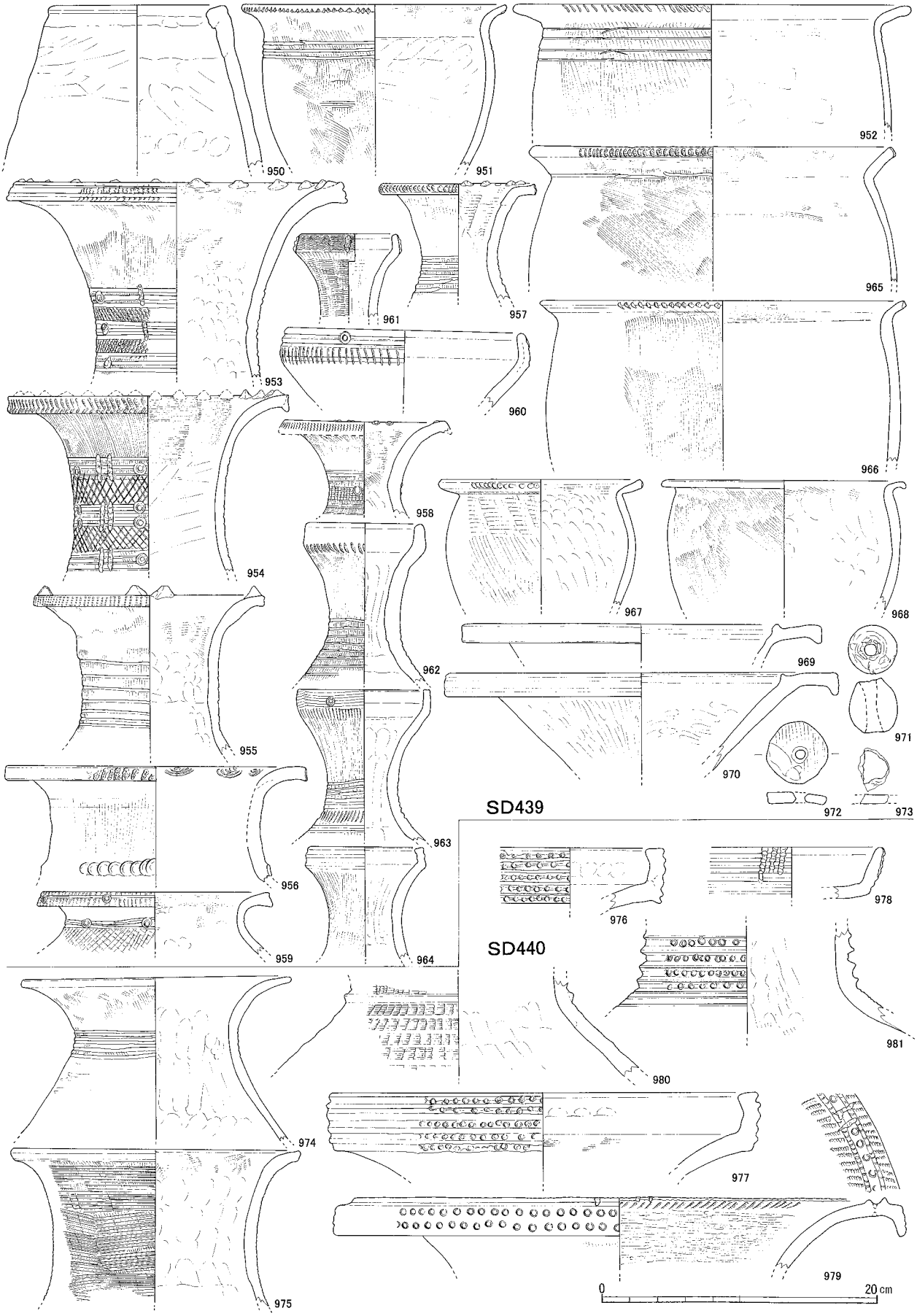
第58図　遺物実測図31（1：4）



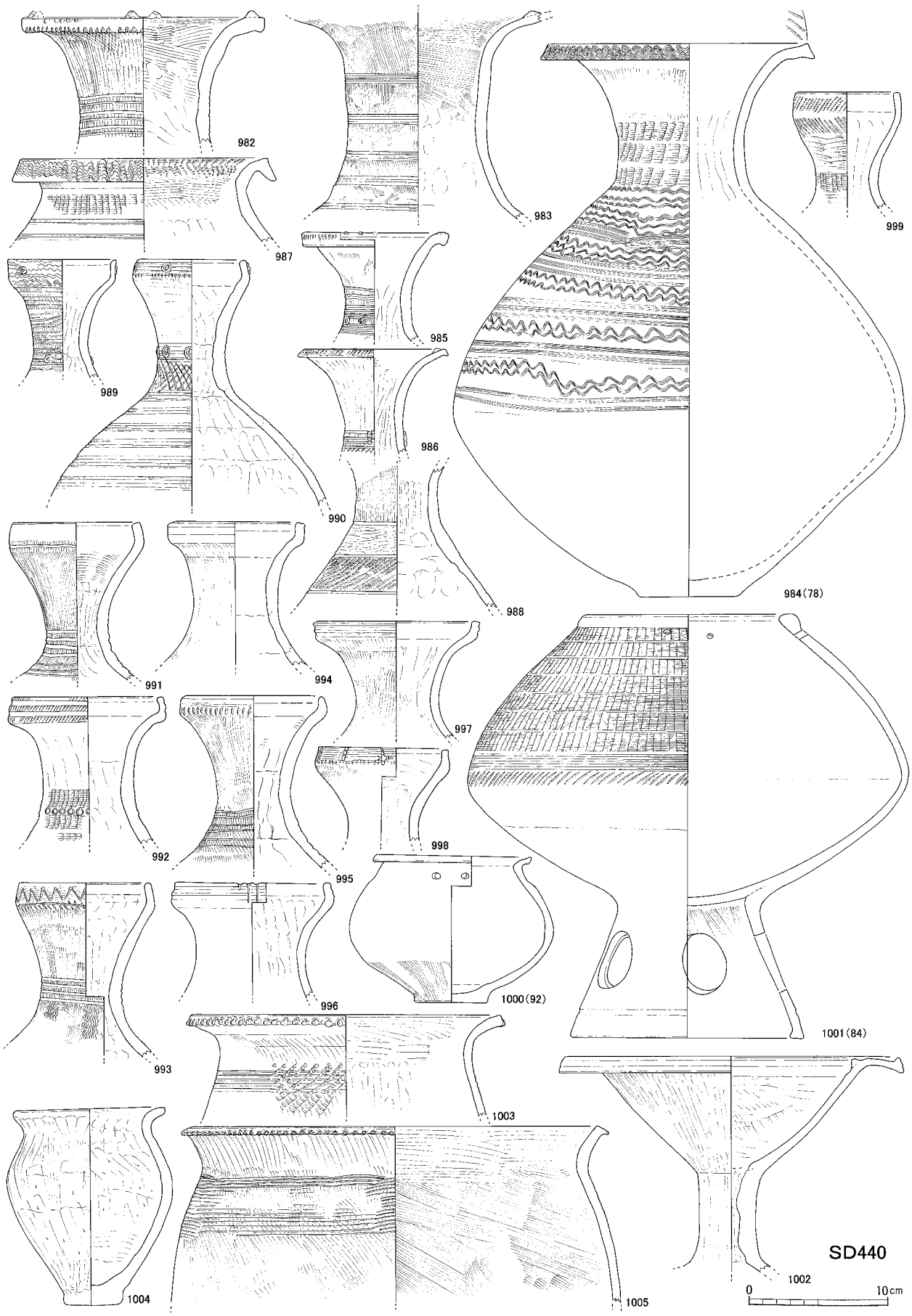
第59図　遺物実測図32（1：4）



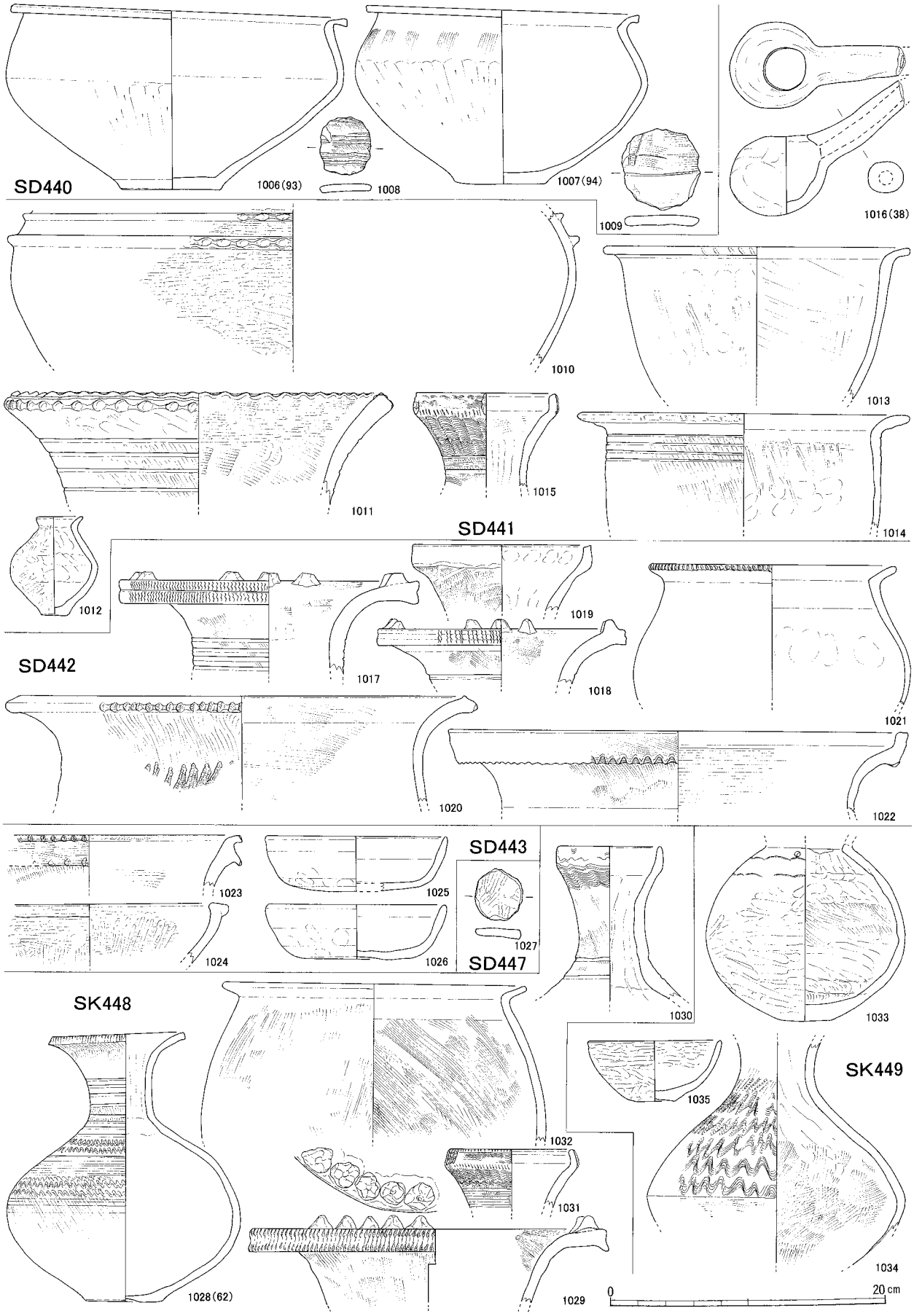
第60図　遺物実測図33（1：4）



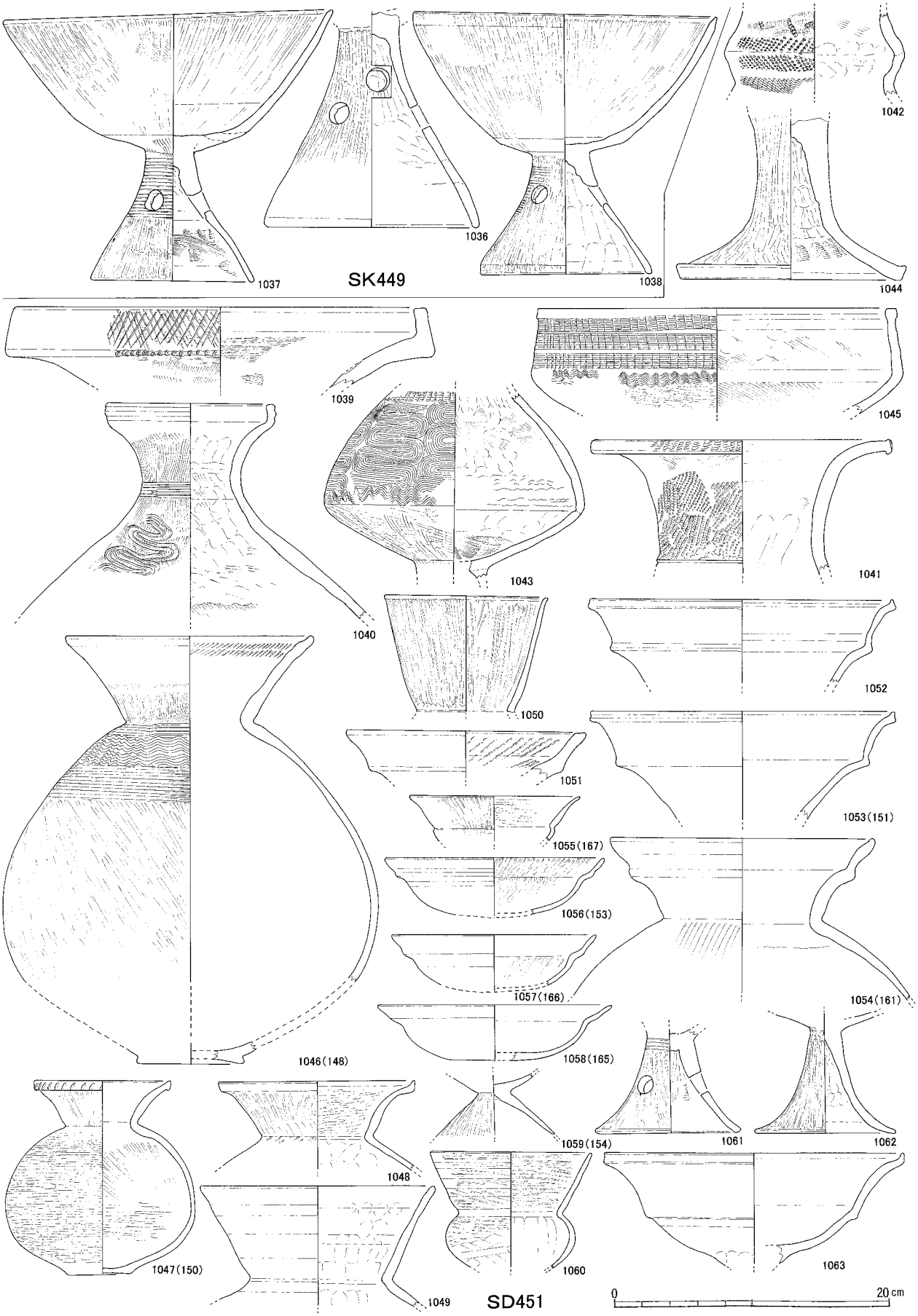
第61図　遺物実測図34（1：4）



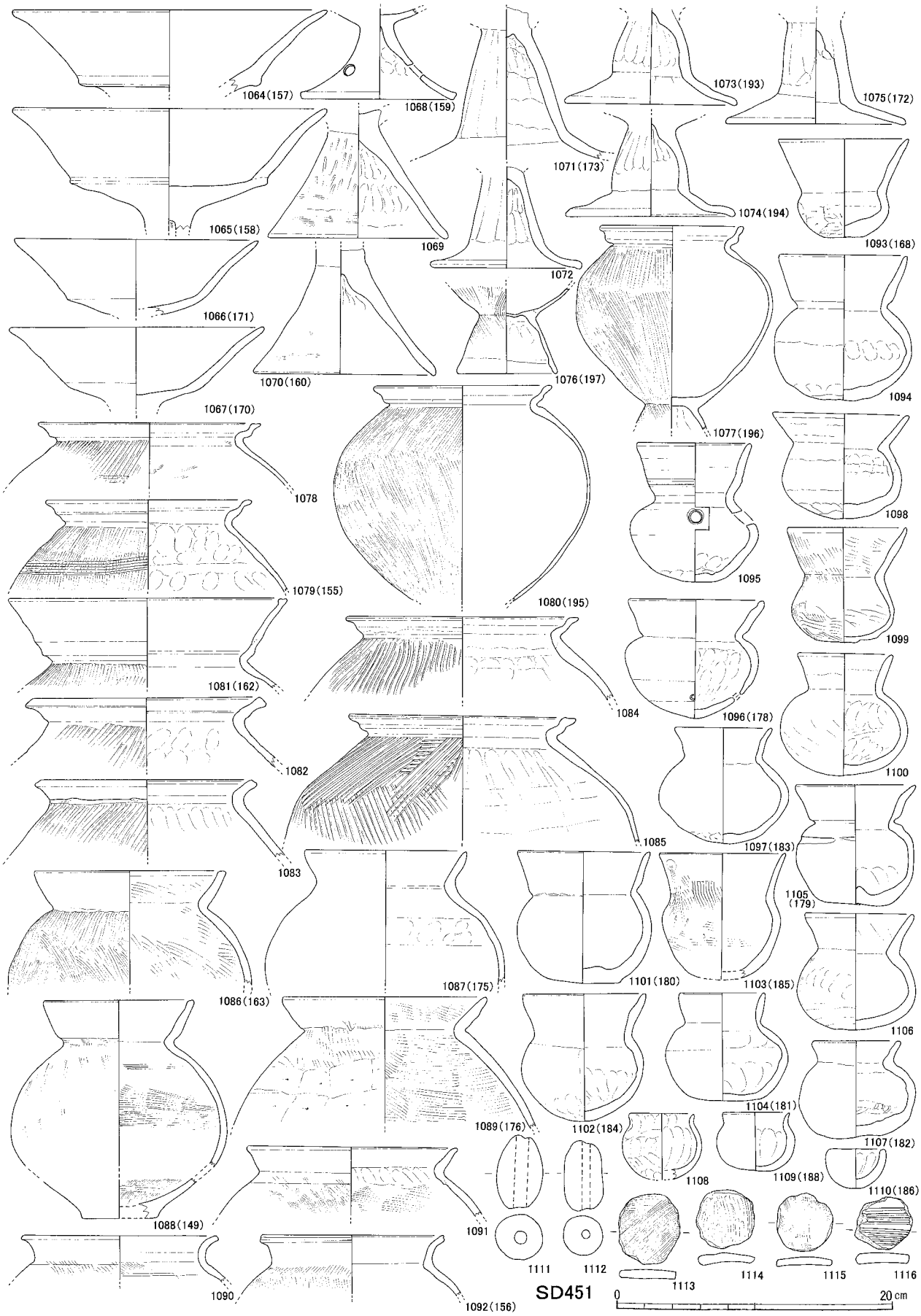
第62図　遺物実測図35（1：4）



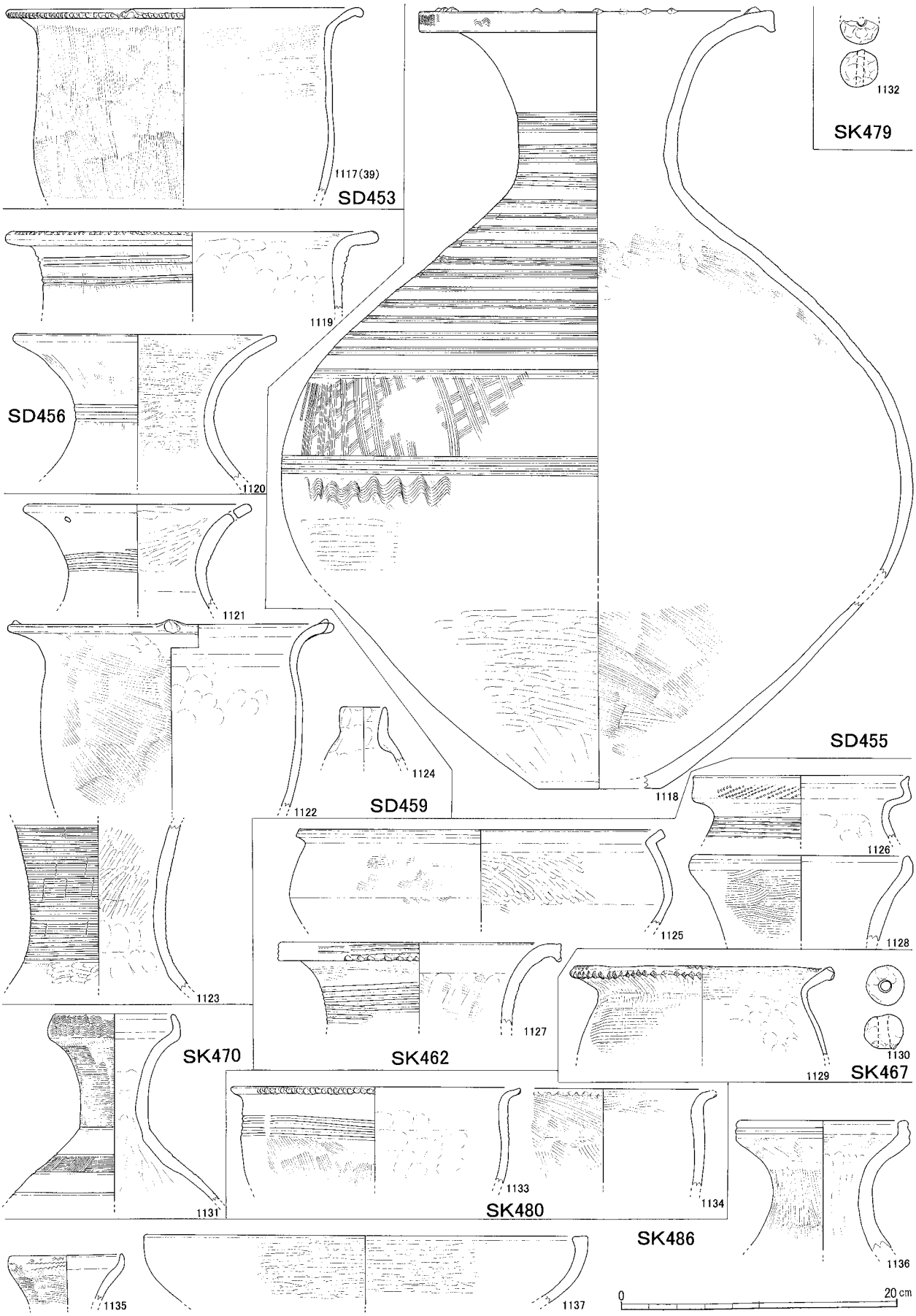
第63図　遺物実測図36（1：4）



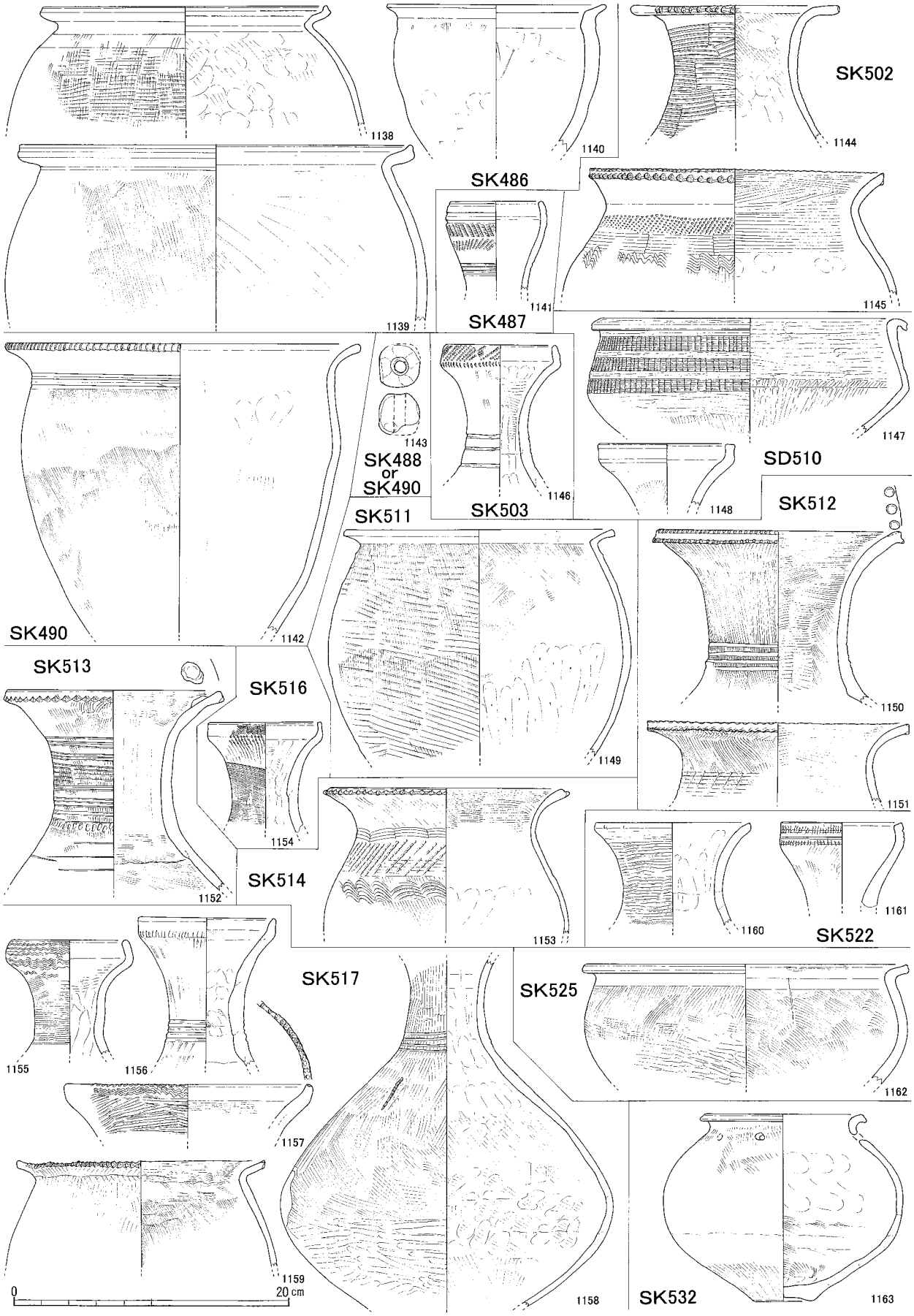
第64図　遺物実測図37（1：4）



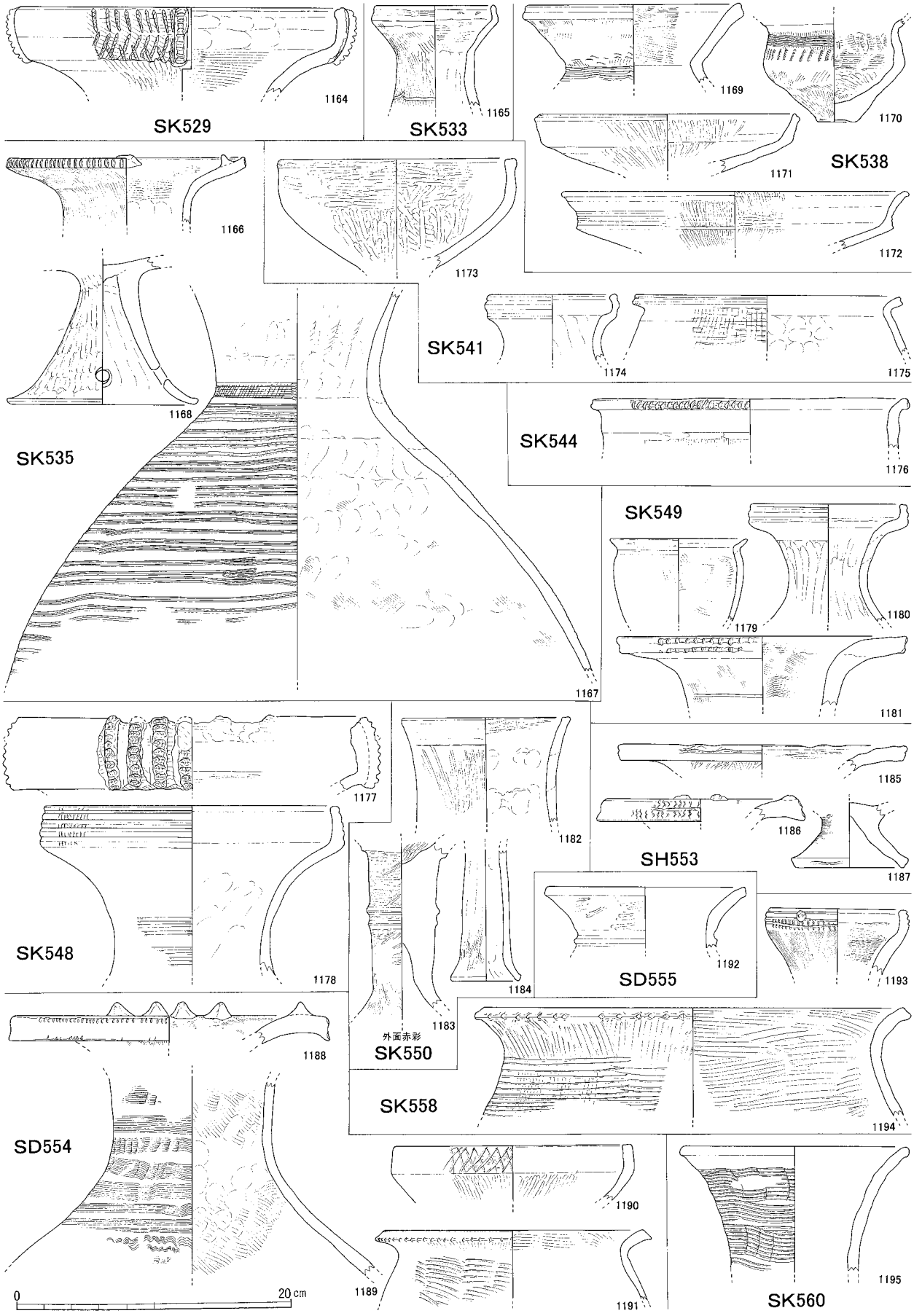
第65図　遺物実測図38（1：4）



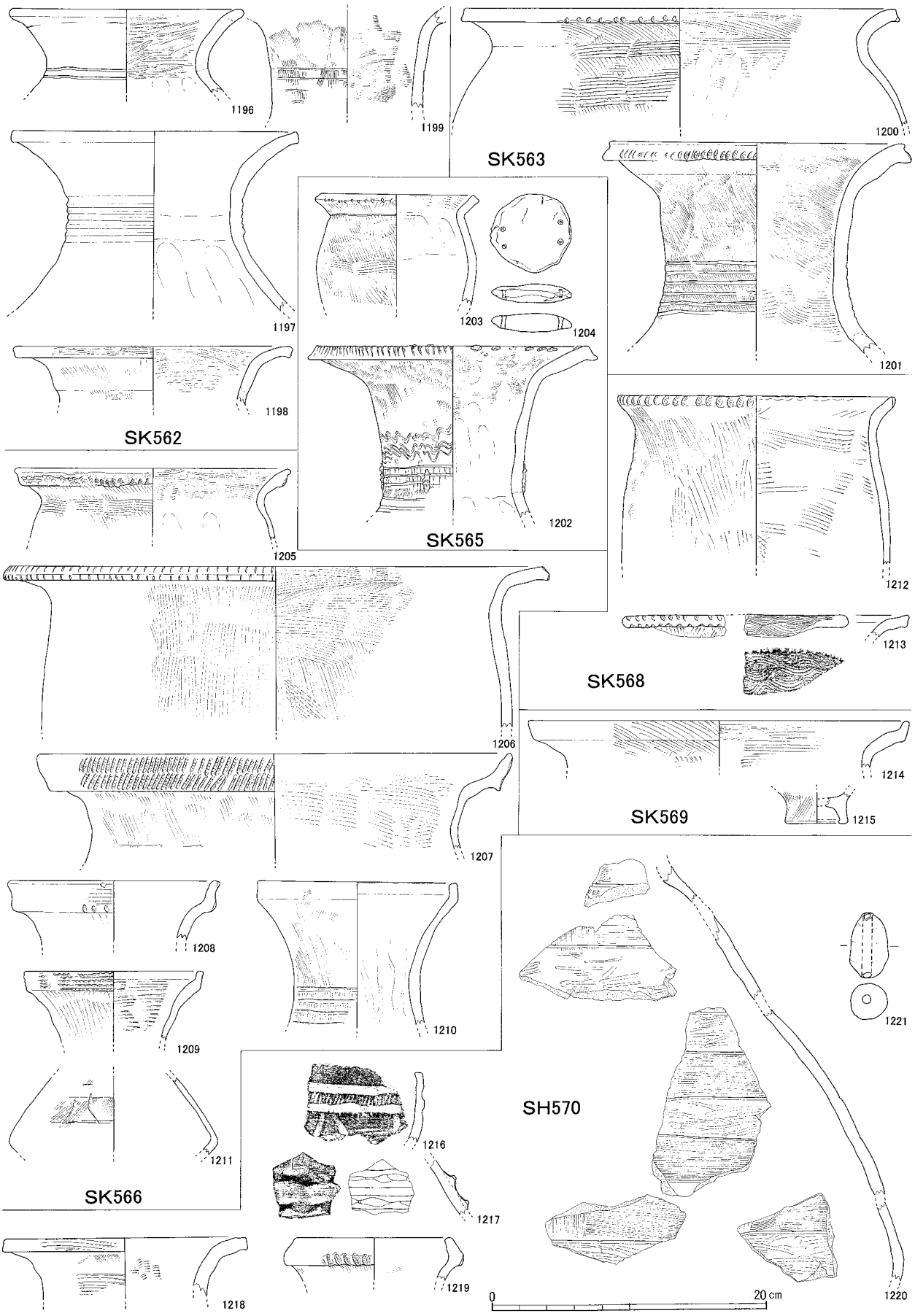
第66図　遺物実測図39（1：4）



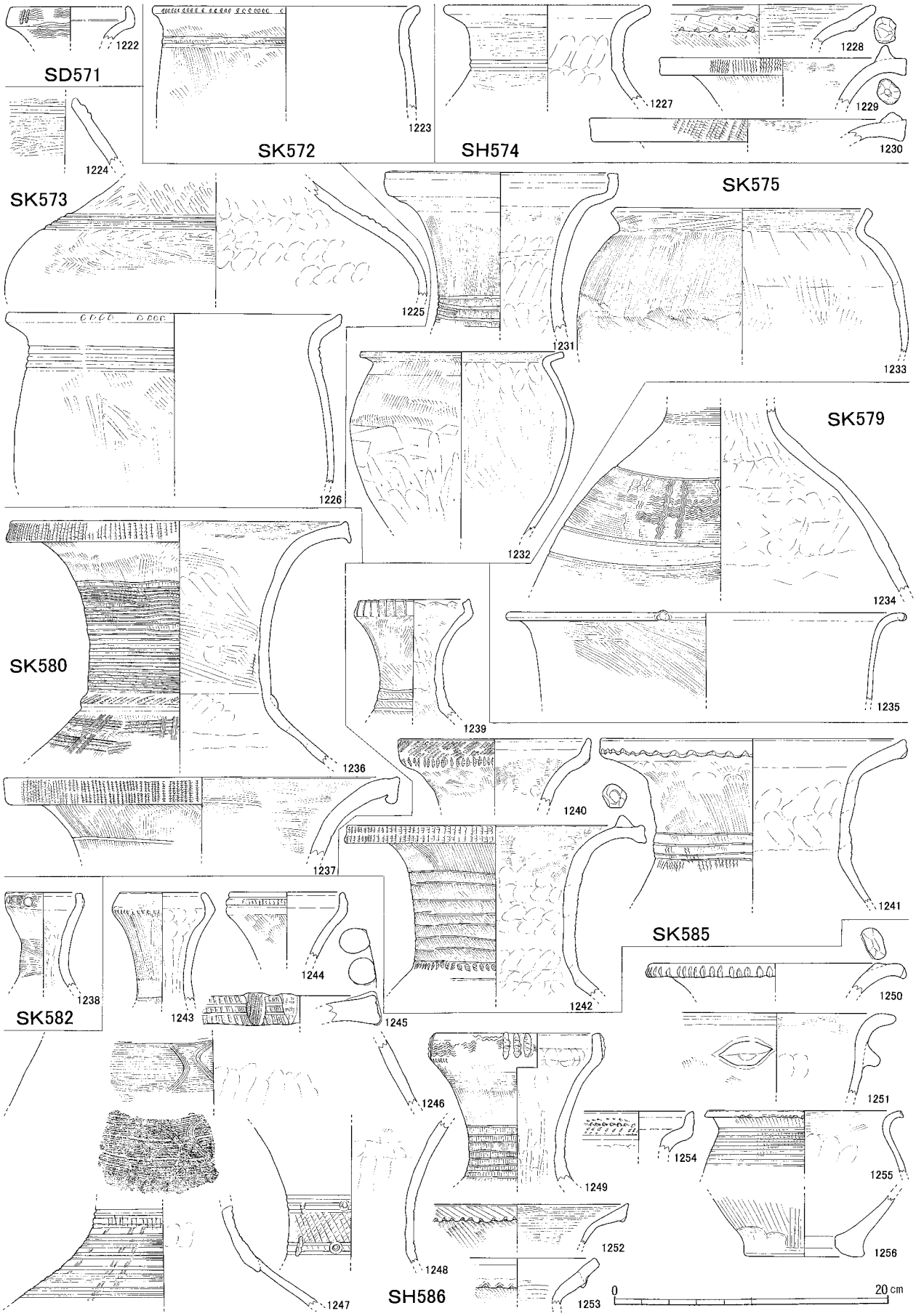
第67図　遺物実測図40（1：4）



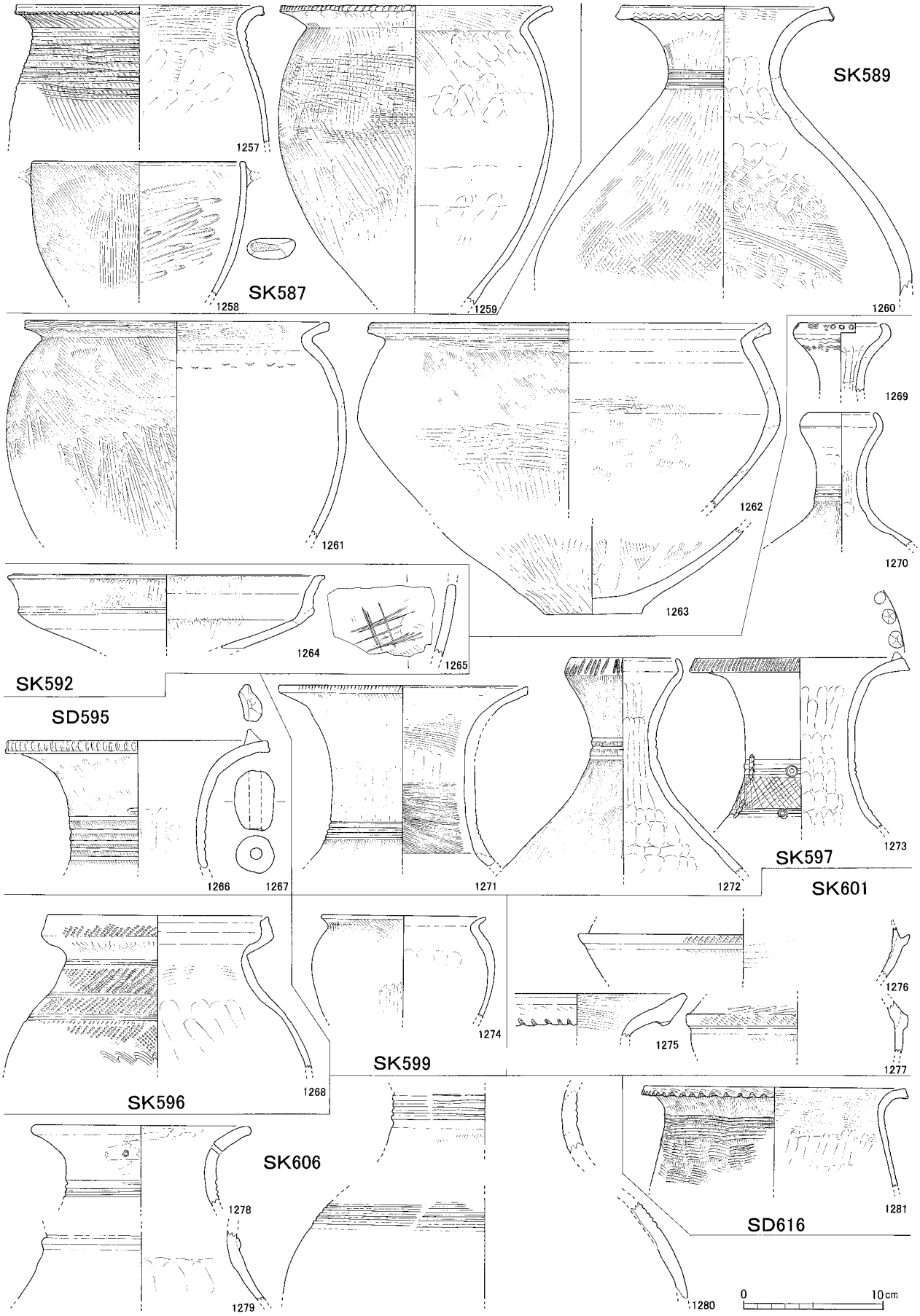
第68図　遺物実測図41（1：4）



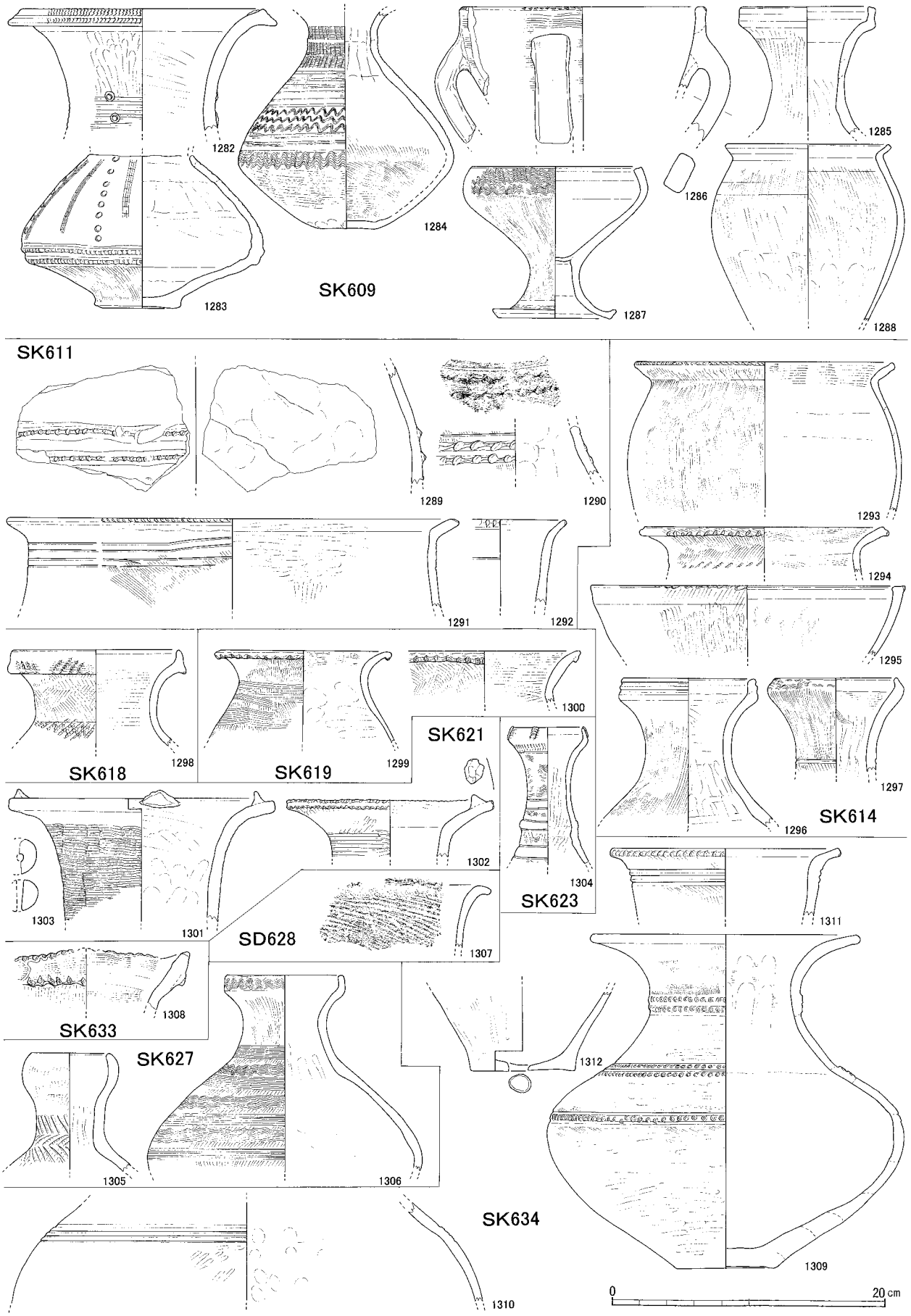
第69図　遺物実測図42（1：4）



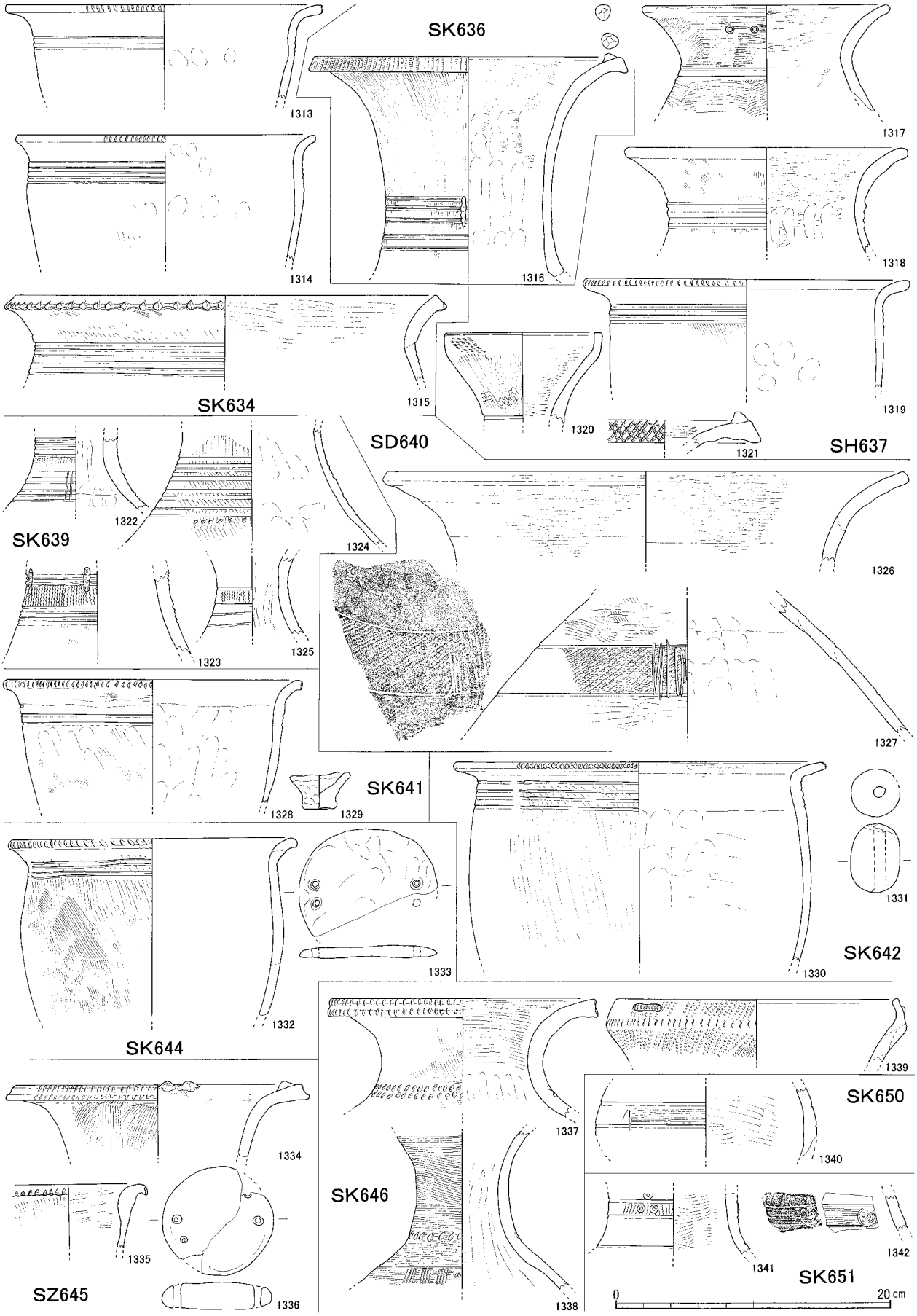
第70図　遺物実測図43（1：4）



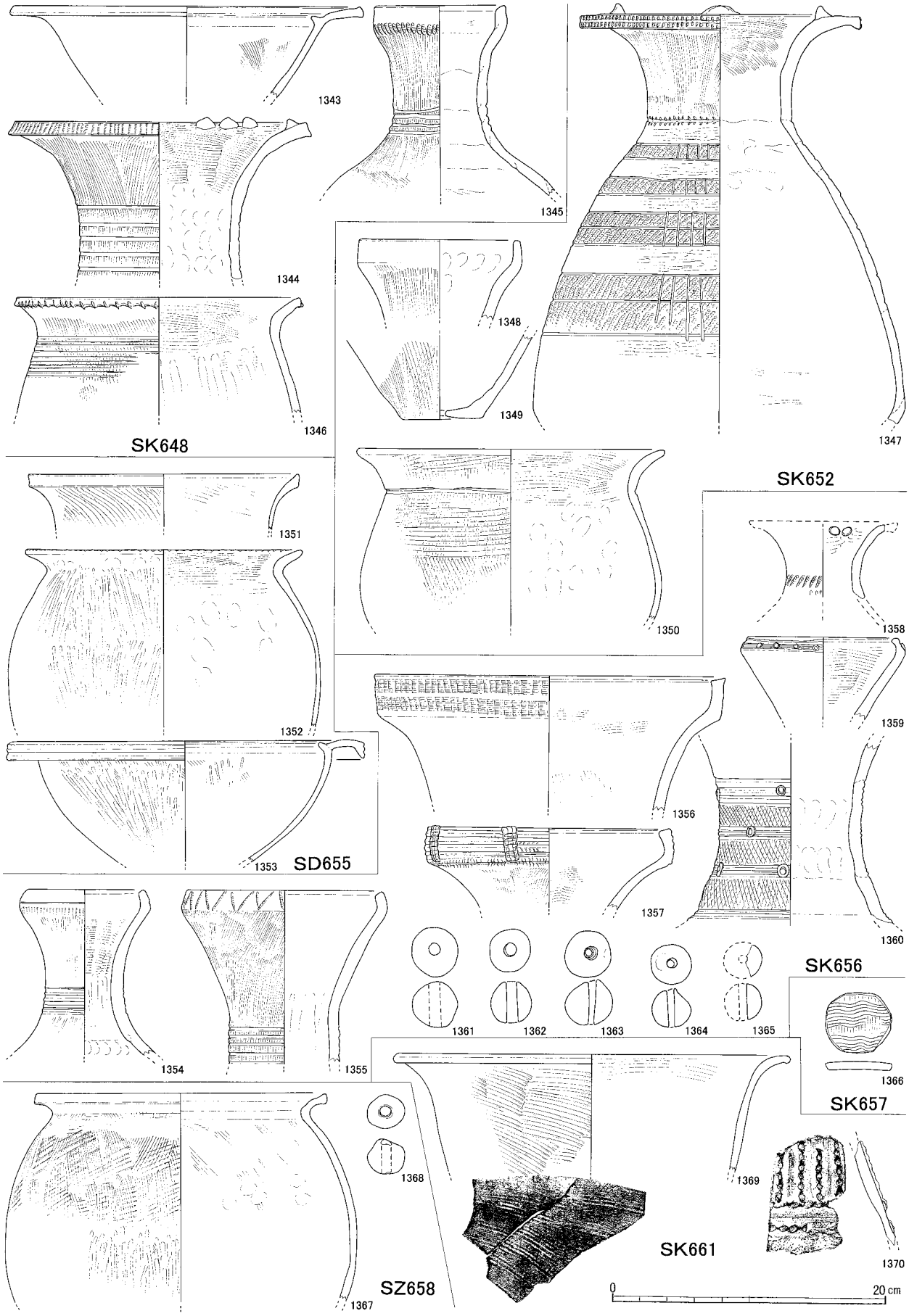
第71図　遺物実測図44（1：4）



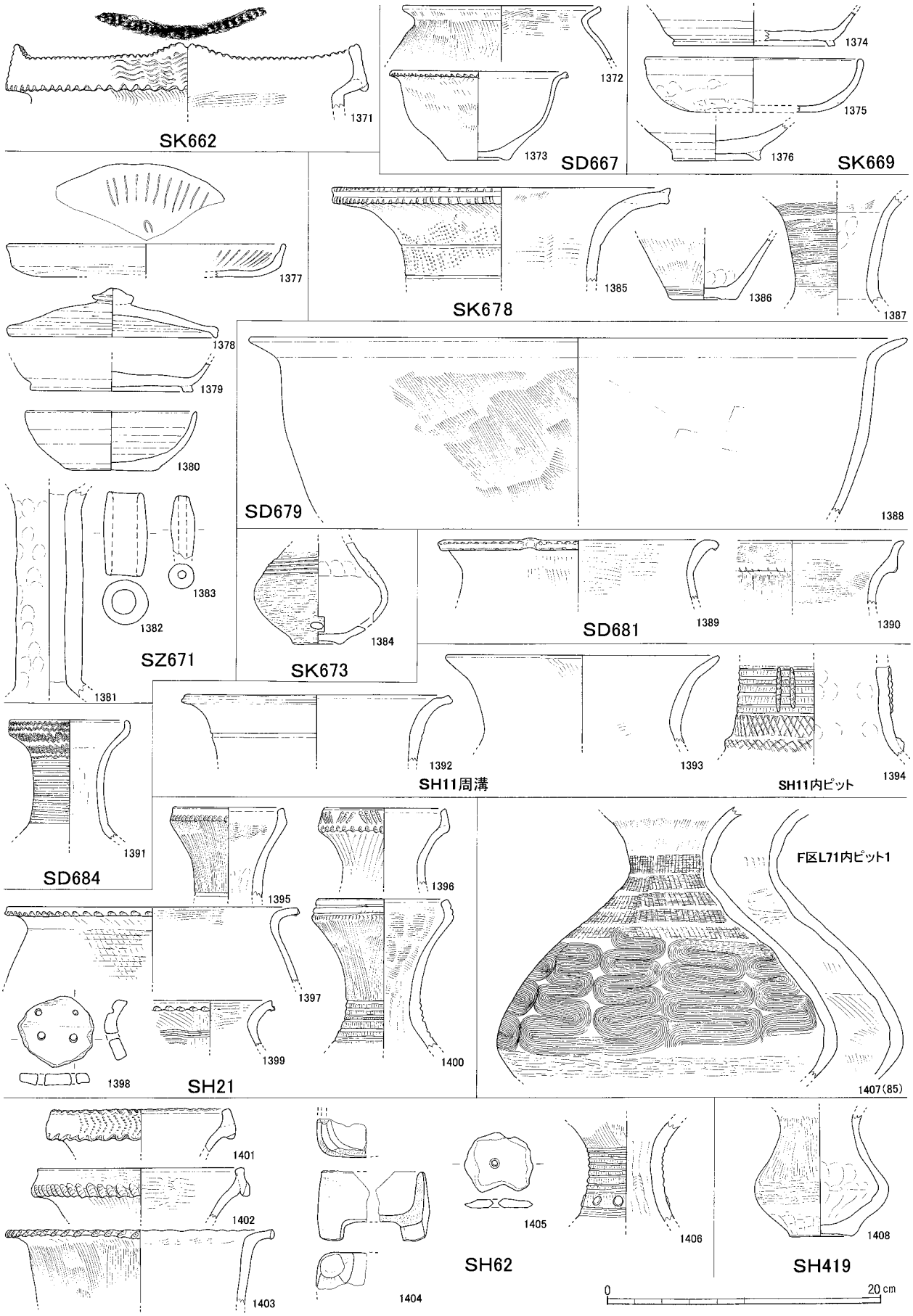
第72図　遺物実測図45（1：4）



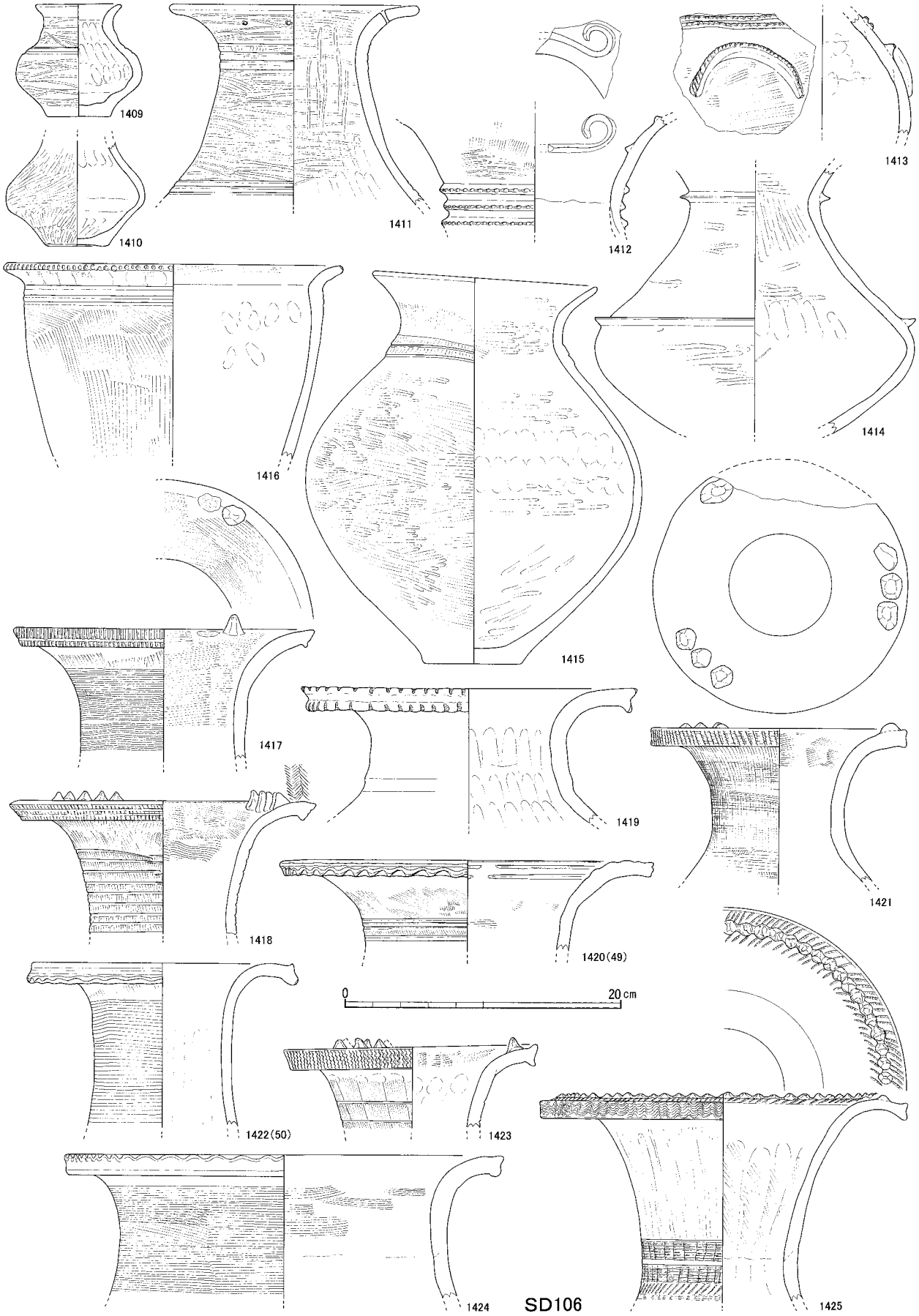
第73図　遺物実測図46（1：4）



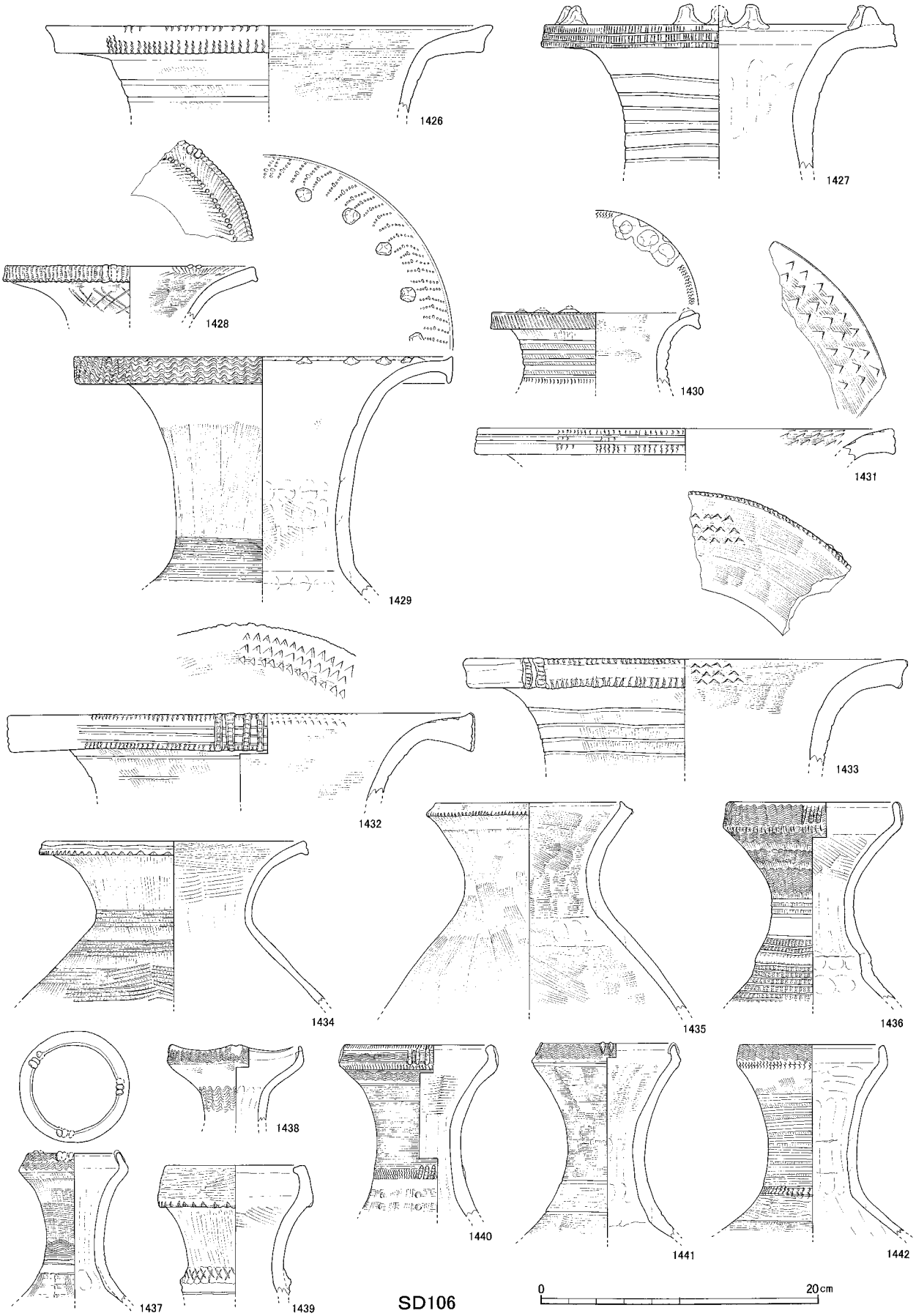
第74図　遺物実測図47（1：4）



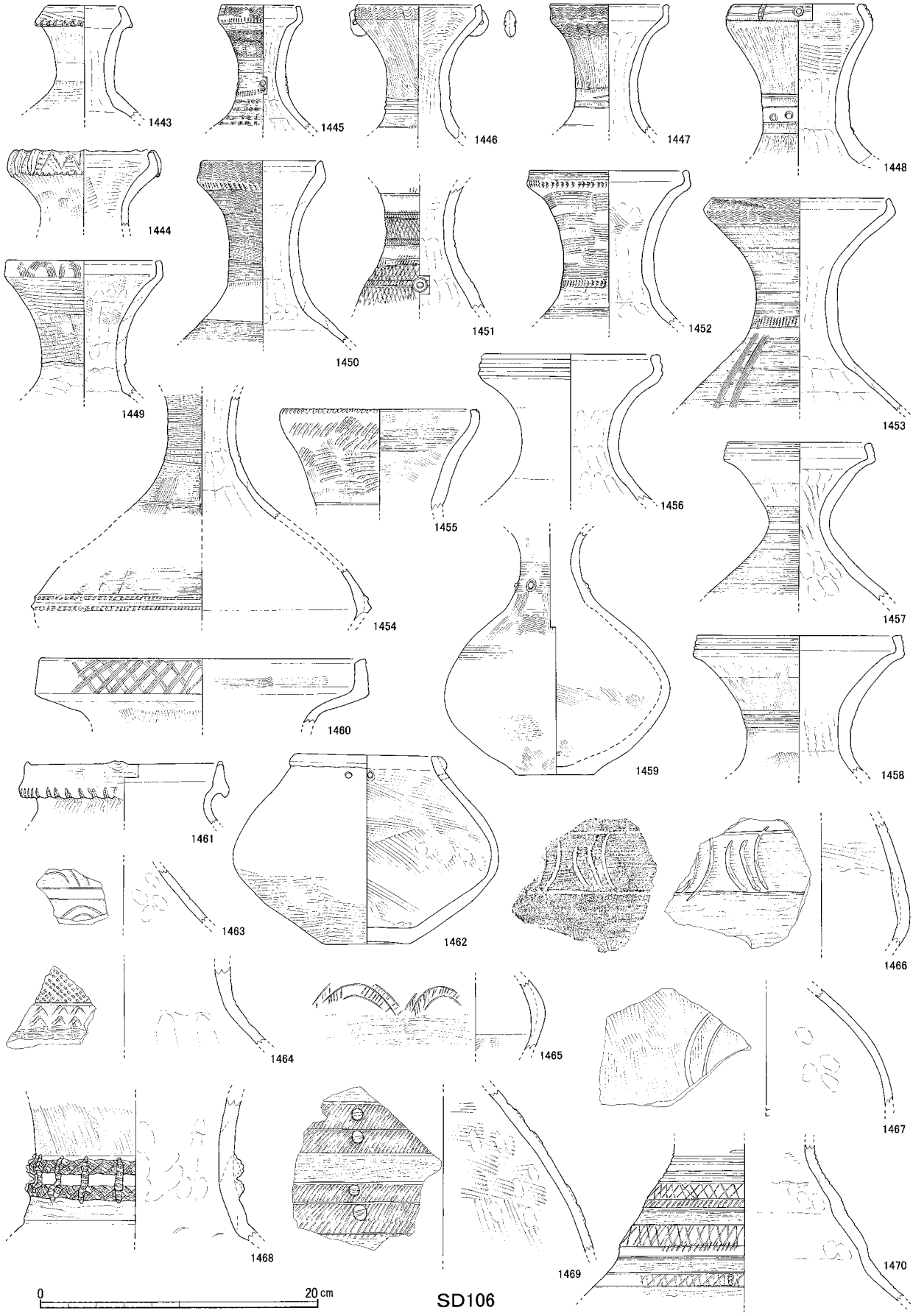
第75図　遺物実測図48（1：4）



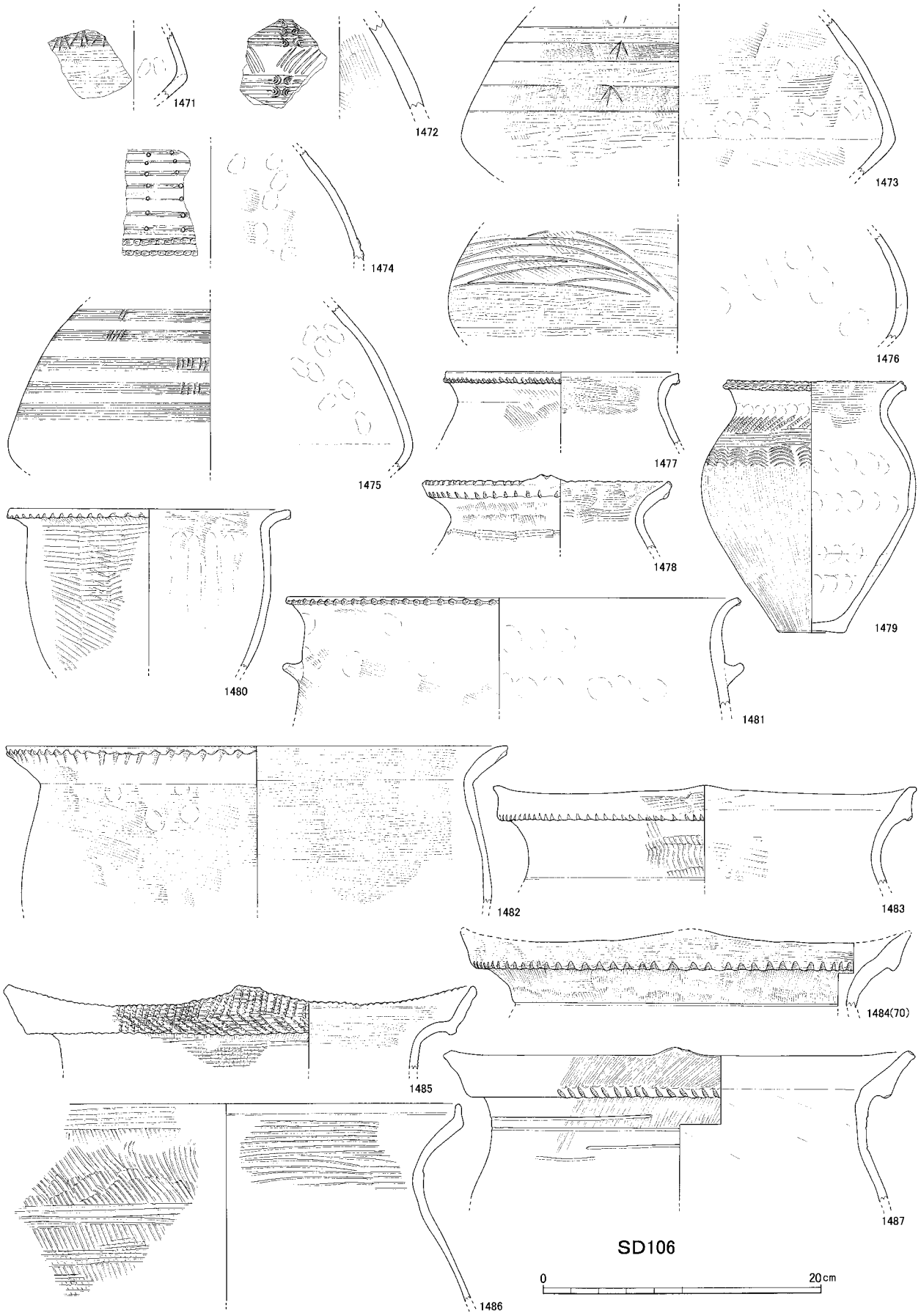
第76図　遺物実測図49（1：4）



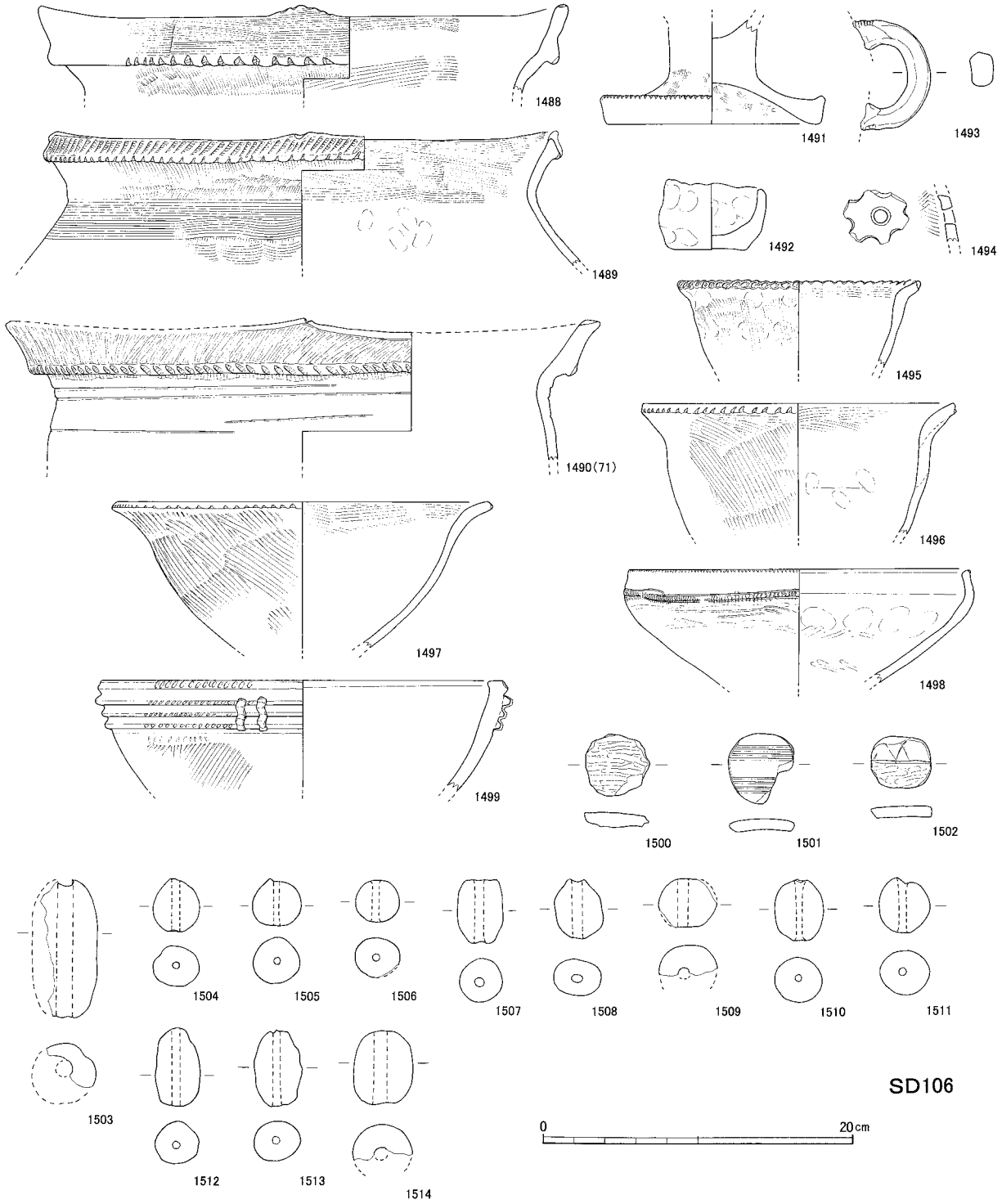
第77図　遺物実測図50（1：4）



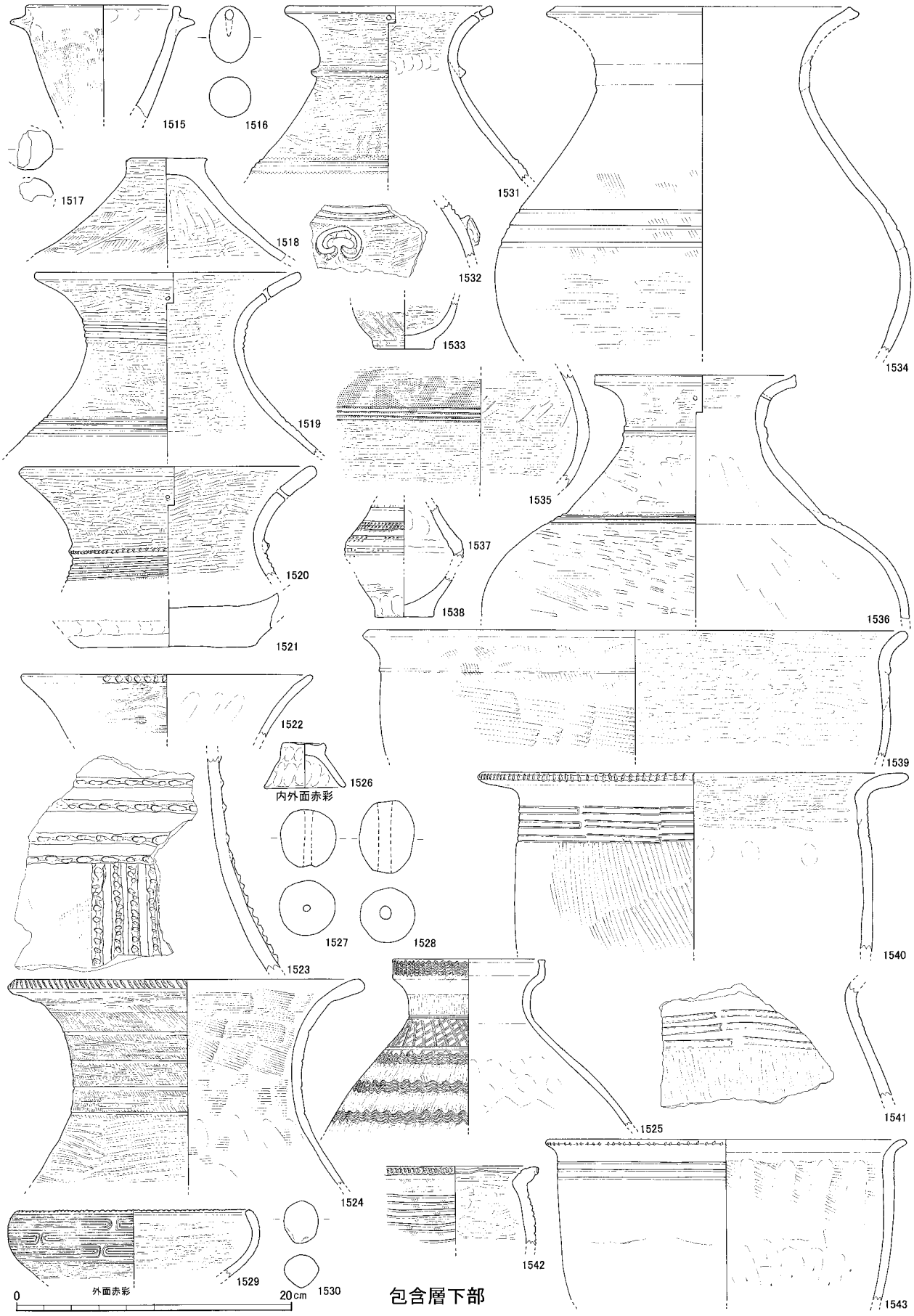
第78図　遺物実測図51（1：4）



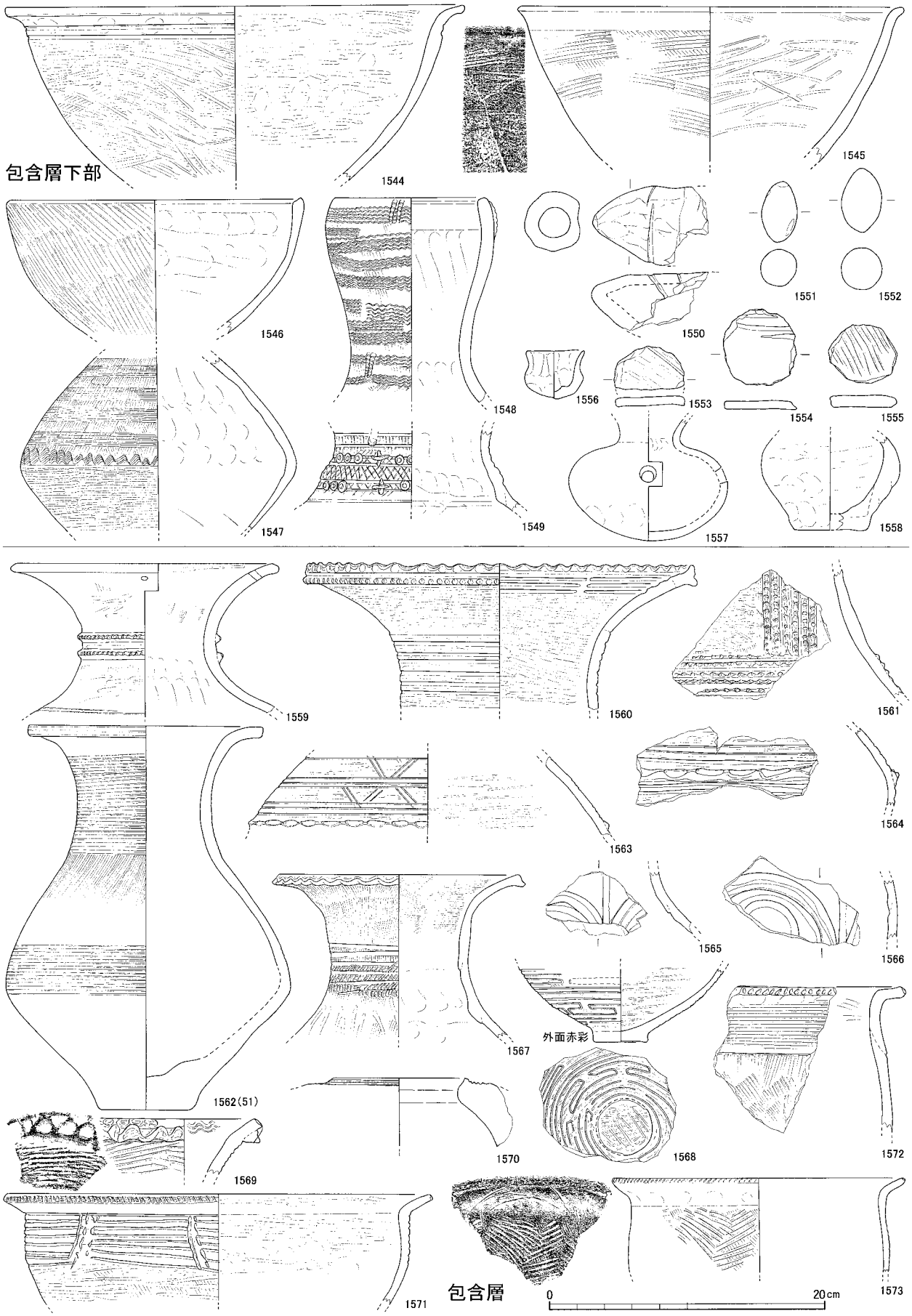
第79図　遺物実測図52（1：4）



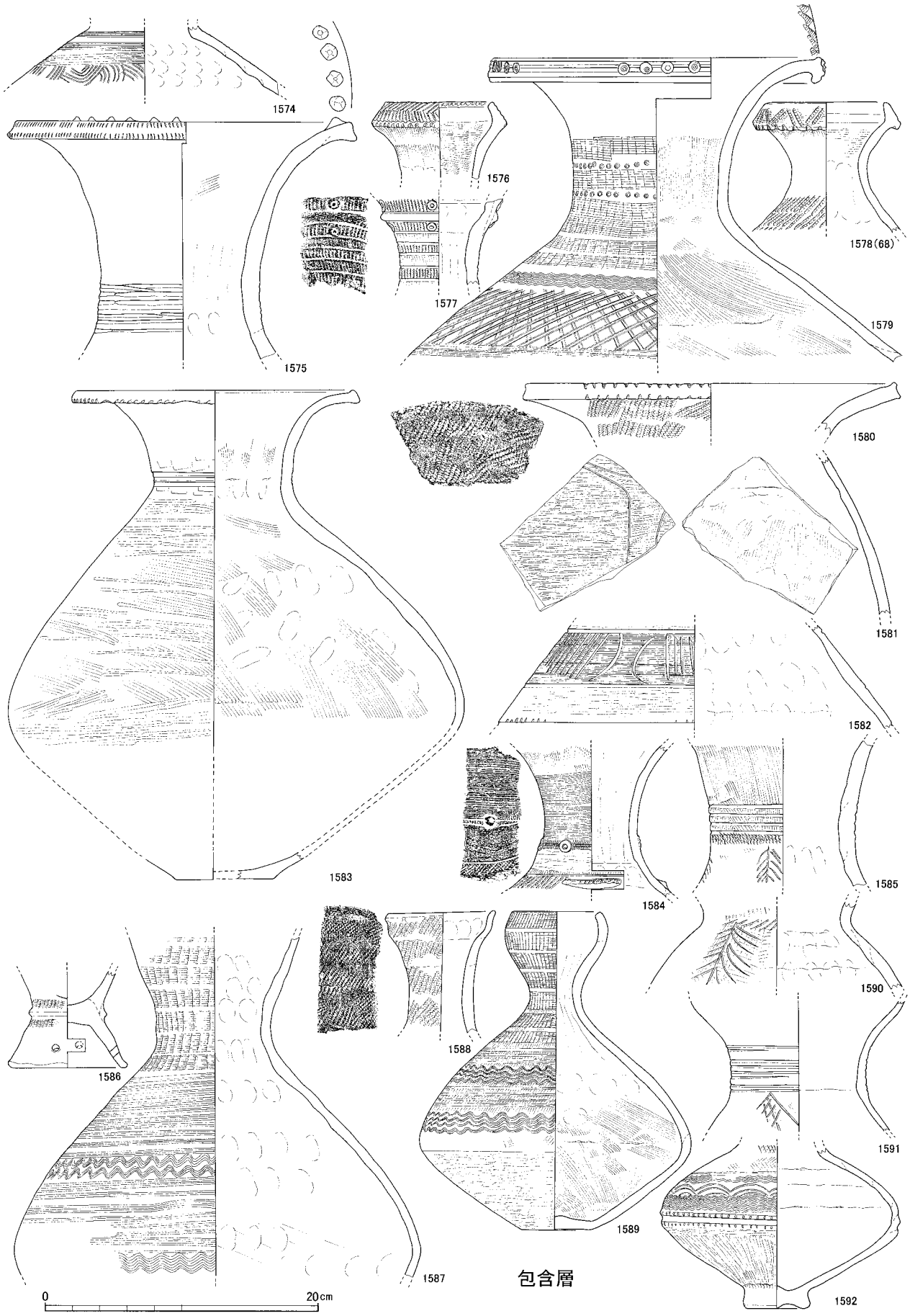
第80図　遺物実測図53（1：4）



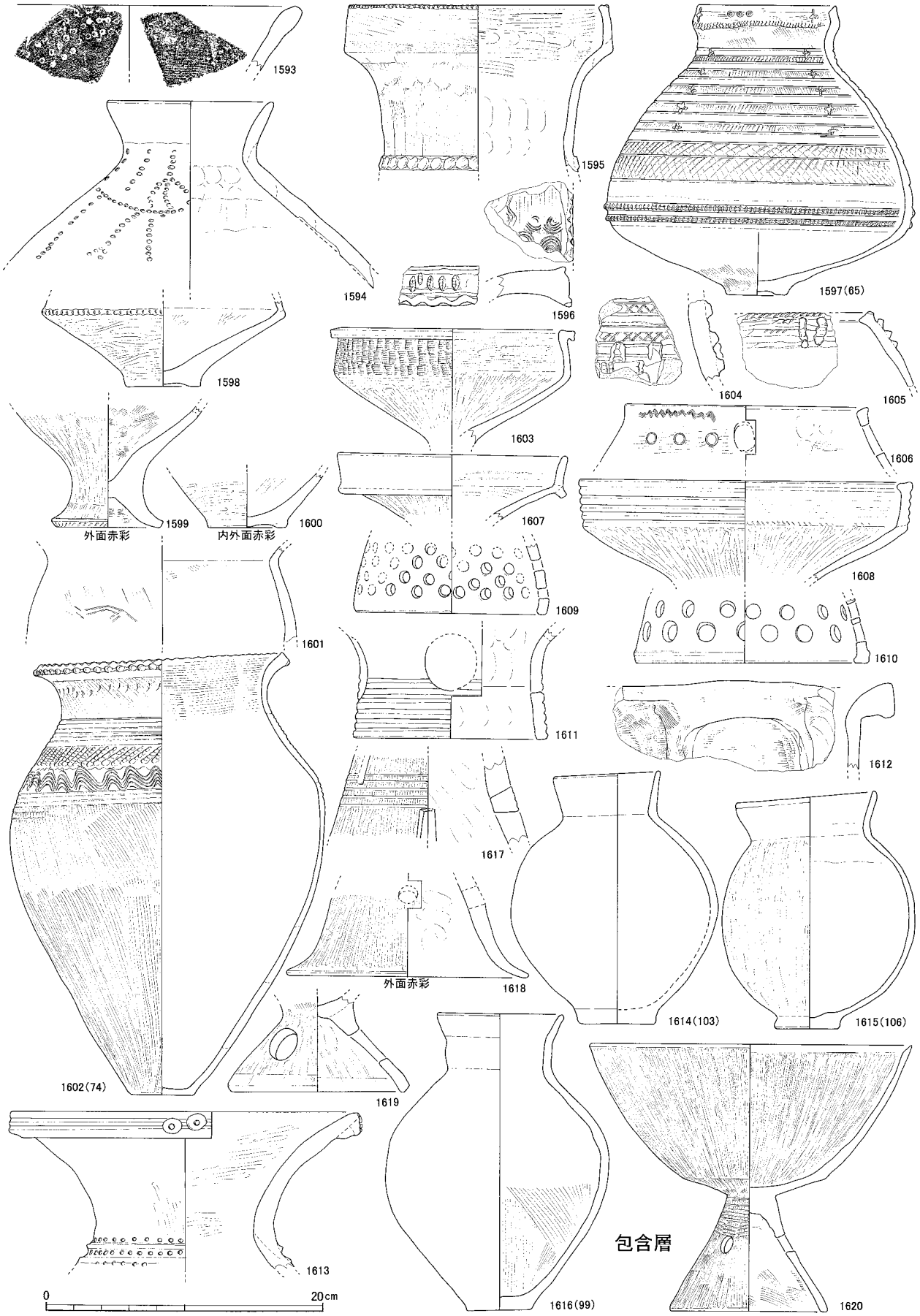
第81図　遺物実測図54（1：4）



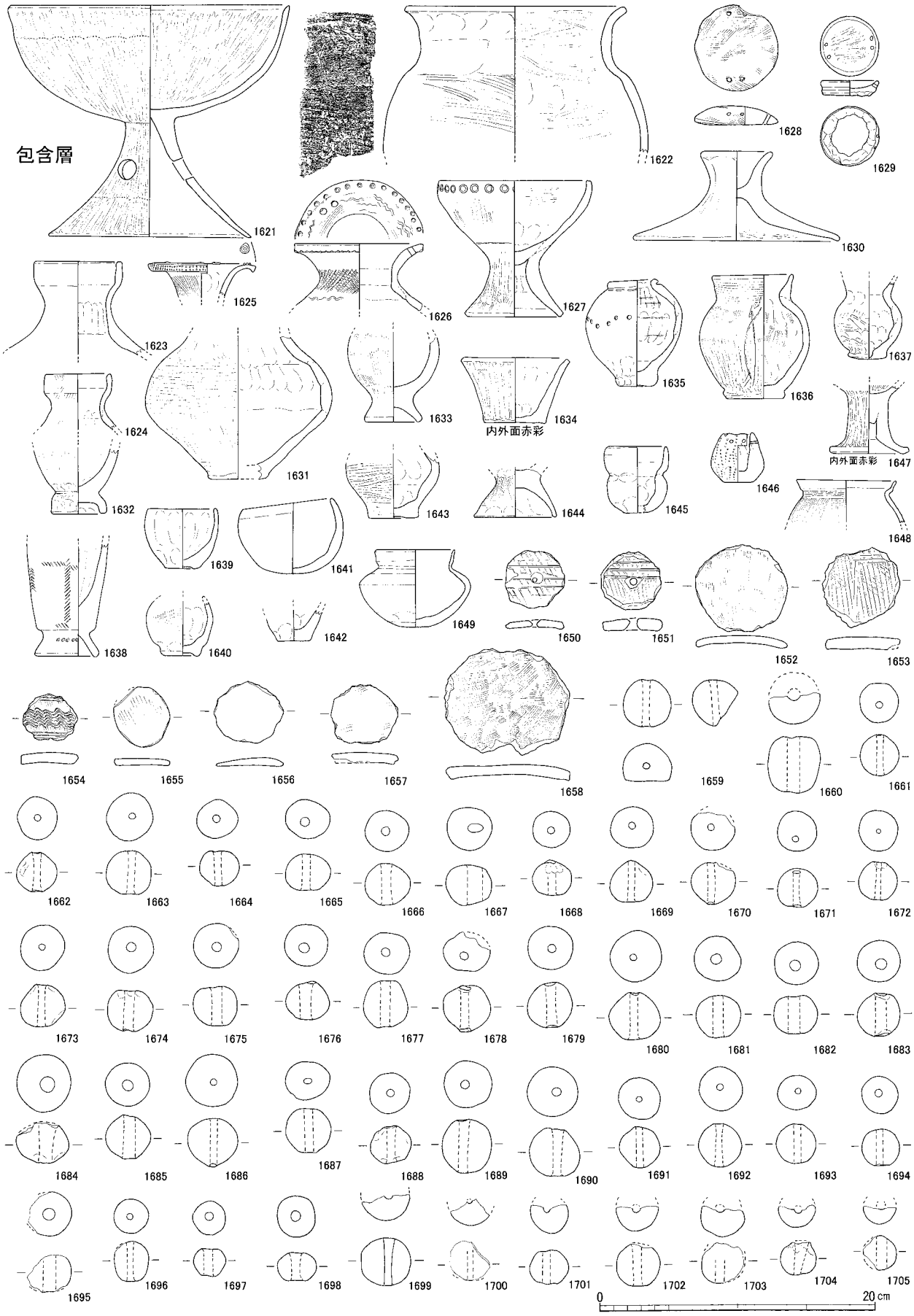
第82図　遺物実測図55（1：4）



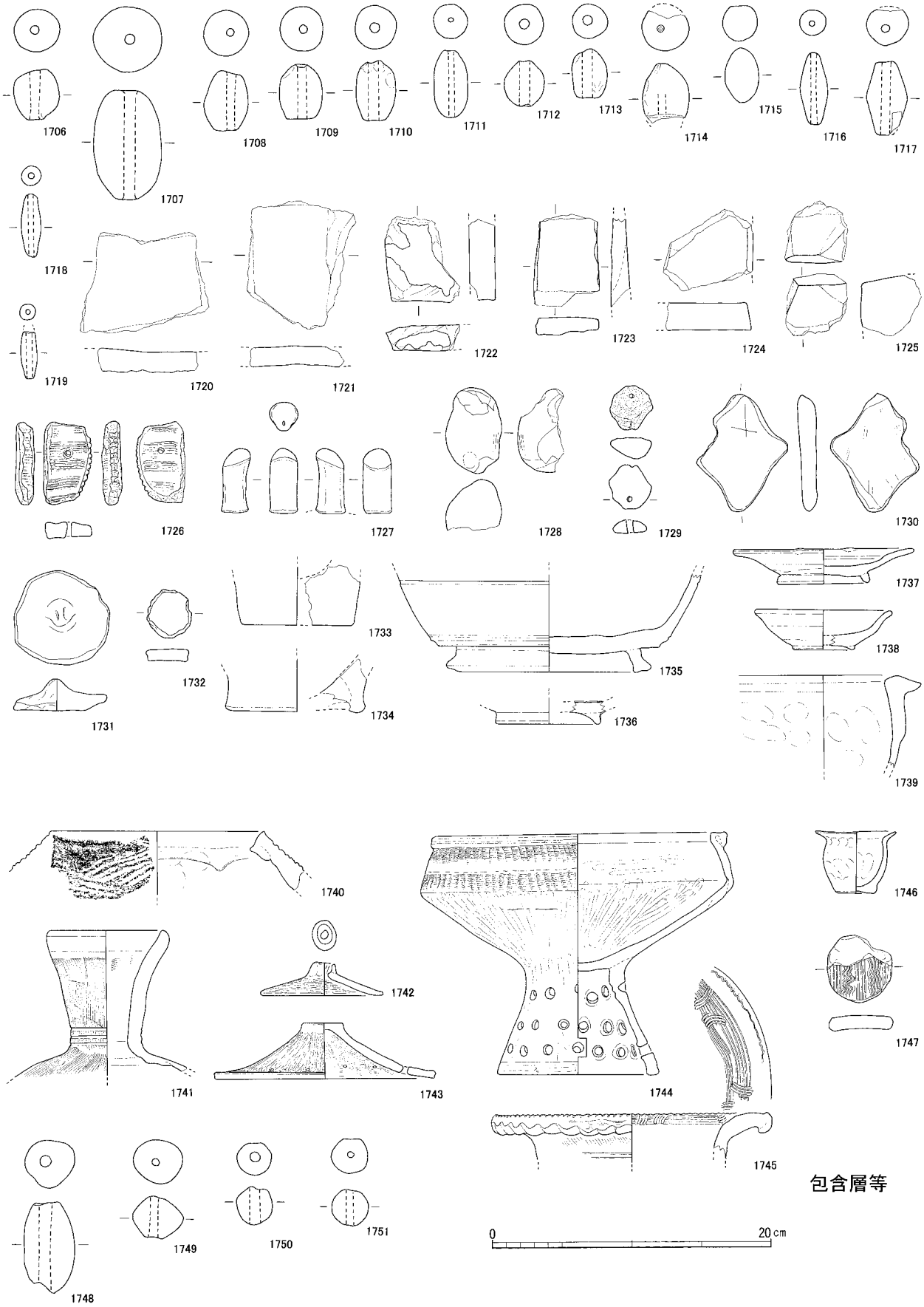
第83図　遺物実測図56（1：4）



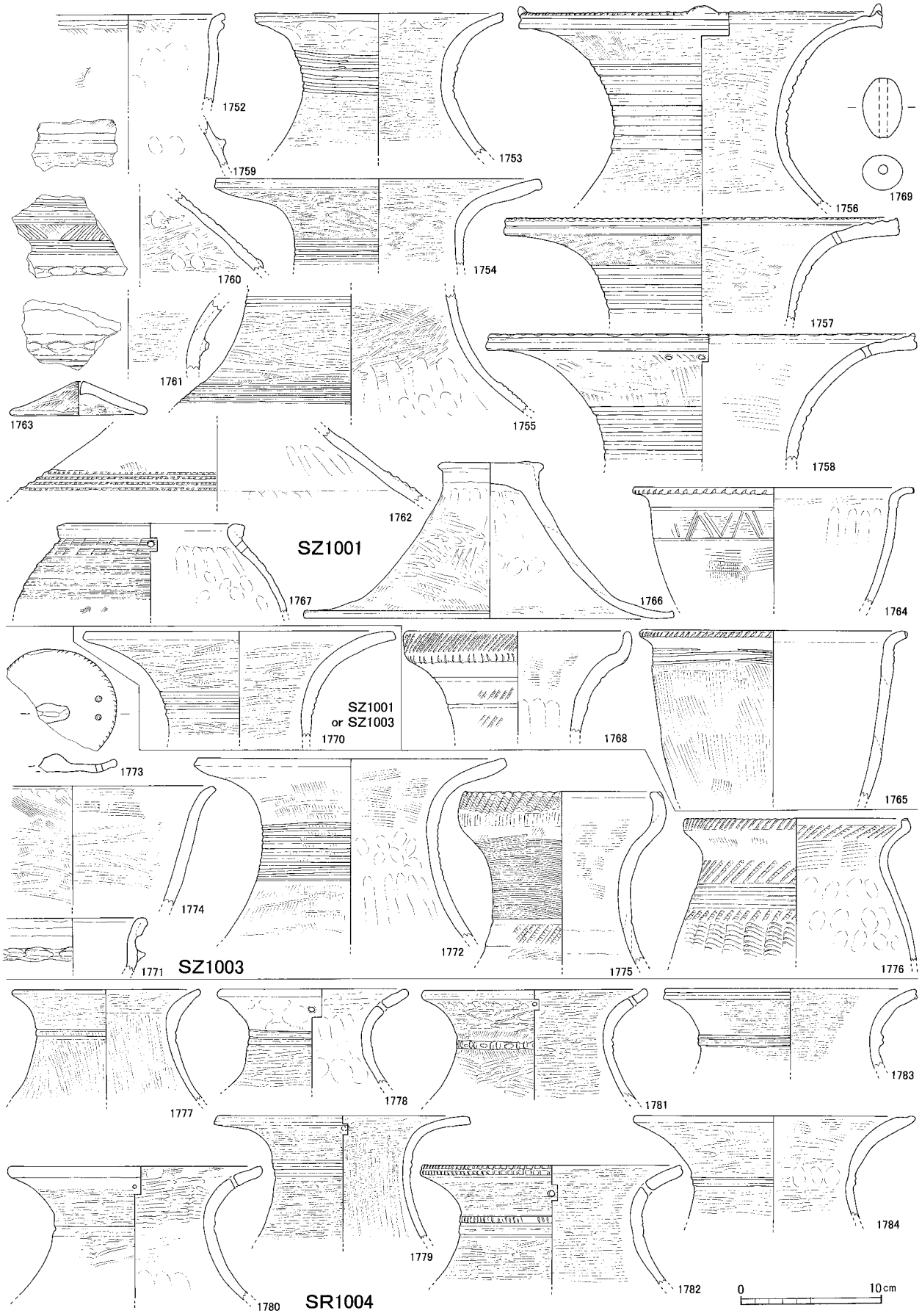
第84図　遺物実測図57（1：4）



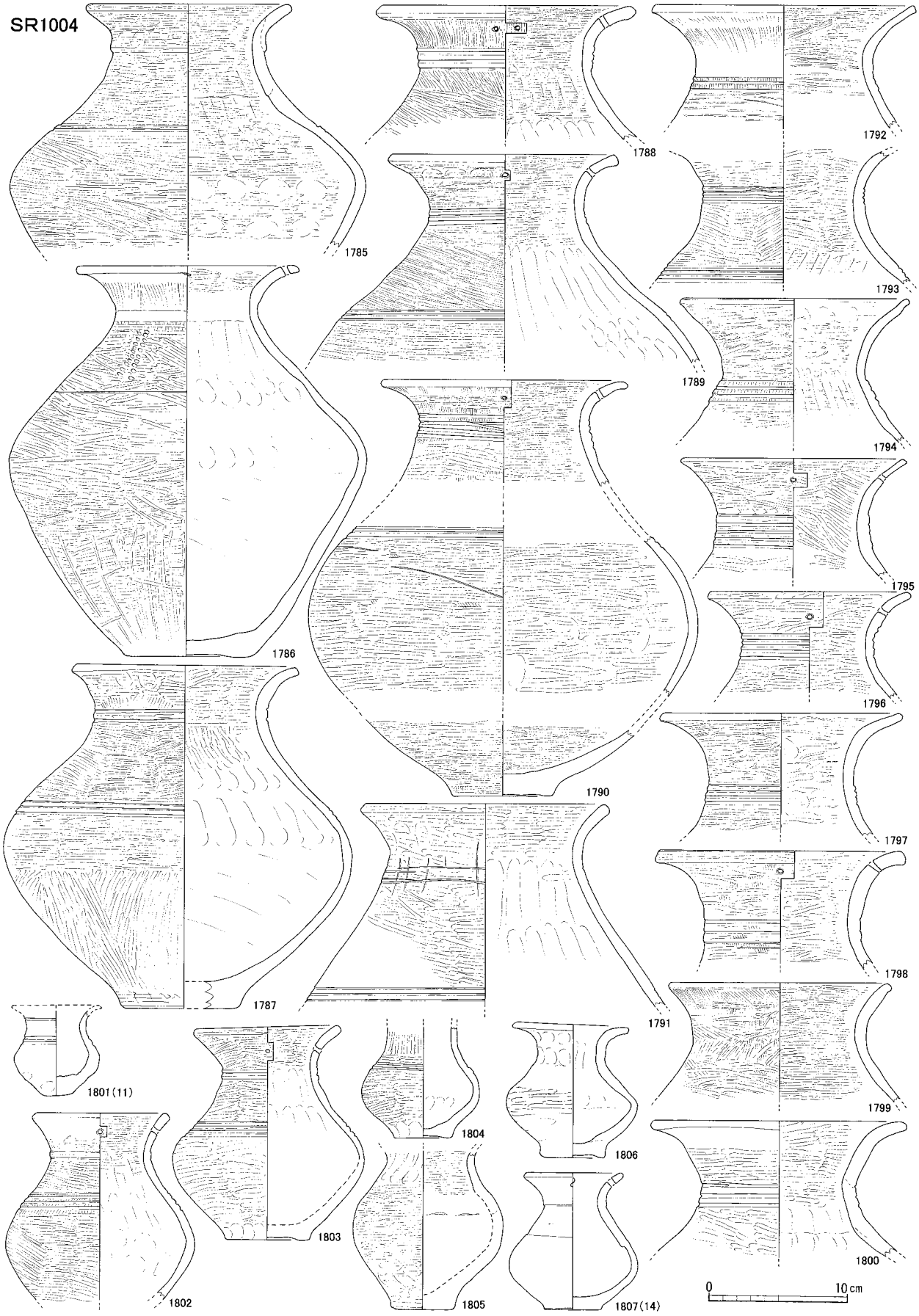
第85図　遺物実測図58（1：4）



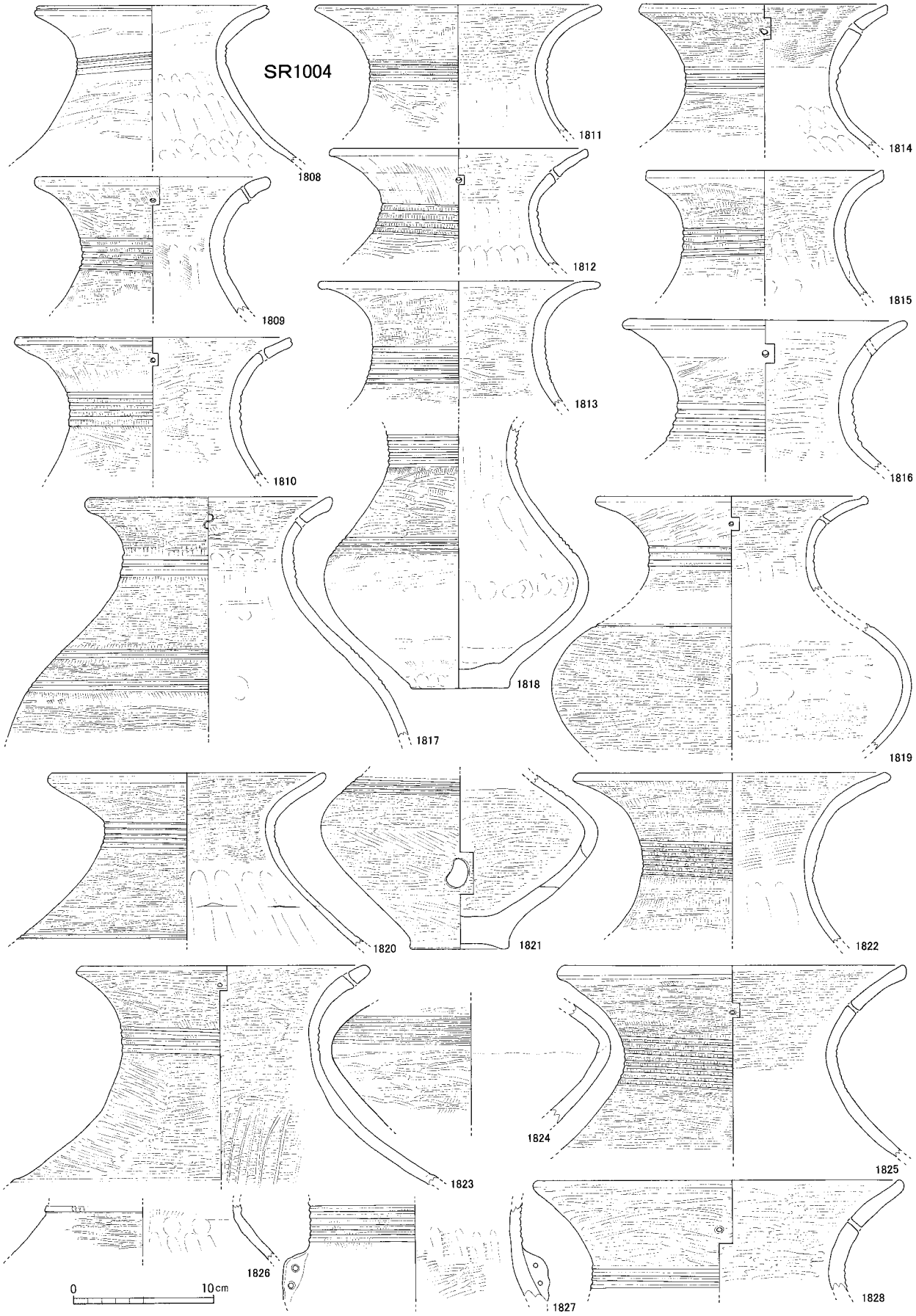
第86図　遺物実測図59（1：4）



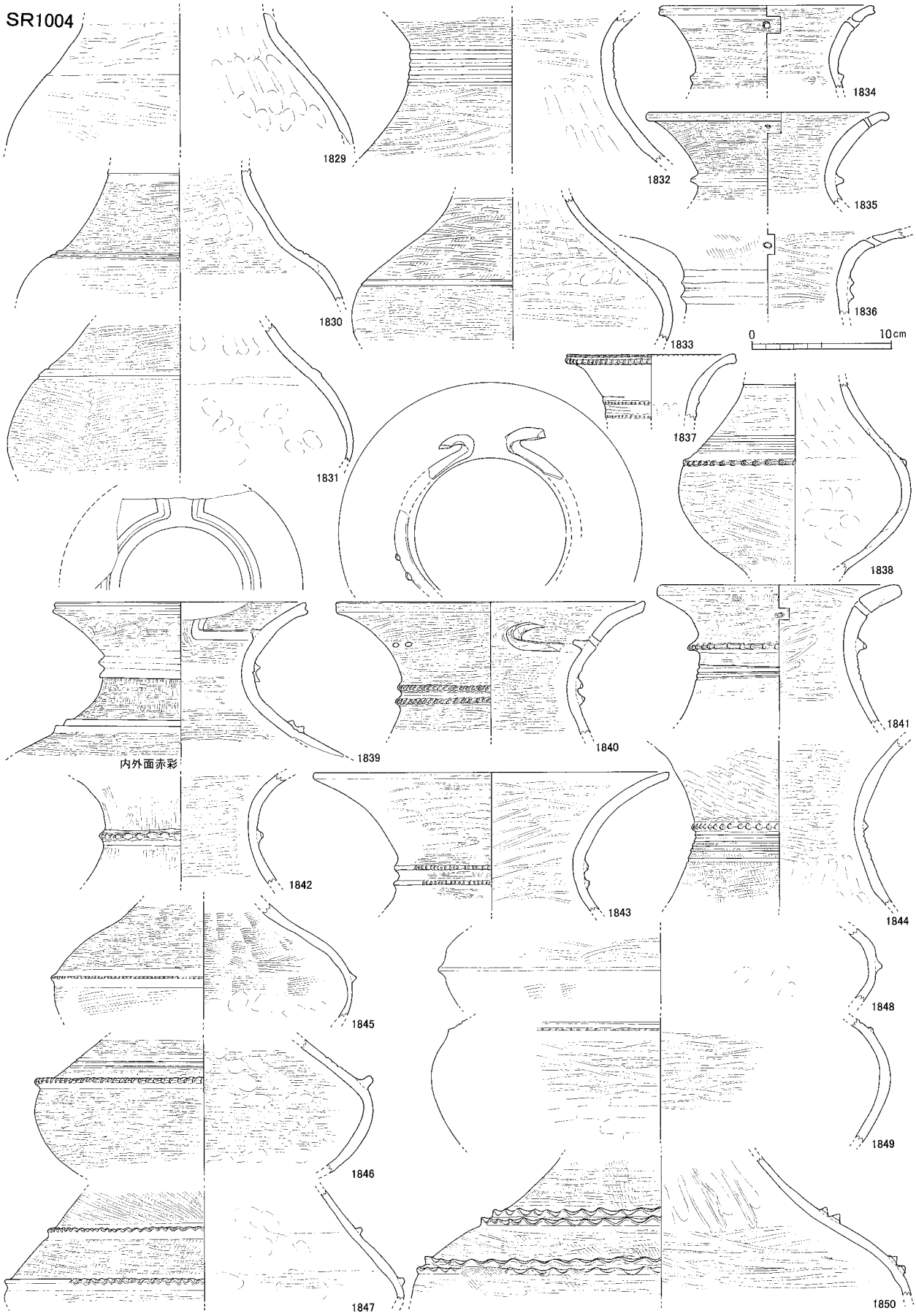
第87図　遺物実測図60（1：4）



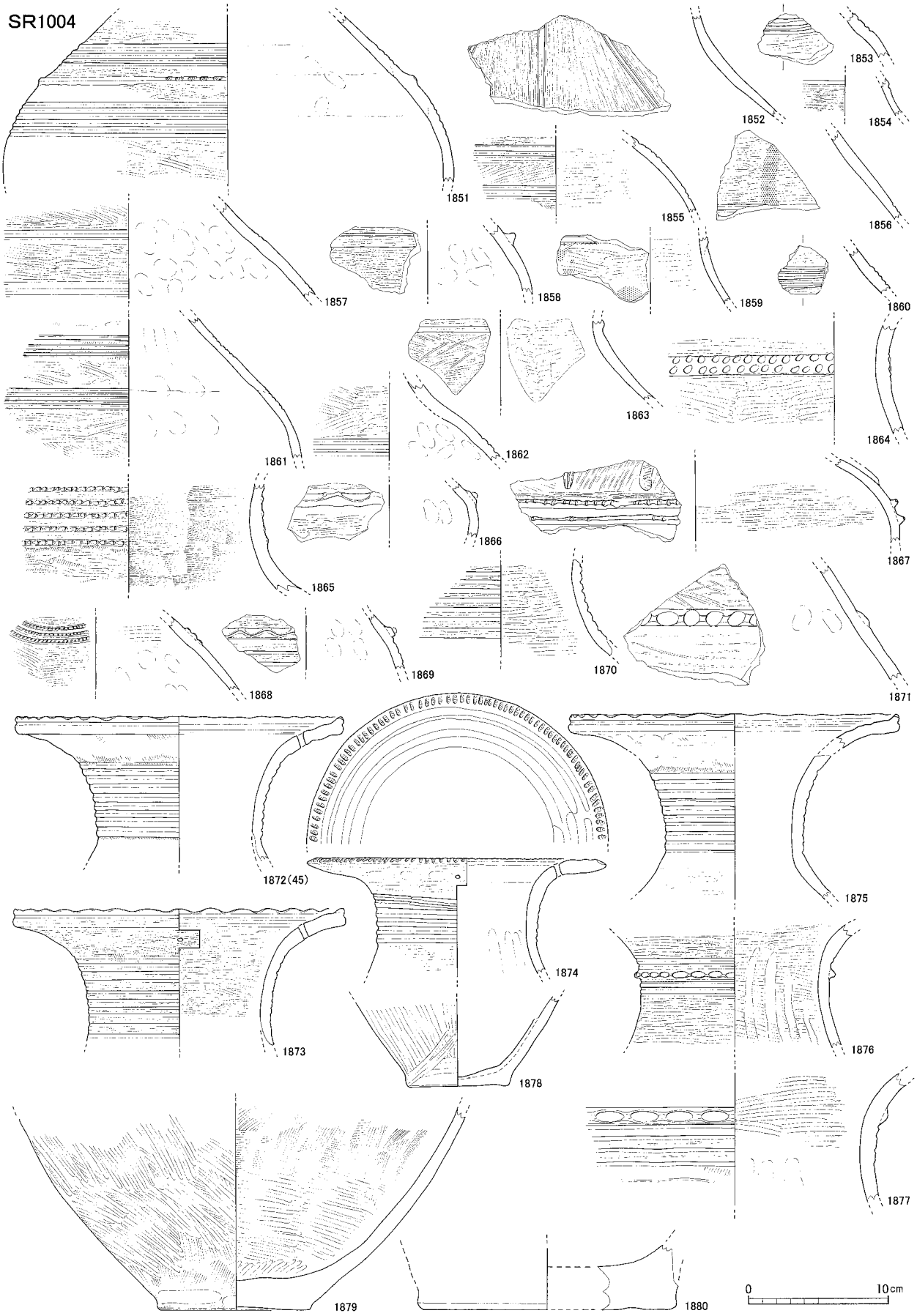
第88図　遺物実測図61（1：4）



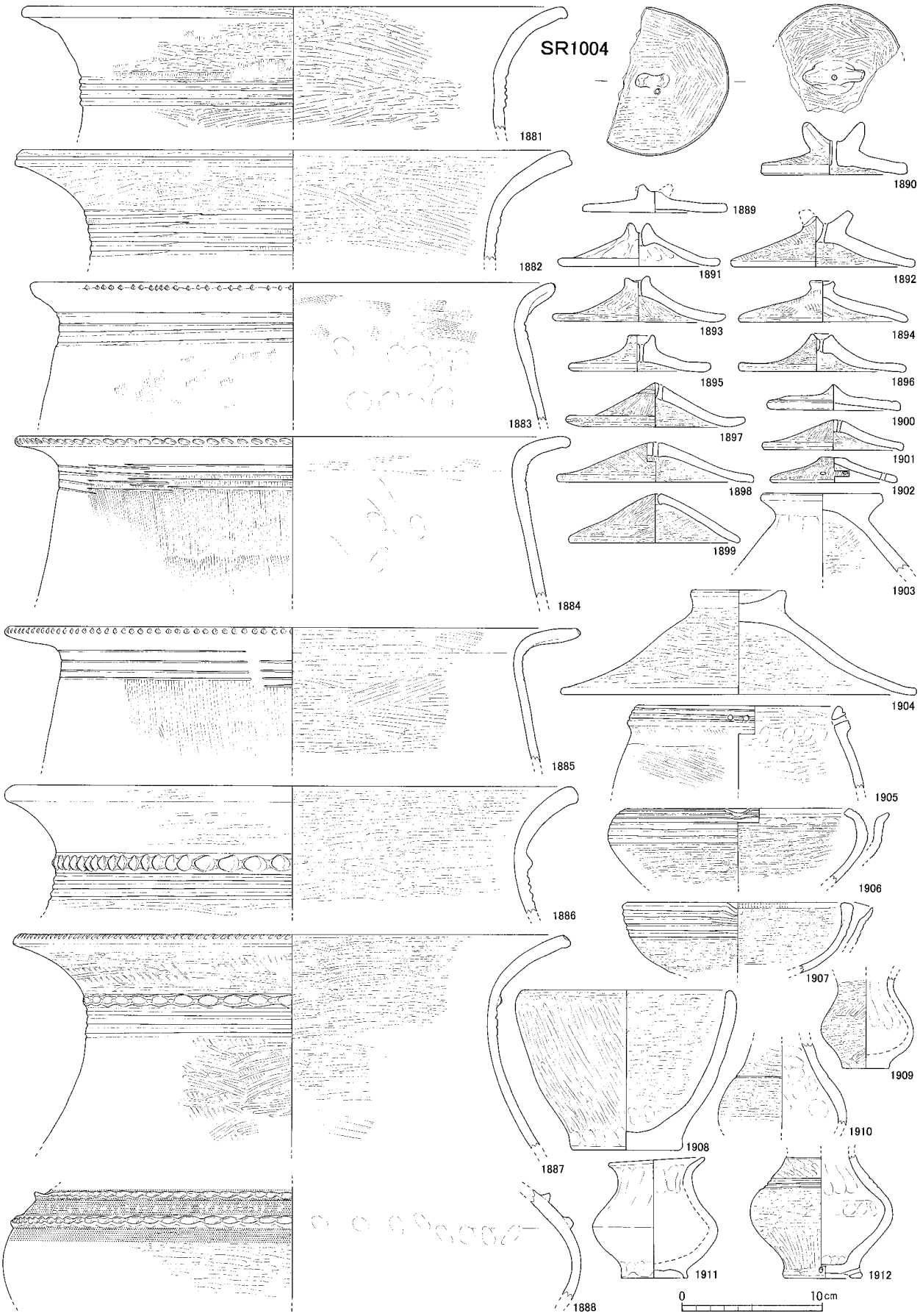
第89図　遺物実測図62（1：4）



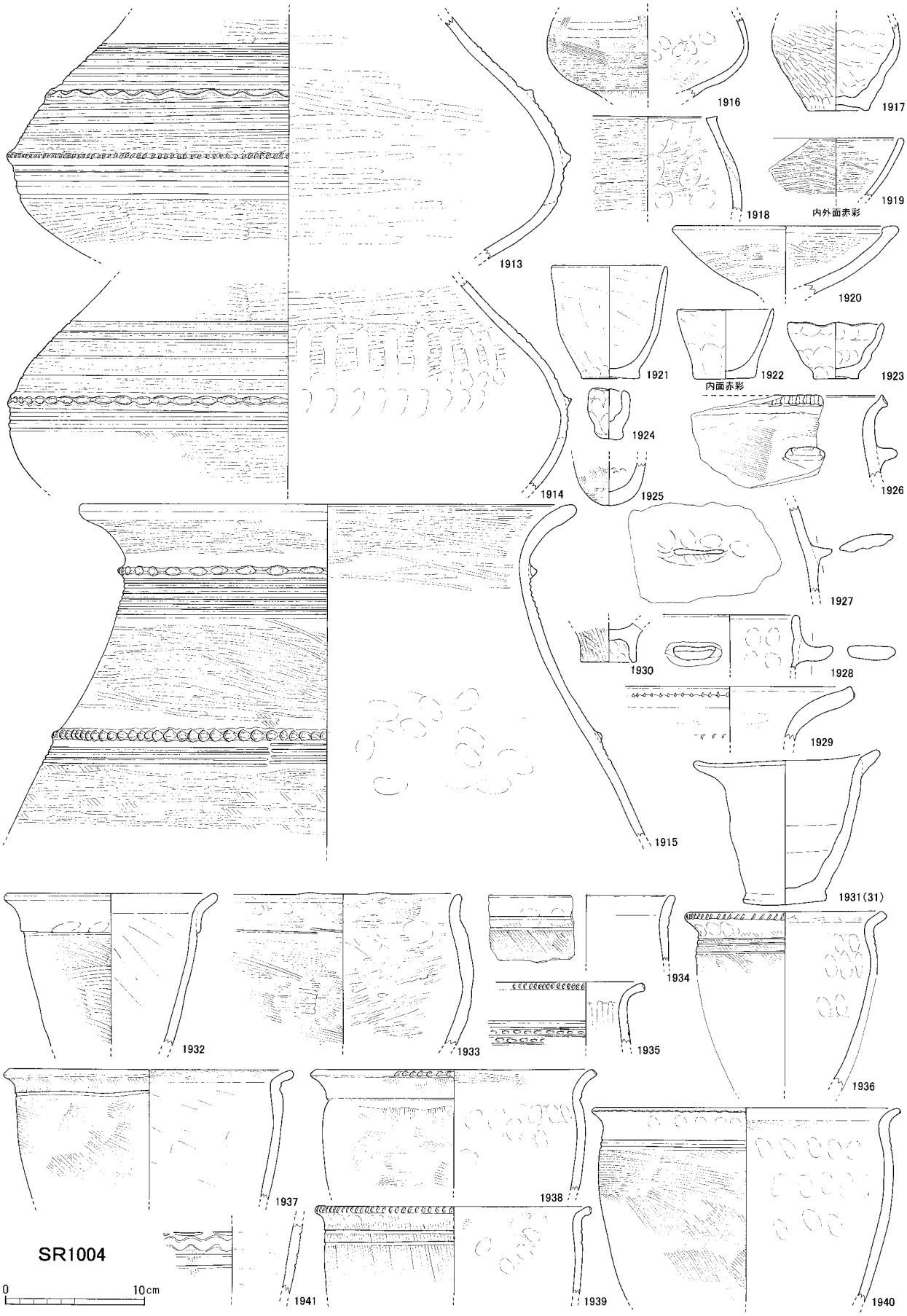
第90図　遺物実測図63（1：4）



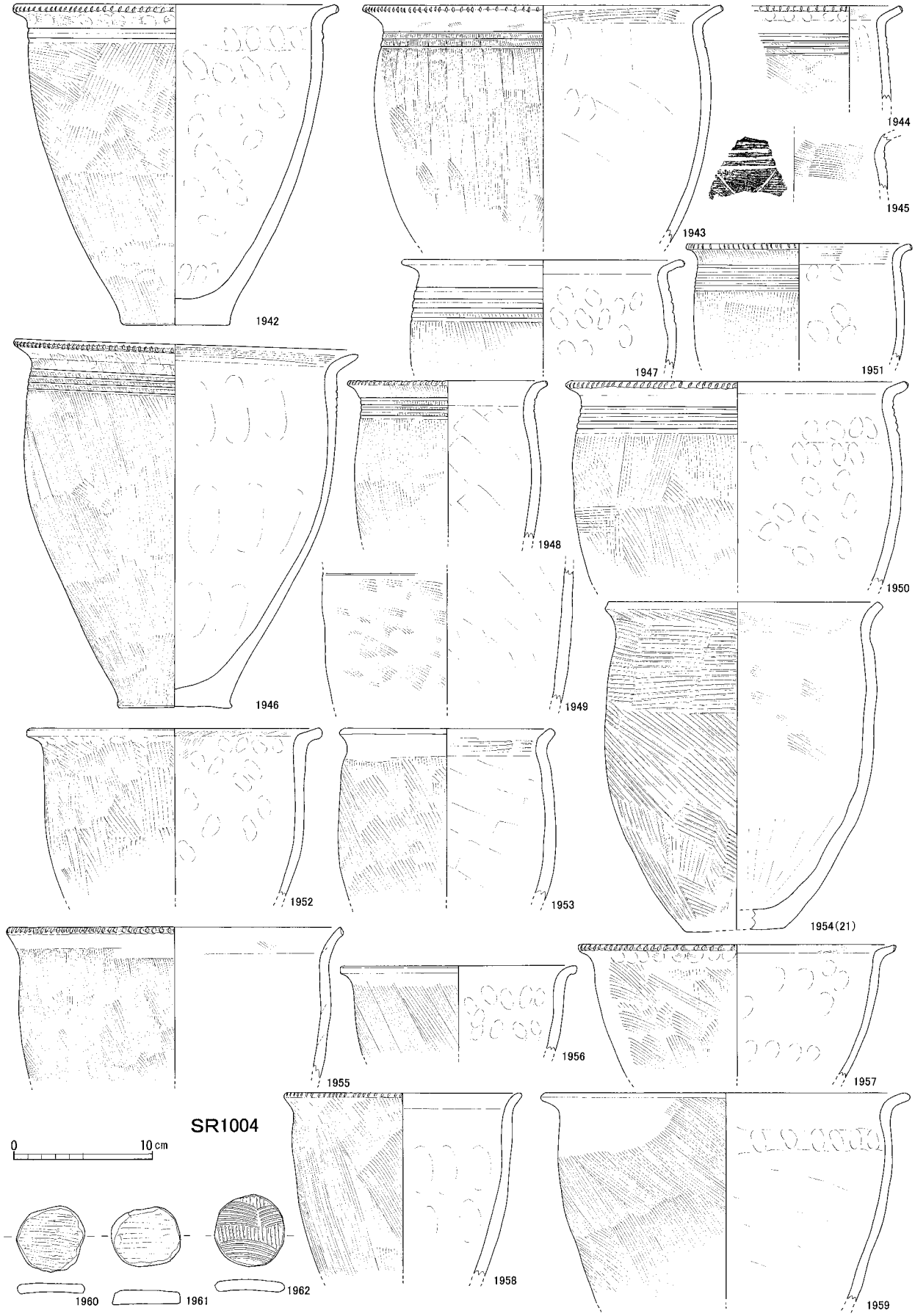
第91図　遺物実測図64（1：4）



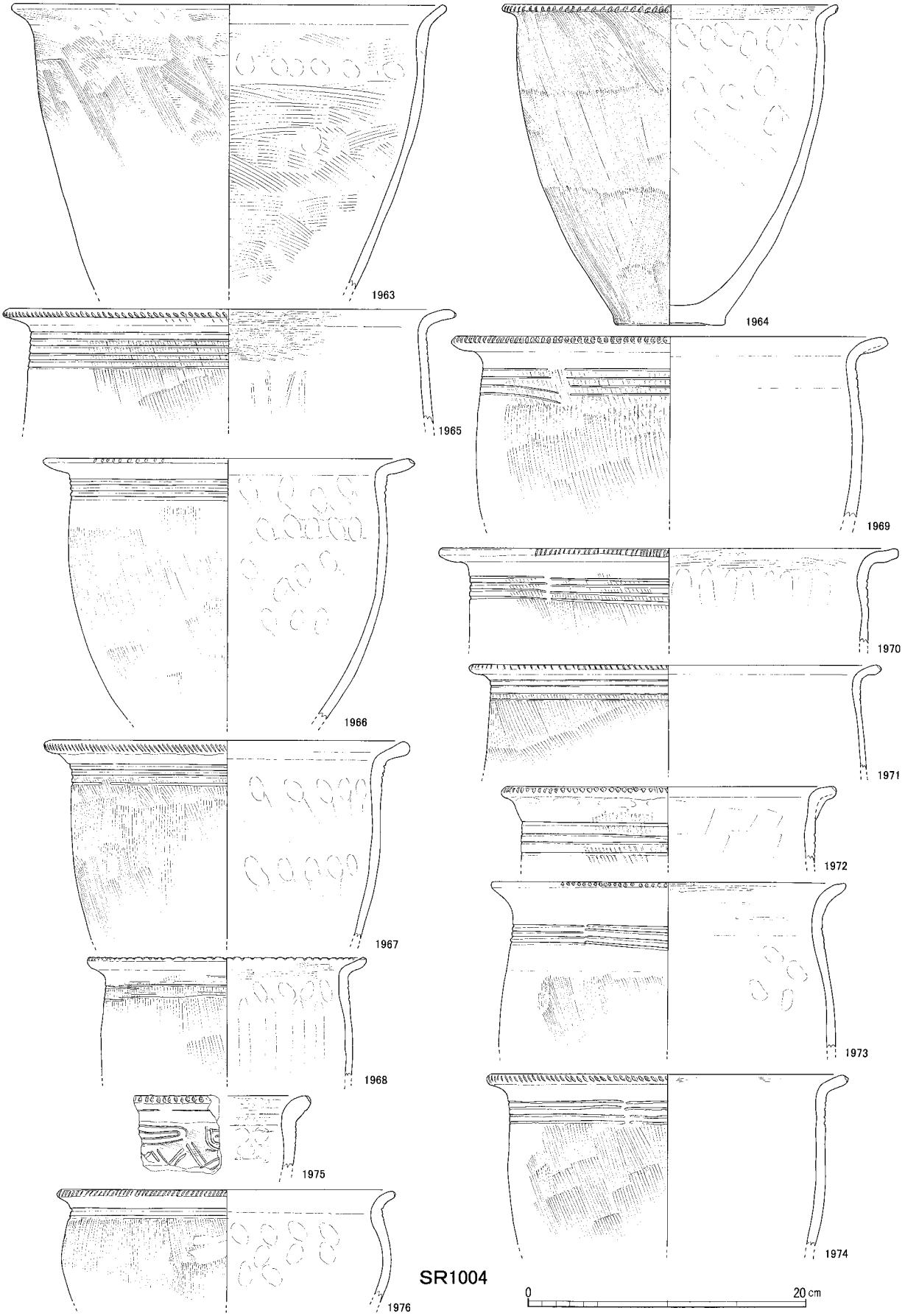
第92図　遺物実測図65（1：4）



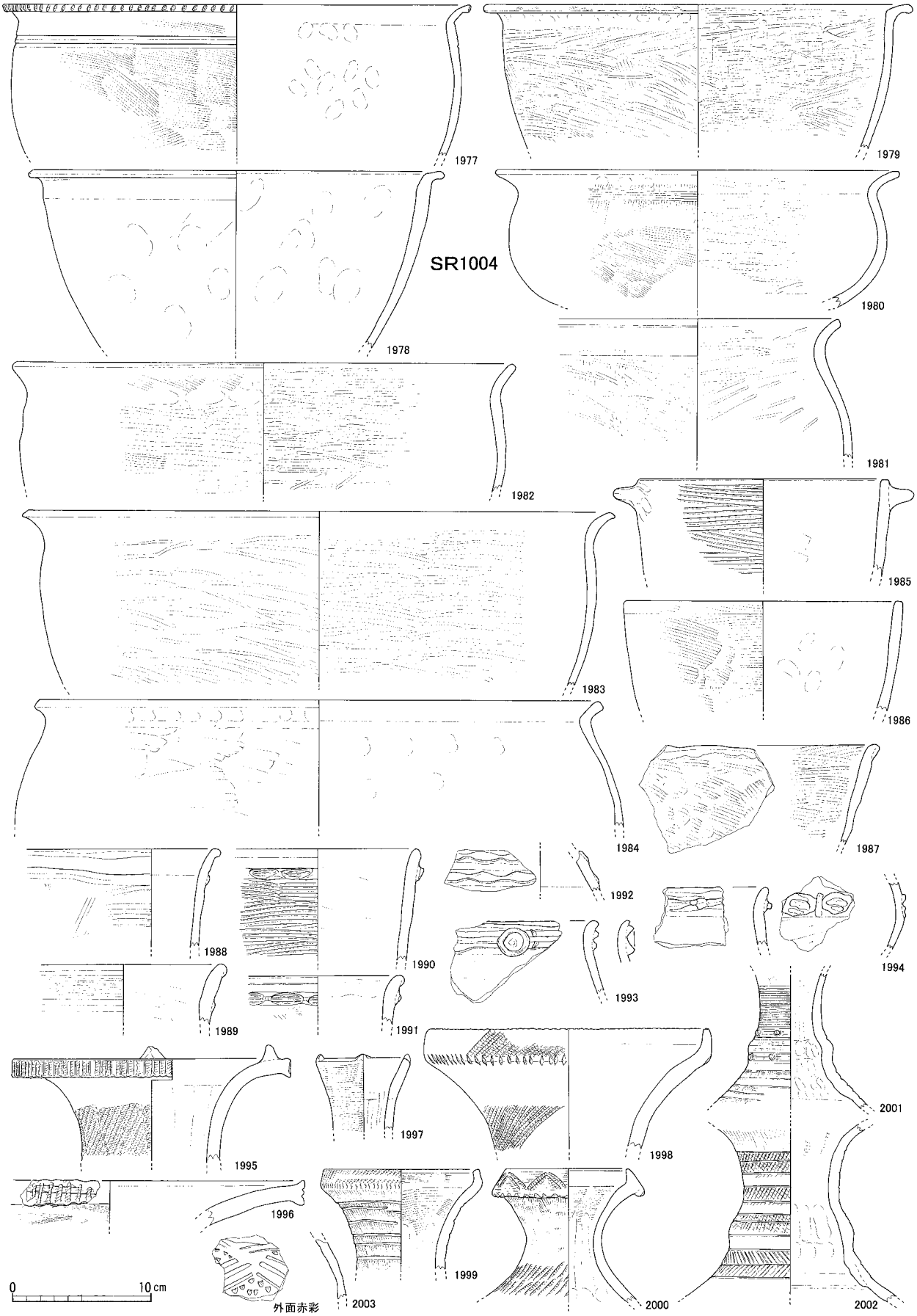
第93図　遺物実測図66（1：4）



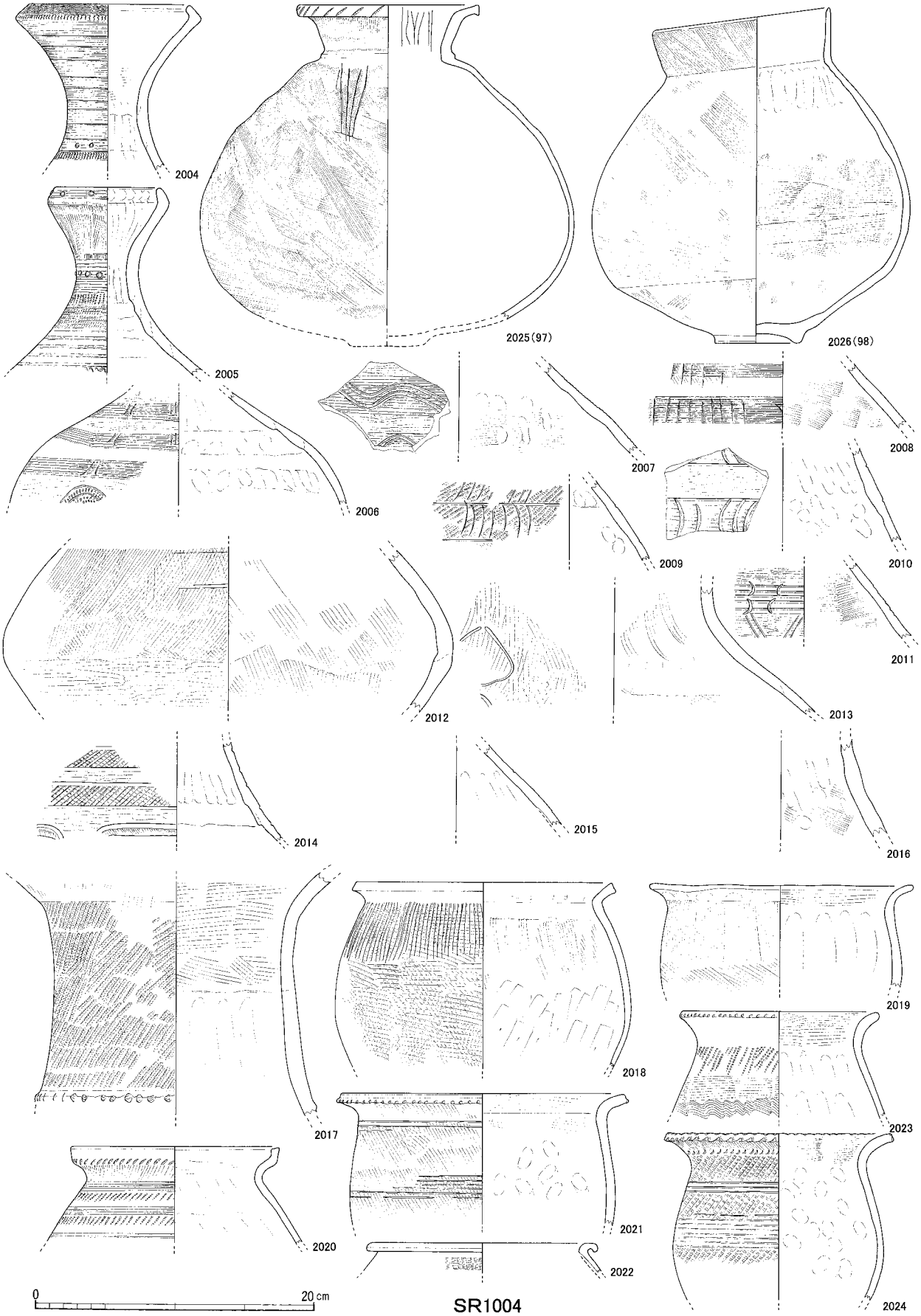
第94図　遺物実測図67（1：4）



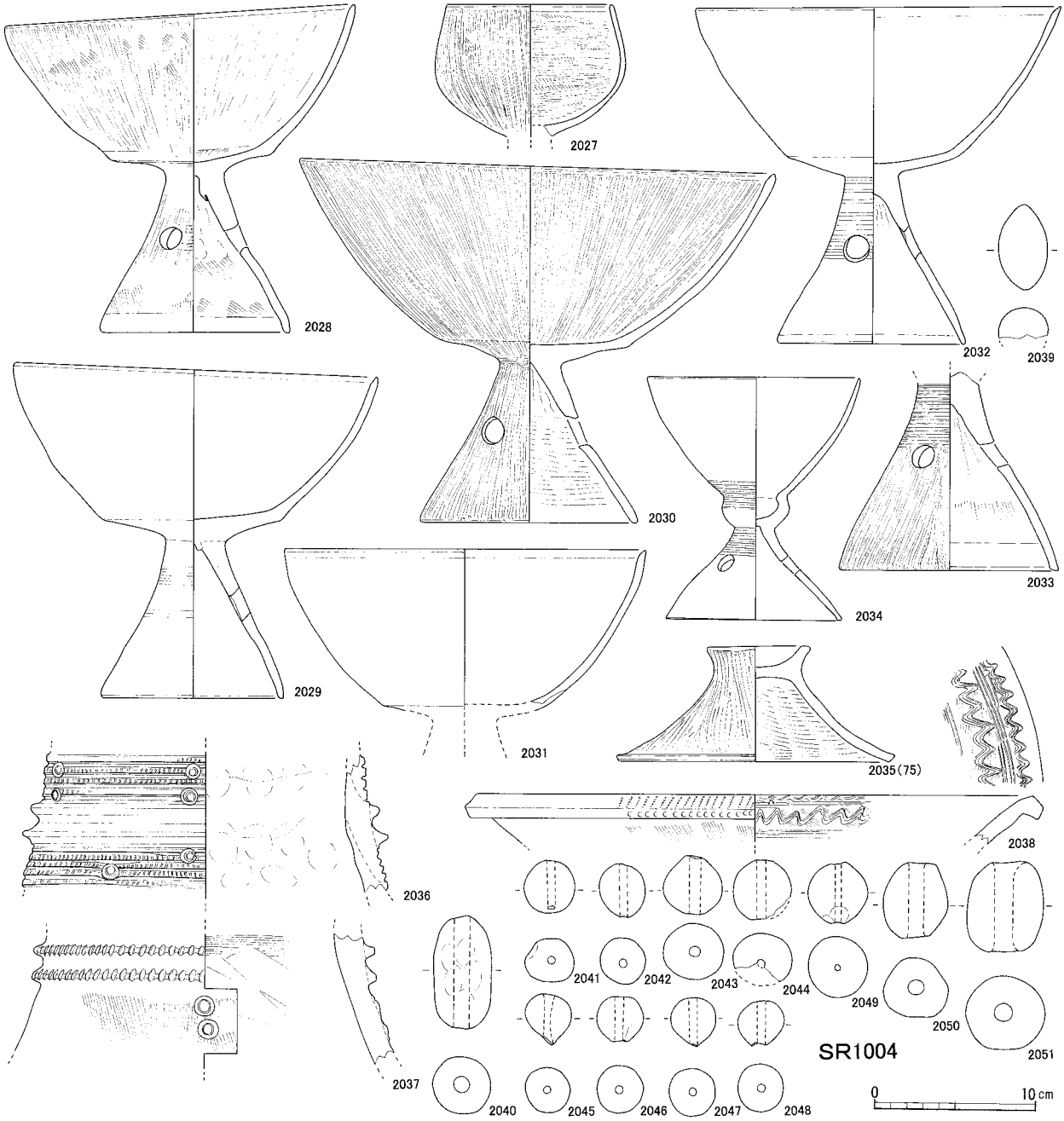
第95図　遺物実測図68（1：4）



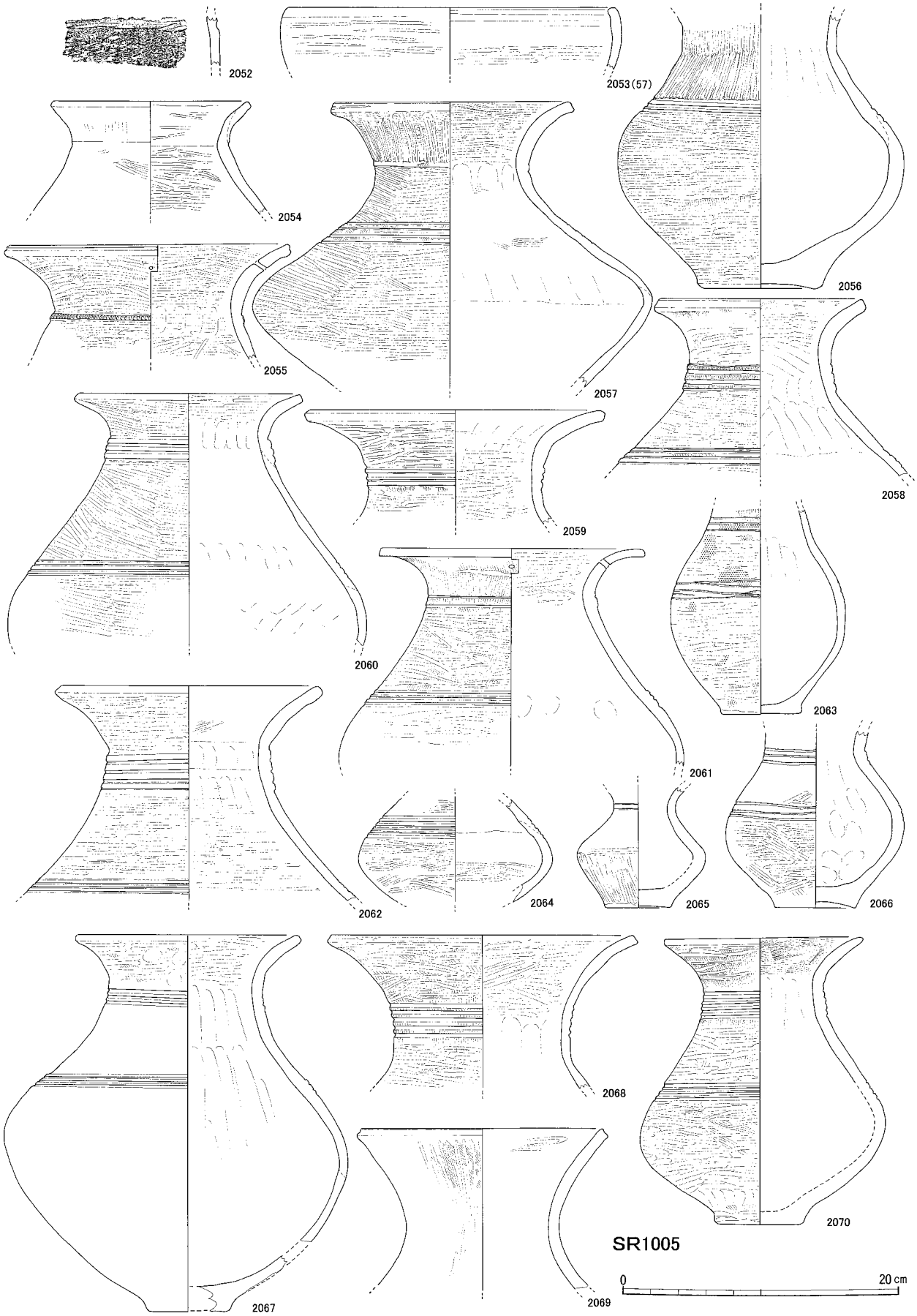
第96図　遺物実測図69（1：4）



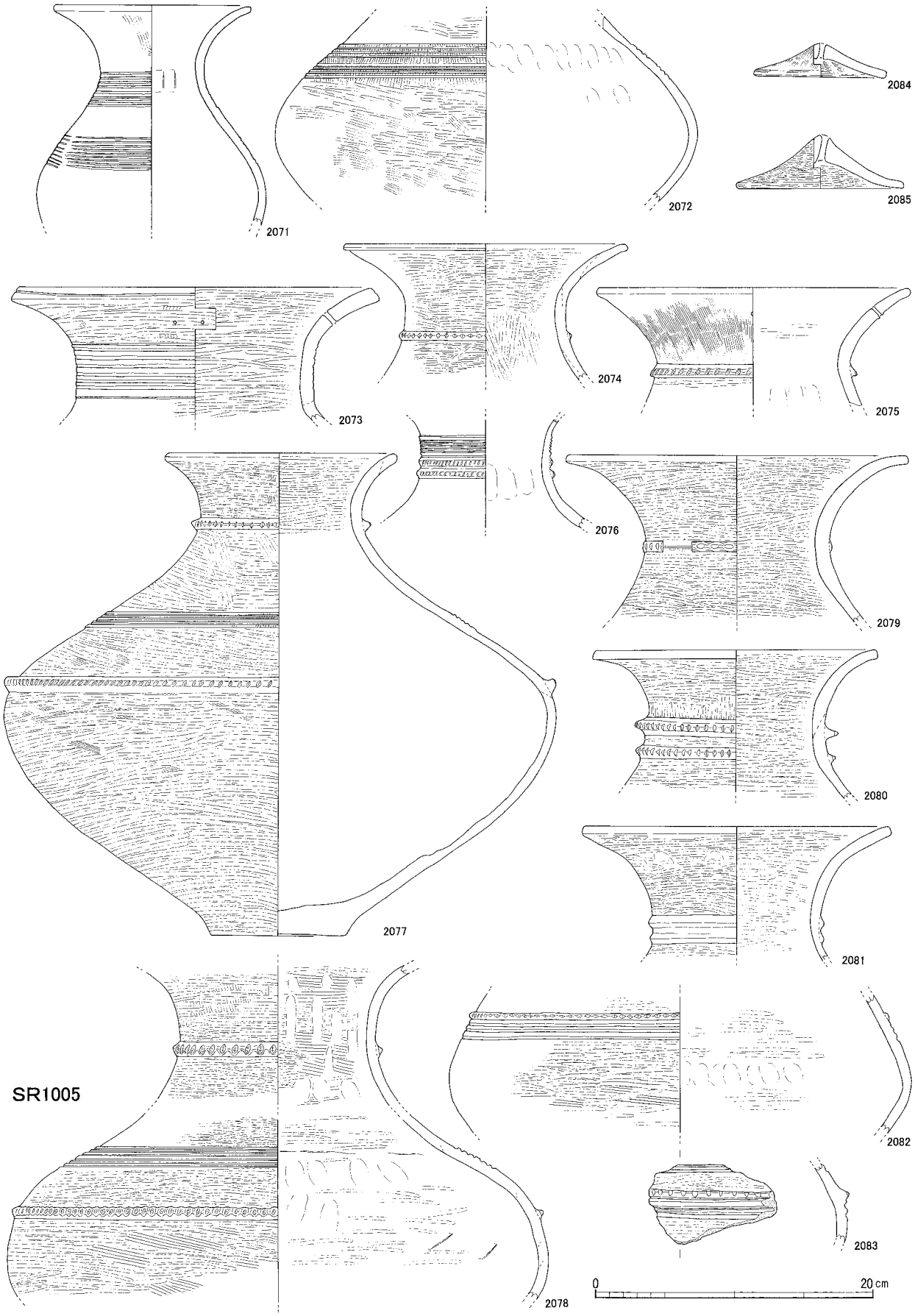
第97図　遺物実測図70（1：4）



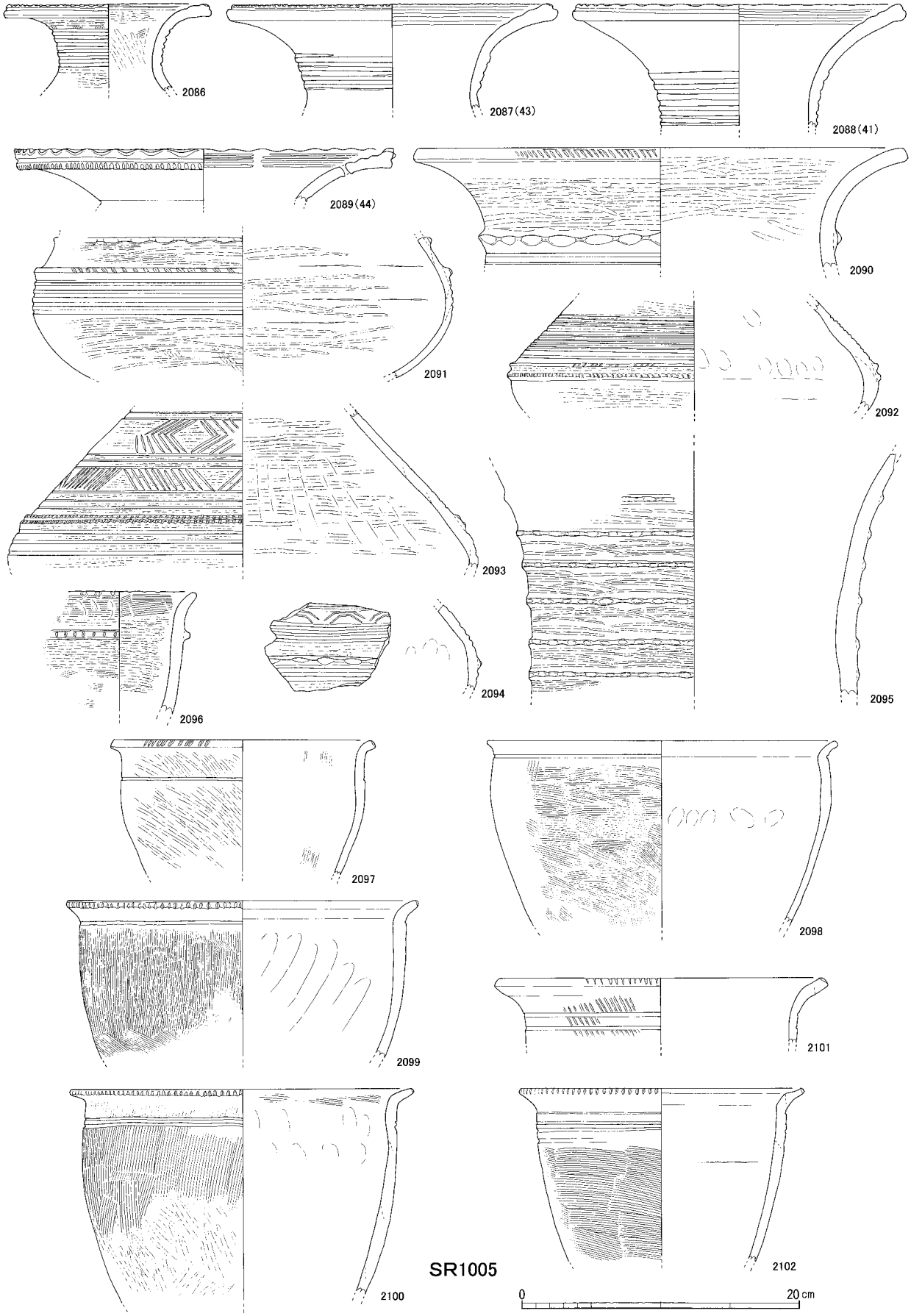
第98図　遺物実測図71（1：4）



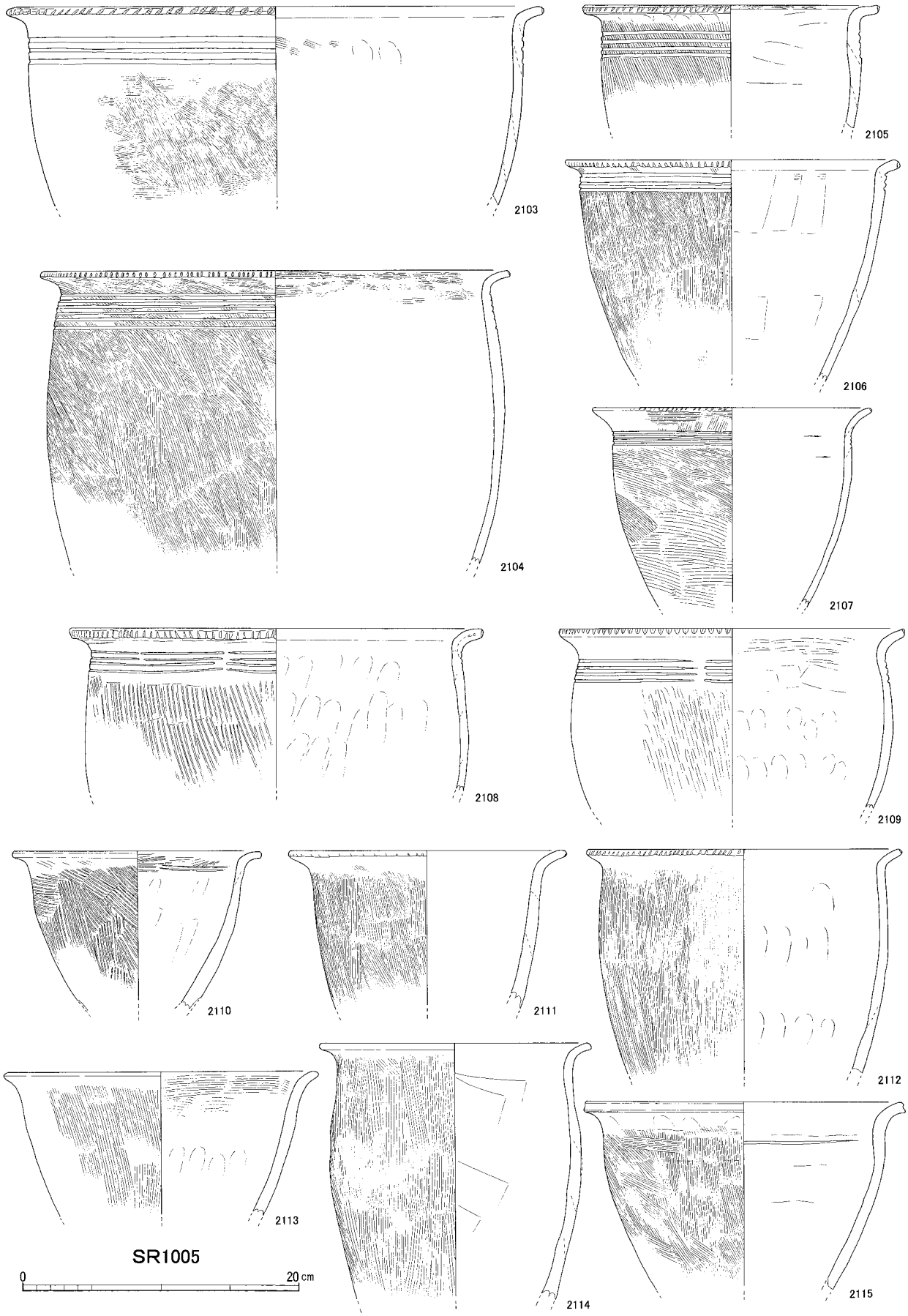
第99図　遺物実測図72（1：4）



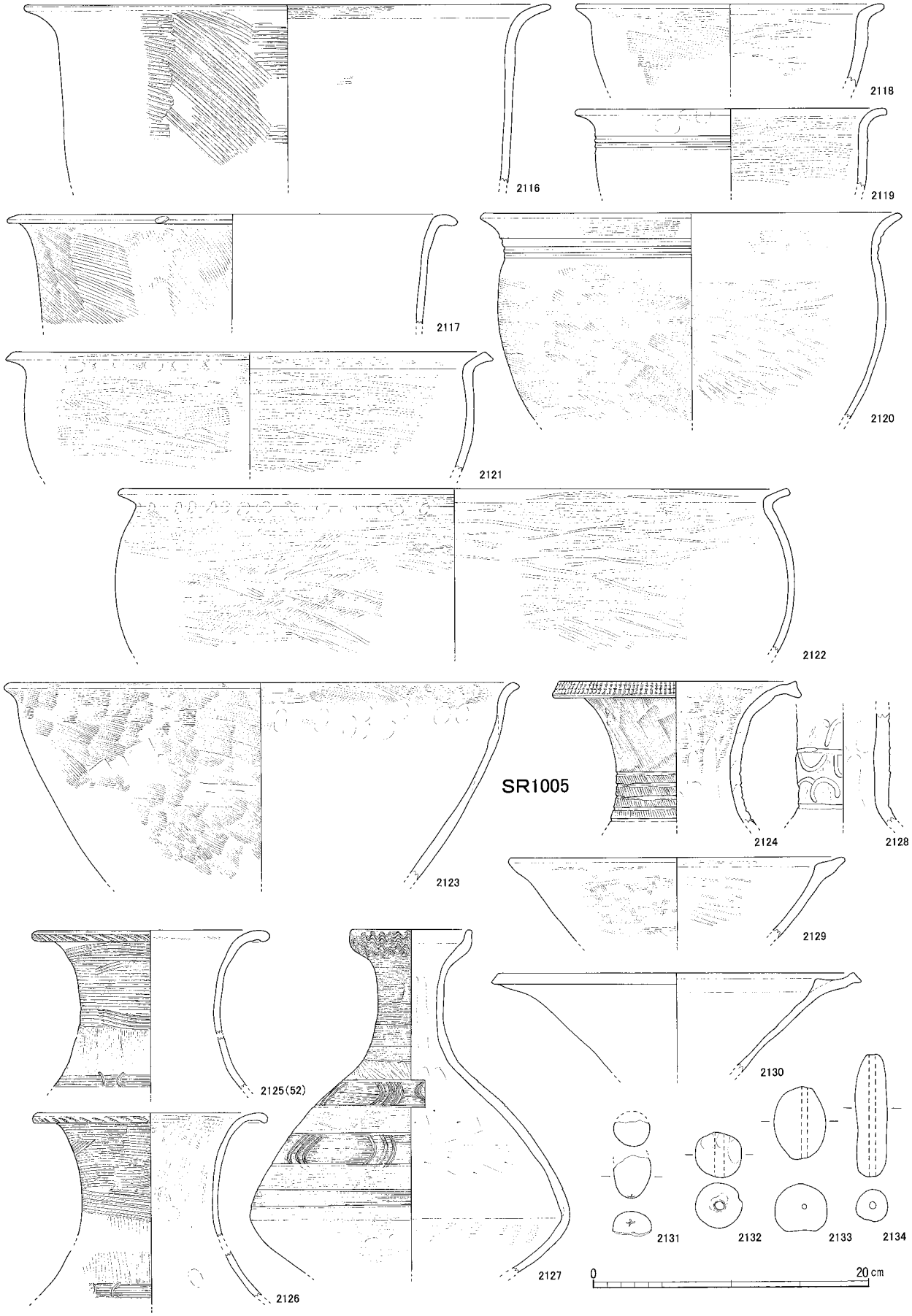
第100図　遺物実測図73（1：4）



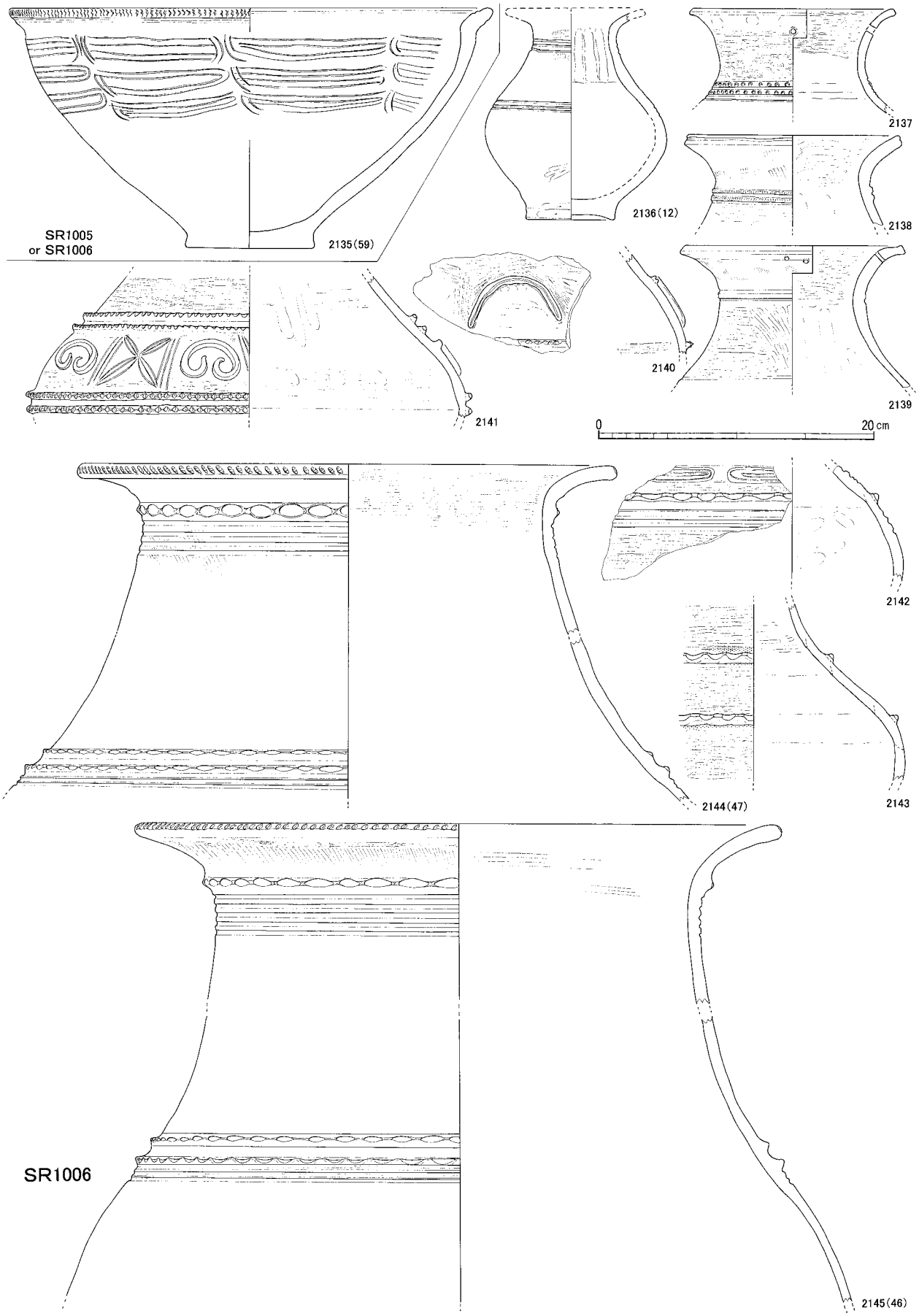
第101図　遺物実測図74（1：4）



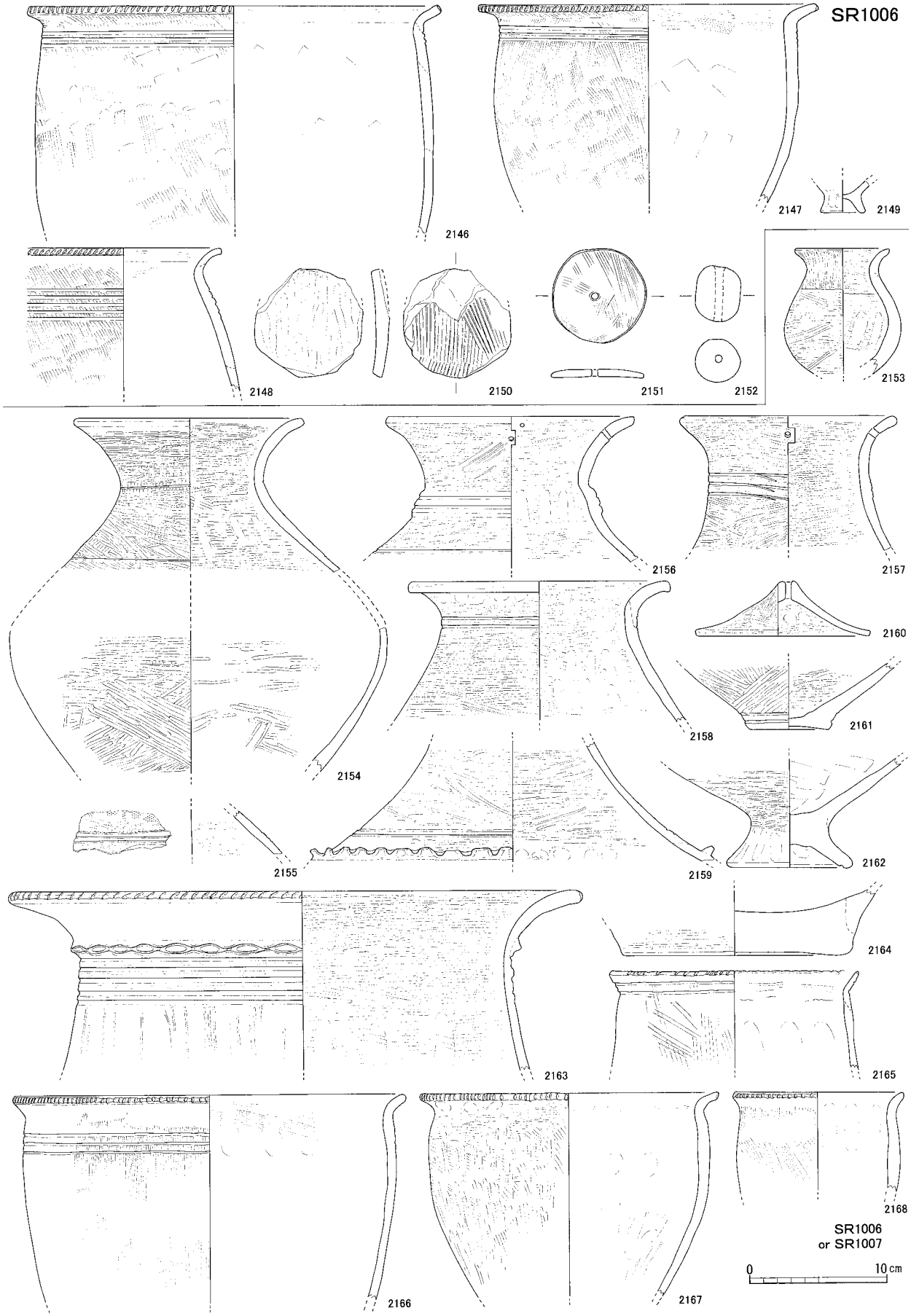
第102図　遺物実測図75（1：4）



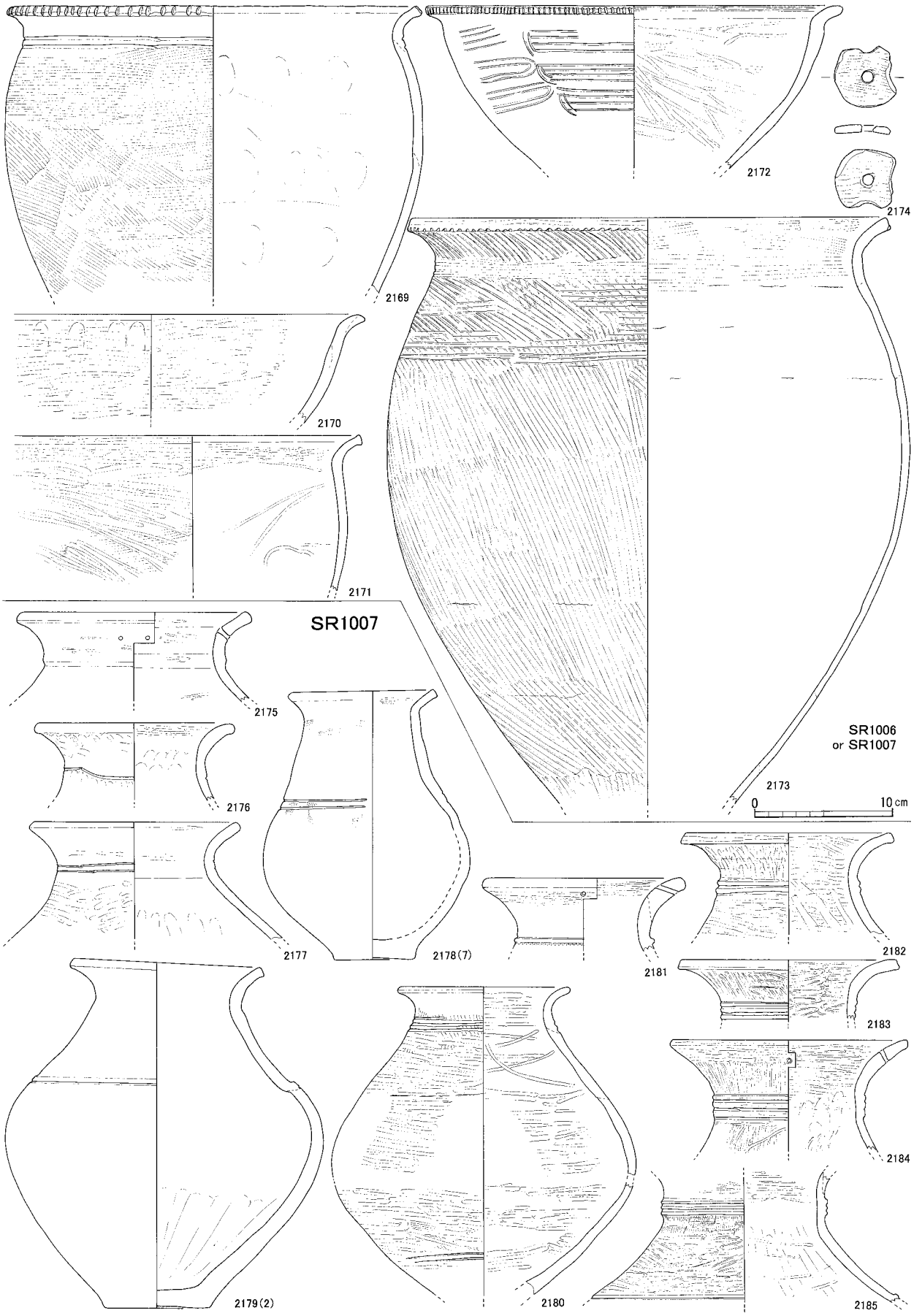
第103図　遺物実測図76（1：4）



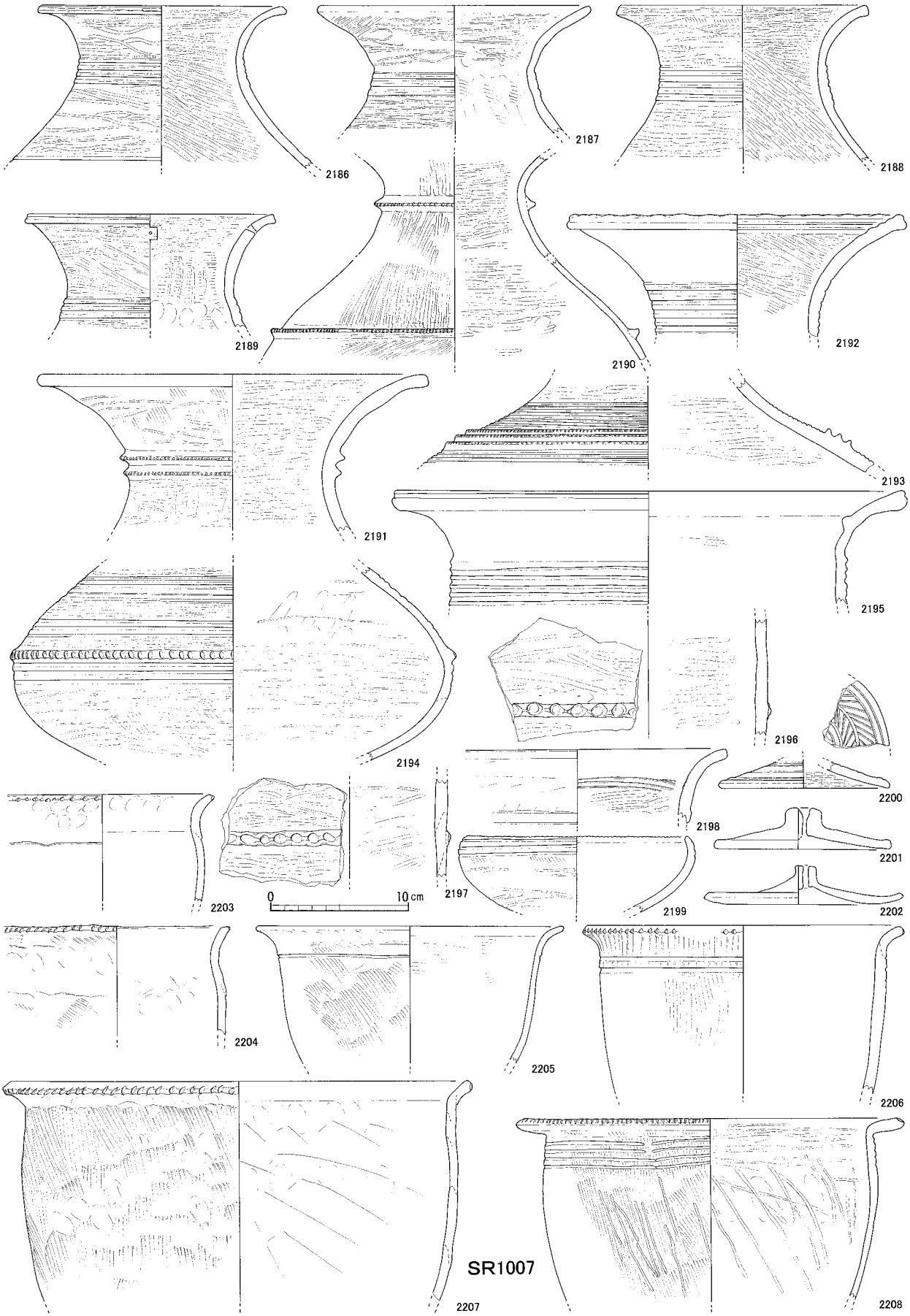
第104図　遺物実測図77（1：4）



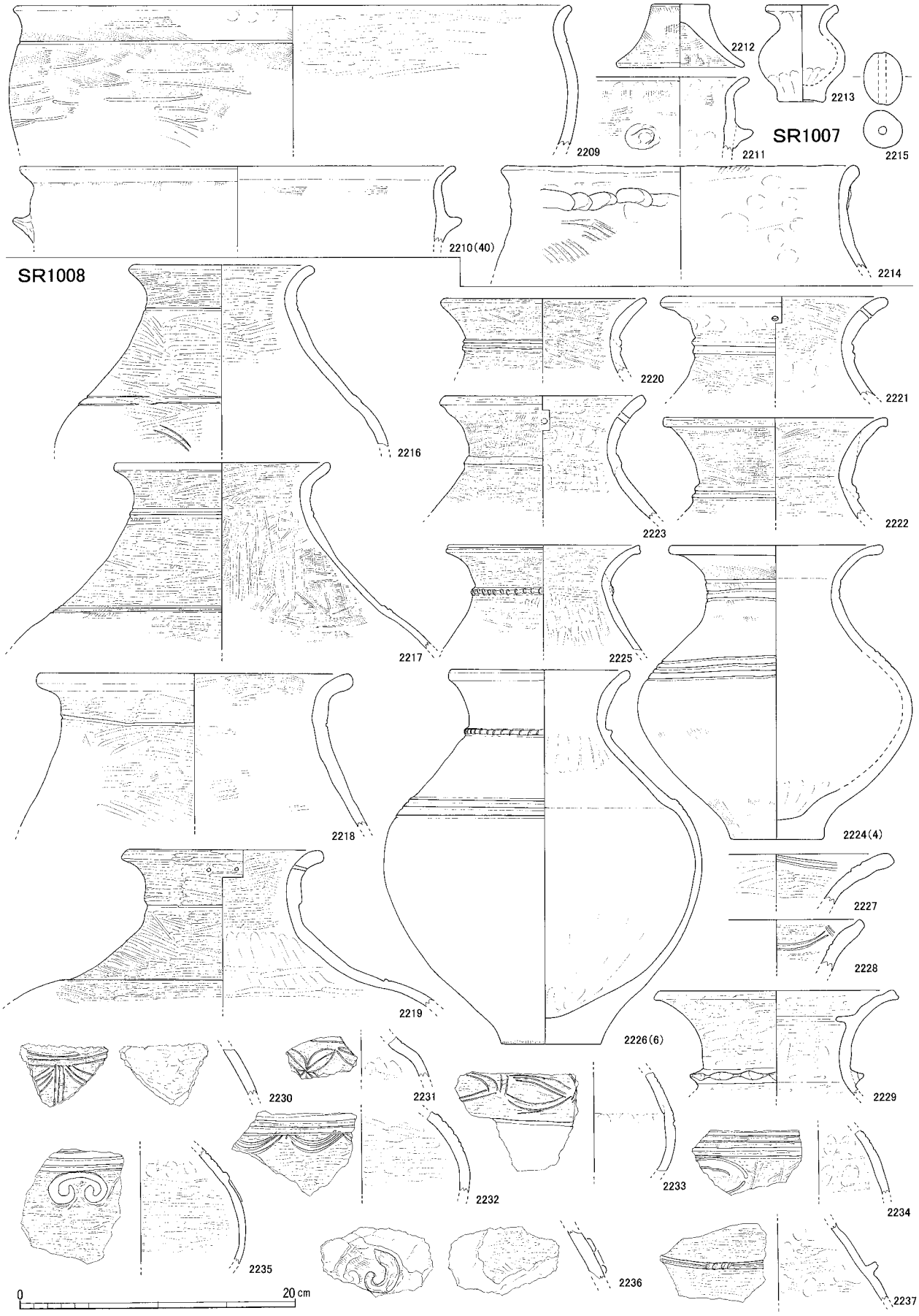
第105図　遺物実測図78（1：4）



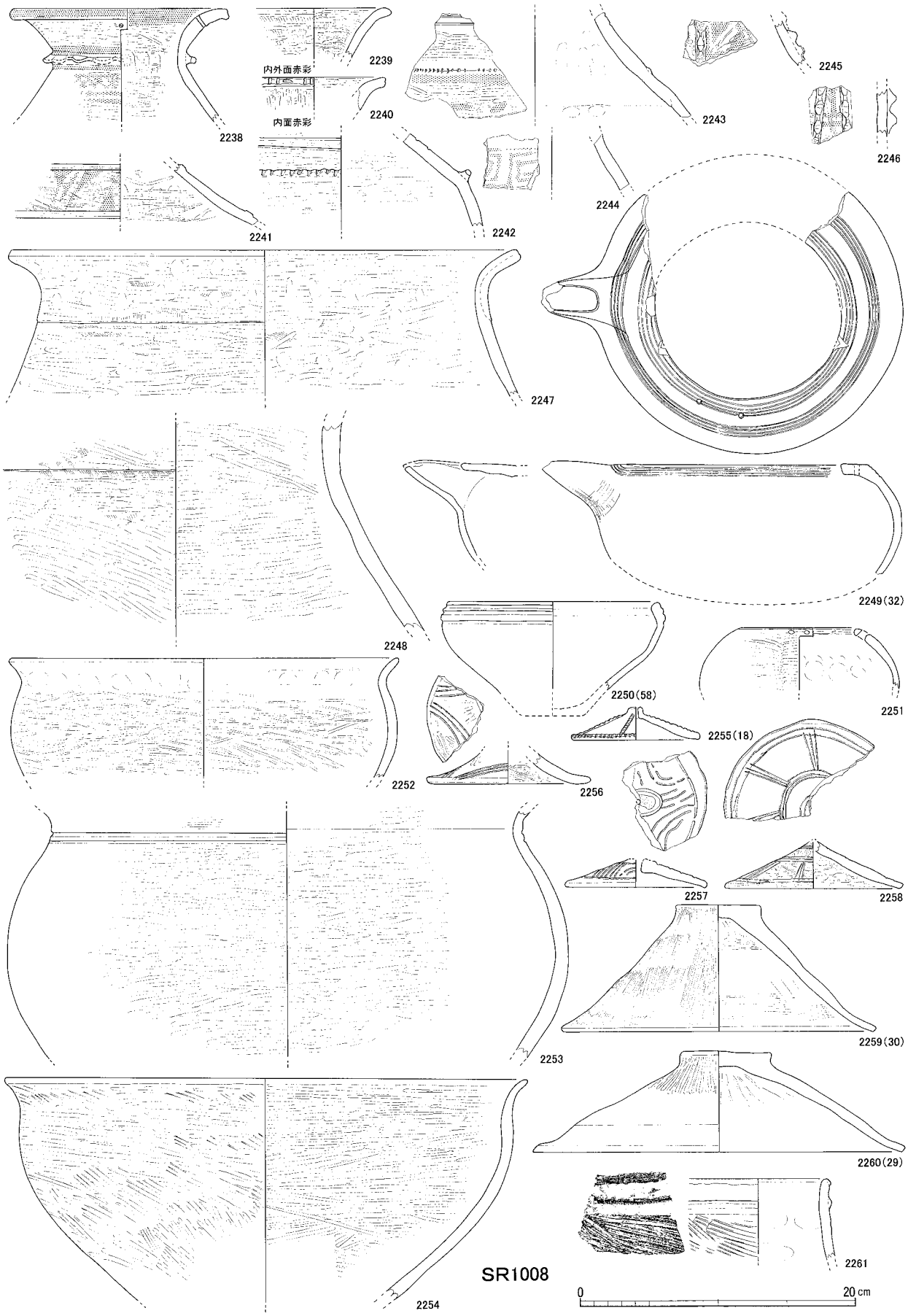
第106図　遺物実測図79（1：4）



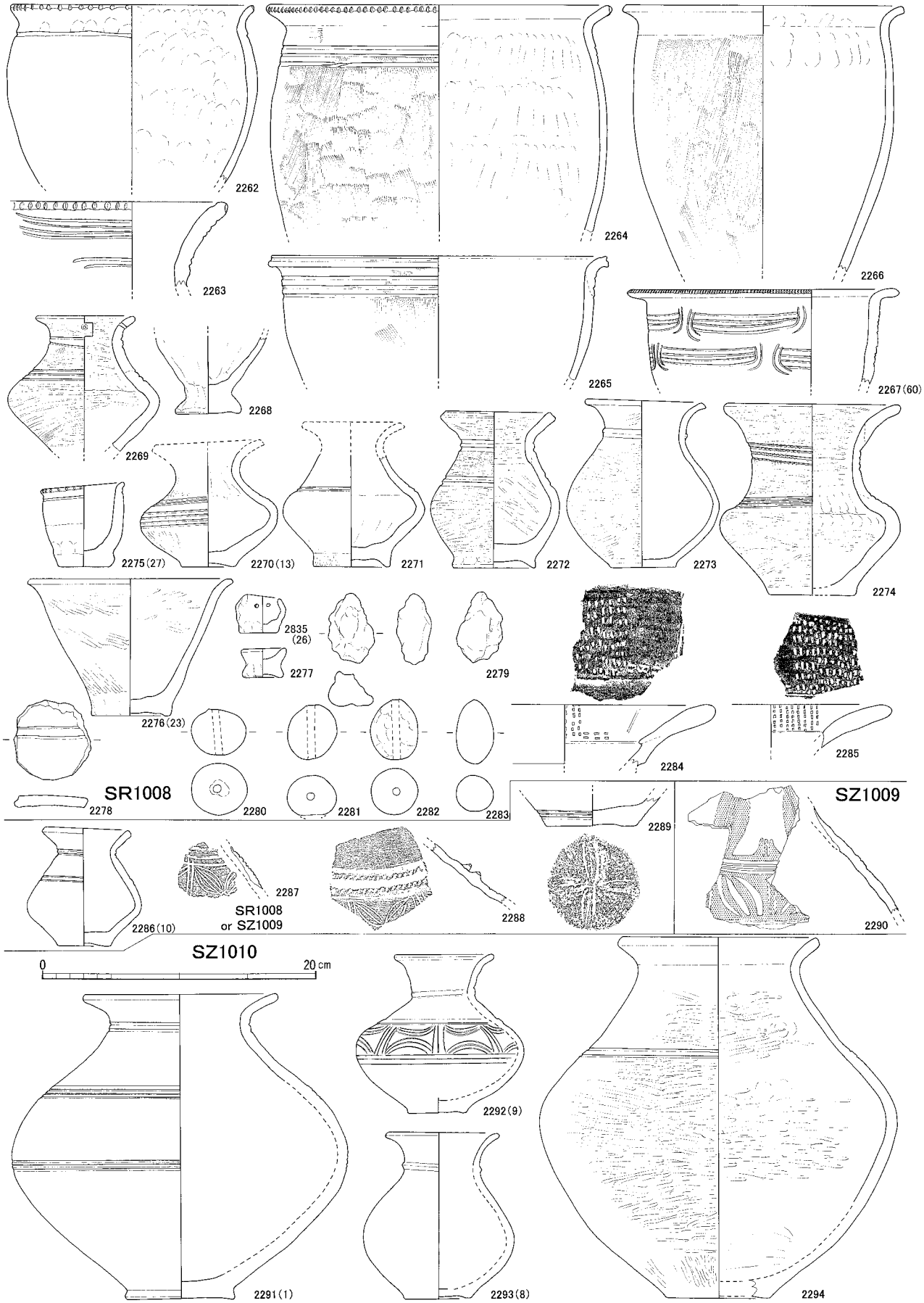
第107図　遺物実測図80（1：4）



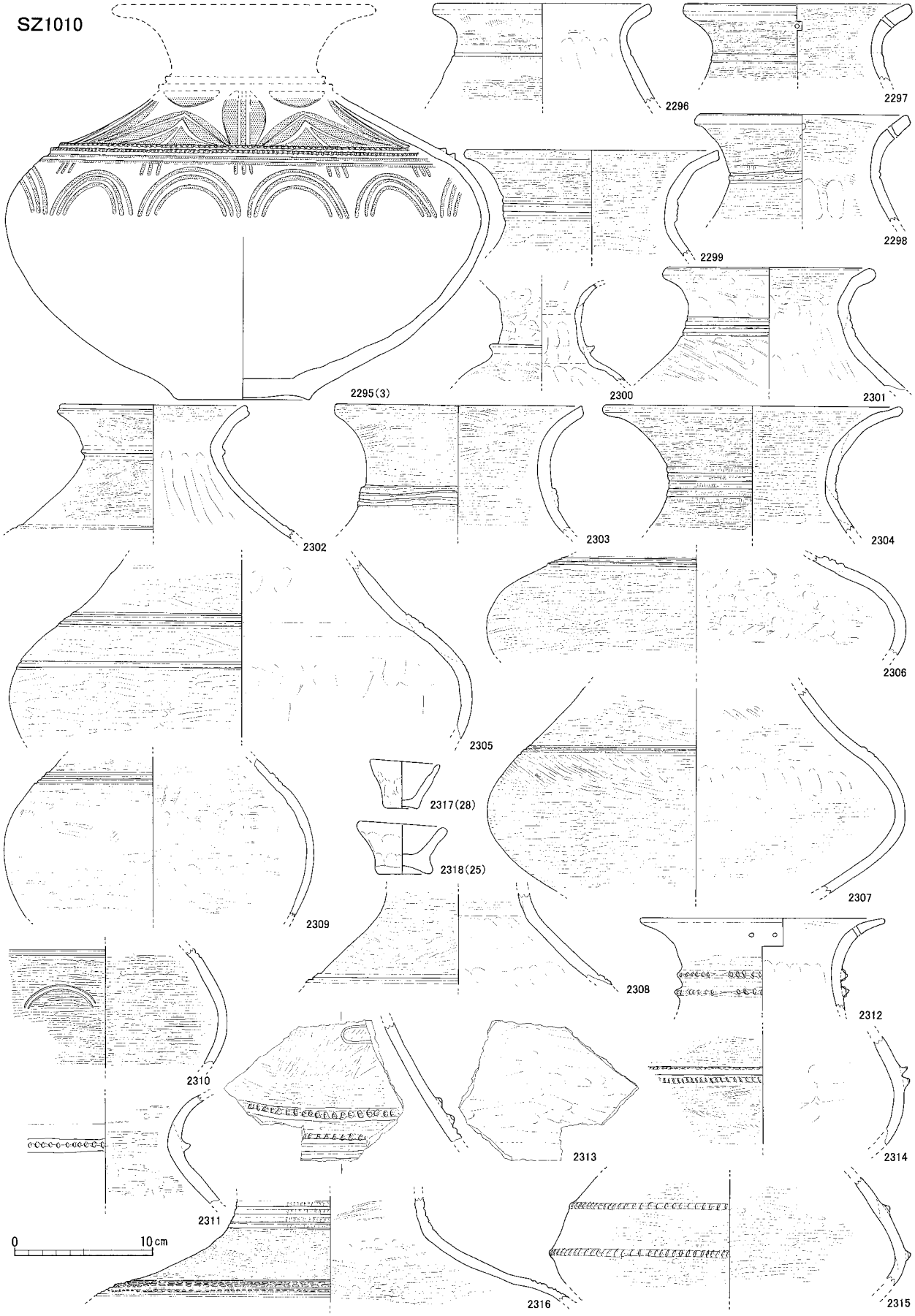
第108図　遺物実測図81（1：4）



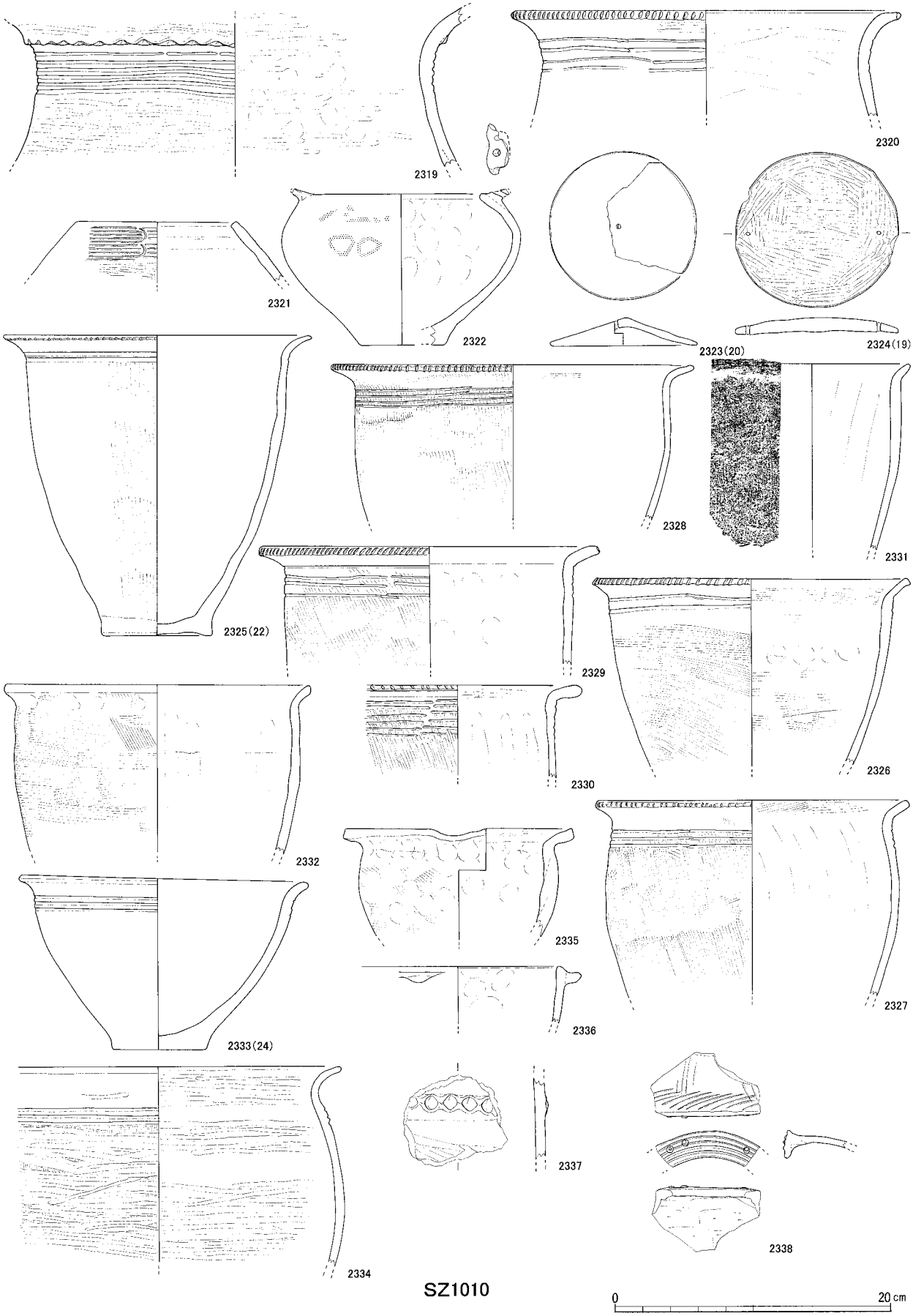
第109図　遺物実測図82（1：4）



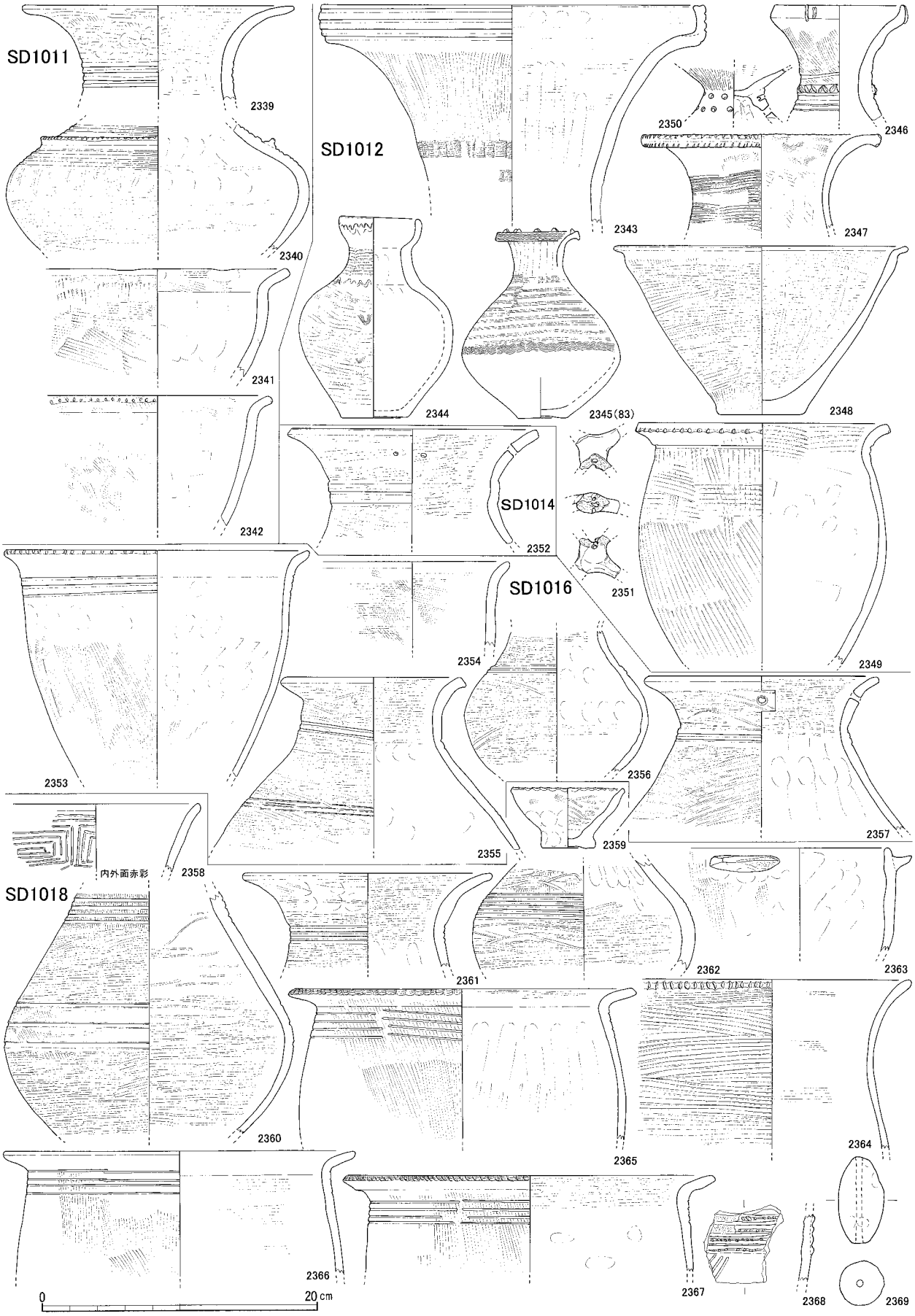
第110図　遺物実測図83（1：4）



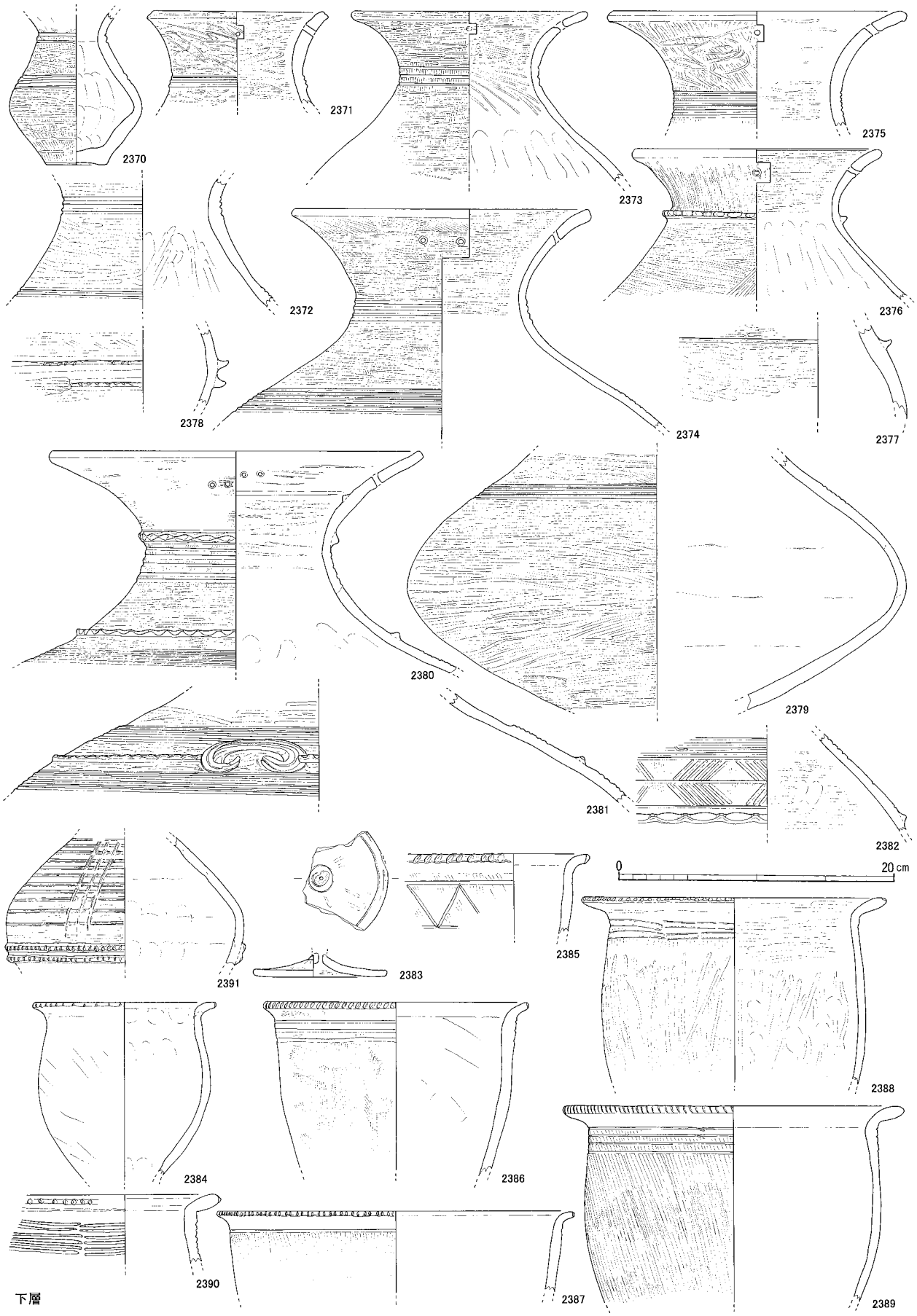
第111図　遺物実測図84（1：4）



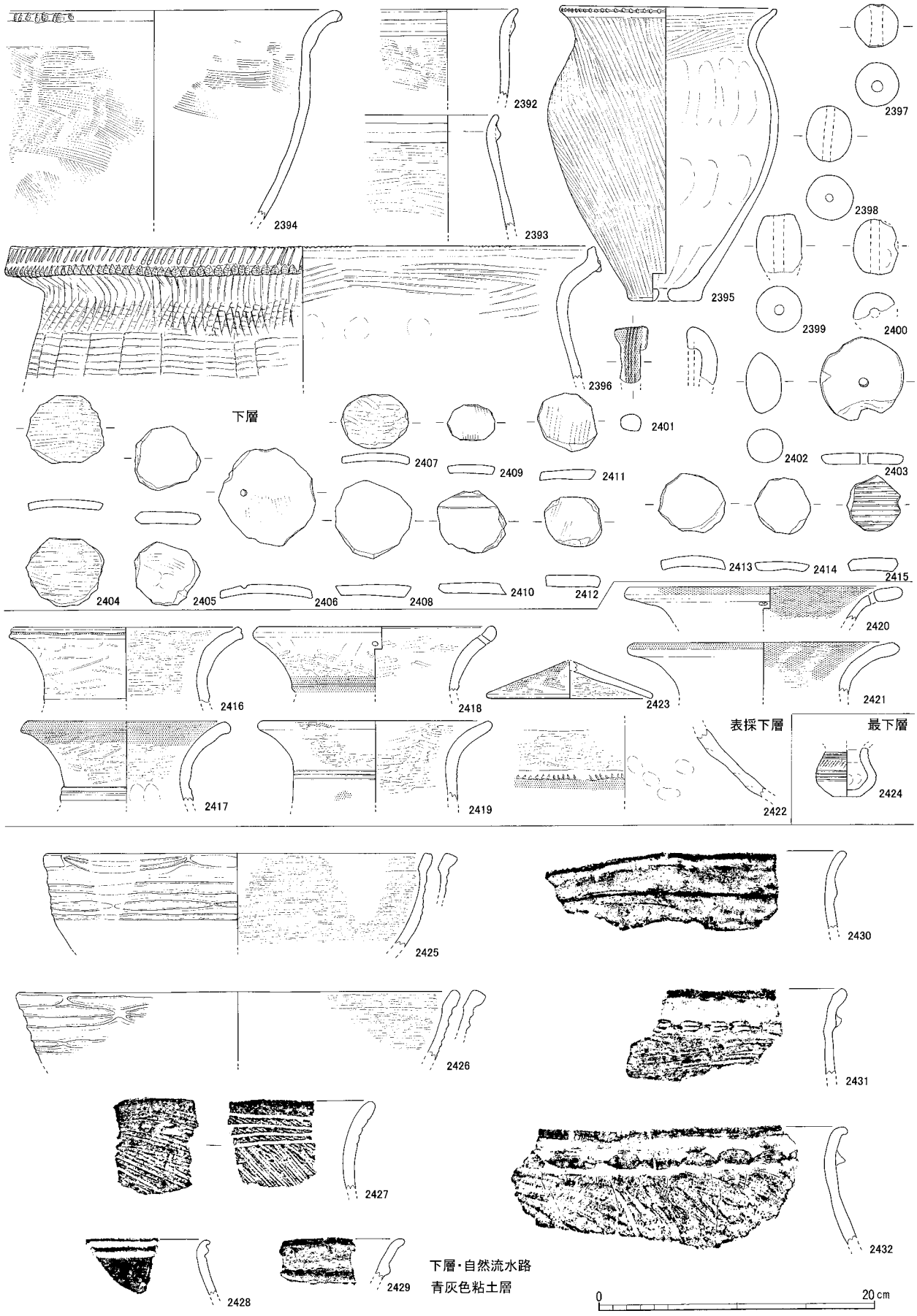
第112図　遺物実測図85（1：4）



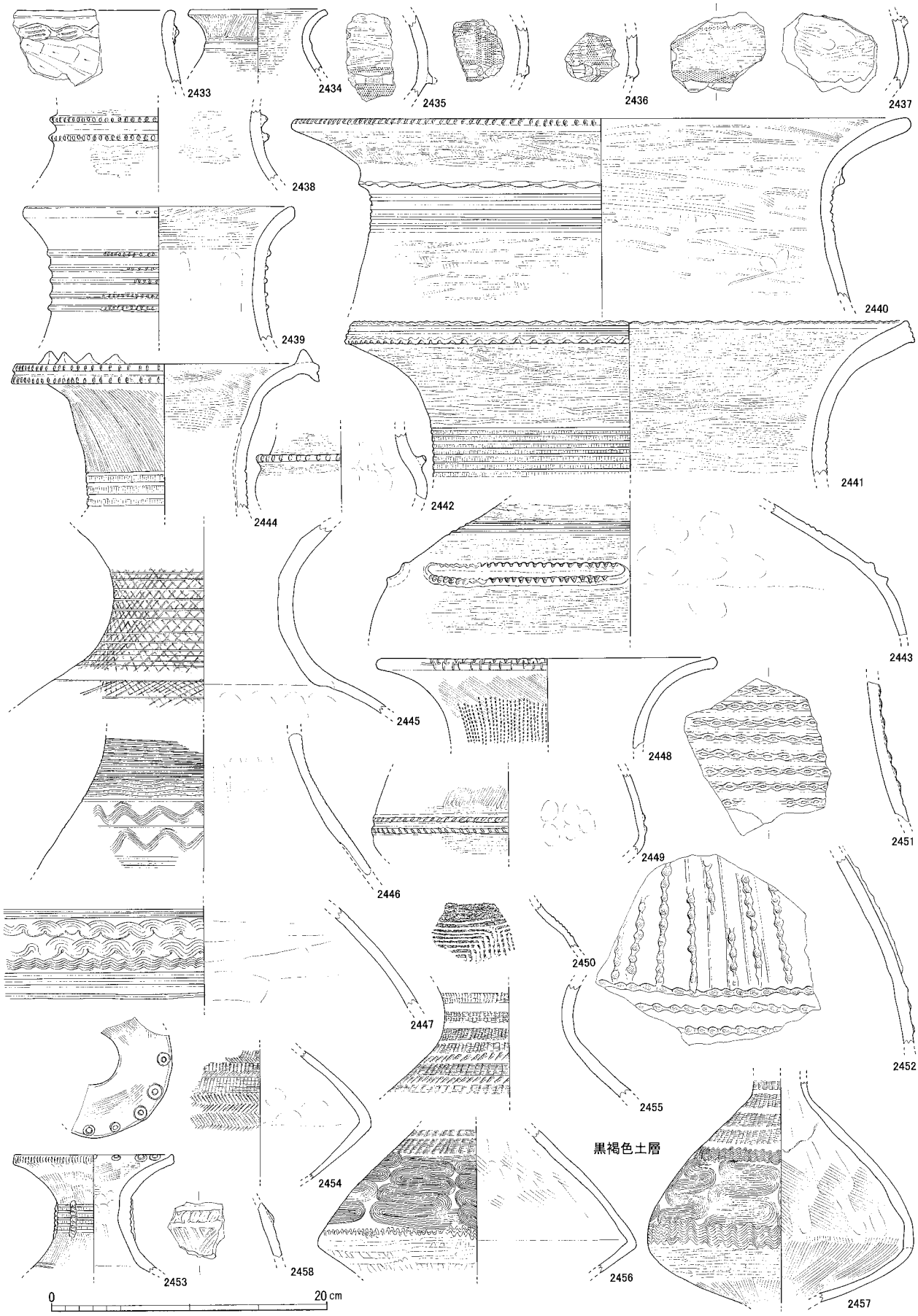
第113図　遺物実測図86（1：4）



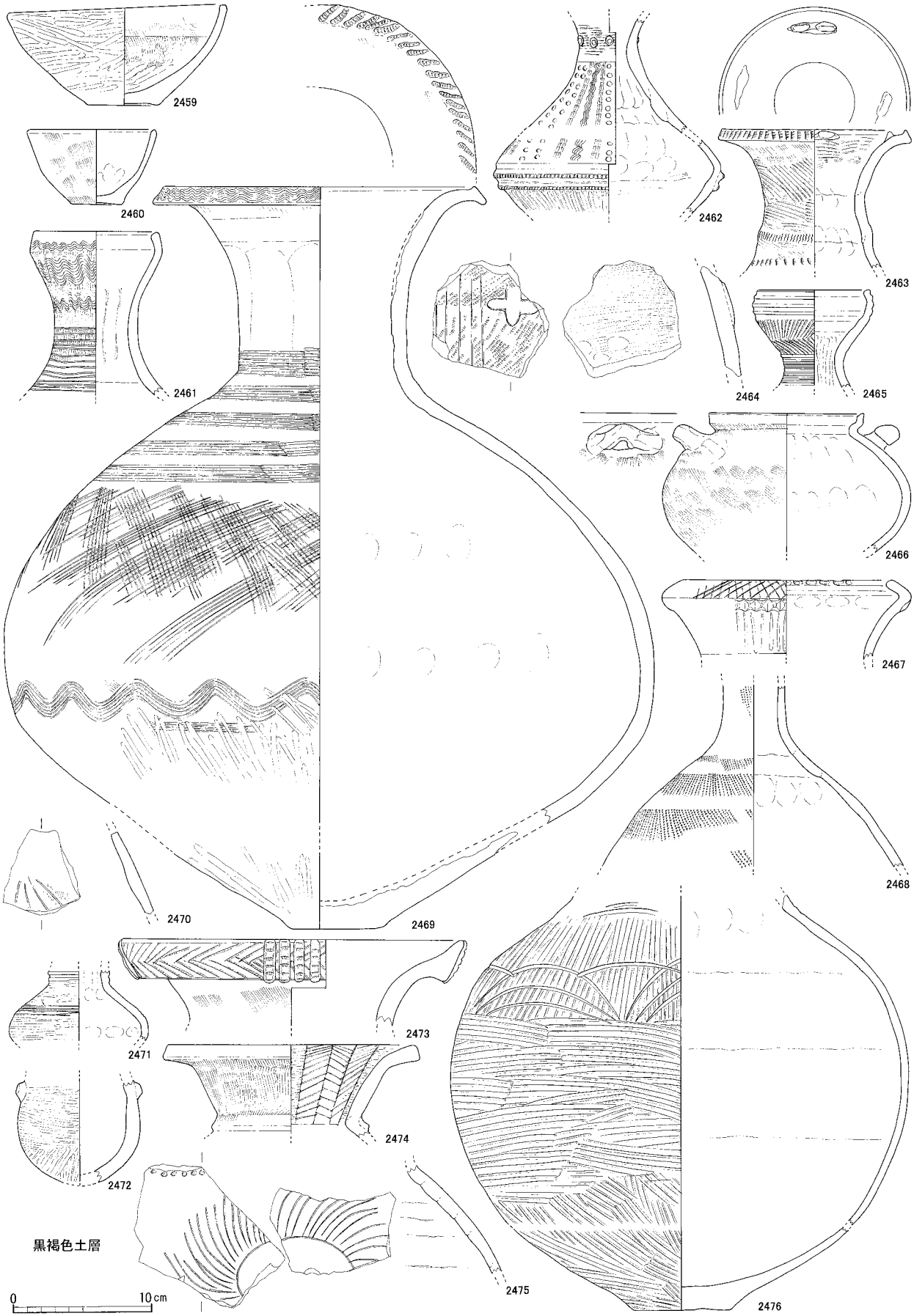
第114図　遺物実測図87（1：4）



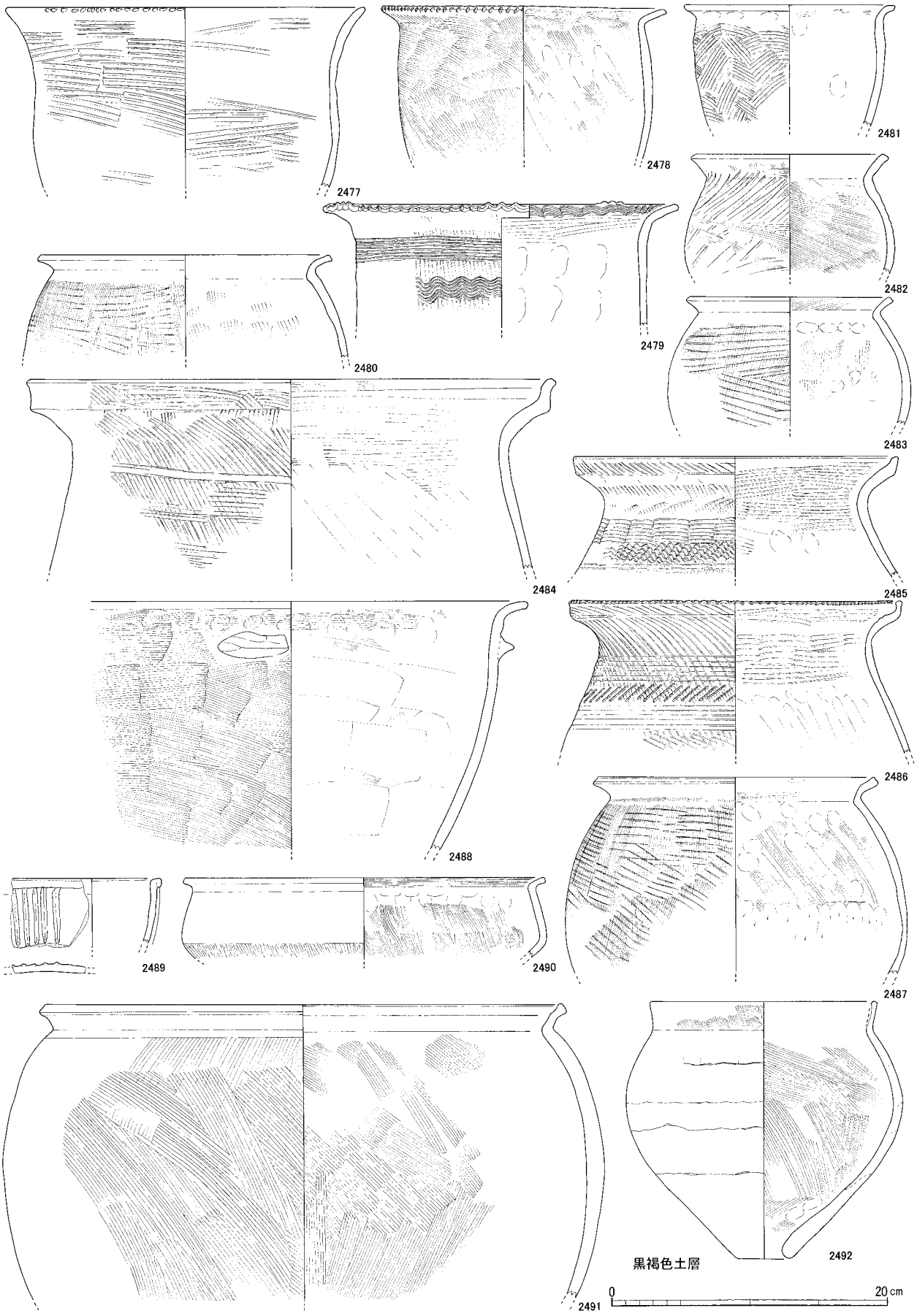
第115図　遺物実測図88（1：4）



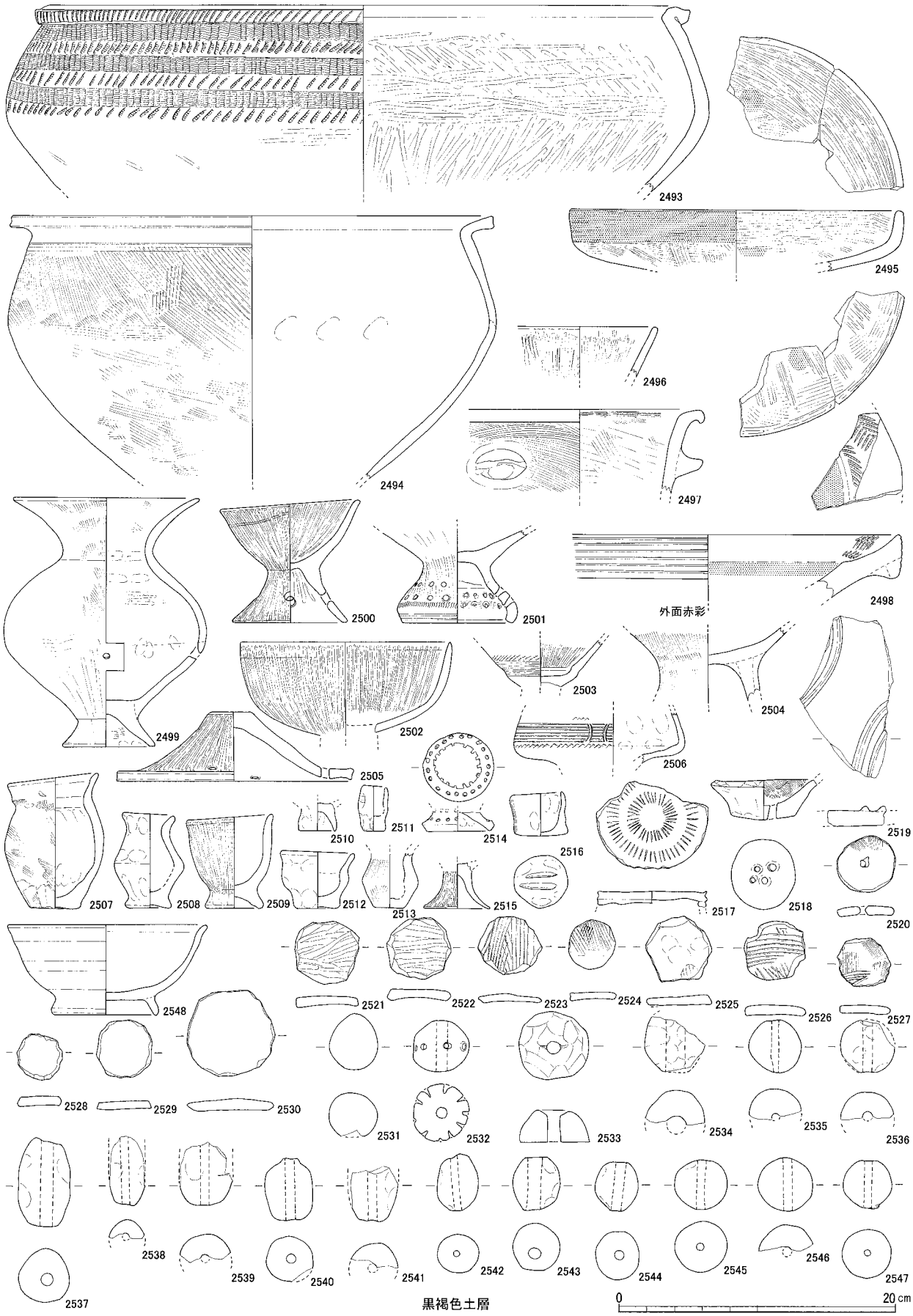
第116図　遺物実測図89（1：4）



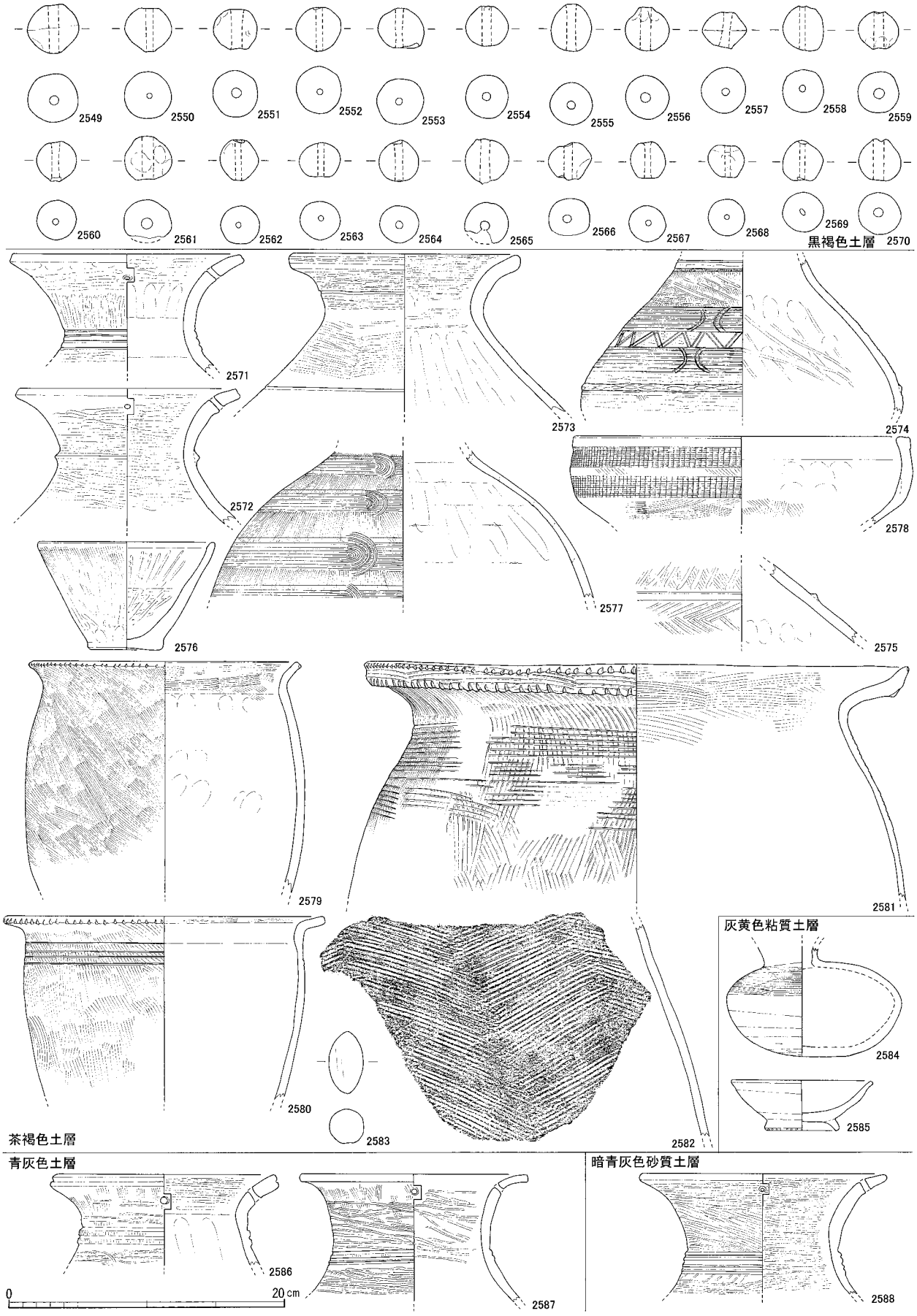
第117図　遺物実測図90（1：4）



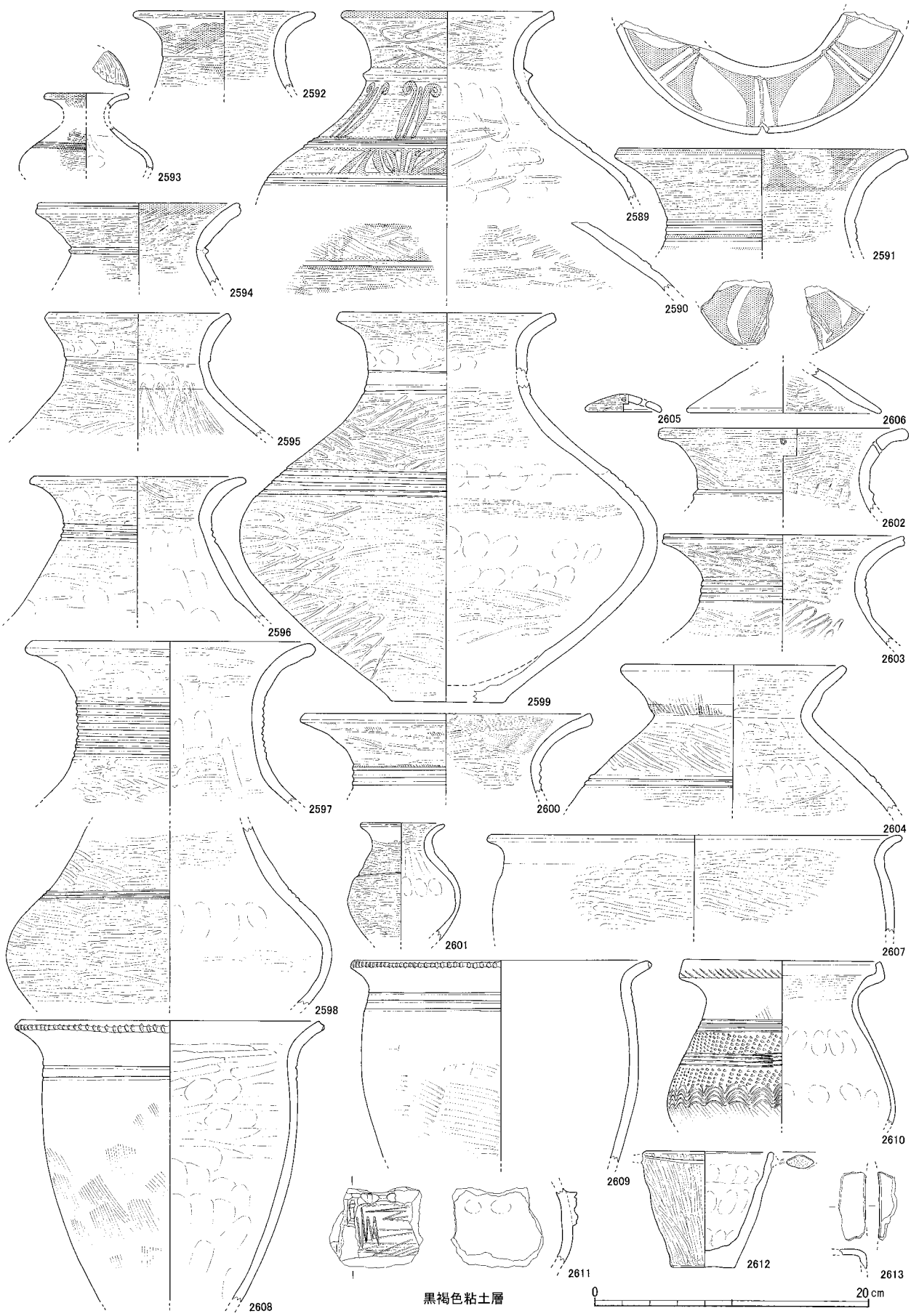
第118図　遺物実測図91（1：4）



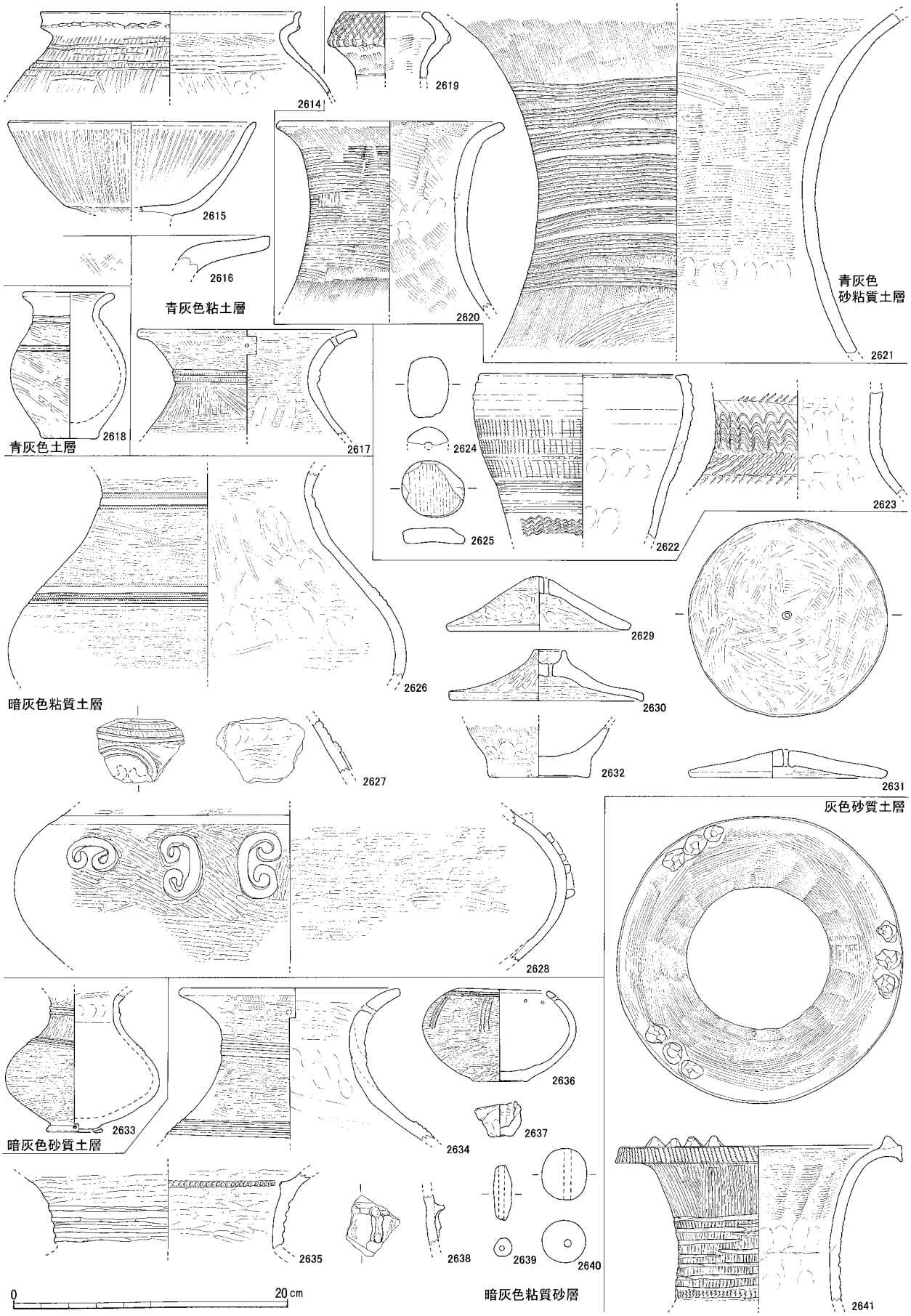
第119図　遺物実測図92（1：4）



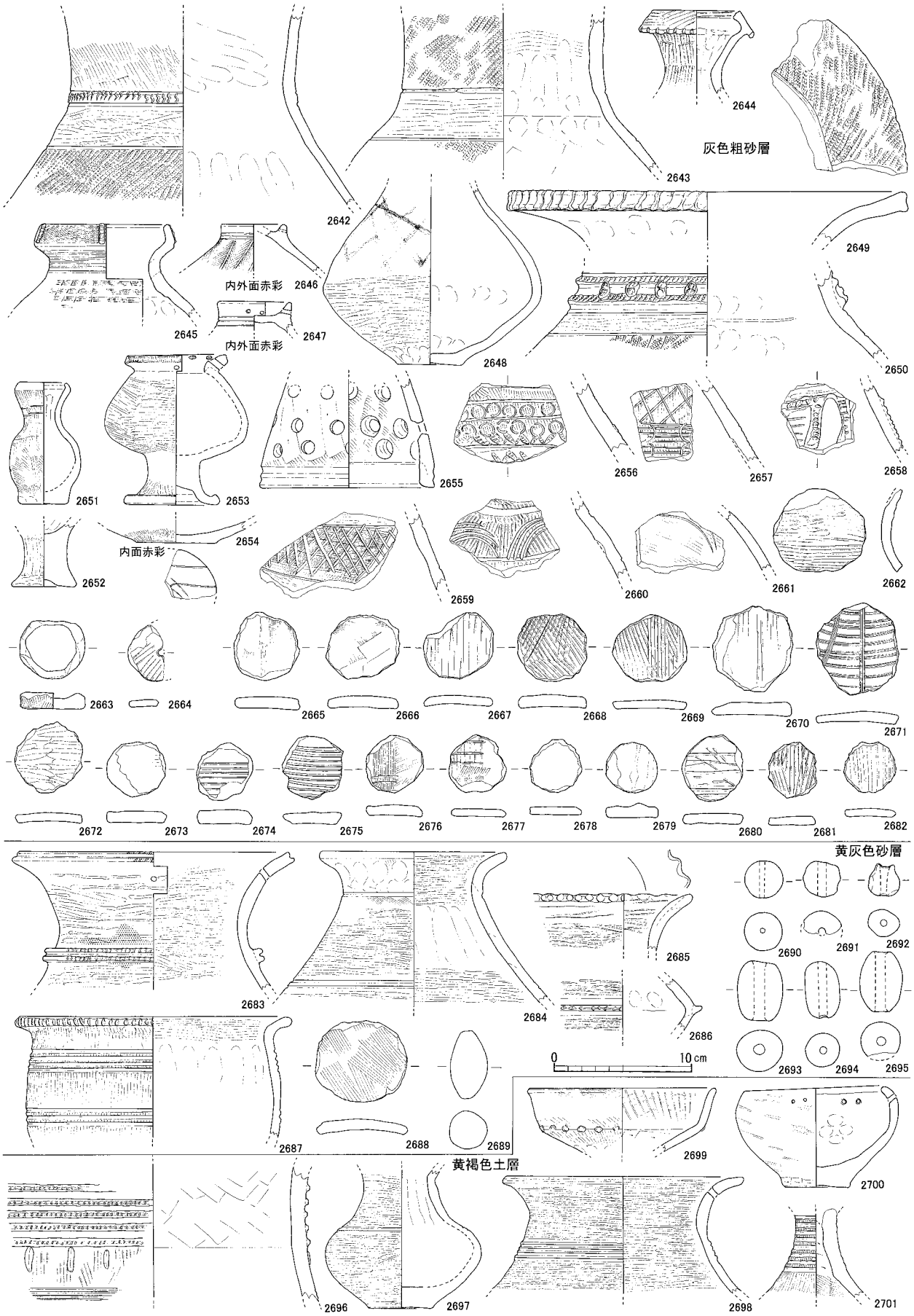
第120図　遺物実測図93（1：4）



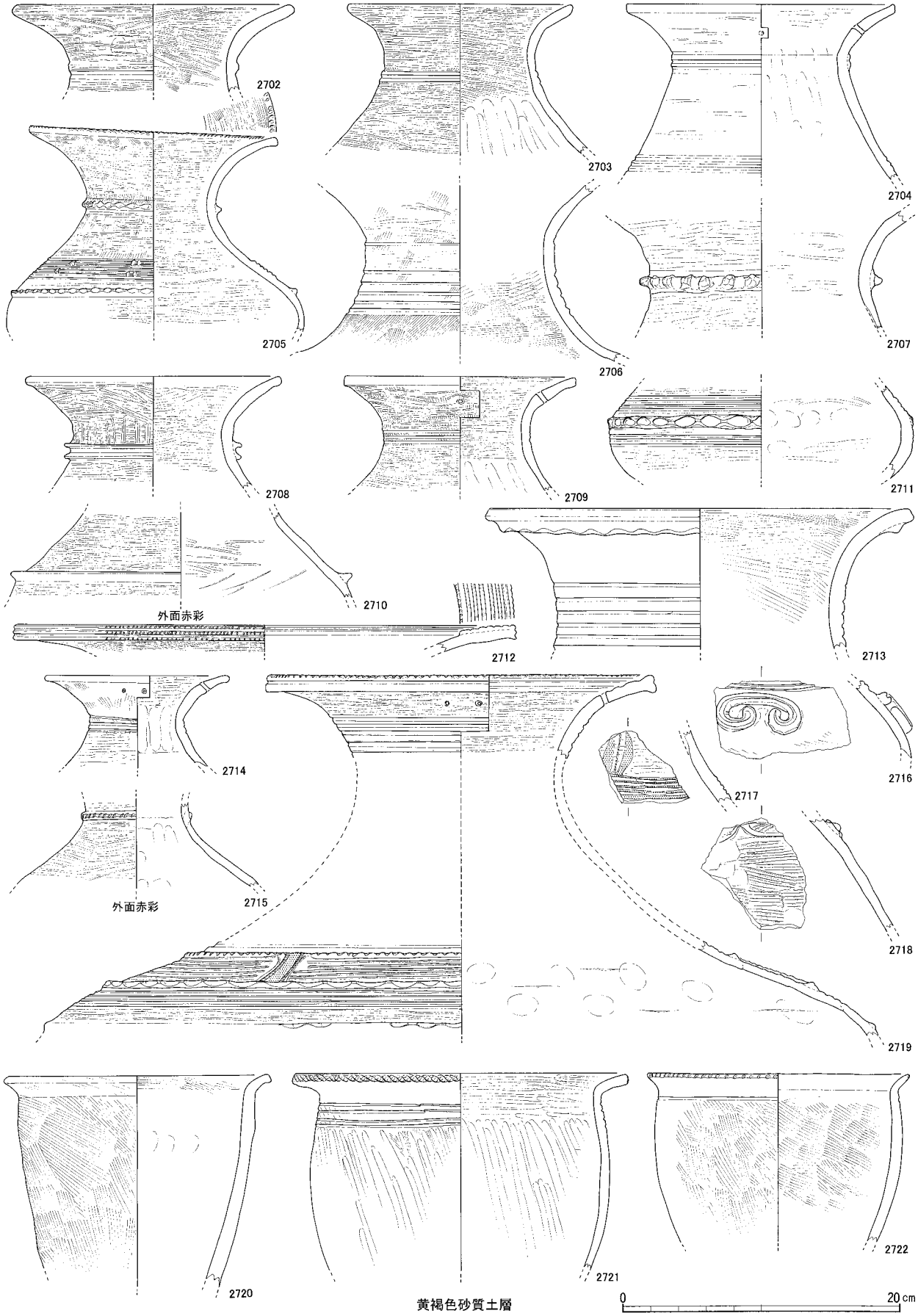
第121図　遺物実測図94（1：4）



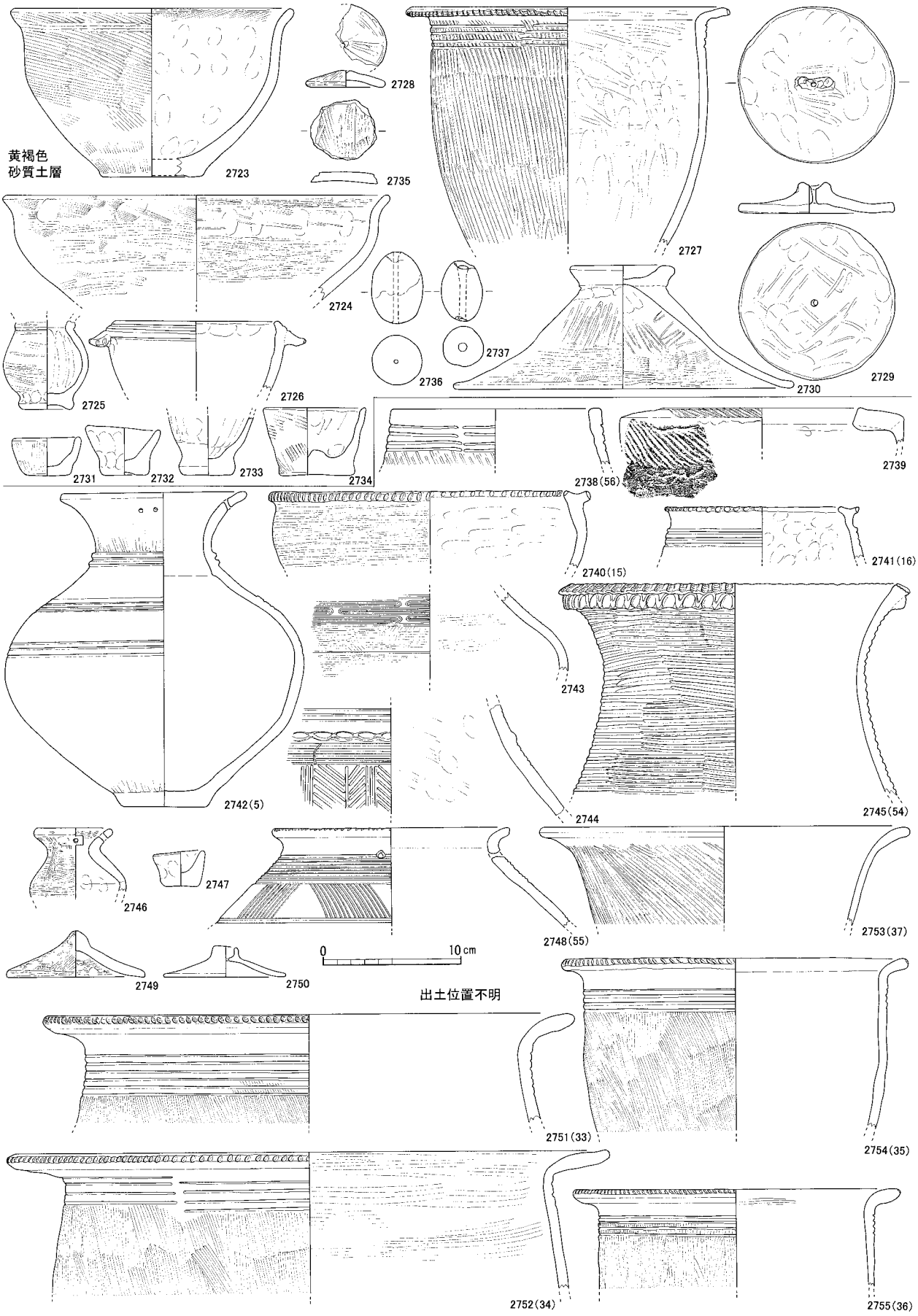
第122図　遺物実測図95（1：4）



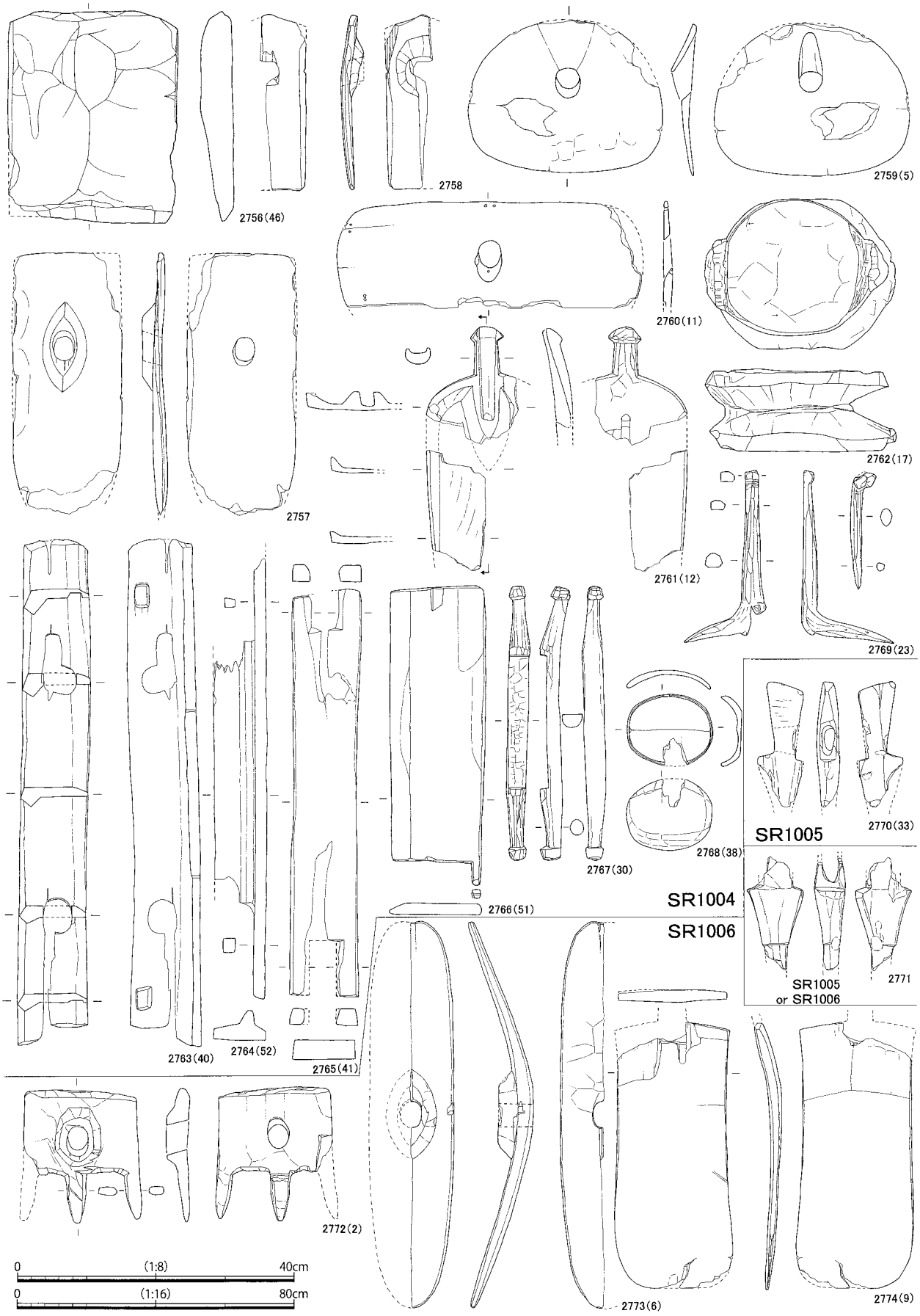
第123図　遺物実測図96（1：4）



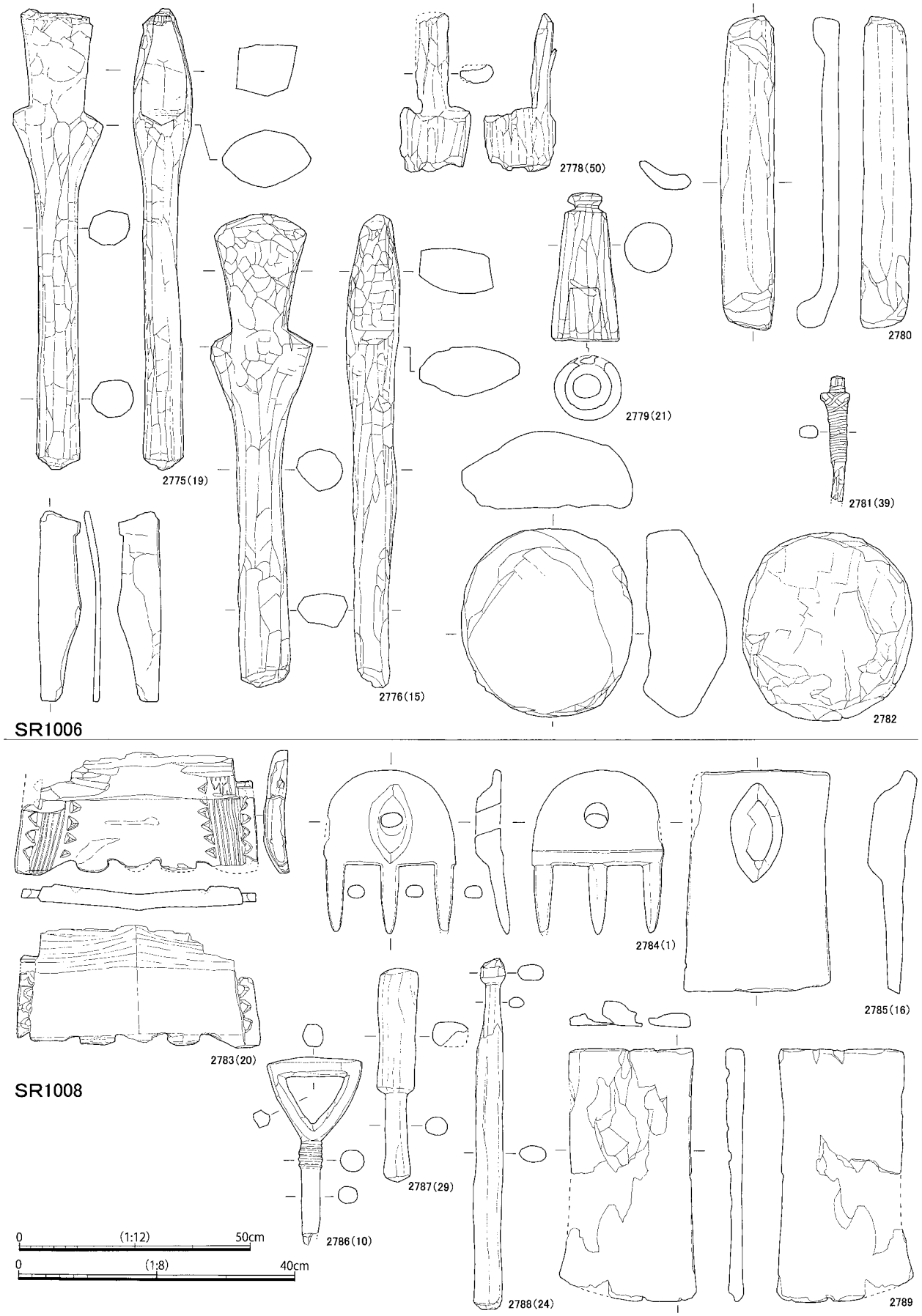
第124図　遺物実測図97（1：4）



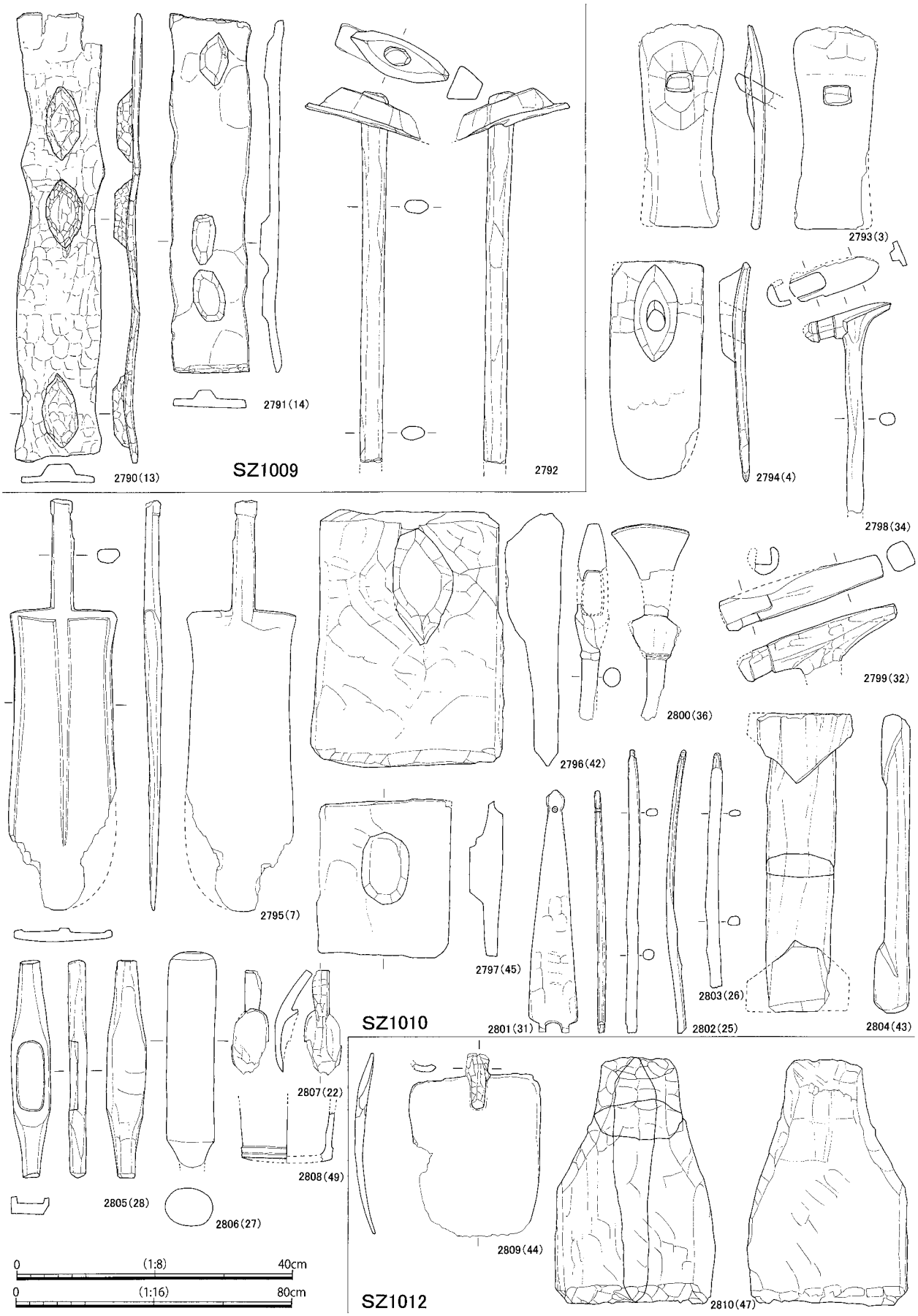
第125図　遺物実測図98（1：4）



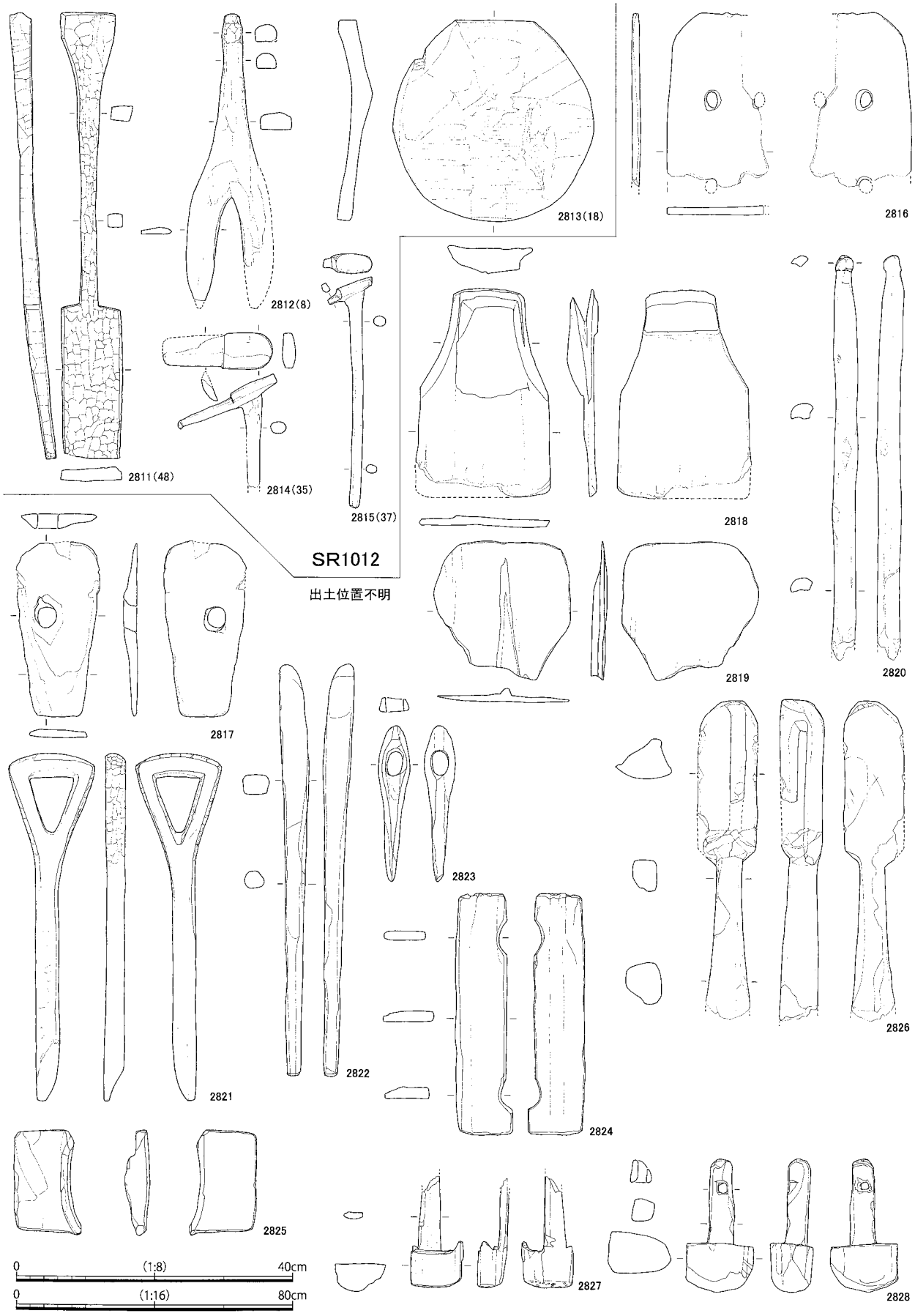
第126図　遺物実測図99（2756～2763・2765・2767～2774＝1：8，2764・2766＝1：16）



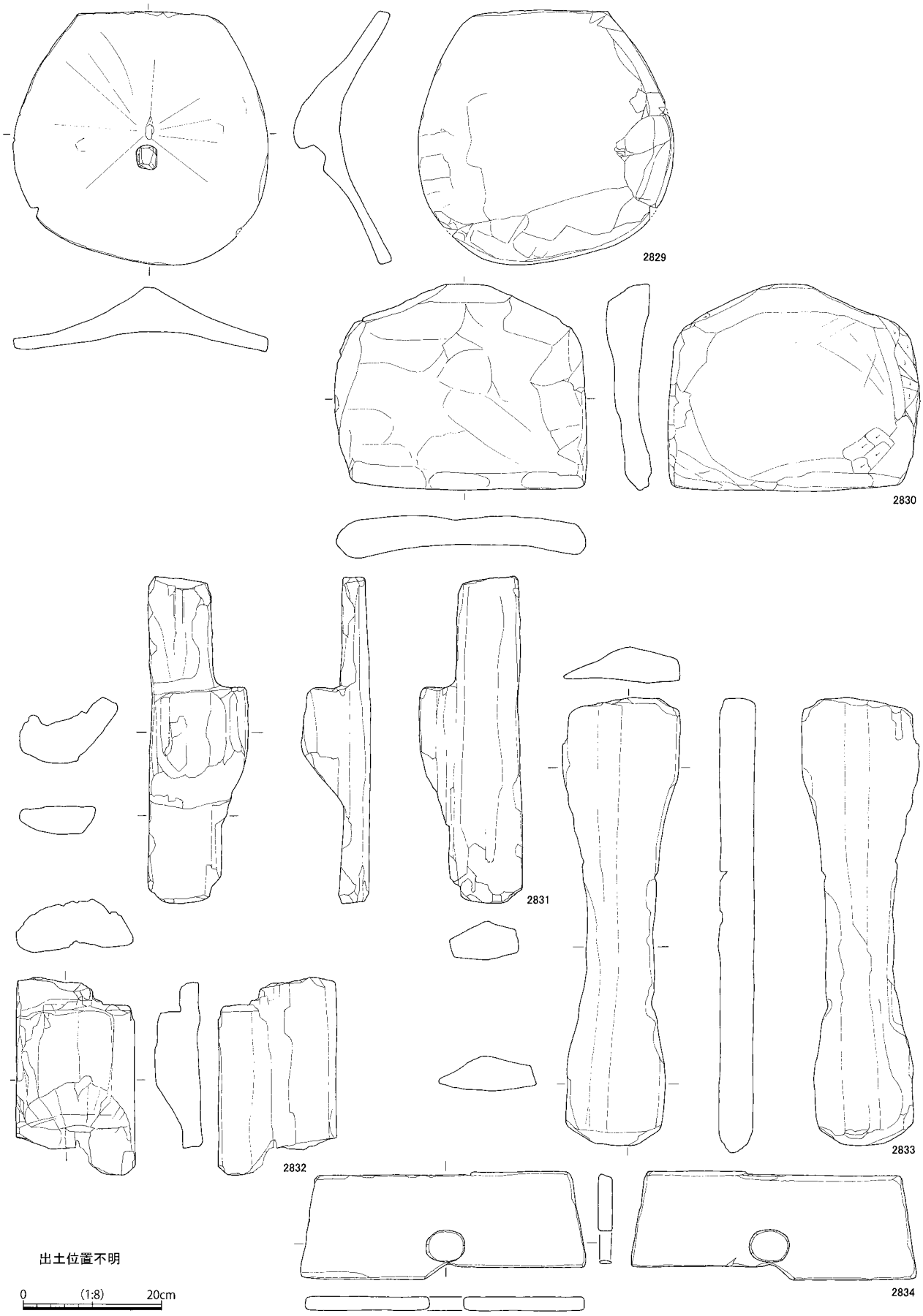
第127図　遺物実測図100（2775～2782・2784～2789＝1：8，2783＝1：12）



第128図　遺物実測図101（2791～2810＝1：8，2790＝1：16）



第129図　遺物実測図102（2812～2828＝1：8，2811＝1：16）



第130図　遺物実測図103（1：8）

V　納所遺跡の位置づけ

1　納所遺跡の弥生時代中期集落について

納所遺跡の弥生時代中期集落の様相については80年報告書などで的確に示されている。それをもとに、納所遺跡は伊勢湾西岸地域で中心的な位置を占めるような大規模集落であったと評価されてきた[1)]。本報告で検出された遺構について網羅的に整理し、それに対応する形で出土土器を報告したことによって、そうした従来の評価や知見をさらに深化させるための材料が揃ってきたといえよう。ここでは、その一端について概略を述べておきたい。

（1）集落の消長

まず、納所遺跡の調査区における遺構や遺物の様相から、調査区付近に展開していた集落の消長について概観しておきたい。

納所遺跡の調査では、自然流路などから弥生時代前期の遺物が多量に出土しているが、竪穴住居は検出されておらず、前期の集落の様相は明らかでない。しかしながら、遺物の量や内容などからみれば、付近にまとまった形で居住域が存在したと考えてよく、納所遺跡の弥生時代集落の一つの盛期は前期後葉にあるとみられる。

中期前葉には、いったんは前期後半の様相よりも集落が衰退した印象を受ける。確実にこの時期に属すると思われる遺構は少ない。ただし、中期前葉に属する遺物は一定量出土しており、この時期に属すると思われる土坑などもいくつか存在するため、中期前葉にも付近に集落が営まれていたものと推測される。

中期前葉のこうした状況を経て、納所遺跡は弥生時代中期中葉に集落の最盛期を迎えるようである。中期中葉に属すると考えられる遺構はかなり目立つ。竪穴住居もほとんどはこの時期のものと考えられ、多数の住居からなる居住域が明瞭に形成されている。

その後、中期後葉になると遺構数は減少傾向にあるように思われる。集落としては縮小傾向にあった可能性が高いだろう。ただし、当該期の土器自体はかなりの量が出土している。竪穴住居にも中期中葉から中期後葉にわたる時期幅の土器が出土しているものがいくつかあり、その中には中期後葉に属する住居も含まれる可能性がある。したがって、集落の縮小は急激なものではなく、緩やかなものであったとみられる。

一方、居住域東部に存在する大溝群は中期後葉にはかなり埋没が進んでいるものと考えられる。埋没状況に関する情報は乏しいが、出土した土器の時期を参考にすれば、大溝として区画・防御・排水などの面で機能していたのは中期中葉までが主体であり、中期後葉の頃には大溝は埋没が進み、その機能を失いつつあったものと考えられる。

納所遺跡からは後期の遺構や遺物も検出されているが、遺構数・遺物量ともに後期には急激な減少がみられ、中期末ごろに集落が急速に解体していくことが分かる。これまでにも中期末における集落の解体と、その原因として地形環境の変化などがあったことが指摘されている。ただし、遺物には弥生時代後期初頭から終末期にかけてのものがあり、集落が営まれていなくても、後期を通じて調査区付近で何らかの人の活動が行われていたようである。

（2）竪穴住居と居住域

竪穴住居　今回の報告では、ＳＫ234・389・546にも竪穴住居である可能性を指摘している。これらと、これまでに報告されていたものをあわせれば、住居は計18棟となる。

竪穴住居には、平面形が円形のものと方形のものとがみられる。ＳＨ11は出土した土器からみて前期から中期前葉まで遡る可能性があるが、この住居は平面形が方形であり、中期前葉までは平面形が円形の住居で占められる伊勢湾西岸地域においては稀な事例といえる。ただし、西側に排水溝らしき溝が取り付く点などは中期前葉の住居としては違和感があ

る。出土した土器が小片ばかりであることを踏まえれば、ＳＨ11は中期中葉以降に下りうる可能性もあろう。

中期中葉のものと考えられる竪穴住居には、平面形が円形のものと方形のものとが混在している。出土した土器からは円形のものと方形のものとの間に明瞭な時期差を認めることはできない。こうした状況は、近隣に所在している替田・弐ノ坪遺跡でも確認されている。伊勢湾西岸地域の弥生時代の竪穴住居は中期中葉を境として円形から方形へと変化していくことが指摘されているが[2)]、過渡期には集落の中に両者が混在していたことが納所遺跡の事例からも窺うことができよう。

納所遺跡で検出された平面形が方形の竪穴住居の中でもＳＨ417は平面形がやや長方形を呈しており、中期後葉によくみられるタイプのものに似ており、土器も中期中葉から後葉にかけてのものが出土している。こうした点からみれば納所遺跡でも中期後葉には平面形が方形の竪穴住居が主流となっていった可能性が高い。ＳＨ185は平面形が円形に近く、中期中葉から後葉の土器を出土しているが、この住居に関しては規模がかなり大きく、また円形というよりは多角形に近いものであり、やや特殊な性格のものと考えておいた方がよいのかもしれない。

なお、竪穴住居には排水溝と思われる溝が付属するものがいくつかみられることは注目できる。伊勢湾西岸地域では弥生時代中期を通じて排水溝が付属しないものが一般的だが、近隣の長遺跡[3)]では排水溝が付属する竪穴住居が多数検出されている。こうした集落との住居構造の共通性についても注意しておく必要があろう。

居住域　調査区内で検出された竪穴住居はほとんどが中期中葉のものと考えられることから、調査区付近は主に中期中葉の居住域であったとみることができよう。この居住域の東側のＧ・Ｈ区では、ＳＤ438・442などの東西方向にのびる大溝が複数検出されている。これらは人為的に掘削されたものと思われ、居住域を画するものとみられる。大溝群の東側については、調査が行われた範囲では住居は検出されていない。

一方、居住域の西側のＡ区でも遺構が減少し、溝状の遺構がみられる。これらの溝状遺構はいずれも不整形で、自然流路と考えられる。この自然流路群の近辺には遺構がほとんどみられない。地形的にも低い地点であり、居住域の西側はこれらの自然流路によって画されていた可能性が考えられる。

したがって、調査区内の情報のみに基づけば、この東側の大溝群と西側の自然流路群との間の範囲を一つの居住域のまとまりとして捉えることができよう。南北の範囲については不明であるが、南側には安濃川が流れており、居住域がそれほど南へ広がっていくとは考えにくい。北側についても、Ｉ区の北端の遺構密度がやや低い箇所でＳＤ459などの溝が検出されており、これを積極的に評価すれば、Ｉ区北端付近が居住域の北限となる可能性もある。納所遺跡の発掘調査で検出された中期中葉の居住域は、径170～200ｍほどのまとまりとして把握することができるのかもしれない。

この中期中葉の居住域については、Ｄ区付近の円形の空閑地をはさんで２群に分かれることや、この空閑地の東西で竪穴住居の平面形にも違いがあることが指摘されている。この空閑地は集落の広場的な機能をもっていたことも想定されている。ただし、この空閑地の南北の調査区外の様相については不明であるため、この空閑地の評価については、今少し慎重にしておきたい。

なお、納所遺跡では範囲確認調査が本調査の調査区周辺で行われており、その結果、弥生時代の包含層が南北350ｍ、東西440ｍにわたって確認されている[4)]。範囲確認調査の報告では、その範囲に遺跡が広がっていることが推測されている。この範囲は、調査から推定された居住域の範囲よりやや広いように思われる。もちろん、包含層の存在が直接的に居住域の範囲を示すわけではないが、範囲確認調査で設けられた調査坑の中には石器がかなりの量まとまって出土したものもあるようであり、こうした点は居住域の存在を窺わせる。先に述べたように、中期前葉・後葉の居住域が調査区付近に存在していた可能性があることを踏まえれば、時期によって居住域が拡大あるいは移動していた可能性や、複数の居住域のまとまりが存在していた可能性なども考慮しておく必要があろう。

（３）墳墓と墓域

方形周溝墓　納所遺跡では、方形周溝墓が数基検出されている。大型の方形周溝墓はみられず、いずれも小型のものである。

居住域の東部のＦ区には、数基がまとまって築造されている。ＳＸ410・411・414・415などは、Ｌ字状に折れ曲がった溝などによって構成される。四辺をしっかりと溝で画するものは認められず、一・二辺の溝を他の方形周溝墓と共有するように造られているとみられる。ただ、これらのＦ区の方形周溝墓群については溝の規模が貧弱であり、他の溝との関係性も弱いようにもみえる。

これらの方形周溝墓のほかには、Ｆ区の方形周溝墓群のやや西方にＳＸ333が存在している。ＳＸ333は不整形な方形を呈しており、Ｆ区の方形周溝墓と異なって四辺をしっかりと溝で画するものの、数カ所で周溝が途切れている。北側の周溝は、隅ではなく辺の途中で途切れて陸橋部状となっている。こうした形態の方形周溝墓は、納所遺跡ではこれのみである。

土壙墓の可能性がある土坑　以前の報告では、土壙墓とされる遺構が14基報告されている[5)]。中でもＳＫ597からは管玉が出土しており、副葬品とも考えられる。また、これらの他にも、ＳＫ521などのように人がちょうど入る程度の規模の土坑で、内部から骨片が検出されているものがある。これらについても土壙墓である可能性がある。

こうした土壙墓状の土坑には、土器があまり出土しておらず時期の比定が難しいものもあるが、大枠では土坑は中期中葉～後葉に属するものが多いとみられる。しかしながら、特定の時期に集中的に築造されているような様相は認めがたいようである。

ただし、これらすべてが土壙墓であるかどうかについては判断が難しい。ＳＫ10のように完形の土器が多数出土しているものは、当時の土器供献のあり方に照らせば埋葬施設とするには疑問が残る。骨が検出されているものについても、ＳＫ500・512などのように明らかな獣骨が出土した事例もある。

このように、規模や形状、土器や骨片の出土といった点に基づいてこうした土坑を一概に土壙墓と考えるには、やや問題が残るようである。一部については土壙墓である可能性が認められるが、その存在は散在的で、方形周溝墓とは別に土壙墓群が形成されていたと積極的に認定することは難しいように思われる。

墓域の形成　中期中葉には、ＳＸ333が築造されているとみられる。この方形周溝墓は単独で存在しているともみられるが、付近のＳＫ364などは方形周溝墓の一部をなす溝とも考えられ、不明瞭ながらも方形周溝墓群を形成している可能性もあろう。

ＳＸ333が築造されている付近は居住域の内部にあたるが、居住域との間に溝や空閑地による明瞭な区画があるようには見受けられない。居住域の一部に墓域が形成されているような状況である。

Ｆ区に群をなして存在する方形周溝墓は、いずれも弥生時代中期後葉のものである可能性が高い。したがって、中期後葉になって調査区内における居住域の存在が不明瞭になってきたころに、方形周溝墓群が形成されると考えられる。

今のところ、中期後葉にはＦ区を中心に墓域が形成されているようにみられるが、一方ではＳＤ170やＳＫ254などのように、Ｃ・Ｄ区などでも方形周溝墓の可能性がある中期後葉の遺構が検出されている。これらを積極的に評価すれば、当該期には調査区内の広い範囲にわたって墓域が形成されていたとも考えられるが、現状では可能性を指摘するにとどめておきたい。

註

1）　三重県教育委員会『納所遺跡―遺構と遺物―』1980、三重県『三重県史』考古編１　2005。

2）　三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡（第５～第８次）発掘調査報告』2007。

3）　三重県埋蔵文化財センター『長遺跡発掘調査報告』2000。

4）　三重県教育委員会『納所遺跡範囲確認調査報告』1976。

5）　遺構一覧表の80年報告書遺構名欄で「ＳＫ○」と記されているものが該当する。なお、註１）の三重県2005では土壙墓は４基とされている。

2　手焙形土器の線刻について

納所遺跡出土の手焙形土器（第34図187）に施された線刻は、かねてより注目されてきた資料である。本報告では紙幅の関係上、詳細な報告ができなかったため、ここで取り上げておきたい。

（1）線刻と施された土器について

手焙形土器に施された線刻をどのようなものと考えるのかについては、かねてより検討がなされてきた[1)]。直弧文との関係が指摘されたほか、龍とみる見解なども出されているが、近年では北島大輔や石黒立人による単位文様という視点からの詳細な検討によって、伊勢湾沿岸地域における人面文との関係性が明らかにされてきている[2)]。それによれば、この納所遺跡の手焙形土器の線刻は、人面文の一部を表現したものである可能性が高いとされる。

次項に線刻の展開図を掲載したが（第131図１）[3)]、旋回するような配置でバチ形の単位文様が４単位描かれており、人面文の一部と考える場合、これが伊勢湾沿岸地域でみられる人面文線刻の左頬付近に描かれる幾何学文とみる。そして、バチ形文様群から左上へのびる文様が左目表現であるとみるのである。こうした見解は妥当なものであろう。

顔面の右側部分が描かれなかった理由としては、もともと部分描画であったであったとする考え方と、未完成とする考え方とがある。人面文線刻において重要な要素とされる幾何学文を描いていることや、他の遺跡からも部分描画の資料が出土していることを踏まえれば、部分描画であると考えて問題ないように思われる。ただし、描かれた位置から見て手焙形土器の覆部を顔全体に見なしているようである点と、部分描画の資料がまだ少ない点を踏まえると、途中で描画が中断し、未完成に終わったとの見方も完全には否定できないだろう。

一方、文様が描かれた土器については、形態からは在地産であるか、搬入品であるか、速断できない。時期的には、形態や同じくＳＲ４－２から出土した土器群からみて、廻間Ⅰ式期でも後半のものである可能性が高い。なお、線刻はかなり強い線で刻まれており、土器の器壁がまだ軟らかい段階で線刻が施されたものと思われる。

（2）伊勢湾西岸地域の人面文線刻との関連

人面文線刻の施された土器が多く分布する伊勢湾沿岸地域にあって、伊勢湾西岸地域では人面文線刻土器が希薄であることが指摘されてきた[4)]。伊勢湾西岸地域の土器に施された人面文線刻は、他に鈴鹿市十宮古里遺跡例[5)]、松阪市琵琶垣内遺跡例[6)]のほか、可能性があるものとして松阪市小津遺跡例[7)]があげられるに過ぎない。

十宮古里遺跡の人面文は、土器片に両目などが遺存している。顔の輪郭全体を描く西日本系のものである可能性も指摘されている。描かれた土器は小片のため器形などは不明で、所属時期や、在地で生産された土器かどうかなどは判断しがたい。ただし、この遺跡は廻間Ⅰ式期に盛期があり、人面文もこの時期のものと思われる。

琵琶垣内遺跡の人面文は、左目付近と顔面右側のごく一部が遺存している。線刻は納所遺跡のものほど強く刻まれておらず、刻線というよりは浅い沈線状の線で描かれている。再実測した展開図を掲載したが（第131図２）、左目付近に鯨面を表す多条の沈線が施され、また、眉間から眉にあたる部分にかけても沈線が施されている。岐阜県荒尾南遺跡・今宿遺跡例など、西濃地域の事例と類似する。ただし、顔面の右側部分については左側とはやや異なったラインが描かれており、左右対称に描かれていない可能性がある。

描かれた土器は小型の広口壺である（第131図）。器形や各部の文様、胎土などからみると伊勢湾西岸地域で製作された土器とみて問題ないように思われるが、同様の壺は伊勢湾沿岸地域に広く分布しており、製作地を限定することは難しい。時期的には廻間Ⅰ式期のものと考えられる。

さて、以上のような事例に納所遺跡の事例を加えると、人面文線刻土器が少ないとされる伊勢湾西岸地域においても、徐々に事例が増えつつあるようにみえる。時期的にも伊勢湾沿岸地域の他地域の事例と同様に、弥生時代終末期、なかでも廻間Ⅰ式期に

集中する可能性が高い。

ただし、伊勢湾西岸地域の人面文線刻には様式的なまとまりがないようにも思われる。納所遺跡のものが人面の一部のみを描いた部分描画の可能性が高いのに対して、十宮古里遺跡と琵琶垣内遺跡のものは人面全体を描いた全体描画である。そして、全体描画のものの中でも、十宮古里遺跡のものと琵琶垣内遺跡のものでは系統的な差がある可能性も残る。したがって、伊勢湾西岸地域で人面文の線刻が体系的に行われていた形跡は、今のところまだ薄いといえようか。今後の資料の増加を待って更に検討していく必要があろう。

註

1）　伊藤久嗣「納所遺跡出土の特殊文様を描く手焙型土器」『考古学雑誌』第67巻第１号　日本考古學會1981。

2）　北島大輔「組帯文の展開と地域間交流―古墳出現期の伊勢湾地方を中心に―」『駿台史学』第120号　駿台史学会　2004、石黒立人「伊勢湾周辺地域の人（黥）面線刻をめぐる二、三の問題」『原始絵画の研究　論考編』六一書房　2006。

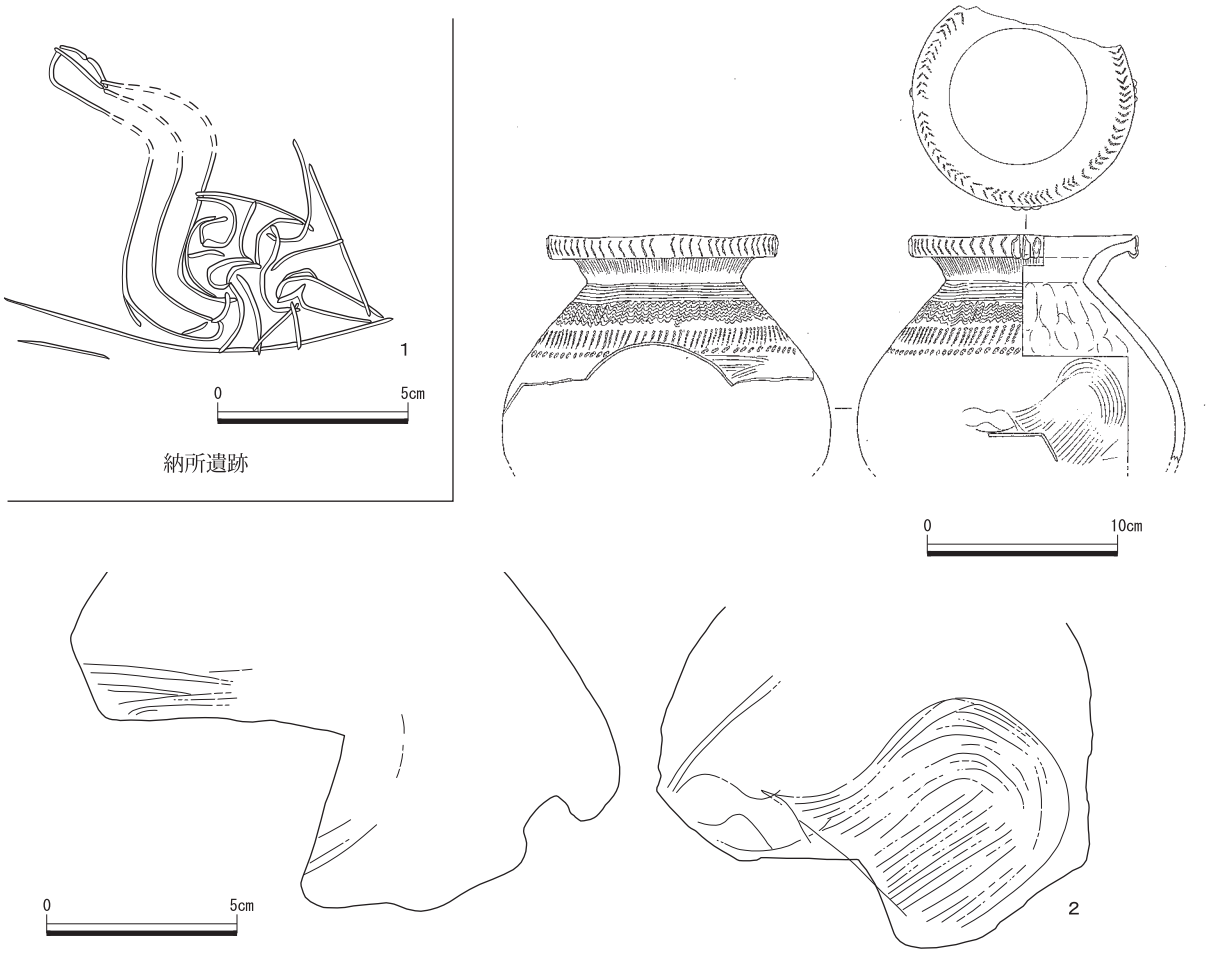
3）　註２）石黒2006に掲載されている図を元に作成したものである。

4）　註２）石黒2006。

5）　鈴鹿市考古博物館『十宮古里遺跡発掘調査報告』2010。

6）　三重県埋蔵文化財センター2007『琵琶垣内遺跡（第４次）発掘調査報告』2007。

7）　松阪市教育委員会『2005年度松阪市埋蔵文化財発掘調査報告』2007。



第131図　手焙形土器の線刻と関連資料

3　納所遺跡前期弥生土器の諸相

（1）納所遺跡前期弥生土器をめぐって

伊勢湾西岸域の前期弥生土器は、これまでのように〈広域型遠賀川系土器〉・〈在地型遠賀川系土器（金剛坂式土器）〉という二項対立軸のみで論じられるものではない。もちろん、当該地域の前期弥生土器を扱うにあたって重要な“指標”に代わりはないが、これまでの“正統／亜式”といった形容詞を冠することによる強い概念規定を演出する方法は、“斉一性”の規範を念頭に置いた伝播変異現象の変質の顕示に繋がってきた。そして“斉一性＝〈広域型〉”・“〈広域型〉と晩期系土器諸要素との混淆＝〈在地型〉の生成”という構図が定着してきた感があろう。しかし、〈広域型〉と捉えられる一群についても土器諸要素にみる地域性の顕在化が認められるが、“斉一性”の名の下に等閑に伏されてきたようにも窺える。翻って金剛坂式についても器種分化に遺跡差が現れているのだから、今後は諸遺跡ならびに諸エリアごとにこうした観点をめぐる整理と研究の深化があらためて問われるであろう。

伊勢湾岸域の弥生土器を扱うにあたって土器の系統区分を明確にする方向性は正しい。従前までの研究史で明らかのように、弥生時代前期の伊勢湾西岸域は〈広域型遠賀川系〉・〈金剛坂式[1)]〉・〈浮線文系／沈線文系〉、東岸域はこれらと〈条痕文系（樫王式／水神平式）〉・〈削痕遠賀川系（三ツ井式[2)]／元屋敷式）〉として把握される。それらの土器固有圏の重複あるいは土器移動による分布圏を形成しており、いわば各種土器圏の重層性が現れていよう。

これまで伊勢湾西岸域では金剛坂式の生成と固有圏、そして土器移動にみる分布状況―内陸部や太平洋岸ルートによる離散的な搬出―が注目されてきた。次に求められるものは、先述したような広域型遠賀川系土器の諸特徴をあらためて整理することによって、遠賀川系土器の伝播経路を照準できるだろうし、もちろん土器様式に限定されることではなく、灌漑水田型稲栽培を基軸とした水稲農耕体系の受容に対する諸遺跡・諸エリアの反応を遺跡・遺物から着実な整理の積み上げをおこなう必要性があろう。

本書によって再整理を経た納所遺跡前期弥生土器は、こうした問題に対して多岐にわたる情報を提供し、研究発展に大きく寄与するのには間違いない。ここでは納所遺跡前期弥生土器の諸相をめぐって、若干の整理をおこなっておく。

（2）納所遺跡前期弥生土器の諸特徴

まずはこれまでの納所遺跡前期弥生土器の諸特徴をみておきたい。文様構成の組成を数値化した80年報告書でのＦ地区下層下部（青灰色粘質土）を参照すると、広口壺は段単純６％程度、削出突帯50％程度、貼付突帯８％程度、篦描沈線36％程度。甕は無文28％程度、篦描沈線72％程度となる。同地区下層上部（茶褐色砂質土）の広口壺は広域型遠賀川系58％程度（段単純３％程度、削出突帯22％程度、貼付突帯14％程度、篦描沈線18％程度）、金剛坂式42％程度となるようだ。

従前からの“区分文様から帯状文様への変遷”を目論んだ文様構成の推移を層序と整合させた魅力的な内容であるが、今となっては帰属層序の根拠が失われているため、数値情報の真意を問うことはできない。つまるところ遺構一括性の信頼度は相当に低く見積もらなければならないし、文様組成の推移は明確に捉えることが困難な状況にある。本書でも図化対象の土器の選定をふまえているため、正確な数値化作業は棚上げするしかない。ここでは土器製作技法〔形態・文様構成〕と胎土の特徴に注目したい。

納所遺跡前期弥生土器は土器構成を参照する限り、環瀬戸内海域以東の遠賀川系土器様式からの逸脱や土器諸要素の欠落はみられない。ようするに当該土器様式が彼地にも到達しているという認識は、既往の研究史からも証明されていたところであろう。つまるところ当該土器様式の東限となる伊勢湾岸域には、金剛坂式を代表例としながら細部においても土器地域性の発現が注目されてきた。こうした土器地域性を抽出することによって、遠賀川系土器の東方波及を照準する手がかりとなるため、ここでは伊勢湾岸域より以西の諸地域との比較を試みてみよう。

近畿前期弥生土器を中心とした壺用蓋と紐孔の消長からみた三段階区分法[3)]では、（有）段階に多く

が該当する。広口長頸壺も存在するが、長頸化はそれほど顕著ではない。ましてや金剛坂式には蓋を欠く公算が大きかったが、納所遺跡では紐孔をもつ個体もあり（失）段階は明確に顕在化しないようだ。この点が近畿地域との相異点といえよう。例えば大和地域と比較すると、大和第Ⅱ－１様式のような口縁部先端の開きが胴部最大径と同等となる広口長頸壺はなく、大和第Ⅰ－２－ｂ様式までの土器形態が一般的となる。伊勢湾岸域の前期後葉から中期前葉の土器は長頸化志向を達成しないようだ。こうしてみると環瀬戸内海域との関連性が彷彿とされるだろう。

次に他地域系土器をみておこう。波状口縁をもつ土器2685は晩期系土器の範疇で捉えられるもので、中ノ庄遺跡でも認められる。三ツ井式に関連するものかもしれない。内外面ミガキ調整を施した甕2721、逆Ｌ字状口縁甕／鉢2740・2741は環瀬戸内海域の特徴である。特に逆Ｌ字状口縁甕／鉢は口縁部内面にも貼付突帯―いわばＴ字状口縁を呈する―をもつ特徴をもち、備讃瀬戸地域から大阪湾岸域にかけて分布するものと共通する。

広口長頸壺Ｂ2635と大型壺Ｂ2195には内面突帯がある。これは明らかに環瀬戸内海域を淵源とする属性であり、同じく特殊文様として古相を示す複線山形文2093についても、金剛坂式を理解するにあたって重要な諸要素といえるだろう。一方で指づくね貼付突帯をもつ広口壺・広口長頸壺は、器種分類中のＡ／Ｂの両者に採用される特徴をもつようだ。

また、708・913・1414・2300の口頸部／頸胴部界に貼付突帯１条をもつ白色系胎土の広口壺、広口壺にみる半截竹管文や双頭渦文・断面M字状貼付突帯、貼付突帯下部の下地沈線の多用傾向、赤褐色系土器の多さから、特に奈良盆地中・南部産の土器と親縁性の高さが窺えそうである。そのなかでも赤褐色系胎土の志向は平等坊・岩室遺跡、坪井・大福遺跡などの盆地東縁域を中心とする特徴の傾向があり、いうなれば金剛坂式の生成や関連性とあながち無関係ではないだろう。

（３）納所遺跡前期弥生土器の淵源

納所遺跡における前期弥生土器の淵源を考えるにあたって、本来ならば当該遺跡での土器構成・諸特徴などを網羅的にふまえなくてはならない。ここではあくまで若干の展望のみに終始しておきたい。

納所遺跡前期弥生土器の成立は、大阪湾岸域―近畿内陸域との関連性が前提となるだろう。つまりは遠賀川系土器様式の受容経路の諸問題に端を発するからである。これまで複数の諸経路が想定されてきたが、土器諸特徴から主要経路を絞り込める公算が高い。こうした観点は今後の課題として求められる。

納所遺跡には伊勢湾岸域にみられる遠賀川系土器の初現形態〔接合段器種群を初めとする口頸部／頸胴部界の境界が明瞭な一群〕が存在する。有段壺1785・2219・2595、有段甕1932・2203・2204などがこれに相当するだろう。こうした初現形態の土器群は、納所遺跡以外に中ノ庄遺跡と金剛坂遺跡のほか、濃尾平野の朝日遺跡貝殻山貝塚南地点にみられる。これらの多くは列島西部域に広く分布する有段壺型式が中心となる。納所遺跡では有段壺諸型式や特殊文様／赤彩文の多用傾向からも大阪湾岸域―近畿内陸域の遠賀川系土器の初現形態と概ね符合する。そのなかでも口縁部中ごろから頸部下位にかけて筒状に立ち上がる有段壺2219・2595は、近畿地域でも河内地域と大和地域に概ね限られる型式である。納所遺跡前期弥生土器の場合は始源候補地の一つとして、これらの地域を想定してもよいだろう。

伊勢湾岸域にみられる初現形態の遠賀川系土器出土遺跡は、上記の諸遺跡にみられるような広範なエリアにおいてあくまで点的に分布する。つまるところ当該土器様式の受容は特定経路に限定されるものではないが、伊勢湾西岸域における遠賀川系土器の成立過程を把握するうえでも、納所遺跡前期弥生土器の重要性はあらためて高い点を認識できるだろう。

註

１）　紅村　弘『東海先史文化の諸段階』（本文編・補足改訂版）私家版　1981。

２）　石黒立人・宮腰健司「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会　2007。

３）　豆谷和之「近畿前期弥生土器再論」『考古学研究』第55巻第３号　考古学研究会　2008。

報 告 書 抄 録

ふりがな	のうそいせきいち―いこう・どき・もくせいひんへん―
書　　名	納所遺跡Ⅰ―遺構・土器・木製品編―
副 書 名	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	35－3
編 著 者 名	石井智大・川部浩司・櫻井拓馬・穂積裕昌
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　　ＴＥＬ　0596-52-1732
発行年月日	西暦2012（平成24）年３月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のうそいせき 納所遺跡	つしのうそちょう 津市納所町 あざきたうら 字北浦ほか	24201	34	34° 43’ 34”	136° 29’ 25”	1973年10月16日 ～1975年12月初旬	12,500	県道雲林院・津線バイパス建設

種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代	旧河道・溝・竪穴住居 方形周溝墓・土坑 掘立柱建物ほか	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・木器・石器・石製品他	

要　約	伊勢湾西岸を代表する弥生時代遺跡。旧河道などから出土した弥生時代前期の遠賀川系遺物は、多量の土器・石器・木器をセットで伴う当地域の基準資料。弥生時代中期以降も竪穴住居・方形周溝墓を含む多数の遺構が確認されており、安濃川流域における拠点的な集落として位置づけることができる。

納所遺跡Ⅰ―遺構・土器・木製品編―

２０１２年３月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　光出版印刷株式会社